

# 鏡水箕隅原C遺跡

—沖縄西海岸道路「那覇西道路」建設事業に伴う緊急発掘調査報告—

2011年3月

那覇市教育委員会

かがんじみーぬしんぼるしーいせき  
鏡水箕隅原C遺跡

—沖縄西海岸道路「那覇西道路」建設事業に伴う緊急発掘調査報告—



巻首図版1 遺跡一帯の空中写真

(S=1:8,000)



巻首図版2 調査区全景 上：南西から  
下：北から



巻首図版3 主な層序と遺構

- 1段目左：I・J-8・9グリッド東側アゼ
- 2段目左：I-10~13グリッド北側アゼ
- 3段目左：焼土遺構№2・1（J-8グリッド）
- 4段目左：貝溜り遺構（J-13グリッド№2）

- 1段目右：K~M-15グリッド南側アゼ
- 2段目右：H-10~13グリッド北側アゼ
- 3段目右：貝塚（I・J-7~9グリッド）
- 4段目右：溝状遺構№5



巻首図版 4 主な出土遺物

- 1 段目左：沖縄新石器時代前Ⅱ期の土器
- 2 段目左：沖縄新石器時代前Ⅲ・Ⅳ期の遺物
- 3 段目左：沖縄新石器時代前Ⅳ期の遺物
- 4 段目左：沖縄新石器時代後期の遺物

- 1 段目右：沖縄新石器時代前Ⅱ期の石器
- 2 段目右：脊椎動物遺体
- 3 段目右：沖縄新石器時代前Ⅲ・Ⅳ期の石器
- 4 段目右：貝製品

## 序

本書は2005（平成17）年度と2006（平成18）年度に実施した沖縄西海岸道路那覇西道路建設に係る埋蔵文化財緊急発掘調査の成果報告書であります。

「毓水箕隅原C遺跡」は、内閣府沖縄総合事務局南部国道事務所による上記道路建設計画に伴って発見されたものです。この道路は、「慢性的な渋滞をきたしている本島の大動脈・国道58号、331号の混雑を緩和するため」、「那覇市街部及びその周辺の交通渋滞対策に大きく寄与し、那覇空港へのアクセス向上並びに南北の接続機能の向上を図るために計画」されたもので、今後の整備に期待が高まります。

さて、本遺跡の発掘調査では、「沖縄新石器時代前期・後期」、グスク時代等における様々な時代の資料が得られています。特に、沖縄新石器時代前Ⅱ期（縄文時代早期相当期）の「爪形文土器」は、那覇市において初めての出土で大きな話題となり、本市における先史時代の研究に新たな知見を加えることとなりました。今後とも周辺地域での発掘調査を進めることで先史時代における先人達の生活の一端が明らかになることでしょう。

本報告書が、市民の皆様はもとより多くの方々にご利用され、文化財保護行政の一助となることを希望いたします。

末尾になりましたが、発掘調査作業ならびに、本報告書を作成するにあたってご協力いただきました関係各位に深く感謝申し上げます。

平成23年3月

那覇市教育委員会

教育長 城間 幹子

## 例 言

1. 本報告書は、那覇市教育委員会が内閣府沖縄総合事務局南部国道事務所の委託を受けて2005（平成17）・2006（平成18）年度に実施した「鏡水箕隅原C遺跡緊急発掘調査」の成果を収録したものである。
2. 調査は、沖縄西海岸道路「那覇西道路」建設事業に伴うもので、那覇市教育委員会が実施した。
3. 中国産および本土産陶磁器の鑑定等について、下記の方々よりご教示を得た。記して感謝申し上げる。  
金武正紀氏（今帰仁村埋蔵文化財発掘調査アドバイザー）  
堀内秀樹氏（東京大学）  
野上建紀氏（有田町歴史民俗資料館）
4. 石器・石材の石質鑑定等について、下記の方々よりご教示を得た。記して感謝申し上げる。  
大城逸郎氏（おきなわ石の会 会長）  
神谷厚昭氏（金城町石畳地質研究）
5. 土器の鑑定等について、丑野毅氏（当時、東京国際大学）、堂込秀人氏（当時、鹿児島県教育庁文化財課）、伊藤慎二氏（国学院大学）よりご教示を得た。記して謝意を表する。
6. 比較資料収集において、下記の方々よりご教示を得た。記して感謝申し上げる。  
鹿児島県教育庁文化財課（木原俊孝氏、青崎和憲氏、堂込秀人氏）  
鹿児島県立埋蔵文化財センター（池畑耕一氏、新東晃一氏、長野眞一氏）  
鹿児島県立上野原縄文の森（冨田逸郎氏）  
鹿児島市立ふるさと考古歴史館（竹之内祐司氏、岩坪秀樹氏、出口浩氏）  
奄美市教育委員会文化課（久伸博氏）  
奄美市教育委員会生涯学習課（松本信光氏）  
奄美市立奄美博物館（中山清美氏、高梨修氏）  
奄美市歴史民俗資料館  
榊原えりこ氏（龍郷町教育委員会）  
新里尚美氏、金城達氏（八重瀬町教育委員会文化課）  
島袋春美氏、山城安生氏、東門研治氏、松原哲志氏（北谷町教育委員会社会教育課）  
山崎真治氏（沖縄県立博物館・美術館）  
相美伊久雄氏（志布志市教育委員会生涯学習課）
7. 調査および資料整理は下記の方々に指導・協力を得た。記して感謝申し上げる。  
金武正紀氏（今帰仁村埋蔵文化財発掘調査アドバイザー）  
大城逸郎氏（おきなわ石の会 会長）



黒住爾二氏（千葉県立中央博物館）

島袋洋氏・盛本勲氏・金城亀信氏（沖縄県教育庁文化課）

安里嗣淳氏、岸本義彦氏（沖縄県立埋蔵文化財センター）

島袋利恵子氏（宜野座村教育委員会）

大城竜也氏・伊波かおり氏（豊見城市教育委員会）

瑞慶覧長順氏・三澤祐大氏・井上浩彰氏（沖縄国際大学生）

中村フサ子氏（那覇市教育委員会臨時職員）

宮城みさ子氏・城間千栄子氏・仲西美那子氏・宮良知子氏・山城千夏氏・仲井真美佐枝氏・志良堂

恵氏・渡辺幸夫氏（那覇市教育委員会非常勤職員）

鏡水自治会・鏡水郷友会ほか関係各位

8. 本報告で使用した先史時代の名称は、高宮廣衛『沖縄先史遺跡と文化』 榊第一書房 1994年3月 p133より引用した表を参考にした（第2表）。
9. 巻首図版1および図版1の空中写真（2007年1月撮影）、第2図の那覇市全図（平成18年2月発行）は、国土地理院発行のものを複製して使用した。
10. 第1図に使用した広域図は、坂本幸雄 株式会社 ティビーエス・ブリタニカ『ブリタニカ国際地図』1991年7月1日（第2版改訂発行）の91ページの部分をトレースして使用した。
11. 第4図は、米軍作成地形図（1947・1948年撮影の航空写真をもとに1948年作成）を縮小複写して貼り合わせたものを重ねて作図したものである。
12. 第3・7図は、「都市計画図 1：2,500 平成7年12月修正 那覇市作成」を縮小複写し貼り合わせて使用した。
13. 第5図は、那覇市企画部市史編集室『那覇市史 那覇の民俗 資料篇 第2巻中の7』昭和54年1月 付録「旧小禄の歴史・民俗地図」を縮小したものである。
14. 第6図は、沖縄タイムス朝刊 「思い出のわが町」より、「<66>戦前の字鏡水民俗地図」1977年12月8日を加筆・トレースして作図した。
15. 本報告書の執筆は以下の通りである。編集は比嘉君子、大城弘子、請盛智秋、真栄城和美、山下真利子および各執筆者の協力を得て、仲宗根が行った。なお、第VI章 第3節は城間千栄子氏より原稿を頂いた。記して感謝申し上げます。また、附篇は、バリノ・サーヴェイ株式会社より報告いただいた。記して感謝申し上げます。

第I章～第V章 仲宗根啓

第VI章 第1・2節 仲宗根啓 大城弘子

第3節 城間千栄子

第4節 伊波かおり

第5節 北條真子

第6節 尾木綾

第7～10節 樋口麻子

第Ⅶ章 仲宗根啓

附篇 パリノ・サーヴェイ株式会社

16. 番号と写真図版の番号は一致するように配置してある。
17. 出土遺物は那覇市教育委員会文化財課で保管している。

# 目 次

- 巻首図版 1 遺跡一帯の空中写真
- 巻首図版 2 調査区全景
- 巻首図版 3 主な層序と遺構
- 巻首図版 4 主な出土遺物

序  
例言

第 I 章 調査に至る経緯 .....	1
第 II 章 遺跡の位置と環境 .....	3
第 III 章 調査経過と調査組織 .....	13
第 1 節 調査経過 .....	13
第 2 節 調査組織 .....	20
第 IV 章 層序 .....	23
第 V 章 遺構 .....	29
第 1 節 沖縄新石器時代前 II 期（8 期）の遺構 .....	29
第 2 節 沖縄新石器時代前 III・IV 期（6・7 期）の遺構 .....	31
第 3 節 沖縄新石器時代後期（5 期）の遺構 .....	32
第 4 節 グスク時代以降（4 期）の遺構 .....	33
第 5 節 近世（3 期）の遺構 .....	34
第 6 節 近代（2 期）の遺構 .....	36
第 VI 章 遺物 .....	49
第 1 節 土器 .....	49
第 2 節 石器 .....	61
第 3 節 貝製品 .....	81
第 4 節 外国産陶磁器 .....	85
A 白磁 .....	85
B 青磁 .....	87
C 青花 .....	89
D 青磁染付 .....	91
E 瑠璃釉 .....	91
F 黒釉陶器 .....	91

G 緑釉 .....	91
H 翡翠釉 .....	91
I 褐釉陶器 .....	92
J タイ産半練 .....	92
第5節 本土産陶磁器 .....	103
第6節 銭貨 .....	115
第7節 円盤状製品 .....	119
第8節 煙管 .....	122
第9節 陶製品 .....	123
第10節 玉 .....	123
第Ⅶ章 總括 .....	125

#### 附篇

1 鏡水箕隅原C遺跡の年代測定委託業務報告 .....	129
2 鏡水箕隅原C遺跡の自然科学分析委託業務報告 .....	135
3 鏡水箕隅原C遺跡の年代測定委託業務報告 .....	143
4 鏡水箕隅原C遺跡の年代測定委託業務報告 .....	149
5 鏡水箕隅原C遺跡の自然科学分析委託業務報告 .....	153
6 鏡水箕隅原C遺跡の年代測定委託業務報告 .....	159
7 鏡水箕隅原C遺跡の自然科学分析委託業務報告 .....	163

#### 報告書抄録

## 挿図目次

第1図	沖縄本島と那覇市の位置	6
第2図	那覇市内の主な遺跡	7
第3図	本遺跡周辺の地形と 周辺の遺跡(平成7年)	8
第4図	本遺跡周辺の地形 (1947・1948年)	9
第5図	旧小祿の歴史・民俗地図	10
第6図	戦前の字鏡水民俗地図 (昭和18年頃)	11
第7図	グリッド設定図	12
第8図	土層堆積模式図	23
第9図	グリッド及び 土層観察用アゼ設定図	26
第10図	土層断面図	27
第11図	沖縄新石器時代前Ⅱ期の 遺構・遺物分布図	37
第12図	沖縄新石器時代前Ⅲ・Ⅳ期の 遺構・遺物分布図	39
第13図	沖縄新石器時代後期の 遺構・遺物分布図	41
第14図	グスク時代以降の遺構 (ピット・鉄跡)分布図	43
第15図	グスク時代以降の遺構 (鉄跡)分布図	45
第16図	近世の遺構 (溝状遺構)分布図	47
第17図	土器①	53
第18図	土器②	55
第19図	土器③	57
第20図	土器④	59
第21図	石器①	73
第22図	石器②	74
第23図	石器③	75
第24図	石器④	76
第25図	石器⑤	77
第26図	石器⑥	78
第27図	石器⑦	79

第28図	石器⑧	80
第29図	貝製品①	83
第30図	貝製品②	84
第31図	白磁・青磁	95
第32図	青磁・青花	97
第33図	青花・青磁染付・瑠璃軸・ タイ産半練	99
第34図	本土産磁器集中部 出土遺物①	109
第35図	本土産磁器集中部 出土遺物②	111
第36図	本土産陶磁器	113
第37図	銭貨①	117
第38図	銭貨②	118
第39図	円盤状製品の最大径と 重さ相関	120
第40図	円盤状製品	121
第41図	煙管・陶製品・玉	124

## 挿表目次

第1表	調査工程	13
第2表	沖縄諸島の暫定編年	50
第3表	沖縄新石器時代前Ⅱ期土器 集計一覧	51
第4表	土器観察一覧①	52
第5表	土器観察一覧②	54
第6表	土器観察一覧③	56
第7表	土器観察一覧④	58
第8表	石質同定一覧①	62
第9表	石質同定一覧②	63
第10表	石質同定一覧③	66
第11表	石器観察一覧	71
第12表	貝製品出土一覧	81
第13表	貝製品観察一覧①	81
第14表	貝製品観察一覧②	82
第15表	白磁出土一覧①	85
第16表	白磁出土一覧②	86
第17表	青磁出土一覧①	87

第18表	青磁出土一覧②	88
第19表	青花出土一覧①	89
第20表	青花出土一覧②	90
第21表	褐釉陶器出土一覧①	92
第22表	褐釉陶器出土一覧②	93
第23表	白磁観察一覧①	94
第24表	青磁観察一覧①	94
第25表	青磁観察一覧②	96
第26表	青花観察一覧①	96
第27表	青花観察一覧②	98
第28表	青磁染付観察一覧	98
第29表	瑠璃軸観察一覧	98
第30表	タイ産半練観察一覧①	98
第31表	白磁観察一覧②	100
第32表	青磁観察一覧③	100
第33表	青磁観察一覧④	101
第34表	青花観察一覧③	101
第35表	青花観察一覧④	102
第36表	褐釉陶器観察一覧	102
第37表	タイ産半練観察一覧②	102
第38表	本土産磁器出土一覧①	104
第39表	本土産磁器出土一覧②	105
第40表	本土産陶器出土一覧	106
第41表	本土産磁器集中部出土の 紙部焼計測一覧	107
第42表	本土産磁器集中部 出土遺物観察一覧①	108
第43表	本土産磁器集中部 出土遺物観察一覧②	110
第44表	本土産陶磁器観察一覧	112
第45表	銭貨出土一覧	115
第46表	銭貨観察一覧①	116
第47表	銭貨観察一覧②	116
第48表	銭貨観察一覧③	116
第49表	銭貨観察一覧④	118
第50表	円盤状製品観察一覧	119
第51表	円盤状製品出土一覧	120
第52表	煙管計測一覧	122
第53表	陶製品計測一覧	123

第54表	玉計測一覧	123
第55表	放射性炭素年代測定一覧①	128
第56表	放射性炭素年代測定一覧②	128

## 図版目次

図版 1	遺跡一帯の空中写真
図版 2	遺跡の状況
図版 3	主な層序の状況
図版 4	主な層序の状況
図版 5	主な遺構と出土遺物 (沖縄新石器時代前Ⅱ期)
図版 6	主な遺構と出土遺物 (沖縄新石器時代前Ⅲ・Ⅳ期)
図版 7	主な出土遺物 (沖縄新石器時代前Ⅲ・Ⅳ期)
図版 8	主な出土遺物 (沖縄新石器時代前Ⅲ・Ⅳ期)
図版 9	主な出土遺物 (沖縄新石器時代前Ⅲ・Ⅳ期)
図版 10	主な遺構 (沖縄新石器時代後期)
図版 11	主な遺構 (沖縄新石器時代後期)
図版 12	主な出土遺物 (沖縄新石器時代後期)
図版 13	主な出土遺物 (沖縄新石器時代後期)
図版 14	主な遺構 (グスク時代以降)
図版 15	主な遺構 (グスク時代以降)
図版 16	主な遺構 (グスク時代以降)
図版 17	主な遺構と出土遺物 (グスク時代以降)
図版 18	主な遺構 (近世)
図版 19	主な遺構 (近世)
図版 20	主な遺構 (近代)
図版 21	表土剥ぎ作業と樹木の移植作業
図版 22	表土剥ぎ作業と委託業務
図版 23	発掘調査作業の状況
図版 24	発掘調査作業の状況
図版 25	発掘調査作業の状況

- 図版26 発掘調査作業の状況
- 図版27 土器①
- 図版28 土器②
- 図版29 土器③
- 図版30 土器④
- 図版31 石器①
- 図版32 石器②
- 図版33 石器③
- 図版34 石器④
- 図版35 石器⑤
- 図版36 石器⑥
- 図版37 石器⑦
- 図版38 石器⑧
- 図版39 貝製品①
- 図版40 貝製品②
- 図版41 白磁・青磁
- 図版42 青磁・青花
- 図版43 青花・青磁染付・瑠璃釉・タイ産半練
- 図版44 白磁・青磁
- 図版45 青磁・青花
- 図版46 青花・褐釉陶器・タイ産半練
- 図版47 本土産磁器集中部出土遺物①
- 図版48 本土産磁器集中部出土遺物②
- 図版49 本土産陶磁器
- 図版50 銭貨
- 図版51 円盤状製品
- 図版52 煙管・陶製品・玉

# 鏡水箕隅原C遺跡発掘調査報告書

## 第I章 調査に至る経緯

本遺跡は、沖縄県那覇市字鏡水に位置する。同地域は、陸上自衛隊那覇駐屯地として使用されている地域である。同地域において、内閣府沖縄総合事務局南部国道事務所（以下、南部国道事務所）による「沖縄西海岸道路 那覇西道路」建設が計画された。「那覇西道路は、沖縄西海岸道路（延長50km）の一部を構成する道路で」、「国道58号の渋滞緩和」「那覇空港へのアクセス向上」「那覇港の機能向上」が整備効果として上げられている。

さて、那覇西道路（那覇市若狭～那覇市鏡水の約3km）開発計画の中で、沖縄県那覇市鏡水地先における「埋蔵文化財事前審査願」が平成15年10月30日付け、南部国道事務所から那覇市教育委員会（以下、市教委）に提出された。同地域は、前述のとおり、自衛隊基地内との制約された区域であったため、埋蔵文化財の有無が確認されていないのが現状であった。そのため、平成15年11月11日～11月14日までの期間で踏査及び試掘調査が市教委によって実施された。その結果、二遺跡の所在が確認され、平成15年11月28日付け、「事前調査報告書」が市教委から南部国道事務所あて回答された。

さらに、平成16年1月19日付け及び平成16年4月20日付けで開発計画区域の大部分について「埋蔵文化財事前審査願」が南部国道事務所から市教委へ再度提出された。

市教委では、平成16年2月4日・5日及び平成16年6月14日～6月22日までの期間で試掘調査を実施した結果、合計四遺跡（遺跡A・遺跡B・遺跡C・遺跡Dと仮称）の所在が明らかになることとなった（平成16年2月16日付け及び平成16年8月18日付けで事前調査報告書が市教委から南部国道事務所あて回答）。

その後、南部国道事務所と市教委、沖縄県教育庁文化課（以下、県文化課）との間で、遺跡保存のための調整が行われることになる。

まず、平成16年7月5日、南部国道事務所と市教委にて遺跡保存のための調整が行われた。その結果、遺跡B及び遺跡Dについては現地保存が可能、遺跡A及び遺跡Cについては、記録保存のための発掘調査が必要であるとの結論に達した。しかし、市教委では、諸事情により調査対応が困難である旨の回答がなされた。

平成16年8月24日、南部国道事務所、市教委、県文化課で遺跡保存のための調整が行われた。南部国道事務所からは、遺跡Cは平成17年度、遺跡Aは平成18年度対応で、市教委と県文化課で協力して記録保存のための発掘調査を実施してほしいとの依頼であった。市教委及び県文化課は、調査対応の詳細について検討するとした。

平成16年10月5日、県文化課と市教委で調整を行い、遺跡Cは市教委、遺跡Aは県文化課が対応すると結論に至った。

平成16年10月18日、南部国道事務所、市教委による調整において、県文化課と市教委による調査対応の結論についての報告及び確認が行われ、今後の日程についても調整が行われた。

一方、三者による遺跡保存のための調整を実施しながら、合わせて文化財保護法による手続きも行われた。

南部国道事務所から、沖縄県教育委員会への進捗依頼である「沖縄西海岸道路（那覇西道路）に係る埋蔵文化財の発見について」が平成16年9月28日付け、市教委に提出された。



平成16年10月14日付け、市教委より県教育委員会あて「遺跡の発見通知について」が送達され、平成16年10月21日付け、沖縄県教育委員会より市教委あて「遺跡の発見について」の回答が送付された。なお、道路開発計画地区内で発見された四つの遺跡は、同地区内に所在する「ミノシン毛」と称される小高い丘陵の周辺に位置することから、箕隅原A・B・C・D遺跡とされた。その後、遺跡の所在する大字名である「鏡水」を付して鏡水箕隅原C遺跡とした。

平成16年11月12日付け、市教委より南部国道事務所あて「遺跡の発見について」が送付され、発見された四遺跡は周知の埋蔵文化財となった。

その後、文化財保護法による埋蔵文化財（箕隅原C遺跡）発掘調査着手通知が平成17年5月18日付け、「埋蔵文化財発掘調査について」として市教委より沖縄県教育委員会あて報告された。

鏡水箕隅原C遺跡の発掘調査（手作業による実質的な調査）は、第1次調査が2005（平成17）年5月26日、第2次調査が2006（平成18）年7月3日から実施された。

#### 参考資料

内閣府 沖縄総合事務局 南部国道事務所 『沖縄西海岸道路 那覇西道路』（パンフレット）

内閣府 沖縄総合事務局 南部国道事務所 ホームページ 『お約束プロジェクト 2007』

内閣府 沖縄総合事務局 南部国道事務所 『沖縄西海岸道路 那覇西道路 お約束プロジェクト』（パンフレット）

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### 那覇市の現況

本遺跡は、沖縄県那覇市鏡水地内に所在する。

市の位置について那覇市のホームページによると、「沖縄県は、北緯24～28度、東経122～133度の南北約400km、東西約1,000kmの海上に弧を描いて連なる160の島しょの内、有人島39からなっています。その中で那覇市は最大の島、沖縄本島南部に位置します。また、本市は鹿児島と台北のほとんど中間にあり、那覇を中心とする1,500kmの円周域には、東京、ビョンヤン、香港、ソウル、北京、マニラなどの主要な都市があり、交通通信機能の上からも東南アジアの各都市を結ぶ要衝の地点であり、わが国の南の玄関として地理的に好条件の位置にあります。」と紹介されている（第1図）。

本市の地形等を概観すると、東シナ海に西面し、東側に弁ヶ嶽・首里城付近を頂点とする台地があり、南側には小緑台地、北側は天久台地が占地する。その台地などを源として、北から安謝川・安里川・国場川が西流する。安謝川は安謝港、安里川は泊港、国場川は那覇港を経て、東シナ海に注ぐ。また、市の周辺は、北に浦添市、東に西原町、南風原町、南に豊見城市が接している。

本市の概要は、その面積39.23<sup>＊</sup>㎡、総人口318,658人（2011年1月現在）を擁する県庁所在地である。県庁などが所在する泉崎、国際通り（県道39号線）周辺に企業や官公庁が集中し、活気を呈している。さらに、本市北西側では、1987（昭和62）年、「天久解放地」と称されていた米軍用地が全面返還され、「那覇新都心」として整備され発展を遂げている。

### 那覇市内の主な遺跡

本市における主な遺跡分布を第2図に示した。その分布は、ほぼ市内全域に点在する。近世期の遺跡は、古墓群・古窯跡・集落跡がそれぞれの地域に散在して位置している。特に、近世期の集落跡に関する発掘調査については、首里地域や壺屋地域において、その事例が増加しているものの、小緑や真和志地域では希薄の感がある。今後、範囲確認調査や分布調査などの事前調査も積極的に実施する必要がある。

### 字鏡水と周辺の遺跡

先の大戦直後（第4図）と平成7年頃（第3図）の地形図に本遺跡の位置を示した。かつては、直線距離で約100mほどに海岸線が迫った位置に本遺跡が所在していたことが理解できる。

以下、諸書籍等から「字鏡水」について引用してみる。

#### 『字鏡水創立百周年記念誌』

鏡水の起源として「西原間切安室村の住人、大屋と称する人は大嶺村長山原に移住し、半農半漁の生活をしてしたが、同郷の知人で平良、新垣の一族を誘い鏡水原に居住せしめたことが字鏡水の起源である。（省略）」と紹介されている。

#### 『沖縄大百科事典』鏡水 かがみず

「（前略）方音は<カガンジ>。旧小緑村の西北岸に位置。戦前は鏡水大根（カガンジデークニ）の生産地として有名。1933年（昭和8）小緑海軍飛行場が建設される。戦後は米軍基地に接収され、

復帰（1972年）後は自衛隊が駐屯、那覇空港は米軍管理から運輸省の所管となる。（後略）」と紹介されている。

#### 『角川日本地名大辞典』47沖縄

〔近代〕鏡水村 によると、「明治36～41年の村名。島尻郡小禄間切のうち。もとは小禄間切安次嶺村・儀間村の各一部。地内には仕明知行地や仕明請地が多く、仕明地を小作する人のハルヤー（自作小屋）から発達した屋取を中心とする。はじめ崎原・箕隅原にあったウンジュムイ屋取ができ、のちに鏡水屋取などができた。（後略）」とある。

同じく、かがみず 鏡水<那覇市>によると、「（前略）「ベリー訪問記」にアベイポイント（Abbey Point）と見え、「その岬は樹葉に覆われ、その先端は孤立した一群の岩石をいただき……丘陵には所々に白いものが点在していた。自分は最初それを住家と思ったが、しかしそれは石灰岩で出来た墳墓であった」と記す。」とあり、「アベイポイントの観音像」の図が『青い目が見た大琉球』に紹介されている。これが同地区内に所在する「ミーヌシン」と称される拝所のことであろう（那覇市歴史地図：『琉球国由来記』に、前の洞穴には、正観音、後の洞穴にはピンズルを祭ってあるという。琉球国由来記：メイノスミノ事 岩穴アリ、形チ箕ニ似タリ。故ニ、メイノスミト、云ヨシナリ。前ノ竈ニハ 正観音ノ尊像ヲ安置シ、且、寶頭庵在ス也。誰人之建立シケルヤ、不可考知。（後略））。

さて、本遺跡周辺の主な遺跡を第3図に示している。那覇港の北岸に三重グスク（近接して渡地村跡、那覇港内に御物グスク）、那覇港南岸に屋良座森グスク（近接して垣花村跡・住吉遺跡、東側丘陵にガジャンピラ丘陵遺跡・住吉遺物散布地）、南側丘陵に那崎原遺跡などが立地する。これらは、グスク時代や沖縄新石器時代前期・後期などの遺跡である。また、本遺跡が所在する陸上自衛隊那覇駐屯地内の遺跡は、鏡水名座原A遺跡・鏡水名座原B遺跡・鏡水名座原古墓群・鏡水箕隅原A遺跡・鏡水箕隅原B遺跡・鏡水箕隅原D遺跡・鏡水箕隅原E遺跡・鏡水水溜原遺跡・鏡水土砂場原A遺跡・鏡水土砂場原B遺跡など多数の遺跡が所在することが知られるようになってきた。これは、本遺跡発見の契機となった沖縄西海岸道路（那覇西道路）建設計画や陸上自衛隊那覇駐屯地内の諸開発計画に伴い「埋蔵文化財事前審査願」の提出が増加してきたためである。

第5図と第6図は、昭和期の遺跡周辺の民俗地図を示した。遺跡は集落から離れた海岸寄りに位置している。本遺跡が位置する環境は、近代期に成立・発展を遂げたと言われる「宇鏡水」においては、原野あるいは畑地、後に火薬庫が建ち並ぶ空間であったことが推察される。

なお、同地域周辺における遺跡の位置と環境、歴史的背景等について『鏡水土砂場原A遺跡』発掘調査報告書にて詳述されている。参照頂きたい。

#### 参考資料・引用文献

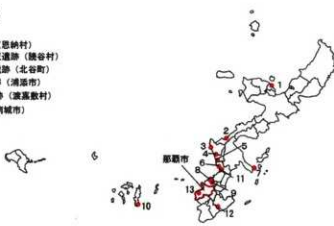
- ・「那覇市 位置・面積」 那覇市ホームページ
- ・『広報なは 市民の友』 第72号 那覇市 2011年（平成23年）3月
- ・『宇鏡水創立百周年記念誌』 鏡水郷友会 発行 鏡水創立百周年記念事業記念誌発行部 編集 平成17年9月
- ・『思い出のわが町』 <66> 宇鏡水 1977年12月8日付け沖縄タイムス朝刊
- ・『沖縄大百科事典』 沖縄タイムス社 1983年5月発行

- ・『角川日本地名大辞典 47 沖縄県』 株式会社角川書店 昭和61年7月8日
- ・『青い目が見た大琉球』ニライ社 1987年8月1日
- ・『ペルリ提督琉球訪問記』国書刊行会（東京） 1997年7月
- ・『那覇市歴史地図—文化遺産悉皆調査報告書—』 那覇市教育委員会 1986年3月
- ・『琉球史料叢書』第二巻 東京美術 昭和四十七年四月十二日
- ・『渡地村跡』—臨港道路那覇1号線整備に伴う緊急発掘調査報告— 沖縄県立埋蔵文化財センター 平成19（2007）年7月
- ・『埋蔵文化財発掘調査概要 渡地村跡』那覇市教育委員会 2009年3月
- ・新田重清ほか「第3回米軍基地内等文化財調査報告」『昭和55年度 文化行政要覧』 沖縄県教育委員会 昭和56年3月
- ・新田重清「基地内文化財調査概要—御物城の考古学的知見—」『沖縄県立博物館紀要』 第3号 沖縄県立博物館 1977年3月
- ・『沖縄県歴史の道調査報告書—真珠道・末吉宮参詣道—』 沖縄県教育委員会 1984年3月
- ・『垣花村跡』 那覇市文化財調査報告書 第78集 那覇市教育委員会 2009年2月
- ・『住吉遺跡』 那覇市文化財調査報告書 第71集 那覇市教育委員会 2006年3月
- ・『ガジャンピラ丘遺跡』 那覇市文化財調査報告書 第36集 那覇市教育委員会 1997年3月
- ・『那覇市の遺跡』 那覇市文化財調査報告書 第5集 那覇市教育委員会 1982年3月
- ・高宮廣衛「那覇の考古資料」『那覇市史 資料篇』 第1巻1 那覇市役所 1968年
- ・『那崎原遺跡』 那覇市文化財調査報告書 第30集 那覇市教育委員会 1996年3月
- ・伊波かおり・北條真子「鏡水名座原A遺跡～那覇市で初めて発掘された縄文時代後期相当期の集落遺跡～」『南島考古だより』  
第87号 沖縄考古学会 平成21年（2009年）12月18日
- ・伊波かおり「第II章 遺跡の位置と環境」『鏡水土砂場原A遺跡』那覇市教育委員会 2010（平成22）年3月
- ・『鏡水箕隅原A遺跡発掘調査現地説明会資料』沖縄県立埋蔵文化財センター 2008.11.9
- ・『平成20年度企画展 発掘調査速報展2008』「箕隅原A遺跡」沖縄県立埋蔵文化財センター 2008（平成20）年7月29日
- ・『平成21年度企画展 発掘調査速報展2009』「鏡水箕隅原A遺跡」沖縄県立埋蔵文化財センター 2009（平成21）年7月22日

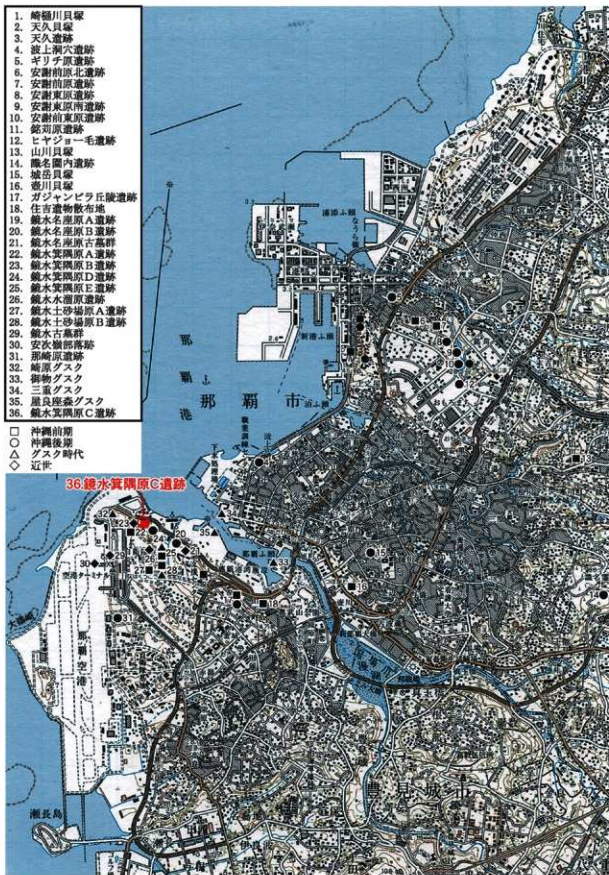


### 沖繩本島Ⅱ期の遺跡

- |                      |                  |
|----------------------|------------------|
| 1. 屋敷地大堂原貝塚 (名護市)    | 2. 仲泊遺跡 (恩納村)    |
| 3. 大久保原遺跡 (勝谷村)      | 4. 遊真知原遺跡 (勝谷村)  |
| 5. 野嶺貝塚群日地点 (高平納町)   | 6. 伊礼原C遺跡 (北谷町)  |
| 7. ヤブチ洞穴遺跡 (うるま市与那城) | 8. 城間古墓群 (清添市)   |
| 9. チヂフチャー洞穴遺跡 (清添市)  | 10. 船越原遺跡 (渡嘉敷村) |
| 11. 新城下原第二遺跡 (宜野湾市)  | 12. 武家湾 (南城市)    |
| 13. 冥陽原C遺跡 (那覇市)     |                  |

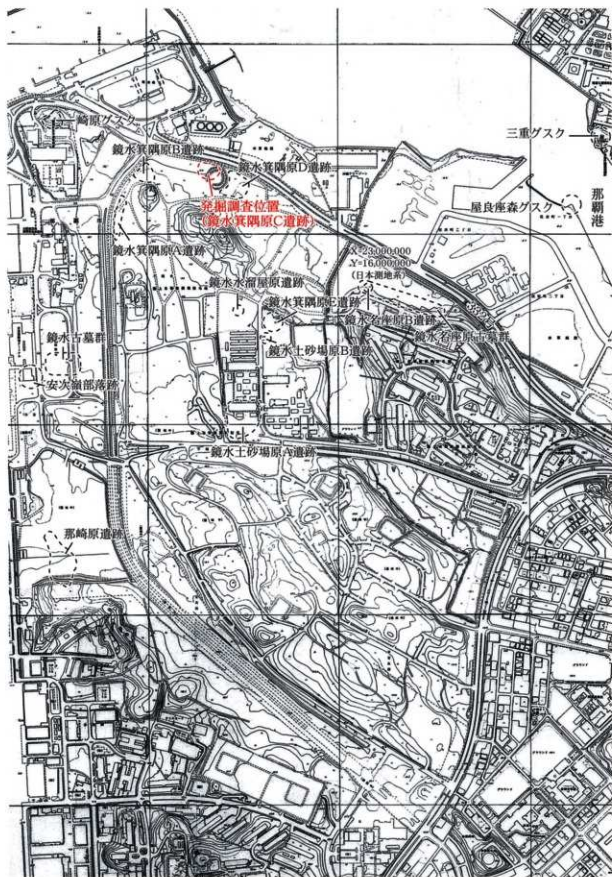


第1図 沖繩本島と那覇市の位置



第2図 那那那市内の主な遺跡

S=1:50,000



第3図 本遺跡周辺の地形と周辺の遺跡（平成7年）

(S=1:10,000)









第6図 戦前の字鏡水民俗地図 (昭和18年頃)



### 第三章 調査経過と調査組織

#### 第1節 調査経過

本遺跡の発掘調査は、第1章でも述べたとおり、2003（平成15）年度及び2004（平成16）年度の試掘調査成果を受けて、2005（平成17）年度と2006（平成18）年度に実施された（第1表）。調査は、第1次調査（2005（平成17）年5月26日～2006（平成18）年1月10日）、第2次調査（2006（平成18）年7月3日～2007（平成19）年3月30日）と二次にわたる調査となった。

調査期間中の2005（平成17）年10月29日（土）には、調査の成果について現地説明会を実施した。

調査開始時は、梅雨の時期であったため、降雨が多く困難な作業が続いた。雨水の処理や現地の赤土防止対策には、南部国道事務所をはじめ現地工事施工業者（三善建設（株）には多大な協力と配慮を賜った。なお、雨天時には、室内作業（出土遺物洗浄作業・写真フィルム・アルバム整理作業など）も行いながら現地作業を実施した。

本遺跡の調査は、沖縄西海岸道路（那覇西道路）建設計画に伴って実施されたもので、その範囲は、当初約400㎡を予定していた。調査開始の前に、遺跡の表土剥ぎをバックホーを使用して実施した結果、約2400㎡まで遺跡の範囲が広がることが判明した。また、鏡水箕隅原D遺跡は、本遺跡と一体の遺跡となる可能性も示唆された。

一方、表土剥ぎ作業と平行しながら磁気探査作業も実施された。

発掘調査は、遺跡の短軸（略南北方向）に略北から、F・G・H・・・とアルファベットを、長軸（略東西方向）に略西から、6・7・8・・・と算用数字を付して4m×4mのグリッドを設けた（第7・9図）。グリッドは、北西隅の交点をグリッド名とし、F-6、G-7、H-8と称した。

なお、調査区内において、遺跡長軸の土層観察用アゼとして「Hグリッドライン」「Kグリッドライン」「Nグリッドライン」、短軸の土層観察用アゼとして「6グリッドライン」「9グリッドライン」「12グリッドライン」「14グリッドライン」「15グリッドライン」「18グリッドライン」に幅1mで設定した（第9図）。

以下、調査概要を業務日誌より略記する。

第1表 調査工程

年度 工程	2003年度 (平成15年度)	2004年度 (平成16年度)	2005年度 (平成17年度)	2006年度 (平成18年度)	2007年度 (平成19年度)	2008年度 (平成20年度)	2009年度 (平成21年度)	2010年度 (平成22年度)
試掘調査	→							
本発掘調査			→					
資料整理				→				
報告書作成								→

## 第一次調査

2005（平成17）年度

発掘調査の開始前には、仮設事務所設置、発掘調査道具類の確認作業などを行いながら、現地での諸調整を行った。

5月26日（木）晴れ

バックホーによる表土剥ぎ作業を開始する。磁気探査を合わせて作業していくこととする。

31日（火）晴れ時々曇り

発掘調査道具を仮設事務所に搬入する。

6月6日（月）晴れ

グリッド設定作業及び手作業による遺物包含層の精査作業を開始する。爪形文土器が採取される。

7日（火）晴れ

遺跡の全体図作成のため、平板測量を実施する。

9日（木）晴れ

J-7・8・9グリッド、I-9グリッド掘り下げ作業を開始する。

14日（火）雨

現地作業を開始するも雨が強まったため、室内作業とする。

16日（木）雨

現地の赤土防止対策について関係部局と調整を行う。以後、7月5日まで現地作業を休止して室内作業を行う。

7月6日（水）晴れ

現地作業を再開する。N-7・8・9・10グリッドの掘り下げ作業を実施。

8日（金）晴れ

N-8グリッド（北側トレンチ）にて鋳跡と見られる遺構が確認される。

11日（月）晴れ

バックホーによる表土剥ぎ作業をほぼ終了する。

15日（金）晴れ

台風接近のため、土のう袋作りなどの対策を講じる。

8月8日（月）晴れ

作業状況の写真撮影を行う。

16日（火）晴れ

N・O・P-5・6・7グリッド土層堆積状況の写真撮影を行う。

17日（水）晴れ

発掘調査実習生として興南高校生（一名）が8月26日まで参加した。

26日（金）晴れ

N・O・P-5・6グリッド土坑（ビット）半截作業及び断面写真撮影作業を行う。

29日（月）曇り

O-5・6・7、P-6・7グリッド検出遺構を完掘する。作業状況の写真撮影を合わせて行う。

9月1日（木）曇り後晴れ

N・P-5・6グリッド検出の土坑（ビット）平面実測作業を実施。

- 2日(金) 晴れ  
N～P-5～9グリッド検出遺構の完掘状況写真撮影を行う。
- 5日(月) 雨  
雨天のため、室内作業(出土遺物洗浄作業、図面整理など)を行う。
- 14日(水) 晴れ  
I-9グリッドにて出土した石器(石鏃)の写真撮影を行う。
- 21日(水) 晴れ  
J-8・9グリッドの出土遺物について、実測(平面・標高値を記入)を行う。
- 10月3日(月) 晴れ  
G-9グリッド東壁・南壁土層観察アゼ実測作業を行う。
- 7日(金) 晴れ  
H～K-7～10グリッドのⅡe層にて検出の貝塚について写真撮影を実施。
- 19日(水) 晴れ  
K-7グリッドⅡe層の貝塚に伴う遺物の取り上げ作業を行う。
- 29日(土) 晴れ  
午前10:30と午後14:30の二回、現地説明会を実施した。
- 11月1日(火) 晴れ  
道路建設工事と発掘調査の工程について、南部国道事務所との調整会議を行う。
- 9日(水) 曇り  
H-10、I-9、J-8・9、K-7グリッドⅡe層検出貝塚に伴う遺物の取り上げ作業を行う。
- 15日(火) 曇り  
作業状況の写真撮影を行う。
- 30日(水) 晴れ  
K・L-7グリッドについてデジタルカメラ測量の試行を行う。
- 12月9日(金) 曇り  
遺跡全体撮影を行う。
- 14日(水) 曇り  
K-6グリッドⅡf層のサンプリングを行う。
- 15日(木) 曇り  
I-9(石器)、J-7(石器)、L-7(石器:石斧)、M-7(土器底部)、P-10(石器)グリッド出土遺物の写真撮影を行う。
- 21日(水) 雨  
雨天のため室内作業を実施。
- 28日(水) 晴れ  
K-6グリッドⅡe層検出の炉跡について焼土と灰のサンプリングを行う。
- 2006(平成18)年
- 1月4日(水) 晴れ  
J・K-6グリッドの土層観察用アゼの掘り下げ作業を行う。

5日(木) 雨

室内作業を行う。

6日(金) 曇り

K-6グリッド検出の炉跡№2よりサンプル土を採集する。

10日(火) 晴れ時々曇り

I・J-8グリッドについて、バックホーを使用して深掘を行い、最下層の状況を確認して第一次調査を終了する。

その後、3月31日までの期間において出土資料の確認・整理作業などを実施した。

## 第二次調査

2006(平成18)年度

昨年度に実施した出土遺物、作成図面、撮影写真の整理・確認作業を行いながら、本年度の調査工程の調整や磁気探査作業、仮設事務所の設置などの諸準備作業を行って現地調査に備えた。

7月3日(月) 晴れ

第二次調査を開始する。グリッド杭の確認作業を行う。

5日(水) 晴れ

南部国道事務所、工事施工業者との調整を行う。L・M-8・9グリッドII d層上面にて溝状の遺構を確認する。

7日(金) 曇り

台風接近のため、現地対策を施す。

12日(水) 晴れ

工事工程との調整により、H-15~17グリッドの掘り下げ作業を主体とする。

13日(木) 曇り

台風の影響が出始める。

18日(火) 晴れ

工事施工中に礎石を発見する。

8月2日(水) 晴れ

H-16グリッドにて近代以降の所産考えられる石囲い遺構を完掘する。

8日(火) 晴れ

J・K・L-16グリッドII d層の掘り下げ作業を継続する。作業状況の写真撮影。

9日(水) 曇り

台風の影響が出始める。

11日(金) 晴れ

H-O-8~13グリッドにて検出された溝状遺構の写真撮影を実施。

14日(月) 晴れ

K~M-8・9グリッド溝状遺構の断面図作成作業を行う。

18日(金) 曇り

M-8グリッド、II c層・II d層の掘り下げ作業終了。赤土が露出する。

- 28日(月) 晴れ  
遺跡内に仮置きしていた残土の処理作業を行う。
- 9月5日(火) 曇り  
G-16グリッド掘り下げ作業終了。地山検出。
- 6日(水) 曇り  
K-8~12グリッド掘り下げ作業をほぼ終了する。地山が露出する。
- 15日(金) 晴れ  
I-14、L-10・14、M-10~12・14グリッドの主にⅡd層の掘り下げ作業を行う。
- 27日(水) 曇り  
各グリッドの作業状況について写真撮影を行う。
- 10月10日(火) 晴れ  
H~J-13グリッド西側壁、H~J-15グリッド東側アゼの断面実測作業を行う。
- 13日(金) 晴れ  
H・I-15グリッド出土遺物(土器・石器)の出土ポイント詳細図作成を行う。
- 26日(木) 曇り  
国際縄文学協会のメンバーが現地視察に訪れる。
- 11月1日(水) 雨  
雨天のため、室内作業(出土遺物洗浄作業)を行う。
- 2日(木) 晴れ  
K~M-14グリッド西側アゼ、K-13グリッド北側アゼ、K・L-13グリッド東壁、M-16グリッド南壁の断面実測作業を行う。
- 7日(火) 晴れ  
K・L-8グリッド西アゼの掘り下げ作業を行う。
- 10日(金) 晴れ  
J-17グリッドにてデジタルカメラによる作図の試行のための測量作業を実施する。
- 24日(金) 晴れ  
N-8・9、O-9グリッドの遺構面精査作業を行って、土坑(ピット)の確認、掘り下げ、平面図作成作業を実施する。
- 29日(水) 曇り  
各グリッドに設定していた土層観察用アゼの掘り下げ作業を行う。
- 12月4日(月) 曇り時々晴れ  
K-16~18グリッド出土の遺物について、出土ポイント詳細図を作成する。
- 5日(火) 晴れ時々曇り  
M-13グリッド南壁における土層堆積状況の写真撮影を行う。
- 7日(木) 曇り後雨  
J-9グリッド南壁における土壌サンプル採取後の写真撮影を行う。
- 11日(月) 曇り  
L-14グリッド西アゼのⅡd層(粘土質)より黒曜石が出土した。



13日(水) 晴れ後曇り

K-8、L-8・9、M-8・9、N-9グリッド検出の土坑(ピット)について半裁状態で土色の観察を行う。各土坑(ピット)によって色調が異なることから時期差が考慮された。

20日(水) 晴れ時々曇り

K・M-8、N-8・9グリッド検出の土坑(ピット)を完掘する。

28日(木) 曇り時々晴れ

各グリッド検出の土坑(ピット)について完掘作業、平面実測作業、写真撮影作業などを行う。

2007(平成19)年

1月4日(木) 曇り時々雨

午前中は雨天のため、室内作業を行い午後より現地を調査開始する。

22日(月) 曇り

G-21グリッド東アゼ、G-22北壁断面実測作業を行う。

24日(水) 曇り

G~I-19~22グリッド周辺についてコンター図を作成する。

26日(金) 晴れ

遺跡の全体撮影を行う。その際、高所作業車を使用した。

31日(水) 晴れ

二回目の遺跡全体撮影を行う。その際、再度高所作業車を利用した。

2月5日(月) 晴れ

L-12・13、M-12・15、N-11・14・15、O-14・15グリッド検出の土坑(ピット)について、覆土の色調観察、深さ、長軸、短軸の計測作業を行う。

6日(火) 晴れ

H・I-17グリッドII d層検出の貝塚の取り上げ作業を行う。

14日(水) 雨

雨天のため、室内作業を行う。

28日(水) 晴れ

H-14グリッド白砂層の掘り下げ作業を行う。

3月1日(木) 晴れ

H-13~15グリッド白砂層の掘り下げ作業を行う。

5日(月) 雨

H-14グリッド白砂層より条痕文様を有する土器が多数出土する。

7日(水) 曇り

H-13グリッド東側トレンチにて土層の堆積状況を観察する。赤土の地山に移行する際、黒色を帯びる土層となる。II f層と対応しそうな様相を呈している。

13日(火) 雨時々曇り

丑野先生(東京国際大学)による調査指導を仮設事務所に賜る。

16日(金) 曇り

H-11グリッド白砂層・II e層掘り下げ後、II f層の掘り下げ作業を行う。爪形土器が出土する。

19日（月）雨時々曇り

沖縄大学生が遺跡の見学を行う。

28日（水）晴れ時々曇り

H-10～13グリッド北側アゼについて断面実測を終了する。

29日（木）曇り

バックホーを使用してI-11～13グリッドの深掘りを実施する。遺物の採集が可能か確認を行った。

30日（金）晴れ

遺跡内の整理・確認、仮設事務所内の片付けを行う。調査道具類の撤収を行い、本遺跡の現地調査をすべて終了した。

なお、資料整理及び報告書作成は、2006（平成18）年度から2010（平成22）年度までの期間で実施した。

## 第2節 調査組織

本遺跡の調査組織は以下のとおりである。

### (1) 調査組織

事業主体	那覇市教育委員会	教育長	仲田美加子（平成17年度）
〃	〃	教育長	桃原 致上（平成18～21年度）
〃	〃	教育長	城間 幹子（平成22年度）
事業所管	文化財課	課 長	古塚 達朗（平成15～22年度）
調査総括	文化財課	副参事	島 弘（平成19～22年度）
調査事務	文化財課	主 幹	大城 伸雄（平成17年度）
〃	〃	主 幹	島 弘（平成18年度）
〃	〃	主 幹	田端 睦子（平成20年度）
〃	〃	主 幹	内間 靖（平成21・22年度）
〃	〃	主 査	島 弘（平成17年度）
〃	〃	主 査	田端 睦子（平成18・19年度）
〃	〃	主任主事	池間 孝子（平成17年度）
〃	〃	主任主事	赤嶺 増美（平成18・19年度）
〃	〃	主任主事	仲宗根 健（平成21・22年度）
〃	〃	主 事	新里真知子（平成20年度）
〃	〃	主事（臨時職員）	長田まり子（平成17年度）
〃	〃	主事（臨時職員）	本浜 美希（平成18年度）
〃	〃	主事（臨時職員）	島袋由美子（平成19年度）
〃	〃	主事（臨時職員）	長谷川さゆり（平成20・21年度）
〃	〃	主事（臨時職員）	金城 栄子（平成21年度）
調 査 員	文化財課	副参事	島 弘
〃	〃	主 幹	内間 靖
〃	〃	専門員主査	玉城 安明
〃	〃	専門員主査	北條 真子
〃	〃	主任専門員	仲宗根 啓
〃	〃	主任専門員	樋口 麻子
〃	〃	主任専門員	當銘 由嗣
〃	〃	専 門 員	知念 政樹

調査員	文化財課	発掘調査補助員（臨時職員）	栗山 初美
	＃	発掘調査補助員（臨時職員）	山里 千春
	＃	発掘調査補助員（臨時職員）	比嘉 君子
	＃	発掘調査補助員（臨時職員）	請盛 智秋
	＃	発掘調査補助員（臨時職員）	本村麻里衣
	＃	発掘調査補助員（臨時職員）	慶田 秀美
	＃	発掘調査補助員（臨時職員）	山下真利子
	＃	発掘調査補助員（臨時職員）	運天 綾
	＃	発掘調査補助員（臨時職員）	尾木 綾
	＃	発掘調査補助員（臨時職員）	大城 弘子

## (2) 発掘調査（第1次：平成17年度）

### 調査補助員

本村麻里衣 具志尚樹

### 発掘調査作業員

嘉数すみ子 翁長しのぶ 山城千夏 西銘須磨子 玉城初美 松長謙輔 喜瀬彰 仲木さゆり

赤嶺智規 安里勝則 玉城弘美 砂辺理恵 上江洲由昇 山城嘉勝 中塚末子 當眞哲 親川まゆみ

平安名哲子 浦崎美知子 知花智子 具志堅良子 仲間美佐子 當眞祐樹 玉城久美 崎濱悠貴

### 世話人

宮城かの子 我如古育子

## (3) 発掘調査（第2次：平成18年度）

### 調査指導員

山里千春 栗山初美 比嘉君子

### 資料整理員

請盛智秋

### 調査補助員

喜瀬彰

### 発掘調査作業員

比嘉千賀子 中塚末子 桃原佐恵美 山城嘉勝 宮国恵子 樋口光子 砂辺理恵 瑞慶覽繁美

知花智子 泉谷墨 玉寄みつえ 佐渡山正子 平安名哲子 比嘉洋子 上江洲由昇 浦添美知子

我我フジ子 石垣浩充 玉城初美 根間俊光 安里勝則 翁長しのぶ 仲木さゆり 西銘須磨子

### 世話人

我如古育子 仲間美佐子

#### (4) 資料整理

平成18年度（洗浄、分類など）

山里千春 栗山初美 比嘉君子 請盛智秋 喜瀬彰

平成19年度（洗浄、ナンバーリング、分類、集計、実測など）

比嘉君子 大城弘子 宮城かの子 尾木綾 請盛智秋 真栄城和美 西銘定子 山下真利子  
平井麻香 津波あずさ 金城いずみ 具志良子 比嘉由紀乃 親泊育子 仲宗根美奈子 喜瀬リサ  
上江洲山昇 我如古育子 中塚末子 砂辺理恵 比嘉洋子 泉谷暎 島千香子

平成20年度（コンテナ整理、サンプリング土洗浄、分類、接合など）

比嘉君子 慶田秀美 宮城かの子 大城弘子 請盛智秋 真栄城和美 金城薫 運天綾 平井麻香  
平良明子 山下美也子 泉谷暎 城間邦子

平成21年度（遺物集計、実測、トレース、押図版作成、遺物写真撮影、図版作成など）

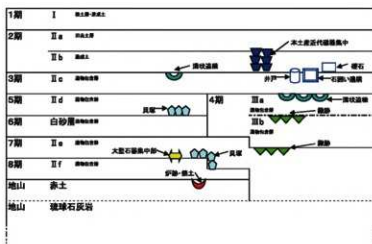
比嘉君子 大城弘子 伊波かおり 阿部直子 尾木綾 請盛智秋 真栄城和美 金城薫 運天綾  
平良明子 山下美也子

## 第IV章 層序

本遺跡の層序（第8・10図 巻首図版3 図版3・4）は、大きく12枚の土層に大別した。分層にあたっては、『標準土色帖』及び視覚的に色調の違いや、包含する遺物等の多少、しまり具合の違いなどによって細分した。

遺跡の時期は、層序全体の様相から第8図に示したとおり8期に分けられる。概念的に略記してみると以下のとおりである。

- 1期（I層 戦後の造成土）
- 2期（II a層・II b層 近代期における表土層及び造成土）
- 3期（II c層 近世の遺物包含層）
- 4期（III a層・III b層 グスク時代遺構の遺物包含層）
- 5期（II d層 沖縄新石器時代後期：弥生時代～平安時代並行期）
- 6期（白砂層 沖縄新石器時代前IV期：縄文時代前～中期相当期）
- 7期（II e層 沖縄新石器時代前III期：縄文時代前～中期相当期）
- 8期（II f層 沖縄新石器時代前II期：縄文時代早～前期相当期）



第8図 土層堆積模式図

第10図にJ-5～20グリッド南側壁及びF～O-13グリッド東側壁の断面状況を代表的な層として図示した。

以下、各層の特徴を略記する。

第Ⅰ層 盛土（攪乱）

層厚は、10～40cm前後を確認した。

第Ⅱ層

a 旧表土層

層厚は、10～30cm前後を測る。

b 明茶褐色土層（間層的な様相を呈する）

本土産磁器がまとまった状態で検出されている。また、井戸跡、礎石、石囲い遺構など近代期と考えられる遺構の検出も見られた。層厚は約20cmを測る。

c 褐色（10YR 4/6）

砂質でしまりがある。貝類、中国産磁器、土器などが混入する。溝状遺構⑦は本層を掘り込む。層厚は約10～65cmを測る。溝状遺構が検出されている。放射性炭素年代測定結果は、190±30、280±30 B Pであった（補正年代 附篇4参照）。

d 暗褐色（10YR 3/4）

砂質でしまりがある。貝類が多数含まれる。層厚は約30cm前後を測る。

d 層下部 暗褐色（10YR 3/3）

上層より色調がやや暗くなる。しまりがある。層厚は約25cm前後を測る。放射性炭素年代測定結果は、1,490±30 B Pであった（補正年代 附篇3参照）。

d 層粘土質 暗オリーブ褐色（2.5Y 3/3）

砂が若干混入し、しまりがある。貝類が若干含まれる。層厚は15cm前後を測る。放射性炭素年代測定結果は、1,440±30 B Pであった（補正年代 附篇2参照）。

Ⅱ d 層全体では、土器（主に沖縄新石器時代後期）、石器の出土とともに貝塚を形成し、貝溜り遺構が多数検出されている。

e 褐色土層（7.5YR 4/6）

粘土質でしまりがある。砂が多量に混入し乾燥するとヒビ割れが著しい。ハイガイの混入が多量に見られる。層厚は、約60cm～200cmを測る。本層は、大型貝の集中した貝塚が形成される。調査区南側では、一見、地山の赤土層と見られた層準にも石器（大型石器）・石材片や土器片（主に沖縄新石器時代前Ⅲ・Ⅳ期）などが混入しており、ある時期にかなりの攪乱（Ⅱ e 層の時期）を受けたことが示唆された。放射性炭素年代測定結果は、1,360±20、2,470±30、1,690±40（粘土質）、1,310±30・1,350±30（地山＝赤土混土） B Pであった（補正年代 附篇2・3・6参照）。

f 暗褐色（10YR 3/4）

黒味を帯びる層。土器（主に沖縄新石器時代前Ⅱ期）、石器、獣骨、貝類などを含む。K-6

グリッド周辺において安定的な堆積状況を示していた。その堆積は、標高約3.3m～3.4mで約10cmほどの厚さであった。放射性炭素年代測定結果は、6,110±40、6,040±40、6,360±40 BPであった（補正年代 附篇1・3・7参照）。

### 第Ⅲ層

#### a 暗茶色土層

粘土質で茶色を帯びる。層厚は5～10cm前後を測る。放射性炭素年代測定結果は、370±20 BPであった（補正年代 附篇6参照）。

#### b 黒褐色土層

粘土質で黒味を帯びる。中国産青花が出土している。本層上面で鋳跡が確認できる。層厚は15cm前後を測る。放射性炭素年代測定結果は、2,080±30 BPであった（補正年代 附篇6参照）。

##### b層下部 黒色土層

上層より粘性が強くなり、焼土、炭が多量に混入する。土器、石器などが混入する。層厚は約10cmを測る。

Ⅲ層では、鋳跡、土坑（ピット）と見られる遺構が検出されている。

### 白砂層 黄褐色（10YR 5/6）

砂質でしまりがある。土器（主に沖繩新石器時代前Ⅲ・Ⅳ期）、サンゴつぶてなどが多量に含まれる。下部がやや黄色味を帯びる。層厚は約50～100cmを測る。放射性炭素年代測定の結果は、340±30、2,420±40 BPであった（補正年代 附篇4参照）。

### 地山 赤土

調査区の東側で標高約4.8m、西側で標高約3.3mで露出した。しかし、遺跡の中心から南側では、Ⅱe層がかなり深く掘り込んだ状況で琉球石灰岩直上まで堆積していた。

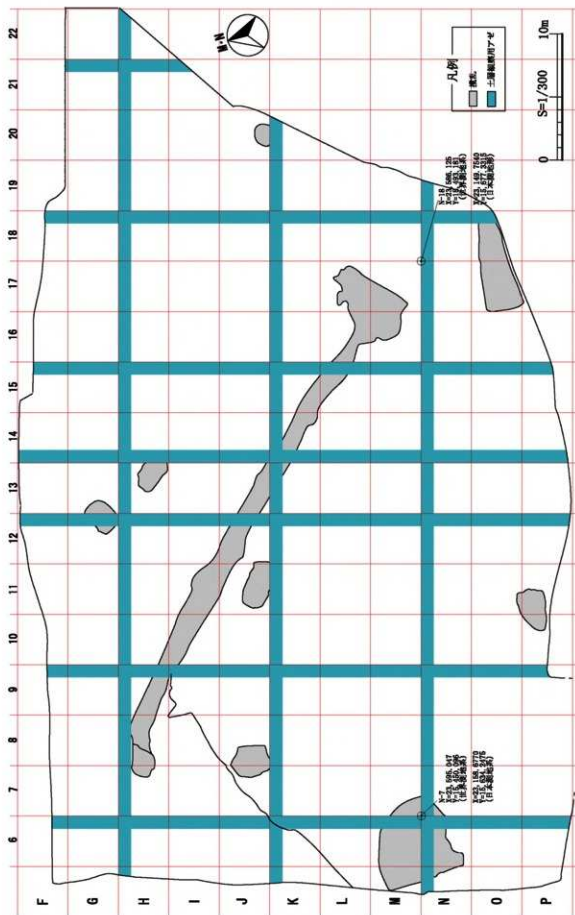
### 地山 琉球石灰岩

琉球石灰岩の露頭が、調査区の東側と南側の一角に見られる。本遺跡の最下層の地山を成す。

### 参考文献

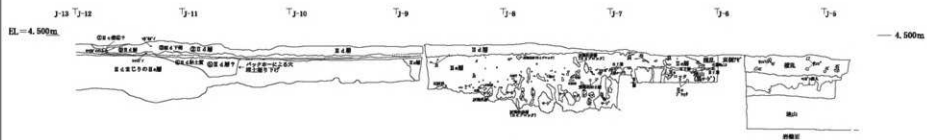
『新版 標準土色帖 1997年版』 農林水産省農林水産技術会事務局 監修 財団法人 日本色影研究所 色票監修



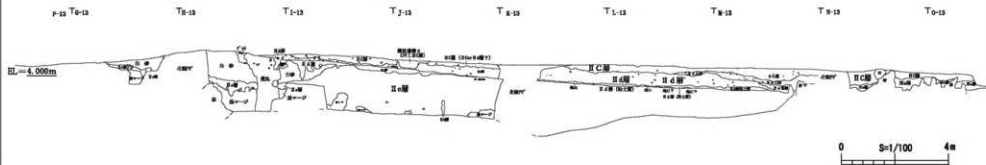


第9図 グリッド及び土層観察用アゼ設定図

J-20~5 南側壁



P~0-13 東側壁



第10圖 土層断面図

## 第V章 遺構

本遺跡より検出された遺構は、井戸跡、石囲い遺構、礎石、本土産磁器集中部（近代）・溝状遺構（近世）・土坑（ピット）、銀跡（グスク時代以降）・貝塚、貝溜り遺構（沖縄新石器時代後期）・貝塚、大型石器集中部（沖縄新石器時代前Ⅲ・Ⅳ期）・焼土遺構（沖縄新石器時代前Ⅱ期）など多様な様相を呈している。

以下、第Ⅳ章で示した時期別（8～2期）に遺構の概略を記す。

### 第1節 沖縄新石器時代前Ⅱ期（8期）の遺構

本期の遺物は、調査区の北東側（F-13グリッド）から南西側（K-6グリッド）にかけて分布する状況が見て取れる（第11図 図版5）。その軸は、略東西に延びるように見える。

本期の遺構としては、焼土遺構で5基が確認されており、調査区北西側（J-8グリッド、K-6・7グリッド）に集中する。特にK-6・7グリッドで検出された焼土遺構の周辺からは、獣骨（イノシシ）の頸骨がまとまって出土している。焼土遺構と獣骨の相伴出土事例として捉えることが可能と考えられた。他遺跡での類似資料の増加に期待したい。

#### 焼土遺構No.1（巻首図版3 図版5）

J-8グリッドで検出された。平面形は、卵形の楕円形を呈する（長軸58cm、短軸52cmを測る）。遺構の北西側一部が攪乱によって欠損する。深さは4cm程度と浅い。遺構確認面は、標高3.36m付近である。地山（赤土）上で検出された。本遺構は、放射性炭素年代の分析結果（5,860±30 B.P. 補正年代 附篇7参照）から第6・7期（沖縄新石器時代前Ⅲ・Ⅳ期）の所属の可能性も示唆される。

#### 焼土遺構No.2（巻首図版3 図版5）

J-8グリッドで検出された。平面形は、不定形（長軸32cm、短軸28cmを測る）。深さは2cm程度と浅い。遺構確認面は、標高3.36m付近である。地山（赤土）上で検出された。

#### 焼土遺構No.3

J-8グリッドで検出された。平面形は、卵形の楕円形を呈する（長軸62cm、短軸50cmを測る）。遺構の東側が一部攪乱によって欠損する。

#### 焼土遺構No.4

J-8グリッドで検出された。平面形は、不定形（長軸60cm、短軸30cmを測る）。遺構の西側が一部攪乱によって欠損する。

#### 焼土遺構No.5

K-6グリッドで検出された。平面形は、卵形の楕円形を呈する（長軸54cm、短軸50cmを測る）。

#### 焼土遺構No.6

K-6グリッドで検出された。平面形は、長軸108cmを測る円形あるいは楕円形と見られるが遺構西側が欠損するため判然としない。深さは10cm程度でⅡf層が覆土となる。遺構確認面は標高約3.3m付近である。地山（赤土上部に黒色のすじが観察される。マンガンの混入の影響が考えられる）上で検出された。遺構内から爪形文土器が2点出土している（標高3.276m、3.272m）。本遺構の放射性炭素年代の分析結果は、 $6,360 \pm 40$  BPであった（補正年代 附篇7参照）

#### 焼土遺構No.7

K-7グリッドで検出された。平面形は、ほぼ円形を呈する（直径58cmを測る）。遺構検出面は、標高約3.3～3.4m付近である。

#### 焼土遺構No.8

K-7グリッドで検出された。平面形は、隅丸方形を呈する（長軸65cm、短軸55cmを測る）。石器2点（石斧、石器片）が遺構の縁に伴って出土している（標高3.350m、3.358m）。

## 第2節 沖縄新石器時代前Ⅲ・Ⅳ期（6・7期）の遺構

本期の遺物は、調査区の北東側（F-13グリッド）から南西側（M-7グリッド）にかけて分布する状況が見て取れる（第12図 図版6～9）。その軸は、略東西に延びるように見える。沖縄新石器時代前Ⅲ期と捉えられる土器群は特に調査区北西側（I-9グリッド、J-8グリッド周辺）で得られる傾向にあった。沖縄新石器時代前Ⅳ期と捉えられる土器群は、調査区北側（H-11～14グリッド）で出土する傾向にあった。

本期の遺構としては、大型の貝類で形成された貝塚、大型の石器が3点まとまって確認された大型石器集中部が確認されている。

### 貝塚（図版6）

J-8グリッド周辺で確認された。調査区の北東（I-9グリッド）から南西側（K-7グリッド）に広がりを持ち、その軸は、略東西に延びるように見える。貝塚を形成する遺物は、大型の貝類（ハイガイ、シャコガイ、サラサバテイ、カキ、クモガイなど）や土器片、石器片、軽石などが北西側から南東側にかけて傾斜して堆積している。標高は、3.6m～2.6m付近に位置する。遺構の縁辺部では、II f層を切る状況が確認された。

### 大型石器集中部（第23・28図 図版8 図版33・38）

G-13グリッドで検出された。3点の大型石器が標高約4.1mのII e層より得られたものである。検出時は、埋納遺構の可能性も想起されたが確証を得るまでには至らなかった。

### 第3節 沖縄新石器時代後期（5期）の遺構

本期の遺物は、調査区の東側にかけて密に分布する状況が見て取れる（第13図 図版10～13）。本期の遺構としては、小型の貝類で形成される貝塚、その範囲の中に楕円形や不定形に掘り込まれた貝溜り遺構が確認されている。

#### 貝塚（図版10）

貝塚の範囲は、調査区の北側はHグリッドライン（H-13～16グリッド）、南側はM-16グリッド、西側はI-12グリッド、東側はJ-19グリッドに広がりを見せる。貝塚の広がり軸は南北に延びるように見える。

貝塚を構成する遺物は、小型の貝類や土器片、石器片、北側から南側にかけて緩やかに傾斜して堆積している。標高は、3.6m～2.6m付近に位置する。貝塚の南側では、琉球石灰岩の地山にその堆積が確認されている。

#### 貝溜り（図版10・11）

貝溜り遺構は、貝塚の内側で少なくとも11箇所確認された。その分布をグリッド別にみると、I-13グリッドで1箇所、J-13グリッドで2箇所、K-14グリッドで1箇所、I-17グリッドで2箇所、I-18グリッドで4箇所、L-18グリッドで1箇所である。貝塚の縁辺部に沿った状況でその分布が認められる状況にある。遺構の多くは、不定形な平面形を呈し、ごく浅い掘り込み内に貝類などが集まった状況を呈していた。

なお、その他に、主に獣骨が集中する箇所も幾つか認められる（I・J-15グリッド）。また、K-15グリッドでは、ヤドカリ（？）の遺殻が50～60cmほどの範囲に集中する箇所も確認された（図版11）。

#### 第4節 グスク時代以降（4期）の遺構

本期の遺構は、調査区の南西側で密に分布する状況が見て取れる（第14・15図 図版14～17）。一見すると、3期の遺構の分布と重なる様相も見取れる。

本期の遺構としては、略三角形を呈する「鉄跡」、円形・楕円形・不定形の土坑（ピット）が確認されている。

遺構の確認面としては、Ⅱe層及びⅢb層上面で検出されている

##### 鉄跡（図版16）

鉄跡は、調査区内に散在して認められる（第14図）。調査区中央側（K・L-8・9グリッド）や調査区東側（J-12、K-13グリッド）で散在し、南西側隅（O・P-6・7グリッド付近）に密に分布する傾向にある（第15図）。

平面形は、主に略三角形を呈する。直線側の長さは、6～8cm。深さは3cm前後のものが多い。遺構短軸半截時の断面形は「V」字状となる。

##### 土坑（ピット）（図版14）

土坑（ピット）は、調査区の南西側で密に分布する。平面形は円形・楕円形・不定形と様々な様相を呈する。また、遺構の覆土は、その色調からⅢ層およびⅡd層の堆積が認められ、時期差が想定できる。ただし、明確なプランを想定することはできなかった。

また、遺構の中には、覆土（Ⅲ層およびⅡd層）の内側に円形（直径5～8cm）の砂の混入が認められるものがあつた（図版16）。調査時には、小動物による擾乱として判断した。他遺跡での類例の増加を待ちたい。

## 第5節 近世（3期）の遺構

本期の遺構としては、溝状遺構が7基確認されている。溝状遺構は、調査区のほぼ中央付近で東西南北にほぼ沿った状況で確認されている（第16図）。このことから、遺構を構築する際には、ある程度方位が想定されていたものと推察できる。

遺構の確認面としては、Ⅱc及びⅡd層面で検出されている。

### 溝状遺構①（図版18）

K・L-8グリッドからK-13グリッドに所在し、ほぼ西側（標高約4.16m）から東側（標高約4.02m）に緩やかに傾斜する遺構である。遺構東側では、溝状遺構⑤と合流する。遺構の長さは、約20m、幅は約1.4～2.4m、深さは約12～30cmである。遺構確認面は、Ⅱd層を掘り込み、覆土は基本的にⅡc層であるが、黄褐色砂層、黒褐色砂層、茶褐色砂層の3枚が確認された。

### 溝状遺構②（図版18）

L-9グリッドからK-13グリッドに所在し、ほぼ西側（標高約4.14m）から東側（標高約4.12m）に緩やかに傾斜する遺構である。遺構東側では、溝状遺構⑥と合流する。遺構の長さは、約16m、幅は約40～60cm、深さは約15cm前後である。遺構確認面は、Ⅱd層を掘り込んでⅡc層が覆土となる。

### 溝状遺構③（図版18）

L・M-8グリッドからL-13グリッドに所在し、ほぼ西側（標高約4.18m）から東側（標高約4.12m）に緩やかに傾斜する遺構である。遺構東側では、溝状遺構⑥と合流する。遺構の長さは、約20m、幅は約1.2～2.4m、深さは約32cm前後である。遺構確認面は、Ⅱd層を掘り込み、覆土は基本的にⅡc層であるが、黄褐色砂層、茶褐色砂層、黒褐色砂層、赤褐色砂層の4枚が確認された。

### 溝状遺構④

J-11グリッドからJ-13グリッドに所在し、ほぼ西側から東側に緩やかに傾斜する遺構である。標高約4.16m。遺構東側では、溝状遺構⑥と合流する。一部攪乱によって切られる。遺構の長さは、約5.4m、幅は約1m、深さは約12cm前後である。遺構確認面は、Ⅱd層を掘り込んでⅡc層が覆土となる。

### 溝状遺構⑤（図版19）

J-18グリッドからJ-13グリッドに所在し、ほぼ東側（標高約4.5～4.9m）から西側（標高4.352m）に緩やかに傾斜する遺構である。遺構西側で溝状遺構⑥と合流する。遺構の長さは約20m、幅は1m前後、深さは約30cm前後である。遺構確認面は、Ⅱd層を掘り込んでおりⅡc層が覆土となる。

### 溝状遺構⑥（図版19）

I-13グリッドからO-13グリッドに所在する。I-13グリッドでは、東側から西側に2.8mほど傾斜して南側にほぼ直角に折れる。平面形は「L」字状となる。遺構の全体としては、ほぼ北側（標高約4.56m）から南側（標高約4.2m）に傾斜する遺構である。遺構東側では、溝状遺構⑤、西側で溝状遺構①、②、③、④と合流する。一部攪乱によって切られる。遺構の長さは、約23m、幅は約0.6～1m、



深さは約20～100cmである。遺構確認面は、II d層を掘り込み、覆土は基本的にII c層であるが黄褐色の砂層の堆積が確認できた。

#### 溝状遺構⑦

O-7グリッドからN-11グリッドに所在し、ほぼ東側から西側に緩やかに傾斜する遺構である。標高約4.32m。遺構西側で、その掘り込みが不明瞭となる。遺構の長さは約15m、幅は1m前後、深さは約5cm前後である。遺構確認面は、II c層を掘り込んでおりII b層が覆土となる。遺構の縁は、鋸歯状を呈する。これは、遺構縁辺部に工具痕（鋸跡）と見られる略三角形の掘り方が観察できるためであった。

## 第6節 近代（2期）の遺構

本期の遺構としては、礎石、井戸跡、石囲い遺構などの建物跡に関連すると考えられる遺構と本土産近代磁器の集中部が確認されている。

礎石、井戸跡、石囲い遺構などの建物跡に関連すると考えられる遺構は、比較的近い位置関係（調査区の北東側 H-16・17・18グリッド）を示しており、何かしらの建物が建っていた可能性が示唆される。ただし、第5図の民俗地図（昭和期）には、対応しそうな印は見当たらない。第6図の民俗地図（昭和18年頃）には、火薬庫が隣接して建ち並ぶ様子が見て取れる。

一方、本土産近代磁器集中部は、調査区中央南西側で検出されている。

### 井戸跡

H-17グリッドの標高5.0mで検出された。平面形はほぼ円形を呈する。確認した深さは、約80cmほどで琉球石灰岩を掘り込んでいる。調査時間の都合上、完掘するには至らなかった。

### 石囲い遺構（図版20）

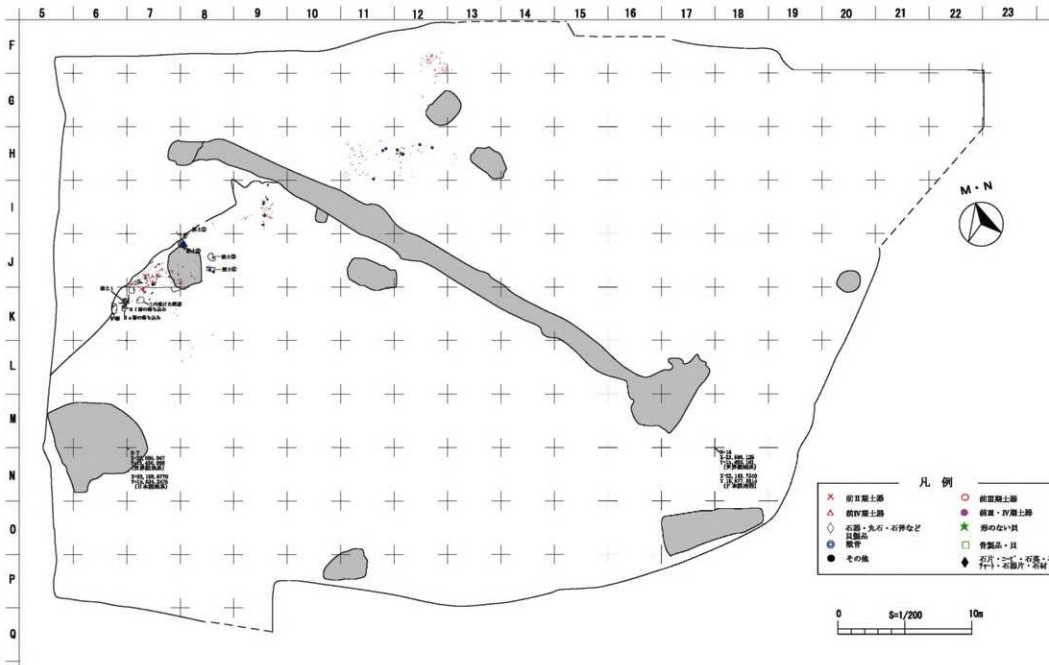
H-16グリッドの標高約5.04m付近で検出された。平面形は、長軸約150cm、短軸約110cmを測る長方形を呈する。琉球石灰岩を使用して囲いを形成し、その周りには一回り大き目の不定形な掘り方も確認できた。深さは、約22.5cmと浅い。琉球石灰岩礫を2段ほど積み上げた状態が確認できた。覆土内から近代銭（一銭）が1点得られている（第38図）。

### 礎石

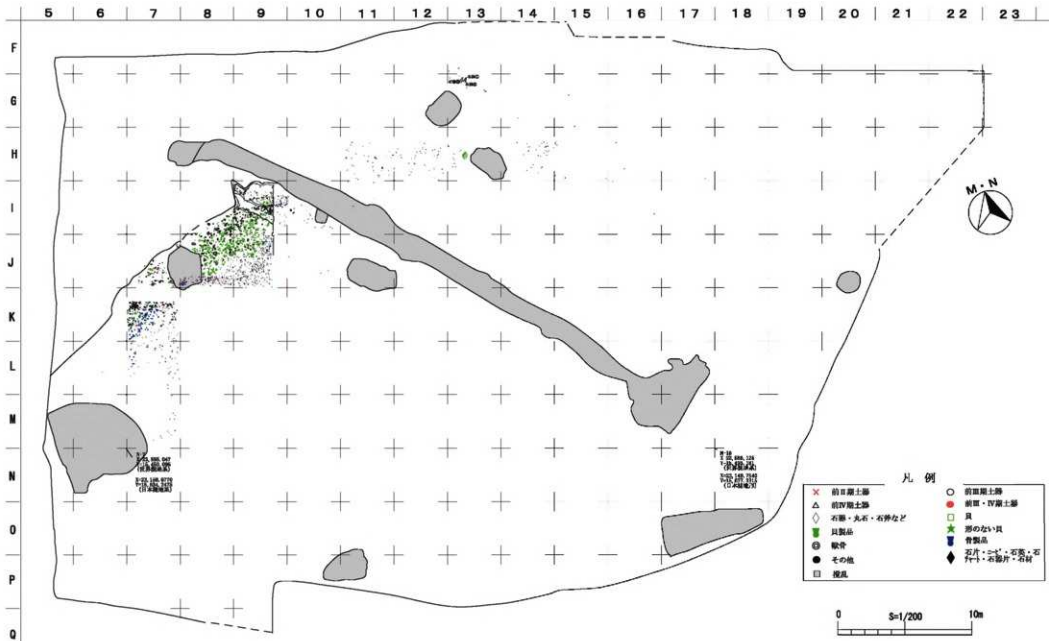
H-18グリッド周辺で琉球石灰岩製の礎石が幾つか確認された。建物跡を確定できるような配置はうかがえなかった。また、遺跡周辺の残土から細粒砂岩製（方言でニービ）の礎石が幾つか採取されている。

### 本土産磁器集中部（第34・35図 図版20・47・48）

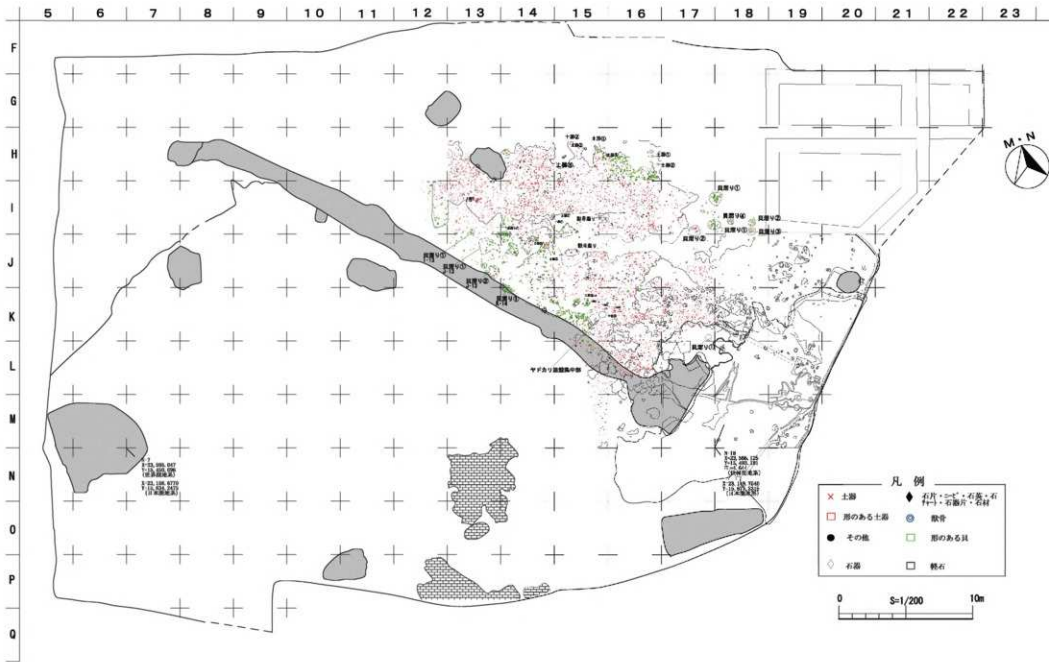
L-12グリッド、II a層～II b層で確認された。ほぼ完形の碗が10数点まとまって出土した。一括廃棄など、意識的に埋められた可能性が想起されたが判然としない。



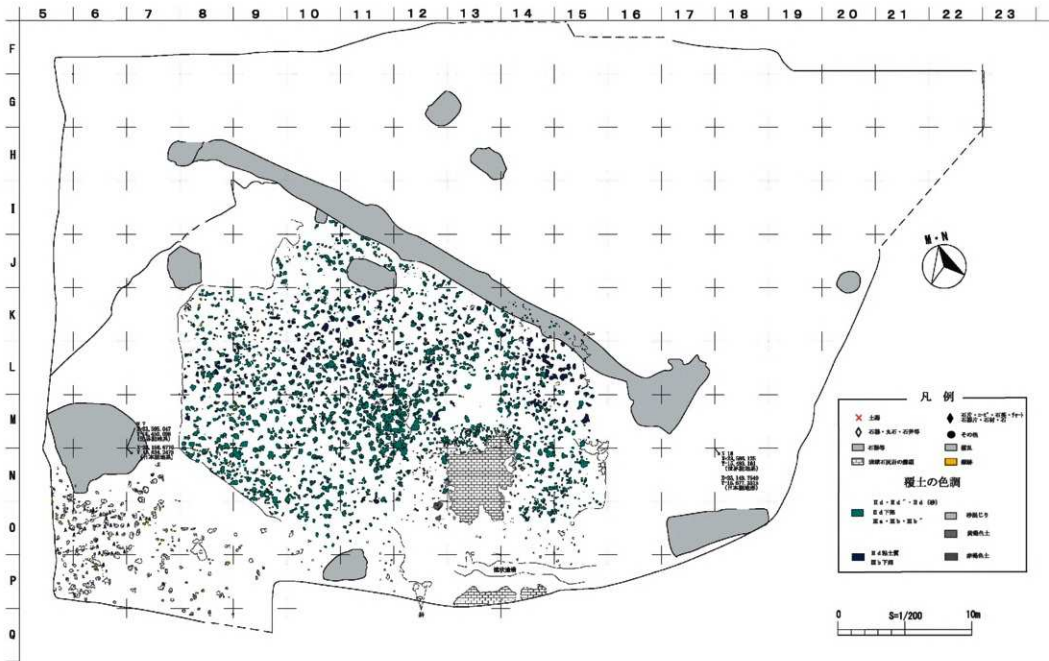
第11図 神縄新石器時代前Ⅱ期の遺構・遺物分布図



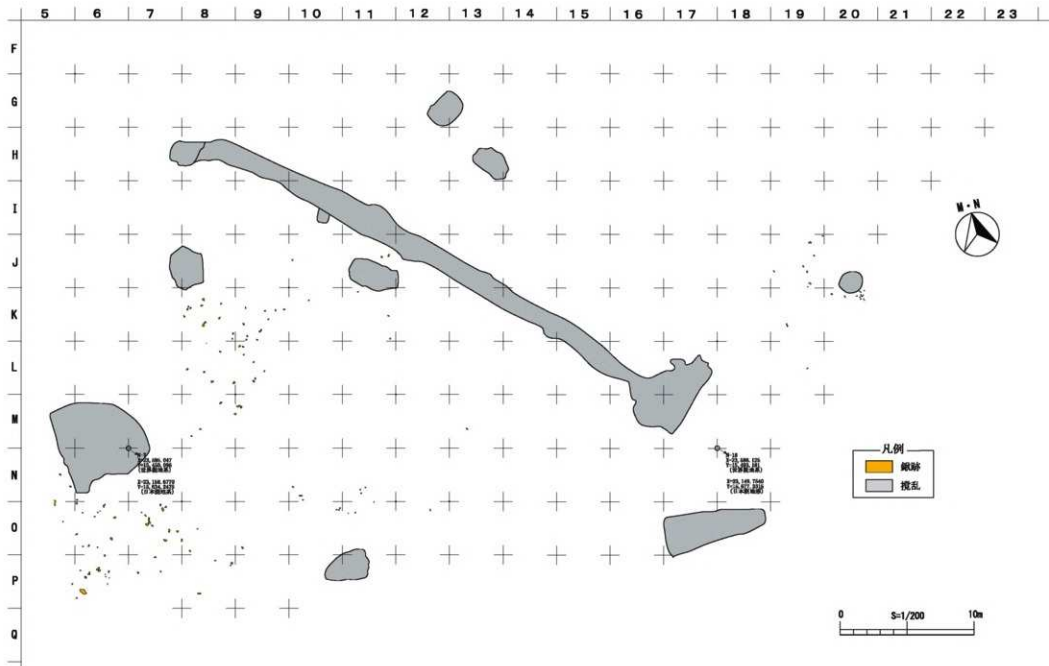
第12図 神縄新石器時代前期・IV期の遺構・遺物分布図



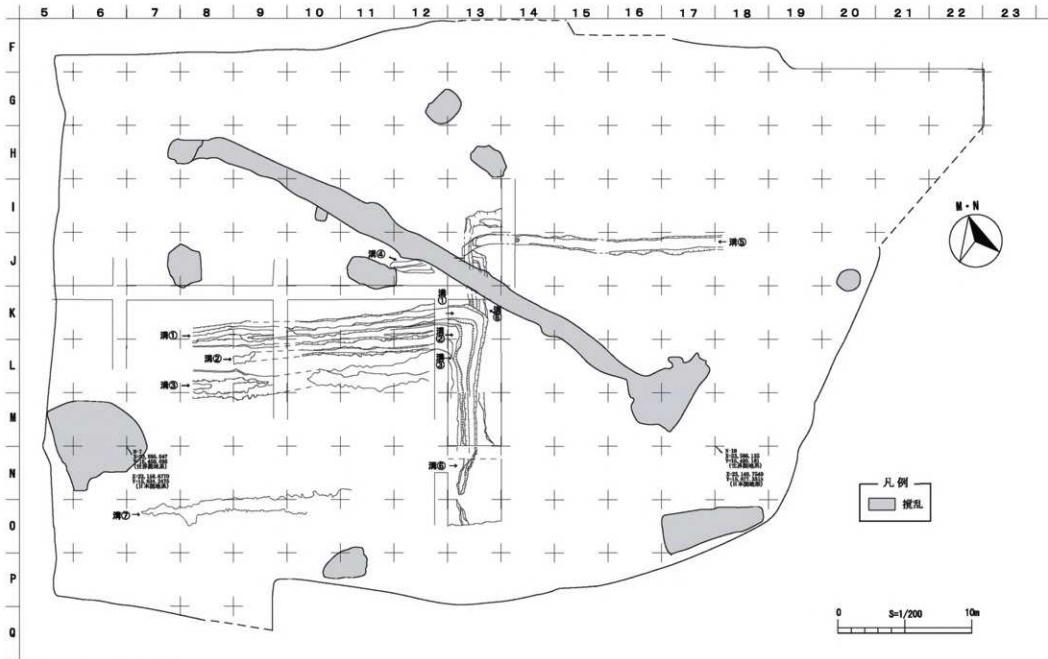
第13図 神縄新石器時代後期の遺構・遺物分布図



第14図 グスク時代以降の遺構(ピット・竃跡)分布図



第15図 グスク時代以降の遺構（銅跡）分布図



第16図 近世の遺構（溝状遺構）分布図



## 第VI章 遺物

ここでは、土器、石器、貝製品、外国産陶磁器、本土産陶磁器、鍍貨、円盤状製品、煙管、陶製品、玉を紹介する。

なお、今回の報告は、整理時間等の都合上、一部資料のみを掲載した。そのため、本遺跡出土遺物の全体像を把握しきれしていないのが現状である。今後、機会を改めて再整理・分析を行う必要がある。

以下、出土遺物の種類ごとに概略を示す。

### 第1節 土器

土器は、以下のように大きく四時期の資料に大別できる。なお、時期区分については、第2表を参考にした。

1. 沖縄新石器時代前Ⅱ期（縄文時代早期相当期）
2. 沖縄新石器時代前Ⅲ期（縄文時代前期相当期）
3. 沖縄新石器時代前Ⅳ期（縄文時代中期相当期）
4. 沖縄新石器時代後期（弥生時代～平安時代相当期）

上記1は、爪形文土器と称されるもので、第3表に示したとおり、総数17,119個（14,978個+2,141個）、総重量22,892g（22,526.9g+365.1g）で1個当たり約1.34gとなる。資料のサイズとしては、かなり小さめのものが多く得られたことになる。

上記2は、曾畑式土器及び室川下層式土器を含むものである。

上記3は、鹿児島県曾於郡末吉町・財部町に所在する「桐木耳取遺跡」出土資料（縄文時代前期・中期土器第V-2類）に類似するものを含むものである。

上記4は、大当原式土器に所属する資料を含むものである。

個々の資料は、第17～20図及び図版27～30に示した。また、その特徴などは第4～7表に譲る。

第2表 沖縄諸島の暫定編年

本土	沖縄	土器型式	沖縄諸島発見の九州系土器	その他の編年資料	現行編年		
縄文時代	草創期	前期 I	▲			早期	
	早期	II	野国第四群 ヤブチ式土器 東原式土器	瓜形文土器	ヤブチ式 6670±140 y.B.P. 東原式 6450±140 y.B.P.		
	前期	III	条痕文土器 室川下層式土器 曾畑式土器 神野A式土器 神野B式土器	条痕文土器 曾畑式土器	曾畑式土器 (渡具知東原) 4880±130 y.B.P.		
	中期	IV	面縄前庭Ⅰ式土器 ← 面縄前庭Ⅱ式土器 ← 面縄前庭Ⅲ式土器 ← 面縄前庭Ⅳ式土器 ← 面縄前庭Ⅴ式土器 ←	旧具志川A式 旧具志川B式 具志川C式 旧神野C式 旧面縄前庭式			
	後期	V	神野D式土器 神野E式土器 伊波式土器 藪堂式土器 大山式土器 室川式土器	出水系土器 市来式土器	伊波式 (熱田原) 3370±80 y.B.P. 伊波式 (室川) 3600±90 y.B.P.		前期
	晩期	VI	室川上層式土器 宇佐浜式土器 仲原式土器		入佐式並行 黒川式土器		前期
	弥生時代	前期	後期 I	真栄里貝塚	板付Ⅱ式土器 亀ノ甲類似土器		
中期		II	具志原式土器	山ノロ式土器			
後期		III	アカジャンガー式土器	免田式土器	アカジャンガー式は中津野式並行か？		
古墳時代 ⇓ 平安時代		IV	フェンサ下層式土器		類恵器		

◎「フェンサ下層式は城時代初期」とする見解もある。

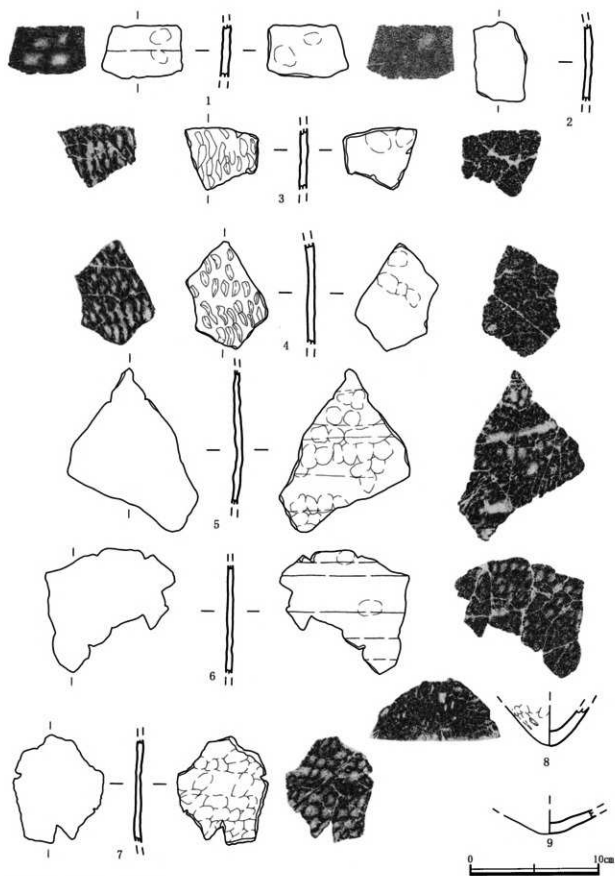
(1991年4月5日改訂)

第3表 沖縄新石器時代前Ⅱ期土器集計一覧

番号	数 量		重 量		備 考
	1 cm以上の資料	1 cm未満の資料	1 cm以上の資料	1 cm未満の資料	
集計1	45	13	333.5	1.7	
集計2	27	3	89.6	0.1	
集計3	142	1	341.9	0.1	
集計4	228	23	312.6	4.3	
集計5	1234	236	1249.0	38.0	
集計6	8	0	32.8	0	
集計7	2	0	7.2	0	
集計8	19	0	40.2	0	
集計9	317	25	552.8	3.2	
集計10	1	0	4.7	0	
集計11	1	0	3.8	0	
集計12	244	91	462.7	10.2	
集計13	95	25	162.9	3.4	
集計14	4	0	9.5	0	
集計15	103	52	246.9	8.8	
集計16	15	1	73.3	0.2	
集計17	360	139	588.5	24.5	
集計18	91	34	93.0	5.1	
集計19	0	10	0	1.5	
集計20	56	4	193.4	0.8	
集計21	18	0	13.3	0	炭より抜き出し
集計22	18	1	19.8	0.3	
集計23	1468	243	2148.4	52.1	
集計24	1463	201	2234.7	36.4	
集計25	98	34	404.6	4.4	
集計26	1	0	2.0	0	
集計27	29	17	44.9	2.4	
集計28	3	4	4.8	0.4	
集計29	18	2	73.9	0.2	G-12ドット取り上げ
集計30	2	0	3.7	0	I-8ドット取り上げ
集計31	277	66	531.1	12.1	
集計32	58	36	123.7	3.5	J-9ドット
集計33	197	38	391.2	3.9	J-8ドット取り上げ
集計34	35	13	66.8	1.1	K-7ドット取り上げ
集計35	1	0	1.0	0	K-6ドット取り上げ
集計36	1876	182	2444.9	37.7	
集計37	1013	124	1829.5	24.9	
集計38	778	38	1161.1	5.5	
集計39	897	102	979.6	18.2	
集計40	2383	225	3503.6	34.4	
集計41	1353	158	1745.9	25.6	
小計	14978	2141	22526.8	365.1	
合計	17119		22891.8		

第4表 土器観察一覧①

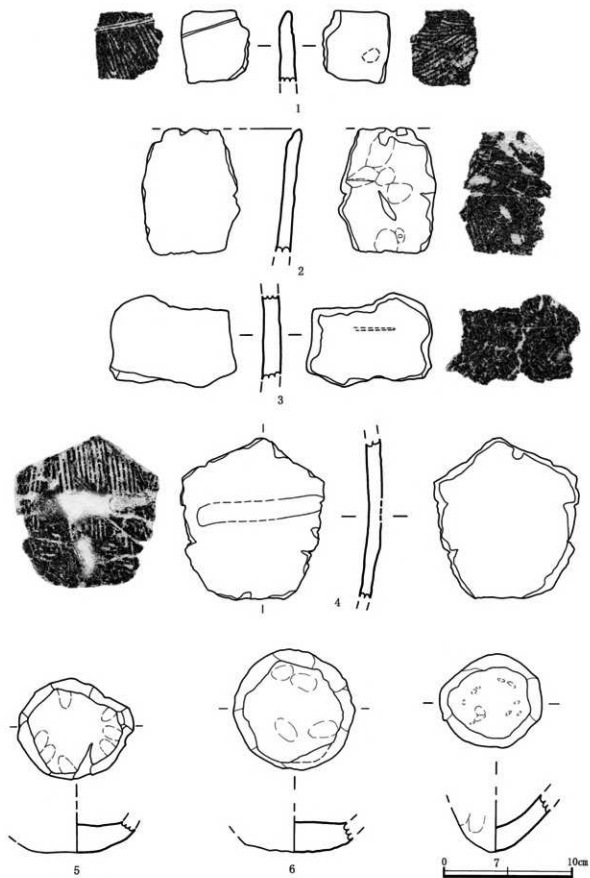
挿図番号 図版番号	時期	器形	部位	法 量			観 察 事 項				出土地点
				口径 底径 (cm)	器 厚 底面厚 (mm)	重さ (g)	焼成	色調	混入物	文様・調整・他	
第17図 1 図版27の1	沖縄 前Ⅱ期		胴部	— —	6.5 —	21.3	良	外：黄褐色 内：赤褐色	石英 黒色粒 雲母	外面：煤痕と指圧による稜が 残る。 内面：指頭押痕有り。	H-12 IIe層 dot No89
第17図 2 図版27の2	沖縄 前Ⅱ期		胴部	— —	5.5 —	17.8	良	外：黄褐色 内：赤褐色	石英 黒色粒 雲母	外面：指頭押圧による残全 面施文、施文は縦長で、一 部明確な爪形文も確認できる。 煤痕有り。 内面：器面が荒れ、混入物 でザラつく。	F-12 II f 7層 dot No31
第17図 3 図版27の3	沖縄 前Ⅱ期		胴部	— —	5.5 —	18.2	良	外：黄褐色 内：黄褐色	石英 黒色粒 雲母	外面：指頭押圧による残全 面施文、爪形文は三日月形 で明確。 煤痕有り。 内面：指頭押痕有り。	F-12 II f 7層 dot No47
第17図 4 図版27の4	沖縄 前Ⅱ期		胴部	— —	6.0 —	28.8	良	外：赤褐色 内：赤褐色	石英 黒色粒 雲母	外面：指頭押圧による残全 面施文、施文は縦長で、明 瞭な爪形文も確認できる。煤 痕有り。 内面：指頭押痕有り。混入 物でザラつく。	F-12 II f 7層 dot No63
第17図 5 図版27の5	沖縄 前Ⅱ期		胴部	— —	5.5 —	58.0	良	外：赤褐色 内：暗赤褐 色	黒色粒 雲母	外面：指頭押圧による残全 面施文、爪形は明確で横位 に並べて施文。煤痕有り。 内面：指頭押痕とナテによる 調整。約3cm幅で稜が数条 見られる。	H-11 II f 層 dot No58
第17図 6 図版27の6	沖縄 前Ⅱ期		胴部	— —	4.5 —	41.9	良	外：黒褐色 内：赤褐色	黒色粒 雲母	外面：指頭押圧による残全 面施文、文様は全体的に浅 く不明瞭だが、爪形の深い部 分は残る。 残外全面を煤が付着。 内面：指頭押痕、ナテによる 丁寧な調整痕が見られる。	K-7 II f 層 dot No320
第17図 7 図版27の7	沖縄 前Ⅱ期		胴部	— —	5.0 —	30.6	良	外：黒褐色 内：赤褐色	黒色粒 雲母	外面：指頭押圧による残全 面施文、文様は全体的に浅 く不明瞭。 残外全面を煤が付着。 内面：指頭押痕、ナテによる 丁寧な調整痕。一部煤痕が 見られる。	J-7 南1号 II f 層0/10 dot No253
第17図 8 図版27の8	沖縄 前Ⅱ期	尖底	底部	— 1.0	6.5 11.0	52.3	良	外：黒褐色 内：黄褐色	黒色粒 雲母	外面：接地面より約2cmの 位置から上部は爪形文が見ら れるが、以下はナテにより不 明。残存外面は全て煤が付 着。 内面：ナテによる調整が見ら れる。	F-12 II f 7層 dot No33
第17図 9 図版27の9	沖縄 前Ⅱ期		底部	— 1.4	6.0 8.5	16.8	良	外：赤褐色 内：黄褐色	黒色粒 雲母	胴部へ大きく開く器形。 外・内面共に、器面が荒れ ていて、調整は不明。混入 物が露出しザラつく。	H-10 II e層 0/10



第17圖 (圖版27) 土器①

第5表 土器観察一覧②

挿図番号 図版番号	時期	器形	部位	法 量			観 察 事 項				出土地点
				口径 底径 (cm)	器 厚 底面厚 (mm)	重さ (g)	焼成	色調	混入物	文様・調整・他	
第18図 1 図版28の1	沖縄 前Ⅲ期	深鉢形	口縁部	— —	12.0 —	47.1	良	外：褐色 内：褐色	白色粒	外面：斜行の条痕を全面に施した後、口縁近くに斜位の沈線をも2条施す。 内面：交斜する条痕を施す。口縁近くはナデ痕が見られる。	H-15 白砂層
第18図 2 図版28の2	沖縄 前Ⅲ期	深鉢形	口縁部	— —	10.5 —	109.5	良	外：褐色 内：褐色	白色粒 白英	外面：斜行の条痕を施す。口唇下には横位に曲を持つ沈線。 内面：条痕を施すがナデにより消され僅かに見られる。	H-16 白砂層 dot No 2
第18図 3 図版28の3	沖縄 前Ⅲ期		胴部	— —	15.0 —	128.1	良	外：赤褐色 内：暗褐色	白色粒 白英 雲母	外面：残存部全面に条痕が鮮明。一部交斜するところも見られる。 内面：条痕を施すがナデにより消され、1本深いものが残る。	I-11 白砂層
第18図 4 図版28の4	沖縄 前Ⅲ期		胴部	— —	10.0 —	183.4	良	外：赤褐色 内：暗褐色	白色粒 白英 雲母	外面：条痕は縦、横に格子状に見られる。中央部に幅約1.5cmの帯状に割がけ状痕が残る。 内面：縦・横・斜の条痕が明瞭に残る。	I-10 IIe層 0/10 dot No 1
第18図 5 図版28の5	沖縄 前Ⅲ期	平底	底部	— 5.3	12.0 21.0	143.4	良	外：暗褐色 内：暗褐色	白色粒 白英	外・内面共に丁寧なナデによる調整が施される。残外面全体と内面一部に煤痕が見られる。	I-8 IIe層
第18図 6 図版28の6	沖縄 前Ⅲ期	丸底	底部	— 7.0	— 23.0	209.7	やや良	外：赤褐色 内：暗褐色	白色粒 白英 雲母	外面：器面が荒れ、調整痕など不明。煤痕が見られる。 内面：条痕らしき痕が見られるが不明瞭。全面に煤痕が見られる。	M-7 地山 20/30
第18図 7 図版28の7	沖縄 前Ⅲ期	丸底	底部	— 2.5	13.0 19.0	183.4	良	外：赤褐色 内：赤褐色	白色粒 白英 雲母	外面：ヘラミガキにより丁寧に調整される。 内面：ナデ・ミガキにより調整するが、粗い成形痕が見られる。	K-17 II d 貝塚下20/30

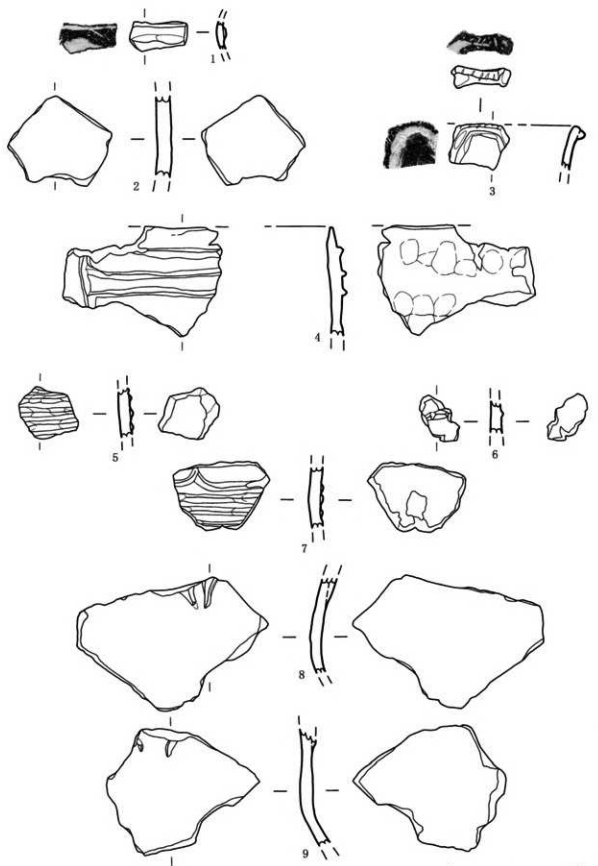


第18圖 (圖版28) 土器②

第6表 土器観察一覧③

挿図番号 図版番号	時期	器形	部位	法量			観察事項					出土地点
				口径 底径 (cm)	器厚 底面厚 (mm)	重さ (g)	焼成	色調	混入物	文様・調整・他		
第19図 1 図版29の1	沖縄 前IV期		胴部	— —	4.0 8.0	8.4	やや良	外：褐色 内：赤褐色	白色粒 石英 雲母	外面：凸帯を横位に貼り付ける。ナテによる調整痕が見られる。 内面：磨耗しているが、指頭圧痕のような窪みが僅かに確認できる。	K-16 II d 層 貝塚下	
第19図 2 図版29の2	沖縄 前IV期		胴部	— —	11.0	67.3	良	外：褐色 内：褐色	白色粒 石英 雲母	外面：縦位の条痕が鮮明。煤痕も見られる。 内面：ナテ調整されるが、条痕が残る。	H-14 白砂層 dot No328	
第19図 3 図版29の3	沖縄 前IV期	深鉢形	口縁部	— —	7.0	20.6	やや良	外：暗褐色 内：暗褐色	白色粒 赤色粒 石英 雲母	外面：口唇直に台形状の凸物を貼り付ける。口唇上面にはおみ文を施す。 内面：ナテ調整を施す。	I-10 西側 H・F II e 層 土器No1 裏辺	
第19図 4 図版29の4	沖縄 前IV期	深鉢形	口縁部	— —	7.5	116.1	良	外：褐色 内：褐色	白色粒 雲母	外面：凸帯を横位に3本、縦位に1本貼り付ける。残全面煤付着。 内面：上部はナテにより調整され条痕は不鮮明。	H-14 白砂層 dot No25	
第19図 5 図版29の5	沖縄 前IV期		胴部	— —	9.0	16.2	やや良	外：褐色 内：褐色	白色粒 雲母	外面：凸帯を横位4本確認できるが、上部1本は帯の隙間が小さい。 内面：磨耗しているが、条痕は確認できる。	H-11 白砂 土器①	
第19図 6 図版29の6	沖縄 前IV期		胴部	— —	9.0	9.6	良	外：黒褐色 内：黒褐色	白色粒 雲母	外面：凸帯を1本と条痕は確認できる。 内面：条痕が見られる。	I-12 白砂	
第19図 7 図版29の7	沖縄 前IV期		胴部	— —	8.0	40.1	やや良	外：褐色 内：褐色	白色粒 雲母	外面：凸帯が4本確認できる。上部の帯は2本に分かれ、縁が口縁向きに伸びる形を反転させている。 内面：条痕を施した後ナテによる調整。	H-11 白砂	
第19図 8 図版29の8	沖縄 前IV期		胴部	— —	9.0	138.1	良	外：黒褐色 内：褐色	白色粒 石英 雲母	外面：先廻りの凸物が2つ貼り付けられ、文様の一部と思われる。条痕が施される。 内面：条痕を施した後ナテによる調整。	I-13 II e 層	
第19図 9 図版29の9	沖縄 前IV期		胴部	— —	8.5	116.6	やや良	外：黒褐色 内：褐色	白色粒 石英 雲母 焼土粒	外面：先廻りの凸物が2つ貼り付けられ、文様の一部と思われる。条痕が施された後ナテ調整。 内面：条痕を施した後ナテによる調整。	H-14 白砂 dot No24	

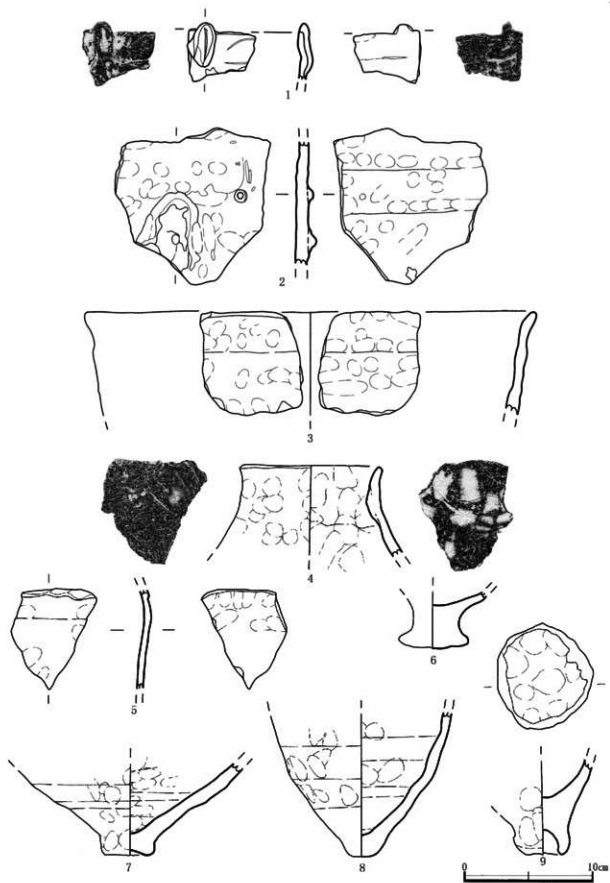




第19图 (图版29) 土器③

第7表 土器観察一覧④

押出番号 図版番号	時期	器形	部位	法 量			観 察 事 項				出土地点
				口径 底径 (cm)	器厚 底面厚 (mm)	重さ (g)	焼成	色調	混入物	文様・調整・他	
第20図 1 図版30の1	沖縄後期	深鉢形	口縁部	— —	4.0 —	18.5	良	外：橙褐色 内：橙褐色	白色粒 雲母	外面：紐状の粘土を二つに折り曲げ口縁に貼り付ける。口唇直下に縦流線による曲線をほどこす。 内面：磨耗しているが、ナデ調整痕が見られる。	H-15 II d 層 貝塚下
第20図 2 図版30の2	沖縄後期	胴部	—	—	9.0 —	153.5	良	外：褐色 内：暗褐色	白色粒 雲母	外面：紐状の粘土を楕円状に貼り付け、その内に円形の突起を貼り付ける。直徑約10mmの孔が外→内へ穿つ。煤痕が見られる。 内面：磨耗しているが、ナデ調整痕が確認できる。煤痕が見られる。	J-14 II d 層 貝塚下10/20
第20図 3 図版30の3	沖縄後期	深鉢形	口縁部	35.0 —	9.0 —	70.9	やや良	外：褐色 内：褐色	白色粒 雲母	外面：指頭圧痕による成形後ナデによる調整。煤痕が見られる。 内面：磨耗が激しい。ナデ調整を施すが、擦痕が僅かに残る。	J-14 II d 層 貝塚下10/20
第20図 4 図版30の4	沖縄後期	壺形	口縁部	11.1 —	8.0 —	64.7	良	外：褐色 内：赤褐色	白色粒 石英 雲母	外面：ナデ調整が丁寧に施される。 内面：指頭圧痕、粘土の横痕にナデ調整を施す。	I-13 II d 層 貝塚下
第20図 5 図版30の5	沖縄後期	胴部	—	—	5.0 —	28.4	良	外：褐色 内：褐色	白色粒 雲母	外面：粘土を指圧により貼付、強状に3つ重ねが確認される。ヘラナデによる調整が施される。 内面：ナデ調整が施される。残全面に煤痕が見られる。	H-15 II d 層 貝塚下
第20図 6 図版30の6	沖縄後期	くしり 平底	底部	— 5.4	6.5 33.0	105.1	良	外：赤褐色 内：黄褐色	白色粒	外・内面共にナデ調整が施される。	J-16 II d 層 貝塚下10/20
第20図 7 図版30の7	沖縄後期	乳房状	底部	— 4.1	10.0 13.0	137.6	良	外：赤褐色 内：黄褐色	白色粒	外面：磨耗しているが、ナデによる調整がみられる。 内面：丁寧なナデ調整が施される。煤痕が見られる。	J-16 II d 層 貝塚下 dot No 1
第20図 8 図版30の8	沖縄後期	乳房状	底部	— 2.2	8.0 16.0	217.2	良	外：赤褐色 内：赤褐色	白色粒	外面：磨耗しているが、指圧痕、ナデによる調整が施される。隆起帯が見られる。 内面：ヘラナデ調整が施される。煤痕が見られる。	I-10 II d 土器 No 3
第20図 9 図版30の9	沖縄後期	乳房状	底部	— 4.4	7.0 24.0	167.0	良	外：橙褐色 内：黄褐色	白色粒	外面：底部を握ったような指圧痕による成形後ナデ調整が施される。 内面：ナデ調整が施される。煤痕が見られる。	I-16 II d 層 貝塚下20/30



第20圖 (圖版30) 土器④

## 参考文献

- ・ 談谷村文化財調査報告第3集 『渡具知東原 第1次・第2次調査報告』 談谷村教育委員会 昭和51年3月31日
- ・ 沖縄県文化財調査報告書第57集 『野国 野国貝塚群B地点発掘調査報告』 沖縄県教育庁文化課 昭和59年3月30日
- ・ 浦添市文化財調査報告書第12集 『チヂフチャー洞穴遺跡 範囲確認調査報告書』 浦添市教育委員会 昭和63年3月
- ・ 浦添市文化財調査報告書 『城間古墓群一牧港補給地区開発工事に伴う緊急発掘調査報告書一』 浦添市教育委員会 1990年3月
- ・ 中山清美 「イヤンヤ（ヤーヤ）洞穴遺跡出土の爪形文土器」『奄美考古』第3号 奄美考古学研究会 1992年11月
- ・ 三島格 「ヤーヤ洞窟遺跡調査のころ」『奄美考古』第3号 奄美考古学研究会 1992年11月
- ・ 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第36集 『新城下原第二遺跡一キャンプ環状内整備工場建設に係る緊急発掘調査報告一』 沖縄県立埋蔵文化財センター 平成18（2006）年3月31日
- ・ 北谷町文化財調査報告書第26集 『伊礼原遺跡一伊礼原B遺跡ほか発掘調査一』北谷町教育委員会 2007年3月
- ・ 山崎真治・藤田祐樹・西秋良宏 「平成19・20年度南城市武雲洞遺跡発掘調査の概要」『沖縄県立博物館・美術館紀要』第2号 2009年3月31日
- ・ 山崎真治・新里尚美・金城達・山田浩久・藤田祐樹 「八重瀬町具志頭グスク崖下採集の遺物について」『沖縄県立博物館・美術館紀要』第2号 2009年3月31日
- ・ 『南城市武雲洞遺跡発掘調査概要報告書』 沖縄県立博物館・美術館 2010（平成22）年3月
- ・ 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書91 『榎木耳取遺跡Ⅲ 東九州自動車道建設（末吉財部ⅠC～園分ⅠC間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ 縄文時代前期～晩期 古墳時代～中世編』 鹿児島県立埋蔵文化財センター 平成17年3月31日

## 第2節 石器

ここでは、刃部磨製石斧、大型石器（石斧等）、石磯、磨石・蔽石、搔器（スクレイパー）、剥片等の石器を図示した。

刃部磨製石斧は、第Ⅱf層（沖縄新石器時代前Ⅱ期）を主体に出土する。全長15cm以下の資料が多く、幅は5cm前後で「小振りの石斧」の感がある。使用されている石質は、緑色片岩や輝緑岩である。

大型石器は、第Ⅱe層（沖縄新石器時代前Ⅱ・Ⅲ期）を主体に出土する。全長37.7cm、31.9cm、幅11.5cmとかなりの大型となる資料である。使用されている石質は、緑色片岩である。

本遺跡では、主要な石器・石材に関して、石質同定を依頼した（第8～10表）。その結果、緑色片岩、輝緑岩、黒色片岩、黒色千枚岩、蛇紋岩、輝石安山岩、石英安山岩、石英閃緑岩、頁岩、石英、チャート、角閃石ひん岩、細粒砂岩等、多種多様であった。その中では、緑色片岩が最も多く利用されているようである。産地としては、名護市・慶良間、本部半島、石垣島、久米島などが見られる。石器・石材として使用される原石は、遺跡から遠く離れた場所に産するものも意識されていたことがうかがえた。個々の資料は、第21～28図及び図版31～38に示した。また、その特徴などは第11表に譲る。

### 参考文献

- ・沖縄県文化財調査報告書第57集 『野国 野国貝塚群B地点発掘調査報告』 沖縄県教育庁文化課 昭和59年3月30日
- ・沖縄県文化財調査報告書第66集 『牧港貝塚・真久原遺跡—県道153号線バイパス工事に伴う発掘調査報告—』 沖縄県教育委員会 1985年3月31日
- ・神谷厚昭『琉球列島ものがたり』 桜井ブーダーインク 2007年3月1日

第8表 石質同定一覧①

遺物 番号	出土地点	種類	石質	産地	備考
1	1-6 do#2	磨製石鏃	緑色片岩	名瀬(伊達市牛久保山)	EL=3483m
2	1-6 do# 10/20	小型石斧	緑色片岩	名瀬(伊達市牛久保山)	
3	1-7 do#37月 do#6①	石剣	石英	名瀬	
4	表土層下	石斧	緑色片岩		
5	1-7-8 カクラン坑	石斧	輝綠石		
6	1-7 表層下 do#6-1	石斧	輝綠石?	伊達	EL=3732m
7	表土層下	大型石斧	緑色片岩		
8	表土層下	大型石斧	緑色片岩		
9	1-7 E# 30/40	石斧	緑色片岩		
10	1-8 南側トレンチ 南壁溝端	緑石	輝綠石		
11	K7 E# 0/10 do#37-5	石斧	緑色片岩		
12	K7 E# 0/10 do#37-8	石斧	緑色片岩		
13	1-8 南側トレンチ E# 40/50	石斧	緑色片岩		
14	1-8 表層下 E# 120/130	小型石斧	緑色片岩		
15	1-7 E# 7表上	石斧	輝綠石		
16	1-7 表層下	石斧	緑色片岩		
17	1-8 E# 0/10 do#6-1	石斧	緑色片岩		EL=3561m
18	1-8 E# 7表下 E# 8	石斧	黒色千枚岩		
19	カクラン(黒色土)	石剣	チャート	本郷平屋?	
20	1-8 南側トレンチ E# 50/50 do#6-130	石斧	輝綠石?	石取島	
21	1-8 E# 10/20	小型石斧	輝綠石		
22	1-7-8 カクラン坑	石斧	緑色片岩		
23	1-7-8 カクラン坑	石斧	緑色片岩		
24	1-8 E# 110/120	石斧	輝綠石		
25	1-8 表層下 E# 120/130	磨製石鏃?	黒色片岩		
26	1-8 表層下 E# 120/130	小型石斧	緑色片岩		
27	1-8 表層下 E# 120/130	石斧	緑色片岩		
28	1-8 表層下 E# 110/120	内湾石斧	片状輝綠石		
29	1-7 E# 50/50 do#6-8	小型石斧	輝綠石		
30	1-8 表層下 E# 50 do#6-50	小型石斧	緑色片岩		
31	K7 E# 0/10 do#8	石斧	緑色片岩		
32	表土層下	石斧	輝綠石		
33	K7 E# 0/10	石斧?	輝綠石		
34	1-5 E# 0/10	石斧?	輝綠石		
35	1-7 E# 30/40	緑石	石英安山岩		
36	1-8 表層下 E# 50/50	緑石	輝綠石		
37	1-8 表層下 E# 80/100	内湾石斧	石英安山岩		
38	1-7 南側トレンチ 北山 0/10 do#6-10	石斧	輝綠石		
39	1-7 西側トレンチ 北山 10/20 do#6-11	石斧	緑色片岩		
40	1-20 カクラン 5/20	石剣	緑色片岩		
41	1-7 E# 10/20 do#6-12	輝綠石			
42	1-8 北側トレンチ カクラン	大型石斧	緑色片岩		
43	1-20 カクラン 5/20	石剣	スニリア		
44	K-18 表層下 E# 80(黒土層) 20/30	石斧	輝綠石		
45	K7 北側下 E# 8	石斧	緑色片岩		
46	1-5 北側下 E# 8	石斧	輝綠石		
47	K7 北側下 E# 8	石斧	緑色片岩		
48	1-7 E# 8(黒土層) 10/20	石斧	輝綠石		
49	1-13 do#6-1	大型石斧	緑色片岩		
50	1-13 do#6-2	大型石斧	緑色片岩		
51	1-13 do#6-3	不明	緑色片岩		
52	K7 E# 40/50 do#6-138	大型石斧	緑色片岩		
53	1-8 南側トレンチ E# 80/10 do#6-138	石斧	輝綠石		
54	1-8 E# 80/70 do#6-132	石斧	黒色片岩		
55	1-8 E# 110/120 do#6-327	緑石?	緑色片岩		
56	1-8 E# 40/50 do#6-298	石斧	黒色片岩		
57	1-8 E# 0/10 do#6-18	石斧	輝綠石		
58	1-8 表層下 E# 80/100	石斧	緑色片岩		
59	1-8 南側トレンチ E# 80/90 do#6-254	石斧	緑色片岩		
60	K7 南側トレンチ E# 30/40 do#6-131	緑石?	緑色片岩		
61	1-8 表層下 E# 8	石斧	輝綠石		
62	K7 E# 30/40 do#6-1	石斧	黒色片岩		
63	K7 北側トレンチ E# 80/10	石斧	緑色片岩		
64	1-8 表層下 E# 50/50	小型石斧	緑色片岩		
65	K7 北側下 E# 8	石斧	緑色片岩		
66	1-8 E# 30/40 do#6-48	小型石斧?	緑色片岩		
67	1-8 南側トレンチ E# 110/120	石斧	緑色片岩		
68	1-18 E# 8 E# 8 10/20	石斧	緑色片岩		
69	K7 北側下 E# 8	石斧	輝綠石		
70	1-8 南側トレンチ E# 80/90 do#6-356	片石	内湾石片岩	石取島	
71	1-8 表層下 E# 40 do#6-34	片石	輝綠石		
72	1-8 表層下 E# 80 do#6-447	緑石	内湾石安山岩		

第9表 石質同定一覧②

遺物 No.	出土地点	種類	石質	産地	備考
73	M-7 堀山 Q/40	石斧	緑色片岩		
74	L-6 石下部 80	石斧	緑色片岩		
75	O-12 石1 doth13	石斧	緑色片岩		
76	H-12 石1 doth37	石斧	緑色片岩		EL-3363m
77	H-12 石1 doth37	石斧	緑色片岩		EL-3745m
78	M-8 石上土	石斧	緑色片岩		EL-3330m
79	M-9 石上土	石斧	緑色片岩		
80	J-8 石上層下 80/70	石斧	緑色片岩		
81	J-8 石上層下 80/70	石斧	緑色片岩		
82	J-9 石上層下 80/90	石斧	六角砂岩		
83	J-9 石上層下	石斧	緑色片岩		
84	H-11 石 10/20 doth80	石斧	緑色片岩		
85	H-11 石 10/20 doth81	石斧	緑色片岩		
86	H-16 石 doth64	石斧	緑色片岩		
87	F-12 石 0/10	石斧	緑色片岩		
88	I-13 石	石斧	六角下砂岩		
89	I-13 石	石斧	緑色片岩		
90	H-12 石 30/40	石斧	緑色片岩		
91	J-12 石 0/10	石斧	緑色片岩		
92	F-17 石 4 貝層下	石斧	砂岩		
93	K-9 石上層下 石上土層上層	石斧	緑色片岩		
94	K-10 石上層下 石上土層上層	石斧	緑色片岩		
95	K-11 石 70/80	石斧	緑色片岩		
96	K-12 石 0/10	石斧	緑色片岩		
97	K-16 石 20/20	石斧	緑色片岩		
98	L-8 石 20/20	石斧	緑色片岩		
99	L-11 石 30/40	石斧	緑色片岩		
100	L-11 石 60/80	石斧	緑色片岩		
101	M-14 石 60土層	石斧	緑色片岩		
102	M-16 石 40土層 10/70	石斧	緑色片岩		
103	M-16 石 30/20	石斧	緑色片岩		
104	M-12 石 20/20	石斧	緑色片岩		
105	M-9 石 10/20	石斧	緑色片岩		
106	M-9 石 20/20	石斧	緑色片岩		
107	H-14 石 0/10	石斧	緑色片岩		
108	L-8 石 貝層下 doth40	鏡片	砂岩 (ニ-ロ)		
110	L-8 石 貝層下 10/20 doth46	鏡片	砂岩 (ニ-ロ)		
111	H-11 石 10/20 doth82	鏡片	緑色片岩		
112	H-12 石 doth28	鏡片	砂岩 (ニ-ロ)		
113	K-7 石 20/20 石	鏡片	六角砂岩(石)	久米島	
114	M-8 石 0/10	鏡片	砂岩		
115	H-12 石 20/20	鏡片	スクレイパー		
116	K-17 石 0/20	鏡片	有孔石製錐	緑色片岩	
117	M-7 堀山 10/20 doth8	石鏡片	緑色片岩		
118	J-8 石 0/10 doth165	石鏡片	頁岩		
119	L-8 石 貝層下 doth48	鏡片	砂岩 (ニ-ロ)		
120	K-7 石 20/20 石 (石上土)	石鏡片	緑色片岩		
121	K-7 石 20/20 石 doth328	石鏡片	緑色片岩		
122	H-12 石 doth38	石鏡片	緑色片岩		
123	H-12 石1	石鏡片	緑色片岩		
124	H-12 石1 doth42	石鏡片	砂岩 (ニ-ロ)		
125	H-12 石1 doth82	石鏡片	砂岩 (ニ-ロ)		
126	H-12 石1 doth83	石鏡片	緑色片岩		
127	J-8 石 10/20 doth161	鏡片	緑色片岩		
128	L-8 石 40/50 doth1	石鏡片	緑色片岩		
129	L-8 石 40/50 doth2	石鏡片	緑色片岩		
130	M-13 石 10/20 doth1	石鏡片	緑色片岩		
131	J-8 石 10/20 doth57	鏡片	緑色片岩		
132	K-7 石 0/10 doth303	石鏡片	緑色片岩		
133	H-12 石 doth40	石鏡片	緑色片岩		
134	H-12 石 doth45	鏡片	砂岩 (ニ-ロ)		
135	H-12 石 doth71	石鏡片	緑色片岩		
136	H-12 石 doth75	石鏡片	緑色片岩		
137	H-12 石 doth77	石鏡片	砂岩 (ニ-ロ)		
138	L-8 石 10/20 doth1	石鏡片	六角砂岩		
139	L-8 石 貝層下 石	石鏡片	緑色片岩		
140	L-8 石 貝層下 石	石鏡片	緑色片岩		
141	J-7 石 0/10	鏡片	緑色片岩		
142	J-7 石 0/10	鏡片	緑色片岩		
143	J-7 石 0/10	鏡片	緑色片岩		
144	J-8 石 貝層下 石	石鏡片	緑色片岩		
145	J-8 石 貝層下 石	鏡片	緑色片岩		
146	J-8 石 貝層下 石	石鏡片	緑色片岩		
147	J-8 石 貝層下 石	石鏡片	緑色片岩		
148	K-6 石 北ア 石	石鏡片	緑色片岩		
149	K-6 石 北ア 石	石鏡片	六角砂岩		
150	K-7 石 北ア 石	鏡片	緑色片岩		
151	K-7 石 北ア 石	鏡片	緑色片岩		
152	K-7 石 北ア 石	鏡片	緑色片岩		
153	K-7 石 北ア 石	鏡片	緑色片岩		
154	K-7 石 北ア 石	鏡片	緑色片岩		
155	K-7 石 北ア 石	鏡片	緑色片岩		
156	K-7 石 北ア 石	鏡片	緑色片岩		

遺物 種	出土地点	種類	石質	産地	備考
157	K7 北アザ 3f	鏡片	緑色片岩		
158	K7 北アザ 3f	鏡片	緑色片岩		
159	K7 3f	鏡片	緑色片岩		
160	K7 3f	鏡片	緑色片岩		
161	K7 3f	鏡片	緑色片岩		
162	K7 北アザ 3f	鏡片	緑色片岩		
163	K7 北アザ 3f	鏡片	緑色片岩		
164	K7 3f	鏡片	緑色片岩		
165	K7 北アザ 3f	鏡片	緑色片岩		
166	K7 北アザ 3f	鏡片	緑色片岩		
167	K7 北アザ 3f	鏡片	緑色片岩		
168	K7 北アザ 3f	鏡片	緑色片岩		
169	K7 北アザ 3f	鏡片	緑色片岩		
170	K7 北アザ 3f	石鏡片	砂岩(ニード)		
171	L6 3f 下層 95f	石鏡片	緑色片岩		
172	L6 3f 下層 95f	石鏡片	緑色片岩		
173	粘土団塊	石鏡片	北東岩		
174	M9 南アザ Ee Q/10	鏡片	灰岩		
175	J9 Ee Q/10	燧石	石灰		
176	J9 Ee 130/140	鏡片	石灰		
177	K7 北アザ 3f	鏡片	石灰		
178	M19 Ee or Ee 20/20	鏡片	石灰		
179	M7 南トレンチ 3f/10 10/20	鏡片	チャート		
180	J9 南トレンチ Ee 粘土層 80/90 do/nb56	鏡片	チャート		
181	Ee	鏡片	チャート		
182	J9 南トレンチ Ee 粘土層 110/120	鏡片	チャート		
183	J9 Ee 130/140	鏡片	チャート		
184	J9 Ee 130/140	鏡片	チャート		
185	K7 北アザ 3e	鏡片	チャート		
186	M7 3f/10 10/20	鏡片	チャート		
Q-13 do/nb1		大型石片	緑色片岩		大型石鏡片中層出土
Q-13 do/nb2		大型石片	緑色片岩		*
Q-13 do/nb3		大型石片	緑色片岩		*
Q-21 全面磨削		石片	北東岩		
J9 具帯 Ee do/nb34		石片	緑砂岩		
J9 具帯下 Ee do/nb30		小型石片	緑色片岩		
J9 Ee 17 Q/10 do/nb128		石片	輝綠岩		
J9 do/nb2		磨削石鏡片	灰色片岩		
J9 具帯下 Ee do/nb447		鏡石	内湾石灰山岩		
J9 Ee Q/10 do/nb1		石片	緑色片岩		EL-3561m
J9 Ee 90/80		鏡石	輝綠岩		
J9 具帯下 Ee 10/80		小型石片	緑色片岩		
J9 磨石(黒色土)		石剣	チャート		本部半島?
J9 J9 具帯下 Ee		石片	黒色片岩		
J-20 磨石 Q/20		石片	スズリ岩		
J-7 Ee 30/40 do/nb26		石片	緑色片岩		
J-7 Ee do/nb12		石片	輝綠岩		
J-7 Ee 7 具上 do/nb5		石片	輝綠岩		
J-7 磨石具		石片	緑色片岩		
J-7 磨石具		石片	緑色片岩		
J-7 磨石具		石片	輝綠岩		
J9 Ee 具帯下 40/50 do/nb667		石片	緑色片岩		
J9 Ee		石片	輝綠岩		
J9 南アトレンチ Ee 80/90 do/nb133		石片	輝綠岩?		石可島
J9 南アトレンチ Ee 110/120 do/nb341		石片	緑色片岩		
J9 南アトレンチ Ee 80/90 do/nb254		石片	緑色片岩		
J9 南アトレンチ 南壁溝		鏡石	緑砂岩		
J9 粘土層 Ee 30/40 do/nb48		小型石片?	緑色片岩		
J9 Ee 110/120		石片	輝石石灰岩		
J9 120/130 具帯下		磨削石鏡片?	灰色片岩		
J9 Ee Q/10 do/nb18		石片	輝綠岩		
J9 Ee 110/120 do/nb327		鏡石?	緑色片岩		
J9 Ee 80/90 do/nb182		石片	灰色片岩		
J9 Ee 具帯下120/130		小型石片	緑色片岩		
J9 具帯下 Ee 110/120		円形石鏡片	片状輝岩		
J9 具帯下 Ee 80/100		円形石鏡片	石灰質輝岩		
J9 具帯下 Ee 70/80		石剣	緑色片岩		
J9 具帯下 Ee 80/100		石片	緑色片岩		
J9 南アトレンチ Ee 80/90		石片	内湾石灰山岩		石可島
K18 具帯下 Ee 粘土層20/30		燧石	輝綠岩		
K6 北アザ 3f		石片	緑色片岩		
K6 北アトレンチ 磨石		大型石片	緑色片岩		
K7 Ee Q/10		石片?	緑砂岩		
K7 Ee Q/10 do/nb315		石片	緑色片岩		
K7 Ee Q/10 do/nb2		石片	緑色片岩		
K7 Ee 40/50 do/nb138		大型石片	緑色片岩		
K7 Ee 40/50 do/nb208		石片	灰色片岩		
K7 Ee Q/10 do/nb316		石片	緑色片岩		
K7 南アトレンチ Ee 30/40 do/nb131		鏡石?	緑色片岩		
K7 北アザ Ee		石片	緑色片岩		
K7 北アザ Ee		石片	緑色片岩		
K7 北アザ Ee		石片	輝綠岩		
K7 北アトレンチ Ee Q/10		石片	緑色片岩		
K7 北アトレンチ Ee Q/10 do/nb1		石片	緑色片岩		



遺物 No	出土地点	種類	材質	産地	備考
1-5 E d 0/10		石鏃?	緑砂岩		
1-5 土器アザ E f 下層		石鏃	輝綠岩		
1-6 E e 10/20		小型石鏃	輝綠岩		
1-6 土器アザ E g		小型石鏃	緑色片岩		
1-6 土器アザ E h		石鏃	緑色片岩		
1-7 E e 30/40 do№84		燧石	石炭灰白岩		
1-7 E e 50/60 do№88		小型石鏃	輝綠岩		
1-7 E e 粘土質10/20		石鏃	輝綠岩		
1-7 西側トレンチ E e 10/20 do№11		石鏃	緑色片岩		
1-7 東側トレンチ 掘削 0/10 do№10		石鏃	輝綠岩		
M-17 岩層の上		石鏃	緑色片岩		
M-18 E e 10/20		石鏃	緑色片岩		
O-6 30 Bb 10/20		小型石鏃	緑色片岩	赤蓮田(赤蓮田中継点)	
O-7 ピットNo37内 掘削 do№1		石鏃	石英		
O-7 掘削面上 do№1		鉋跡(燧石?)	砂岩		
出土燧石		石鏃	緑色片岩		
出土燧石		大型石鏃	緑色片岩		
出土燧石		燧石	輝石片岩		
出土燧石		大型石鏃	緑色片岩		

第10表 石質同定一覧③

調査 №	出土地点	種類	石質	産地	備考
1	J77 E1層 Q/10 №189	石巻	緑色片岩		
2	J77 南トレンチ敷土層 E1層 Q/10 №75	石巻片	緑色片岩		
3	J77 E1層 Q/10 №175	石	緑軟砂岩	青部一帯	
4	J77 E1層 Q/10 №139	石巻	緑色片岩		
5	J77 E1層 Q/10 №179	石巻片	緑色片岩		
6	J77 E1層 Q/10 №143	石巻	緑色片岩		
7	J77 E1層 前上 №38	石巻片	緑色片岩		
8	J77 E1層 Q/10 №147	石巻片	緑色片岩		
9	J77 E1層 Q/10 №134	石巻	緑色片岩		
10	J77 E1層 Q/10 №145	石	ニーズ		
11	J77 E1層 Q/10 №243	石巻	緑色片岩		
12	J77 E1層 Q/10 №131	石巻	緑色片岩		
13	J77 南トレンチ敷土層 E1層 №77	石巻片	緑色片岩		
14	J77 E1層 Q/10 №174	石巻	緑色片岩		
15	J77 E1層 Q/10 №190	石巻片	緑色片岩		
16	J77 E1層 Q/10 №136	石巻	緑色片岩		
17	J77 E1層 Q/10 №138	石巻	緑色片岩		
18	J77 E1層 Q/10 №146	石巻	緑色片岩		
19	J77 E1層 Q/10 №166	石	ニーズ		
20	J77 E1層 Q/10 №142	石巻片	緑色片岩		
21	J77 南トレンチ敷土層 E1層 50/90 №74	石巻片	緑色片岩		
22	J77 E1層 Q/10 №193	石	ニーズ		
23	J77 E1層 Q/10 №136	石巻・丸石	ニーズ		
24	J8 E8層 貝層 №504	石炭?	砂岩石炭質	磯崎方面	ピーゴロック
25	J8 E8層 貝層 №477	石炭?	ニーズ		
26	J8 E8層 貝層 №465	石炭	緑軟砂岩		ニーズの骨
27	J8 E8層 貝層 №668	石	緑軟砂岩		ニーズの骨
28	J8 E8層 貝層 №821	石炭	緑軟砂岩		ニーズの骨
29	J8 E8層 貝層 №578	石炭	緑軟砂岩		ニーズの骨
30	J8 E8層 貝層 №29	石	炭質		クマヤの骨
31	J8 E8層 貝層 №469	石巻製品	ニーズ		
32	J8 E8層 貝層 №553	石炭	ニーズ		
33	J8 E8層 貝層 №437	石炭	ニーズ		
34	J8 E8層 貝層 №544	石炭	ニーズ		
35	J8 E8層 貝層 №469	石巻?	ニーズ		
36	J8 E8層 貝層 №48	石炭	ニーズ		
37	J8 E8層 貝層 №209	石炭	ニーズ		
38	J8 E8層 貝層 №435	石巻片	緑色片岩		
39	J8 E8層 貝層 №535	石炭	砂岩		
40	J8 E8層 貝層 №433	石炭	緑色片岩		
41	J8 E8層 貝層 №488	石巻?	ニーズ		
42	J8 E8層 貝層 №459	石	ニーズ		
43	J8 E8層 貝層 №449	?	片状砂岩		
44	J8 E8層 貝層 №592	石炭	ニーズ		
45	J8 E8層 貝層 №510	石炭	ニーズ		
46	J8 E8層 貝層 №448	石炭	ニーズ		
47	J8 E8層 貝層 №350	石炭	ニーズ		
48	J8 E8層 貝層 №480	石炭	ニーズ		
49	J8 E8層 貝層 №397	石巻	片状砂岩		
50	J8 E8層 貝層 №458	石炭	ニーズ		
51	J8 E8層 貝層 №497	ニーズ	ニーズ		
52	J8 E8層 貝層 №483	ニーズ	ニーズ		
53	J8 E8層 貝層 №479	石炭	ニーズ		
54	J8 E8層 貝層 №308	石炭	ニーズ		
55	J8 E8層 貝層 №317	石炭	ニーズ		
56	J8 E8層 貝層 №468	石炭	ニーズ		
57	J8 E8層 貝層 №546	石炭	塊状石炭質		
58	J8 E8層 貝層 №342	石炭?	塊状石炭質		
59	J8 E8層 貝層 №473	石巻片	緑色片岩		
60	J8 E8層 貝層 №41	石炭	ニーズ		
61	J8 E8層 貝層 №400	石巻	ニーズ		
62	J8 E8層 貝層 №624	石炭	砂岩		
63	J8 東部トレンチ E4層 100/10 №177	石	ニーズ		
64	J8 東部トレンチ E4層 70/90 №211	石	ニーズ		
65	J8 東部トレンチ E1層 Q/10 №133	石	塊状石炭質		
66	J8 東部トレンチ E4層 100/10 №273	石巻	砂岩		
67	J8 東部トレンチ E4層 70/90 №221	石巻片	緑色片岩		
68	J8 東部トレンチ E4層 20/30 №99	ニーズ	ニーズ		
69	J8 東部トレンチ E1層 Q/10 №132	ニーズ	ニーズ		
70	J8 東部トレンチ E4層 100/10 №278	石巻	片状砂岩		
71	J8 東部トレンチ E4層 70/90 №220	石巻片	緑色片岩		
72	J8 東部トレンチ E4層 110/130 №284	石巻片	塊状石炭質		
73	J8 東部トレンチ E4層 90/90 №248	石	ニーズ		
74	J8 東部トレンチ E1層 Q/10 №173	石巻	緑色片岩		
75	J8 東部トレンチ 地山 70/20 №204	石巻片	緑色片岩		
76	J8 東部トレンチ E4層 90/90 №240	石巻	緑色片岩		
77	J8 東部トレンチ E4層 100/10 №276	石巻	緑色片岩		
78	J8 東部トレンチ E4層 70/90 №216	石巻	緑色片岩		
79	J8 東部トレンチ E4層 70/90 №215	石巻	緑色片岩		
80	J8 東部トレンチ E4層 90/100 №268	ニーズ	ニーズ		
81	J8 東部トレンチ E4層 40/50 №171	石巻	ニーズ		
82	J8 東部トレンチ E1層 70/20 №131	石炭	緑色片岩		
83	J8 東部トレンチ E1層 70/20 №130	ニーズ	ニーズ		
84	J8 東部トレンチ E4層 90/90 №244	ニーズ	ニーズ		
85	J8 東部トレンチ E1層 Q/10 №134	石炭	ニーズ		
86	J8 東部トレンチ E1層 Q/10 №134	石炭	緑色片岩		
87	J8 東部トレンチ E4層 50/90 №222	石巻	緑色片岩		
88	J8 E4層 №29	石	ニーズ		

遺物 No.	出土地点	種類	石質	産地	備考
80	J8 東部トレンチ E4層 100/110 No278	石鏝	緑色片岩		
80	J8 東部トレンチ E4層 90/100 No268	---	---		
81	J8 東部トレンチ E4層 90/90 No266	---	---		
82	J8 E4層 No38	石鏝	---		
83	J8 東部トレンチ E4層 90/100 No282	---	---		
84	J8 東部トレンチ E4層 90/90 No277	---	---		
85	J8 東部トレンチ E4層 Q/10 No129	石材	緑色片岩		
86	J8 東部トレンチ E4層 70/90 No212	石	---		
87	J8 東部トレンチ E4層 Q/10 No239	石鏝片	緑色片岩		
89	J8 E4層 No55	石鏝	---		
89	J8 東部トレンチ E4層 90/100 No283	---	---		
100	J8 東部トレンチ E4層 90/100 No280	石材	---		
101	J8 東部トレンチ E4層 90/100 No272	石	琉球石灰岩		
102	J8 東部トレンチ E4層 90/90 No246	---	---		
103	J8 東部トレンチ E4層 100/110 No276	---	---		
104	J8 東部トレンチ E4層 90/90 No210	---	---		
105	J8 東部トレンチ E4層 90/90 No251	石	---		
106	J8 東部トレンチ E4層 100/110 No274	---	---		
107	J7 E4層 30/40 No37	石鏝	緑色片岩		
108	J7 E4層 40/50 No43	石鏝	緑色片岩		
109	J7 E4層 30/40 No38	石鏝	緑色片岩		
110	J7 東トレンチ 地山 10/20 No8	---	片状砂岩		
111	J7 E4層 40/50 No61	石鏝片	緑色片岩		
112	J7 E4層 40/50 No63	石鏝片	緑色片岩		
113	J7 E4層 40/50 No45	石鏝	緑色片岩		
114	J7 東トレンチ 地山 10/20 No3	石鏝	緑色片岩		
115	J7 E4層 20/30 No44	石鏝	緑色片岩		
116	J7 東トレンチ 地山 40/50 No48	石鏝	緑色片岩		
117	J7 東トレンチ 地山 Q/10 No9	石鏝	緑色片岩		
118	J7 E4層 40/50 No53	石鏝	緑色片岩		
119	J7 E4層 40/50 No57	石鏝	緑色片岩		
120	J7 E4層 40/50 No66	石鏝片	緑色片岩		
121	J7 E4層 30/40 No58	石鏝	緑色片岩		
122	J7 E4層 40/50 No40	---	---		
123	J7 E4層 20/30 No18	石鏝	---		
124	J7 E4層 40/50 No41	石材	---		
125	J7 E4層 40/50 No56	石材	---		
126	J7 東トレンチ 地山 40/50 No52	石材	---		
127	J7 E4層 40/50 No57	石材	片状砂岩		
128	J7 東トレンチ 地山 10/20 No5	石灰	石灰		
129	J7 E4層 30/40 No45	石材	---		
130	J7 東トレンチ E4層 10/20 No12	?	---		
131	J7 東トレンチ 地山 10/20 No1	?	砂岩		
132	J7 東トレンチ 地山 10/20 No3	石灰	石灰		
133	J7 東トレンチ 地山 10/20 No4	石灰	石灰		
134	J8 東トレンチ E4層 120/130 No398	石材	---		
135	J8 東トレンチ E4層 120/130 No404	石材	---		
136	J8 東トレンチ E4層 120/130 No408	石材	---		
137	J8 東トレンチ E4層 120/130 No402	石鏝片	緑色片岩		
138	J8 東トレンチ E4層 120/130 No406	石材	---		
139	J8 東トレンチ E4層 120/130 No410	石材	---		
140	J8 東トレンチ E4層 120/130 No408	石材	---		
141	J8 E4層 100/110 No289	石鏝片	輝石斑岩類	久米島	
142	J8 東トレンチ E4層 120/130 No415	石鏝片	緑色片岩		
143	J8 東トレンチ E4層 120/130 No398	石材	---		
144	J8 東トレンチ E4層 120/130 No403	石灰岩	緑色片岩		
145	J8 東トレンチ E4層 120/130 No400	石灰岩	石灰岩		
146	J8 E4層 60/70 No208	石灰	石灰		
147	J8 E4層 貝層 No495	礫石	礫石		
148	J8 E4層 貝層 No471	礫石	礫石		
149	J8 E4層 貝層 No453	礫石	礫石		
150	J7 E4層 50/50 No198	石	片状砂岩		
151	J7 E4層 40/50 No133	石鏝	緑色片岩		
152	J7 E4層 30/40 No208	石鏝	緑色片岩		
153	J7 E4層 40/50 No215	石材	---		
154	J7 E4層 40/50 No278	石	---		
155	J7 E4層 40/50 No275	石	---		
156	J7 E4層 40/50 No249	---	---		
157	J7 E4層 40/50 No144	石鏝	---		
158	J7 E4層 40/50 No157	石鏝	---		
159	J7 E4層 30/40 No210	石鏝	---		
160	J7 E4層 50/50 No207	石鏝	緑色片岩		現状
161	J7 E4層 50/50 No203	石鏝	---		
162	J7 E4層 40/50 No218	石鏝	---		
163	J7 E4層 20/30 No204	石鏝	---		
164	J7 E4層 40/50 No267	石鏝	緑色片岩		
165	J7 E4層 40/50 No169	---	---		
166	J7 E4層 40/50 No182	石鏝	緑色片岩		
167	J7 E4層 40/50 No193	---	---		
168	J7 東トレンチ E4層 30/40 No66	?	石灰(クチャの屑)		
169	J7 E4層 40/50 No145	石灰	緑色片岩		
170	J7 E4層 40/50 No164	石鏝	緑色片岩		
171	J7 東トレンチ E4層 30/40 No52	石灰	石灰		現状が少し
172	J7 E4層 Q/10 No8	石鏝	---		
173	J7 E4層 30/40 No205	---	---		
174	J7 E4層 50/50 No206	石鏝	緑色片岩		
175	J7 E4層 40/50 No203	石鏝	緑色片岩		
176	J7 E4層 30/40 No209	石鏝	片状砂岩		
177	J7 E4層 30/40 No201	石鏝	---		
178	J7 E4層 40/50 No217	石材	粗粒砂岩		



遺物	出土地点	種類	石質	産地	備考
268	J Ⅱ 8 30/50 №118	石橋片	緑色片岩		
269	J Ⅱ 8 20/20 №96	石橋	緑色片岩		
270	J Ⅱ 8 70/90 №246	石橋	ニ一ビ		
271	J Ⅱ 8 70/90 №247	石橋片	緑色片岩		
272	J Ⅱ 8 80/90 №270	石橋	片岩		
273	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 60/90 粘土質 №45	石橋	緑色片岩		
274	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 80/90 №252	石材	チャート		
275	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 80/90 №249	石橋片	緑色片岩		
276	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 80/90 №253	石橋片	黒色千枚岩		
277	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 80/90 №255	石橋片	緑色片岩		
278	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 80/90 №258	石橋	緑色片岩		
279	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 80/100 №307	石橋	ニ一ビ		
280	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 110/120 №355	石材	ニ一ビ		
281	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 80/100 №290	石	ニ一ビ		
282	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 80/100 №280	石橋片	ニ一ビ		
283	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 110/120 №324	石橋片	片状砂岩		
284	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 110/120 №368	石橋	波状石炭泥		
285	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 110/120 №310	石材	緑色片岩		
286	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 100/110 №294	石橋片	片状砂岩		黒色千枚岩片
287	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 100/110 №307	石橋片	緑色片岩		
288	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 100/110 №327	石橋片	片岩		
289	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 100/110 №300	石橋	ニ一ビ		
290	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 100/110 №292	石	ニ一ビ		
291	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 110/120 №313	石材	ニ一ビ		
292	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 90/100 №308	石橋片	緑色片岩		
293	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 110/120 №318	石材	片状砂岩		
294	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 110/120 №326	石材	ニ一ビ		
295	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 110/120 №338	石材	ニ一ビ		
296	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 80/90 №381	石材	ニ一ビ		
297	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 90/100 №367	石材	ニ一ビ		
298	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 110/120 №388	石材	片岩		
299	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 90/100 №372	石材	ニ一ビ		
300	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 100/110 №354	石材	ニ一ビ		
301	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 110/120 №339	石材	ニ一ビ		
302	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 100/110 №377	石材	ニ一ビ		
303	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 110/120 №387	石材	ニ一ビ		
304	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 110/120 №380	石材	ニ一ビ		
305	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 110/120 №337	石材	ニ一ビ		
306	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 110/120 №334	石材	ニ一ビ		
307	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 140/150 砂礫リッジ 層1 №426	石橋	波状砂岩		
308	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 110/120 №359	石材	片岩		
309	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 110/120 №375	石橋	緑色片岩		
310	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 110/120 №385	石材	ニ一ビ		
311	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 110/120 №384	石材	ニ一ビ		
312	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 110/120 №378	石橋	緑色片岩		
313	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 80/100 №369	石材	波状石炭泥		
314	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 100/110 №355	石材	緑色片岩		
315	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 110/120 №363	石材	ニ一ビ		
316	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 90/100 №374	石橋片	緑色片岩		
317	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 120/130 №421	石材	ニ一ビ		
318	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 120/130 №384	石材	緑色片岩		
319	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 120/130 №391	石材	泥岩 (クマヤの層)		
320	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 110/120 №386	石材	ニ一ビ		
321	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 100/110 №376	石橋片	緑色片岩		
322	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 100/110 №371	石橋片	波状砂岩		
323	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 120/130 №416	石橋片	緑色片岩		
324	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 110/120 №381	石材	ニ一ビ		
325	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 120/130 №419	石橋片	緑色片岩		
326	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 120/130 №423	石橋片	緑色片岩		
327	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 140/150 砂礫リッジ 層1 №425	石橋	緑色片岩		
328	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 90/100 №386	石材	ニ一ビ		
329	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 100/110 №389	石橋	ニ一ビ		
330	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 90/90 粘土質 №38	石橋	緑色片岩		
331	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 80/70 №48	石橋	緑色片岩		
332	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 90/90 粘土質 №33	石橋	緑色片岩		
333	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 20/20 №93	石橋	ニ一ビ		
334	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 60/90 粘土質 №44	石橋	緑色片岩		
335	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 80/70 粘土質 №51	石橋	緑色片岩		
336	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 30/50 №110	石橋	緑色片岩		
337	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 80/100 粘土質 №90	石材	ニ一ビ		
338	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 20/20 №90	石材	ニ一ビ		
339	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 5/20 №71	石橋	緑色片岩		
340	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 60/70 粘土質 №40	石橋	緑色片岩		
341	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 5/20 №86	石橋	緑色片岩		
342	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 10/20 №27	石橋	緑色片岩		
343	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 5/20 №77	石橋	ニ一ビ		
344	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 5/20 №75	石材	ニ一ビ		
345	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 80/90 粘土質 №58	石橋	緑色片岩		
346	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 30/50 №109	石橋	ニ一ビ		
347	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 80/100 粘土質 №59	石材	サンゴ		
348	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 30/50 №99	石橋	ニ一ビ		
349	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 5/20 №70	石橋	緑色片岩		
350	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 90/100 粘土質 №83	石材	片岩		
351	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 90/110 №67	石橋	緑色片岩		
352	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 90/100 粘土質 №82	石橋	緑色片岩		
353	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 20/20 №87	石材	泥岩 (クマヤの層)		
354	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 5/20 №72	石橋	ニ一ビ		
355	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 5/20 №74	石橋	緑色片岩		
356	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 5/20 №73	石橋	緑色片岩		
357	J Ⅱ 8 東トレンチ EⅡ 40/50 粘土質 №8	石橋	チャート		

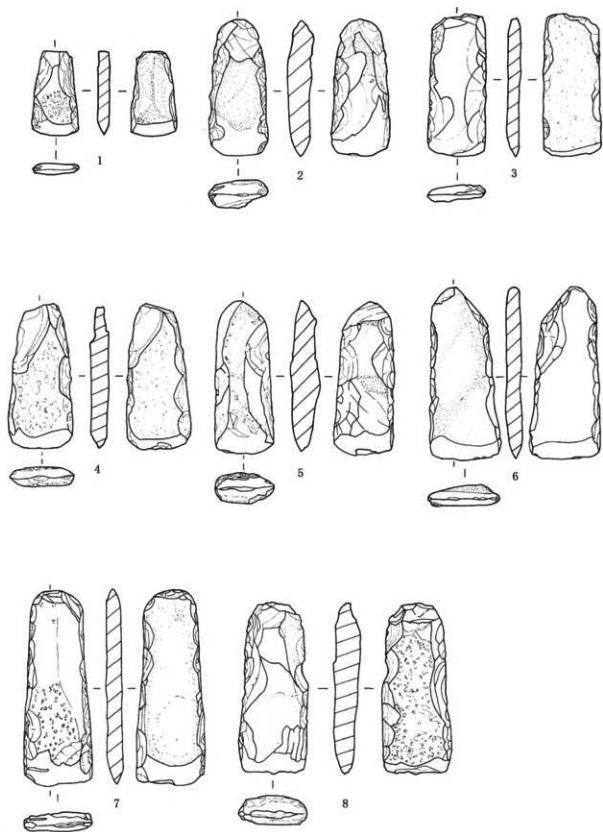
国号	出土地点	種類	石質	産地	備考
358	J8 南トレンチ E4層 40/50 粘土質 №7	石膏	緑色片岩		
359	J8 南トレンチ E4層 30/40 粘土質 №1	石膏	緑色片岩		
360	J8 E4層 20/30 №94	石膏片	緑色片岩		
361	J8 E4層 0/10 №190	石膏	ニーズ		
362	J8 南トレンチ E4層 60/80 №18	石膏	緑色片岩		
363	J8 南トレンチ E4層 30/40 粘土質 №17	石膏	緑色片岩		
364	J8 南トレンチ E4層 30/40 粘土質 面上 №14	石膏	乳皮質		
365	J8 南トレンチ E4層 30/40 粘土質 №9	石膏	緑色片岩		
366	J7 E1層 面上 №54	石膏	ニーズ		
367	J7 E1層 面上 №59	石膏	ニーズ		
368	J7 E1層 0/10 №225	石膏	緑色片岩		
369	J7 E1層 面上 №58	石膏	緑色片岩		
370	J7 E1層 0/10 №271	石	緑色片岩		
371	J7 E1層 0/10 №201	石膏	緑色片岩		
372	J7 E1層 0/10 №60	石膏	緑色片岩		
373	J7 E1層 0/10 №277	石	ニーズ		
374	J7 E1層 面上 №117	石材	ニーズ		
375	J7 南トレンチ E4層 20/80 №245	石膏	緑色片岩		
376	J7 E1層 面上 №53	石膏	緑色片岩		
377	J7 E1層 0/10 №202	石膏	ニーズ		
378	J7 E1層 10/20 №88	石膏	ニーズ		
379	J7 E1層7 面上 №59	石膏	ニーズ		
380	J7 E4層 40/50 №27	石膏	ニーズ		
381	J7 E4層 40/50 №102	石膏	緑色片岩		
382	J7 E4層 面上 40/50 №103	石膏	ニーズ		
383	J7 E4層 40/50 №91	石膏	ニーズ		
384	J7 E1層 面上 №10	石膏	ニーズ		
385	J7 E1層 面上 №42	石材	ニーズ		
386	J7 E4層 40/50 №58	石材	ニーズ		
387	J7 E4層 40/50 №47	石材	ニーズ		
388	J7 E4層 40/50 №50	石材	ニーズ		
389	J7 E4層 30/40 №4	石膏	緑色片岩		
390	J7 E1層 0/10 №228	石材	ニーズ		
391	J7 E1層 面上 40/50 №53	石材	ニーズ		
392	J7 E4層 40/50 №34	石膏	ニーズ		
393	J7 E1層 0/10 №220	石膏	緑色片岩		
394	J7 E1層7 面上 №112	石材	ニーズ		
395	J7 E4層 50/80 №247	石材	緑色片岩		
396	J7 E1層 0/10 №186	石材	ニーズ		
397	J7 E1層 0/10 №232	石	塊状石灰岩		
398	J7 E1層 0/10 №229	石膏	緑色片岩		
399	J7 E1層 0/10 №188	石膏	緑色片岩		
400	J7 E1層 0/10 №226	丸石	塊状石灰岩	ランゴ	
401	J7 E4層 面上 №57	石膏	緑色片岩		
402	J7 E1層7 面上 №208	石膏片	緑色片岩		
403	J7 E1層 0/10 №221	石膏	緑色片岩		
404	J7 E1層7 面上 №95	石膏片	緑色片岩		
405	J7 E1層 0/10 №223	石	緑色片岩		
406	J7 E1層 0/10 №238	石材	ニーズ		
407	J7 E1層 0/10 №211	石膏片	緑色片岩		
408	J7 E1層 0/10 №203	石材	ニーズ		
409	J7 南トレンチ E1層 0/10 №252	石灰	緑色片岩		
410	J7 E1層 0/10 №228	石膏	緑色片岩		
411	J7 E1層 0/10 №210	石膏片	緑色片岩		
412	J7 南トレンチ E1層 0/10 №281	石膏	緑色片岩		
413	J7 E1層7 面上 №127	石膏片	緑色片岩		
414	J7 E4層 30/40 №3	—	ニーズ		
415	J8 E4層 頁岩 №388	輝石	輝石		
416	J8 E4層 頁岩 №386	輝石	輝石		
417	J8 E4層 頁岩 №389	輝石	輝石		
418	J8 奥段トレンチ E4層 20/80 №208	石	ニーズ		
419	J8 奥段トレンチ E4層 0/10 №207	石	ニーズ		
420	J8 E4層 頁岩 №30	輝石	輝石		
421	J8 E4層 頁岩 №39	輝石	輝石		
422	J8 E4層 頁岩 №46	輝石	輝石		
423	J8 E4層 頁岩 №38	輝石	輝石		
424	J8 奥段トレンチ E4層 10/20 №87	輝石	輝石		
425	J8 E4層 №50	輝石	輝石		
426	J8 E4層 №48	輝石	輝石		
427	J8 E4層 №37	輝石	輝石		
428	J8 E4層 №40	輝石	輝石		
429	J8 E4層 №33	輝石	輝石		
430	J8 E4層 №53	輝石	輝石		
431	J8 E4層 №41	輝石	輝石		
432	J8 E4層 10/20 №8	輝石	輝石		
433	J8 E4層 10/20 №15	輝石	輝石		
434	J8 E4層 10/20 №14	輝石	輝石		
435	J8 E4層 10/20 №8	輝石	輝石		
436	J8 E4層 10/20 №30	輝石	輝石		
437	J8 E4層 10/20 №49	輝石	輝石		
438	J8 E4層 頁岩 №485	輝石	輝石		
439	J8 E4層 頁岩 №497	輝石	輝石		
440	J8 E4層 頁岩 №498	輝石	輝石		
441	J8 E4層 頁岩 №519	輝石	輝石		
442	J8 E4層 頁岩 №513	輝石	輝石		
443	J8 E4層 頁岩 №594	輝石	輝石		
444	J8 E4層 頁岩 №558	輝石	輝石		
445	J8 E4層 頁岩 №885	石	塊状石灰岩		
446	J8 E4層 頁岩 №439	輝石	輝石		
447	J8 E4層 頁岩 №478	輝石	輝石		
448	J8 E4層 頁岩 №495	輝石	輝石		
449	J8 E4層 頁岩 №473	輝石	輝石		
450	J7 E4層 40/50 №88	石膏	緑色片岩		

第11表 石器観察一覧

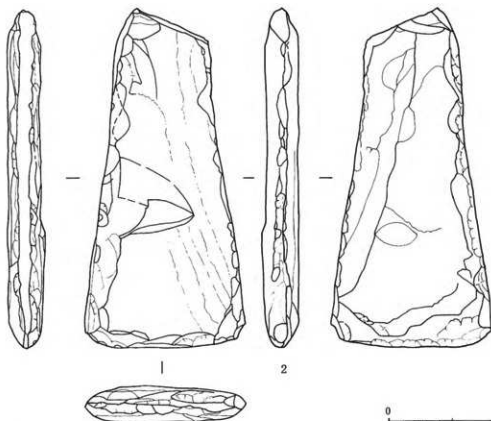
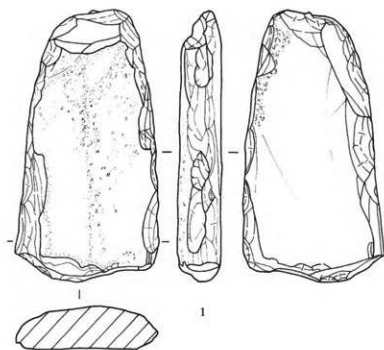
採掘番号 図版番号	種類	出土地点	層序	法量 (cm・g)				材質	観察事項
				長	幅	厚	重		
第21図 1 図版31の1	石斧	I-B 長塚下	I f 層 No50	6.50	3.70	0.90	37.50	緑色片岩	刃部磨製石斧。両刃。小形。磨打と研磨で成形。平面形は扁平な「八字」形。横断面は長楕円形。断面側面は平坦に研磨する。刃縁は明瞭で、刃こぼれが殆んどない。
第21図 2 図版31の2	石斧	J-7	I f 層10/20 No12	10.50	4.60	1.90	143.70	輝綠岩	刃部磨製石斧。両刃。磨打と研磨で成形する。平面形は刃部から基部へゆるやかに窄まる短楕円形。基部は丸みを帯び、横断面はほぼ「八字」形。小さな刃こぼれはあるが、刃縁は明瞭。
第21図 3 図版31の3	石斧	J-7	I f 層7直上 No5	10.90	4.45	0.90	92.60	輝綠岩	刃部磨製石斧。片刃（高・直で刃面の大きさが違う。両刃か?）。扁平な素材を使用。磨打と研磨で成形する。平面形は短楕円形。横断面は長楕円形。刃縁、刃角とも明瞭。
第21図 4 図版31の4	石斧	I-B 東側トレンチ	I f 層0/10 No128	11.15	5.00	1.40	143.80	輝綠岩	刃部磨製石斧。両刃。磨打と研磨で成形。平面形は刃部から基部へゆるやかに窄まる「八字」形。横断面は長楕円形。刃縁は厚肉する。
第21図 5 図版31の5	石斧	J-7・B	復元状	11.85	4.50	2.35	193.20	輝綠岩	刃部磨製石斧。両刃。磨打と研磨で成形する。平面形は刃部から基部へゆるやかに窄まる短楕円形。基部は丸みを帯び、横断面は楕円形。一部刃こぼれがあるが、刃縁、刃角とも明瞭。
第21図 6 図版31の6	石斧	表土割符	—	13.20	5.50	1.50	172.30	緑色片岩	刃部磨製石斧。両刃。扁平な素材を使用。磨打と研磨で成形する。平面形は短楕円形。基部は片側に窄まる（基部右に欠失?）。横断面は扁平な楕円形。小さな刃こぼれがあるが、刃縁は明瞭でやや厚肉筋。
第21図 7 図版31の7	石斧	K-7	I f 層 0/10 No315	15.00	5.25	1.40	204.70	緑色片岩	刃部磨製石斧。両刃。扁平な素材を使用。磨打と研磨で成形する。平面形は刃部から基部へゆるやかに窄まる「八字」形（短楕円形?）。基部は丸みを帯び、横断面は長楕円形。一部刃こぼれがあるが残存刃縁は明瞭。
第21図 8 図版31の8	石斧	K-7	I f 層 0/10 No316	13.20	5.40	2.20	238.90	緑色片岩	刃部磨製石斧。両刃。基部を打ち欠いて成形する。刃部側は短楕円形。基部はやや丸みを帯び、側面の一部を挟む。横断面は楕円形。前面形はやや斜状を呈する。大きな刃こぼれがあるが残存刃縁、刃角は明確。刃角両側面に平坦な研磨面が僅かに残る。
第22図 1 図版32の1	大型石斧	表土割符	—	21.10	11.10	3.40	1400.00	緑色片岩	大型石斧。厚みのある素材を使用。平面形は基部へ窄まる狭長方形。横断面は長楕円形。基部を打ち欠いて成形。表面は研磨と肉肌面。裏面は平坦な肉肌面。（大型石斧の平準品か?）
第22図 2 図版32の2	大型石斧	表土割符	—	26.30	13.60	2.90	1400.00	緑色片岩	大型石斧。平面形は「八字」形。横断面は長楕円形。研磨と磨打で成形する。左側面と基部はやや平坦。下部には表面側面に打撃痕があり、刃部製作中の未製品と見られる。（同じ打撃痕?）
第23図 1 図版33の1	大型石斧	G-13	No1	37.70	8.7~11.5	2.10	1290.00	緑色片岩	大型石斧。扁平な素材を使用。側面を打ち欠き成形する。平面形は刃部から基部へ窄まる短長方形。表面半分は大きな肉肌面。刃部は打撃で刃縁が明確でない。大型石斧系中最大出土。
第23図 2 図版33の2	大型石斧	G-13	No2	31.90	11.50	2.20	1450.00	緑色片岩	刃部磨製大型石斧。片刃。扁平な素材を使用。側面を打ち欠き成形する。平面形は狭長方形。刃部は小さく刃こぼれが多い。大型石斧系中最大出土。
第24図 1 図版34の1	割片	M-19	I c or II d 層 20/30	2.40	2.10	0.55	3.10	石英	（割片石器）。平面形はほぼ円形。裏面は滑らかな割断面。縁面は刃状に尖る。
第24図 2 図版34の2	石磨 （スクレイパー）	J-12	II d 層20/30	6.80	2.90	0.40	9.90	緑色片岩	スクレイパー（小型磨早期型）。片刃で非常に薄い。平面形は扁平なやや斜状を呈する。縁全面が刃のように尖る。磨製石斧部分割片を再利用か?。
第24図 3 図版34の3	石斧	L-8	II d 層30/50	8.20	4.80	1.30	76.60	緑色片岩	刃部磨製石斧。両刃。全体的に磨打による成形。平面形は短楕円形で基部は片側に窄まる。側面形はやや斜状を呈する。刃部は刃こぼれが目立つが、残存刃縁は明瞭。基部は割片を刃状に調整か?。
第24図 4 図版34の4	石斧	M-16	II d 層10/20 （粘土質）	7.80	5.80	1.40	121.70	緑色片岩	磨製石斧。両刃。平面形は「八字」形（短楕円形?）。全体的に研磨され、手触りは滑らか。側面は平坦。基部中央から基部に打撃痕が残る。（側面側面は硬質面の厚肉か?）刃こぼれはあるが残存刃縁と刃角は明瞭。刃縁は直線状。

探検番号 図版番号	種類	出土地点	層序	法量 (cm・g)				材質	観察事項
				長	幅	厚	重		
第24図 5 図版34の5	石弁	J-12	IIc層0/10 東側アザ	9.40	4.70	2.10	105.90	緑色片岩	磨製石弁。片刃(表裏で刃面の大きさが違う。片面が大きく削離した両刃石弁か?)。平面形は「T」形。刃縁は湾状に。側面は磨打と研磨で成形。刃こぼれや刃縁の摩耗があるが一部明確な部分もある。側面形はやや新磨形。
第24図 6 図版34の6	石鏃	J-15	IIc層 貝塚	7.70	5.80	4.40	264.40	(砂岩)	鏃石(磨石)。平面形は楕円形とも楕円形。表裏面中央部に磨打痕があり、片面は凹凸。両側面に決りを有し、壺形状になる。下部部に磨打痕がみられる。
第25図 1 図版35の1	石球 (石球)	H-16	IIc層 貝塚下	(縦:8.7)	(横:8.7)	(高:7.3)	789.20	(砂岩)	石球(石球)。球全面に磨打痕。部分的に研磨が見られる。一部欠落する。
第25図 2 図版35の2	石器	J-17	IIc層 貝塚下	10.30	11.20	2.60	352.90	砂岩	磨製石弁(未製品?)。片刃。自然面と削離面で表裏をなす。刃縁は湾状で刃こぼれが多い。側面に決りを有す。製作途中か?側面形はやや新磨形。
第25図 3 図版35の3	凹石	K-18	IIc層20/30 貝塚中粘土質	-	-	-	362.60	輝綠岩	凹石。大部分が欠落し、中央部に凹みの一部が見える。
第25図 4 図版35の4	磨石・ 磨石	H-15	IIc層 貝塚下20/30	9.95	9.10	5.00	839.10	緑色片岩	磨石(磨石)。平面形は楕円形(短六角形)。側面形は楕丸方形を呈する。厚みのある素材で表裏面とも研磨する。側面全面と表裏面中央部に磨打痕を有し、裏面は凹み、側面は決りを有す。
第26図 1 図版36の1	石弁	L-6	IIf層下部(泥)	6.80	3.10	0.60	25.70	緑色片岩	刃部磨製石弁。両刃。小型。扁平な素材を使用する。平面形は略短冊形。刃部から刃部へやや窄まり、刃縁は小さい。側面は打ち欠け、刃部は平坦に成形する。刃縁は明瞭。
第26図 2 図版36の2	石弁	H-12	IIf層 dot No.7 El:-3.630m	6.10	4.30	0.65	32.20	緑色片岩	刃部磨製石弁。両刃。小型。扁平な素材を使用。平面形は短冊形(側面は欠落?)。刃こぼれは強し。刃こぼれは明瞭。
第26図 3 図版36の3	石弁	G-12	IIf層 dot No.13 El:-3.953m	18.70	5.40	3.00	427.10	緑色片岩	打製石弁。(両刃)。平面形はややカーブする楕丸長方形。横断面は部分的に角を持つ楕円形で刃部が刃部分より厚い。側面から表面に手に馴染む摩擦(握りやすさ)が見られる。刃こぼれが多く、刃部は磨れている。
第26図 4 図版36の4	石弁	H-12	IIf層 dot No.37 El:-3.745m	10.90	5.25	1.80	145.40	緑色片岩	刃部磨製石弁。両刃。平面形は側面が窄まる略「P」字形。表面は磨打。研磨がみられる。刃部の刃こぼれが目立つ。側面形はやや新磨形を呈する。
第26図 5 図版36の5	小型石弁	O-6	IIb層10/20	6.20	3.00	1.05	28.70	緑色片岩	磨製石弁。小型。両刃。表裏面とも研磨する。平面形は「P」形で側面は尖る。刃部の刃こぼれが目立つ。磨製石弁の磨製れ破片か?
第26図 6 図版36の6	石器	O-7	地山道土5No.1 El:-3.732m	(長軸8.3)	(短軸6.6)	3.40	304.40	砂岩	磨石(磨石)。平面形は楕円形。円筒状の縁厚2/3ほどが刃部で摩耗する。表は研磨と表裏。裏は削離面。大型石弁の破片。2次使用か?
第26図 7 図版36の7	石鏃	F-9	IIe層0/10 dot No.2 El:-3.463m	4.50	3.00	0.39	6.70	黒色片岩	有蓋磨製石鏃。平面形は「T」状。表裏面とも研磨する。刃縁に沿って鋭い稜が入る。全面に鋭い刃こぼれが見られ、基部は僅かに残り(凸蓋有蓋鏃、船などは欠失する)。
第26図 8 図版36の8	石球	O-7	pit No.37内① El:-3.732m	(6.60)	(4.10)	(3.10)	131.60	石英	ほぼ立方体の石球。側面全面に打削痕が見られる。
第27図 1 図版37の1	大型石鏃	N-8	IIe層・赤土	33.85	12.40	4.80	3425.00	緑色片岩	大型磨石。厚みのある素材を使用。平面形は「P」形。横断面は楕円(楕円形)を呈する。裏面は平坦。下部に磨打痕。両側面に決りが入る。表面には左右狭り間に鋭い磨り痕が見られる。
第27図 2 図版37の2	(大型石弁)	K-7	IIe層40/90 dot No.13b	22.60	6.10	1.00	352.90	緑色片岩	石弁(未製品?)。薄く扁平な素材を使用。平面形は長方形。刃部は製作途中か? (鋭い使用による破れ?)
第28図 1 図版38の1	大型石鏃	O-13	No.3	28.00	18.00	2.60	2300.00	緑色片岩	「磨石?」。大型で厚みのある扁平な素材を使用。平面形はほぼ五角形で一側狭りを有する。角部分のひとつに磨打痕が見られ、その側面は平坦な研磨面を呈する。大型石鏃類中部出土。

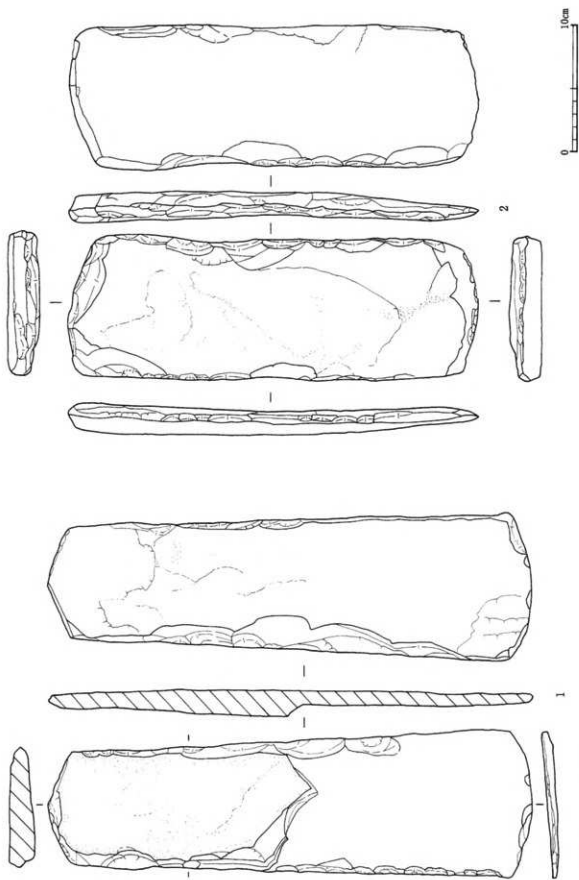




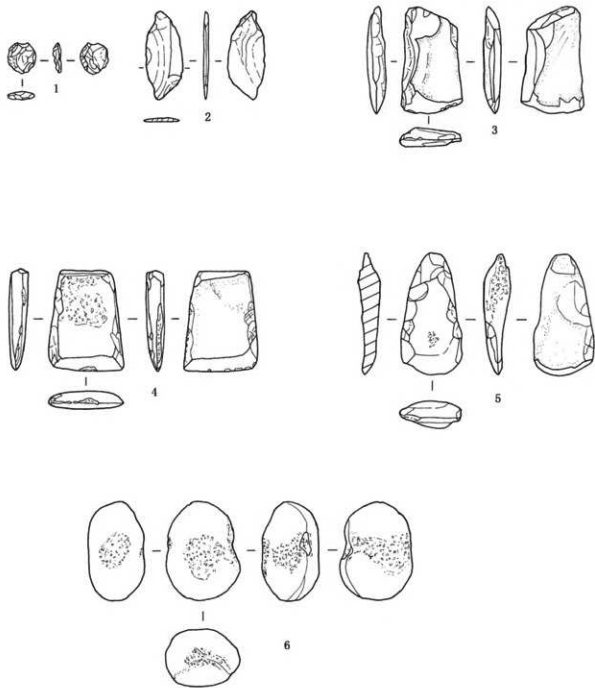
第21圖 (圖版31) 石器①



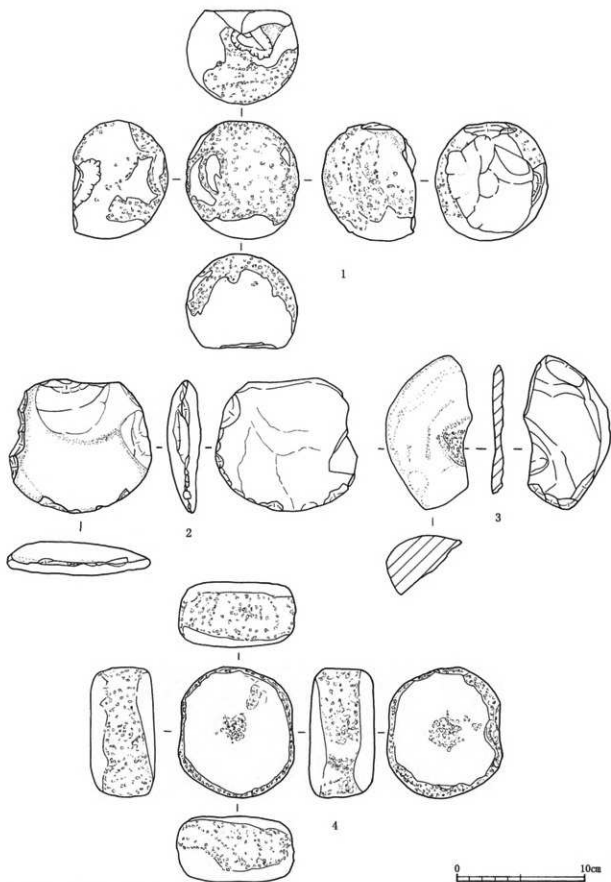
第22图 (图版32) 石器②



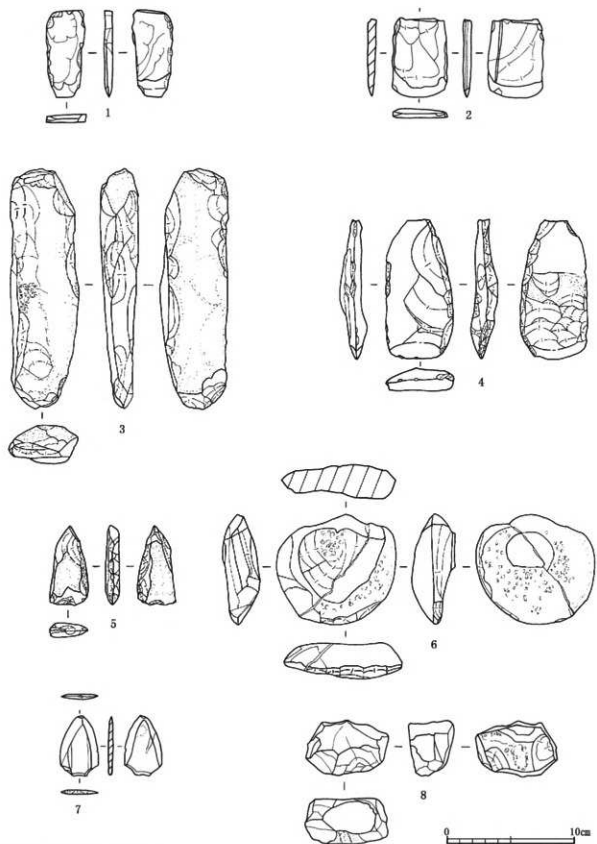
第23圖 (圖版33) 石器③



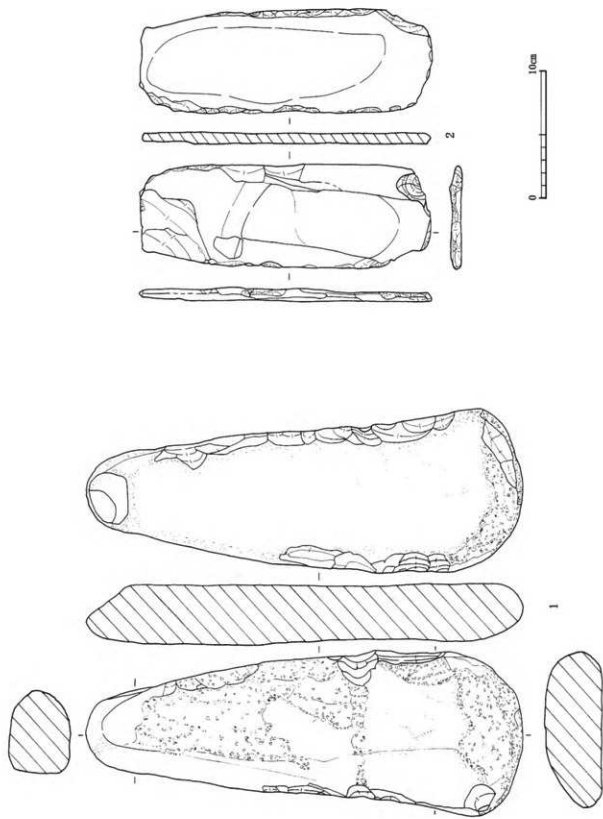
第24圖 (圖版34) 石器④



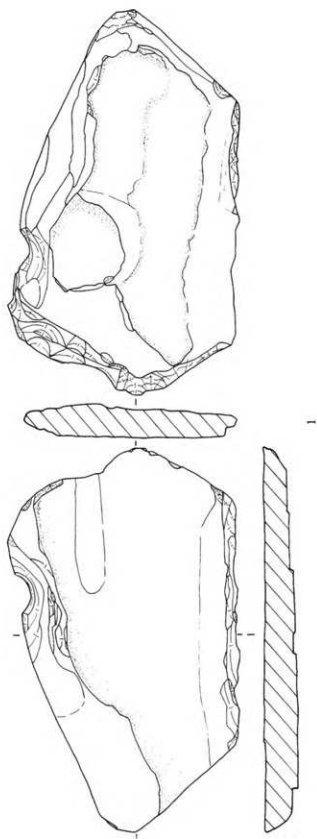
第25图 (图版35) 石器⑤



第26图 (图版36) 石器⑥



第27圖 (圖版37) 石器①



第28圖 (圖版38) 石器⑤



### 第3節 貝製品

本遺跡から貝製品は12点得られた（第12表）。

貝製品の内訳は実用品と考えられるもの5点、装飾品と考えられるもの6点、不明品1点であった。そのうちの特徴的な10点を図示した（第29・30図 図版39・40）。実用品と装飾品の割合はほぼ同数で、その中でも完形品は第30図4メンガイ製貝輪、同図5小玉と同図6札状製品の装飾品3点である。出土層はⅡd層が9点、Ⅱc・Ⅱd層が1点、攪乱1点、出土層序不明が1点である。

個々の特徴について、第13・14表の観察表に示す。

第12表 貝製品出土一覧

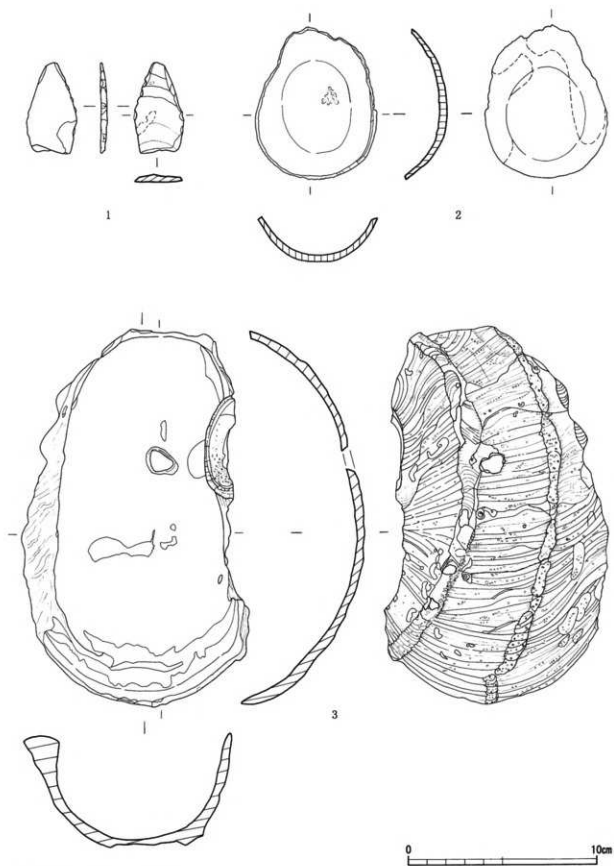
			実用品			装飾品			不明品	合計
			貝弁	匙	鏡	貝輪	札状製品	小玉	ウミウサギ	
H-14		貝塚下10/20							1	1
H-16	Ⅱd	貝塚下10/20	1							1
I-8	攪乱	30/40			1					1
I-11	Ⅱd			1						1
I-15	Ⅱd	貝塚下30/40				1				1
I-16	Ⅱd	貝塚下					1			1
J-15	Ⅱd	貝塚下				1				1
J-16	Ⅱd	貝塚下10/20		1						1
K-11	Ⅱc・Ⅱd10/20	検出フク土10/20						1		1
K-14	Ⅱd	Pt No 2 (69d)					1			1
L-12	Ⅱd	30/40				1				1
一括	Ⅱd	貝塚下10/20				1				1
小計			1	2	1	1	3	2	1	1
合計				5			6		1	12

第13表 貝製品観察一覧①

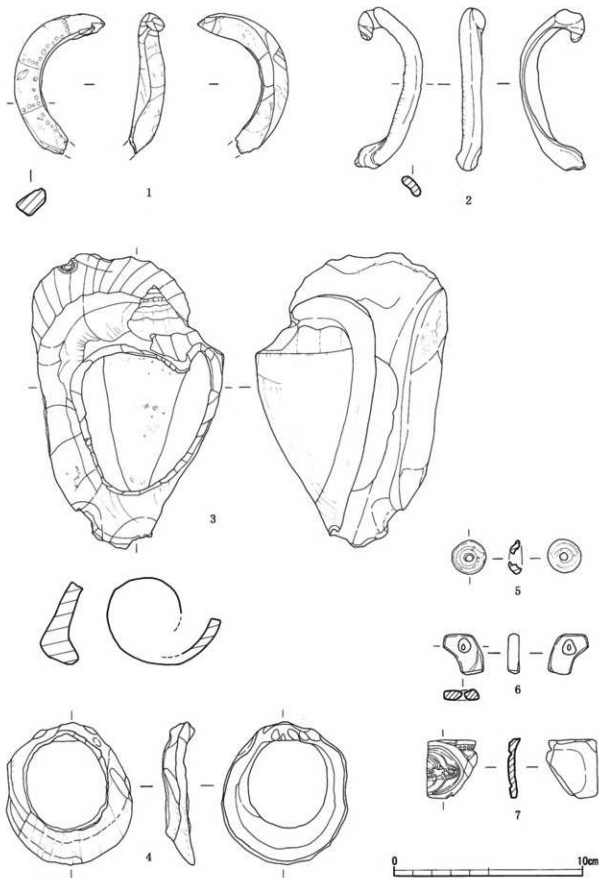
挿図番号 図版番号	貝種と器種	法量 cm g	観察事項	出土地点
第29図 1 図版39の1	クロチョウガイ 貝鏡	高さ：4.8 幅：2.7 厚さ：0.4 重量：5.1	真珠層を利用した製品である。真珠層の色が灰色で、まっすぐな製品なのでクロチョウガイを利用したものと考えられる。両側縁に剝離調整が顕著に確認できる。	I-8 攪乱30/40
第29図 2 図版39の2	ホシダカラガイ 貝匙	高さ：7.95 幅：6.45 重量：34.70	ホシダカラガイの背の部分を利用した製品である。研磨はなく、調整時の打削面そのままである。	I-11 Ⅱd
第29図 3 図版39の3	ヤコウガイ製 貝匙	高さ：19.9 幅：11.4 重量：418.6	ヤコウガイの体層部を利用した製品である。研磨はなく整形時の打削面はそのままの粗製品である。表面の一部には螺肋を打削し真珠層が確認できるが、ほとんどが自然面である。	J-16 Ⅱd貝塚下10/20

第14表 貝製品観察一覧②

挿図番号 図版番号	貝種と器種	法量 cm g	観 察 事 項	出土地点
第30図 1 図版40の1	ゴホウラ 貝輪	高さ：7.4 幅：1.8 重量：24.1	ゴホウラの外唇部を利用した貝輪なので厚いところで1cm、薄い場所では0.5cmの半欠品である。表面に直径2mm程の装飾を施している。縦に4個、その間に4～6個配列している。同図の7にも同様な装飾をしているが、それよりも直径が1mm程大きい。	L-12東側アゼ Ⅱd 30/40
第30図 2 図版40の2	ウミウサギガイ 不明品	高さ：8.45 幅：1.00 重量：17.60	外唇部だけの製品である。歯の部分も丸みを帯び、全面に研磨がみられる。上部には渦巻きに似た彫刻を施した製品である。	H-14 貝塚下 10/20
第30図 3 図版40の3	ゴホウラ 貝輪	高さ：15.5 幅：9.8 重量：377.1 孔径 (縦) 7.3 (横) 6.8	背面を大きく穿孔した未製品なのか、または取り出した背面を利用するための残骸なのか判断ができない。研磨はない。	J-15 Ⅱd貝塚下
第30図 4 図版40の4	メンガイ 貝輪	高さ：7.45 幅：6.6 重量：27.8 孔径 (縦) 5.0 (横) 4.2	完形品である。メンガイの復縁を輪状に加工した製品である。切り取った部分に研磨はみられないが、滑らかである。表裏面共に自然のままである。	I-15 Ⅱd貝塚下 30/40
第30図 5 図版40の5	イモガイ製 小玉	高さ：1.8 幅：1.8 重量：1.8 孔径 (縦) 0.50 (横) 0.55	小形イモガイの螺旋部を利用した製品である。殻長に穿孔している。	K-11溝状遺構 Ⅱc・Ⅱd 10/20 検出フク土 10/20
第30図 6 図版40の6	札状製品	高さ：2.1 幅：2.1 厚さ：0.6 孔径：0.3 重量：3.8	完形品である。全面に丁寧な研磨が施されている。上部に小さな孔があり、両面より穿たれている。紐ずれの跡はみられない。	I-16 Ⅱd貝塚下
第30図 7 図版40の7	イモガイ製 札状製品	高さ：2.6 幅：2.9 厚さ：0.3 重量：4.8	イモガイの体層部を長方形に切り取り、研磨を施している。表面に細かな模様を細工している。幅4mmの帯状文をX状に配したものと思われる。同図1の貝輪に施した刺突文の装飾に酷似している。	K-14 PitNo2 (砂Ⅱd)



第29圖 (圖版39) 貝製品①



第30圖 (圖版40) 貝製品②

## 第4節 外国産陶磁器

本遺跡から得られた外国産陶磁器は総数1209点を数える。中国産陶磁器の種類としては、白磁118点（第15・16表）、青磁353点（第17・18表）、青花414点（第19・20表）、青磁染付1点、琉璃釉2点、黒釉陶器天目1点、緑釉2点、翡翠釉1点、褐釉陶器315点（第21・22表）、の9種類が確認できた。

そのほか、タイ産半練2点が確認できた。

### A 白磁

白磁は総数118点得られており、器種は、碗、小碗、杯、小杯、皿、小皿が出土している（第31図 図版41・44）。碗が94点と多く、ついで皿が7点出土している。碗は、概ね17世紀～19世紀頃に比定されるものが多い。産地は、そのほとんどが中国福建・広東省系と考えられる。

出土地はⅡc層とⅡd層が多く、出土数の3/4を占め、器種構成も様々である。

第31図・図版41（第23表）1及び、図版44（第31表）1・2・3は、無文の外反碗である。第31図・図版41（第23表）1と図版44（第31表）1は、口唇部を舌状に成形する。第31図・図版41（第23表）2は、内底無釉の碗で、外面に軸轆痕が観察できる。高台は面取りされる。図版44（第31表）4・5・6・7は、型成形のようである。同図4・5は、外反口縁の小碗である。同図6は、高台付きの皿で、断面が逆三角形で皿付は細い。同図7は、小杯で高台断面は逆三角形になる。第31図・図版41（第23表）3は、菊花皿で、見込みに細い蛇の目釉刺ぎを施し、高台断面は逆三角形になる。

第31図・図版41（第23表）4は、白色もしくは青灰色の青花のような色調をしているが、今回は白磁に含めて報告する。器種不明で、底径は3.6cmとなり、見込みに直径2.25cmの窪みがあり、立ち上がりは急である。

第15表 白磁出土一覧①

器種 出土地点	碗			小碗			杯		小杯		皿			小皿		角小皿		器種不明		小計
	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	底部	口縁部	底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	口縁部	胴部	底部	口縁部	底部	
表探		5					1		1											7
I層		2																		2
Ⅱa層		1	2																	3
Ⅱc層	8	20	5				1	1	1	1	1				1			1	1	41
Ⅱc・Ⅱd層	3	8	2	1									4							18
Ⅱd(上部)層		3																		3
Ⅱd層	5	11	1	1	1									2						21
Ⅲa層	1	4													1					6
Ⅲb層		1																		1
攪乱	3	7	2						2								1	1		16
合計	20	62	12	2	1	1	2	1	4	1	4	2	2	2	1	2	1	1	118	

第16表 白磁出土一覧②

出土地点	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	一括合計	グリッド合計		
G IIa層																	1		1	1		
H 表探															1					1	3	
I層														2						2		
I IIa層																2				2	5	
攪乱				1	2															3		
J IIc・IId層									1											1	5	
攪乱				2												1	1			4		
K IIc・IId層					1			1	1											3	11	
IId層								3	1	1	1	1								6		
攪乱			2																	2		
L 表探				1										1						2	19	
IIc層					1															1		
IIc・IId層				1	1	1		1	1	1										6		
IId(上部)層											2									2		
IId層				2				2	1	1		2								8		
M IIc層				2	1				1	1										5	27	
IIc・IId層					2		2		1	1				2						6		
IId(上部)層									1											1		
IId層					1	1		3	1				1							7		
攪乱			4											1	1					6		
N IIc層					2	2	3		1	1	4	6	5							24	28	
IIIa層					1					1		1								3		
IIIb層				1																1		
O IIc層				2		1	1		1		2	2								9	12	
IIIa層						1			1	1										3		
P 表探							1													1	5	
IIc層				1	1		1	1												4		
N~P 表探								1												1	1	
一括 表探																			1	1	1	
合計		0	6	11	13	7	6	5	11	8	13	14	6	4	7	4	1	1	0	1	118	118

## B 青磁

青磁は総数353点得られており、器種は、碗、小碗、皿、盤、瓶、袋物が出土している。碗が295点と多く、ついで皿が17点出土している。概ね、15世紀後半～16世紀中に比定されるものが多く確認でき、素地・釉が精良なものは少なく、粗雑なものが多い。産地は、そのほとんどが中国福建・広東省系と考えられる。出土地はⅡc層とⅡd層が多く、出土数の2/3を占め、器種構成も様々である。

碗の文様は、外体面に雷文・蓮弁・細蓮弁が各々13～15点ほどで、そのほか、見込みに刻花文や印花文+菊・渦巻文、草花文が数点確認できた。碗の器形は、直口口縁が多い。

図版44(第32表)8は、無文外反碗である。第31図・図版41(第24表)5～7と図版44(第32表)9は、直口口縁の線刻蓮弁文碗である。厚い釉を施した第31図・図版41(第24表)5と薄い釉を施した同図6・7、図版44(第32表)9とに分けられる。文様は、第31図・図版41(第24表)5は篋描きで幅0.6cm程の細蓮弁文を描き、同図7は片切り彫りで口唇部に一条の圓線が廻らされ、蓮弁の剣先が簡略化された、幅1cm程の蓮弁を描く。同図6は篋描きで蓮弁の剣先が簡略化し、口唇部に一条の圓線が廻らされ、幅1.3cm程の蓮弁を描く。図版44(第32表)9は、篋描きで蓮弁の剣先が簡略化し、口唇部に一条の圓線が廻らされ、幅0.8cm程の蓮弁を描く。第31図・図版41(第24表)8～10は、雷文帯碗である。同図8・9は、直口口縁で内体面は無文である。同図10は外反口縁の雷文帯碗で、内外体面に雷文が描かれる。いずれも、厚い釉を施す。同図8は、外体面口唇部に、片切り彫りで雷文帯を施す。同図9は、外体面口唇部に、型押しで雷文帯を施す。同図10は、内外体面胴部にくずれた雷文を施す。第32図・図版42(第25表)1・第31図・図版41(第24表)12～14と図版44(第32表)10・11は、碗の底部である。厚い釉を施した第31図・図版41(第24表)13、図版44(第32表)11と第32図・図版42(第25表)1、第31図・図版41(第24表)12・14、図版44(第32表)10とに分けられる。第31図・図版41(第24表)13と図版44(第32表)11は見込みに一条の圓線を描きその中に陰印花を施す。高台内は、蛇の目軸刺ぎが施される。第32図・図版42(第25表)1と第31図・図版41(第24表)12・14は、外対面に草花文?を施す。

第17表 青磁出土一覧①

器種 層序	碗				小碗	皿		盤			瓶		袋物		器種不明	合計
	直口碗	外反碗	胴部	底部	底部	口縁部	胴部	口縁部	胴部	底部	胴部	胴部	胴部	底部	底部	
表探	4	2	9	2		2	1								1	21
I層	1	1														2
Ⅱa層	2		8	2												12
Ⅱc層	16	4	37	15		3						1		27	3	106
Ⅱc(下部)層							1									1
Ⅱc・Ⅱd層	7	3	40	5	1	3						1	1			61
Ⅱd(上部)層	1															1
Ⅱd層	16	2	47	6		2		1	1	1	1			1		78
Ⅱd・Ⅱd(粘土質)層			1													1
Ⅱd(粘土質)層	1		6	1												8
Ⅲa層	7	1	24	2		2	1									37
Ⅲb層	1		4	2			1									8
攪乱	6		9					1							1	17
合計	62	13	185	35	1	12	4	1	1	1	1	3	1	30	3	353
器種別合計		295			1	17			3			3	1	33		353

\*表探には、表土剥ぎ、表探、表面清掃、南壁清掃、不明が含まれる。

高台内は、無軸もしくは蛇の目軸刺ぎとなる。第31図・図版41（第24表）13は、外面に軸轆痕が観察でき、焼成も悪い。高台は幅が1.4cmと幅広く、畳付は面取される。図版44（第32表）10は、高台の脚が比較的高く、畳付は面取される。

図版45（第33表）1～3は皿である。同図1は、口折れ皿で、内体面から脣上面へ折れる部分に丸みを持つ。外体面には蓮弁文？が描かれている。同図2は、腰折れ外反皿で、外体面に蓮弁の文様を施す。蓮弁は弁先が尖っていない浅い片切彫りになる。器厚は、8mmと厚くなっている。同図3は、皿の底部で、見込みに菊花？の陰印花が施され、粗い貫入がみられる。同図4は、盤の底部である。見込み部分の器厚は、2.2cmの厚みがある。第32図・図版42（第25表）2は、瓶の胴部で、外面に篋描きによる弧状の文様を施す。

第18表 青磁出土一覧②

グリッド	層序	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	合計	グリッド 合計	
G-19~22 H-19~22 I-19~21	表探														1				1	1	
G	表探								1										1	8	
	Ia層													2					2		
	IIa層														1		2	2	5		
H	表探				1											1			1	4	
	IIa層																	1	2		
	IIc層								1										1		
I	表探			2															2	22	
	IIa層																		5		
	IIc・IIc層									2				1					3		
J	IIc層								1										5	15	
	IIc層									1									3		
	攪乱		7																7		
K	IIc層				1						2	1		2					6	27	
	攪乱	1	4					1	1							1			9		
	IIc層		1	2					2	1		2							8		
L	IIc・IIc層				3				1										5	50	
	IIc層				1	1	1	2	1	1	3	1	1						13		
	攪乱	1																	1		
M	表探																1		2	94	
	IIc層				1			1		2			1						5		
	IIc・IIc層							2	4	2	2	1							11		
N	IIc層			2		4	4	3	4	2	3	5	1	3	1				32	72	
	表探																		3		
	IIc層			3	3	1			1	2	4		2						16		
O	IIc・IIc層				9	8	2	6	5		2	4	4	1					41	40	
	IIc(上部)層																		1		
	IIc層				1	2	1	6	5	1	1								17		
P	IIc(粘土質)層																		1	20	
	IIc(粘土質)層																		1		
	IIa層				1	2	2	1			1	5	2						8		
Q	攪乱	1																	1	40	
	表探				1														1		
	IIc層			2	2	3	3	4	3	2	6	19	2						46		
R	IIc(下部)層								1										1	72	
	IIc層									1	1	1			1				4		
	IIa層				1	2	1		1										14		
S	IIb層				2	1	1	1											5	40	
	攪乱	1																	1		
	IIc層			2	1	5	8			1	9	2							28		
T	IIa層			2	2	2	1							1	1				9	40	
	IIb層			1		1													3		
	表探																		1		
U	IIc層			3	1	2		5											11	20	
	IIa層			1	1	3	2	1											8		
	合計			9	25	37	36	34	24	31	21	43	48	13	13	4	2	8	2		3

\*表探には、表土剥ぎ、表探、表面清掃、南壁清掃、不明が含まれる。



## C 青花

青花は総数414点得られており、器種は、碗、小碗、皿、小皿、大皿、杯、小杯、瓶、大鉢、小鉢、鉢、レンゲが出土している。碗が309点と多く、ついで皿が39点出土している。概ね、16世紀～18世紀中頃に比定されるものが多い。産地は、そのほとんどが中国福建・広東省系と考えられる。

出土地はⅡc層とⅡd層が多く、出土数の1/2を占め、器種構成も様々である。

第32図・図版42（第26表）3・4・5及び、図版45（第34表）5～8は碗の口縁部である。第32図・図版42（第26表）3・4・5及び、図版45（第34表）5・6は直口口縁で、図版45（第34表）7・8は外反口縁である。第32図・図版42（第26表）3・4は、筆描きの文様で、外面口唇部に満状唐草文？や上部と下部に一本の圏線を廻らせ、その中に筆書きの文様を施す。そのほかに、直口口縁の文様は麒麟（第32図 図版42 第26表5）、波濤文？（図版45 第34表5）、花卉唐草文？（同図6）、があり、外反口縁は外体面に寿字文（同図7）や、外体面に唐草文？、内体面に波濤文（同図8）などがみられる。

図版45（第34表）9・10・11・12は碗の底部である。同図9・10は、見込みにホラ貝を描き、外面腰部には、芭蕉文？が施される。外面高台脇に、2条もしくは3条の圏線が施される。同図11・12は、腰部には蓮弁文が施される。同図11は、見込みに二条の圏線を廻らせる。同図12は、外面高台に2条の圏線が施され、高台内に、和美的銘を施す。

図版46（第35表）1・2は小碗の口縁部である。同図1は、外反口縁で外面口唇部に一条の圏線を施し、胴部に馬士文？が描かれている。同図2は、直口口縁で外面に寿字文が施される。

第32図・図版42（第26表）6・7は小碗の底部である。同図6は見込みに二条の圏線を施し、その中に拵じ花文？を施す。外面胴部に牡丹唐草を、高台脇に二条の圏線を施し、高台内に「大明年造？」を施す。同図7は外面胴部に仙芝祝寿文を配し、見込みに花卉を施す。高台内に四角銘款を施す。

第19表 青花出土一覧①

器種	碗				小碗				皿				小皿				大鉢		杯		小杯		瓶		大鉢		小鉢		鉢		レンゲ(徳山)		不明		計				
	直口	外反	外唇	底唇	口縁部	底唇	口縁部	底唇	口縁部	底唇	口縁部	底唇	口縁部	底唇	口縁部	底唇	口縁部	底唇	口縁部	底唇	口縁部	底唇	口縁部	底唇	口縁部	底唇	口縁部	底唇	口縁部	底唇	口縁部	底唇							
赤床	3	3	10	6	1		1	1	1	5	3																								4	39			
1層	1	3	2																																	5			
2層	4	3	11	2	1	2			1	1	2																									4	31		
3層	1	1	2																																		5		
4層	21	10	69	8	3	3	1			7																										10	136		
5c(下層)			2																																		1	3	
5c-5d層	7	3	37	4						1	5																										62		
5d(図版)層			1	1																																	2		
5d層	8	5	21	2			2		1	1	5	1			4																						53		
5d(出土)層															1																						1		
5e(陶器)層			1																																		1		
6層	1	6	12					1																												1	21		
7層			1								1																										1	3	
8層	3	9	23	2			4	2			2	1																									1	2	52
計	48	40	182	29	5	9	8	1	4	10	24	1	1	4	1	1	1	1	3	1	2	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	23	414			
合計			309				30				20			8		1	1		4		5		1	1	2		2		2						23	414			

\*表採には、表採、表土剥ぎ、埋土、表面清掃、北トレンチ、東壁清掃、(攪乱壁)清掃が含まれる。

図版46 (第35表) 3～6は皿である。同図3は腰折れ直口皿で、口唇部外面に一条、内面に筆書きの文様が施される。同図4・5は高台が断面逆三角形になる、皿の底部である。同図4は、外面胴部に唐草文?を配し、見込みに二条の圏線を施し、花卉文を施す。同図5は、外面胴部に唐草文?を配し、見込みに二条の圏線を施し、十字花文?を施す。同図6は、直口口縁の皿である。外面腰部の立ち上がりに二条の圏線を施す。口唇部に二条の圏線を施し、見込みに鳥花文?を施す。高台内に、二条の圏線を施し、合の印を施す。『徳化民寄 青花 P35 28』に類似資料が掲載されている。

第33図・図版43 (第27表) 1・2は皿の底部である。高台は、断面逆三角形である。同図1は外面胴部に文様を施し、見込みに二条の圏線、花卉文を施す。同図2は外面胴部に唐草文を配し、見込みに二条の圏線を施し、玉取獅子文を施す。

同図3は瓶の底部である。底部にラマ式蓮弁文を施す。

同図4は大鉢の胴部である。外面胴部に丸文?を施し、内面に一条の圏線を施す。

第20表 青花出土一覽②

グリッド順序	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	不明	合計	グリッド 原合計	
F	表探						1														1	1
G	表探									2											2	2
	I 層												1	3	1						5	5
	II 層																5	4	10		19	19
G H 18-21 ・ I 19-21	表探																9				9	9
H	表探						1														1	1
	II 層															1	1				2	8
	探込							4		1											5	4
I	表探		2									2									4	4
	II 層															4	6				10	10
	III 層												1	1	1						3	3
J	II c・II d 層																				1	1
	III 層				6	3		1	1												2	2
	探込									1			1								1	1
K	II c 層																				11	11
	II c・II d 層								3	2		1	1								6	6
	III 層						1	1	1	1		1	4								9	21
L	探込																				1	1
	表探					1							2	1							4	4
	II c 層					1				1											2	2
M	II c・II d 層					1	1	2	6	2	2	3									17	17
	III 層				1	4	1	4	3	5			3	2	1	1					29	29
	探込																1	2			4	4
N	表探																				4	4
	II c 層					1															18	18
	II c・II d 層					1	1	2	6	2	2	3									37	37
O	II d(周縁) 層																				2	2
	III 層																				11	11
	II a 層					2															2	2
P	探込				6	5								1	1	2					15	15
	表探																				1	1
	II c 層					1	5	7		5	6	3	13	14	8						63	63
Q	II c(下部) 層																				2	2
	III 層																				1	1
	II a 層					1		4					2	1							8	8
R	II b 層																				1	1
	II b 層							1	2												3	3
	II c 層									3		1									11	11
S	II a 層																				1	1
	II b 層																				1	1
	II c 層																				1	1
グリッド不明 のワッパ	表探																				11	11
ワッパ合計																					11	11
合計		2	22	23	34	31	21	37	39	33	35	37	24	12	10	15	14	4	10	11	414	414

\*表探には、表探、表土剥ぎ、埋土、表面清掃、北トレンチ、東壁清掃、(攪乱壁) 清掃が含まれる。

#### D 青磁染付

青磁染付は1点得られており、皿が出土している。概ね、16世紀頃に比定される。出土地はJ-7のII d層から出土している。

第33図・図版43（第28表）5は、青磁染付の皿である。腰部から立ち上がる皿で、口縁部は直口である。外面に薄く青色の釉が掛かり、内面には呉須で花唐草文が施され、その上から透明釉を施している。青磁染付の類似資料は、小碗であるが『天界寺跡Ⅰ』に掲載されている<sup>83</sup>。

#### E 瑠璃釉

瑠璃釉は2点得られており、碗と器種不明が出土している。概ね、16世紀頃に比定される。出土地は、II d層から出土している。

第33図・図版43（第29表）6は、瑠璃釉の碗である。腰部から緩やかに立ち上がり、外面に瑠璃釉を施し、内面と高台内には透明釉を施す。曇み付けは、露胎となる。

瑠璃釉の類似資料は、小碗や鉢であるが『天界寺跡Ⅰ』に掲載されている<sup>83</sup>。

#### F 黒釉陶器

黒釉陶器は1点得られており、碗が出土している。出土地は、M-6の攪乱から出土している。内外面には茶褐色の釉が掛かり、素地は灰色で黒色の微粒子を含む。胴部小片のため図示できなかった。

#### G 緑釉

緑釉は2点得られており、壺もしくは瓶と器種不明の胴部が出土している。出土地は、M-11のII c・II d層とP-8のII層から出土している。M-11のII c・II d層から出土しているものは、外面に緑釉を施し、内面無釉の壺か瓶で、P-8のII層から出土しているものは胴部小片であった。2点とも胴部小片のため図示できなかった。

#### H 翡翠釉

翡翠釉は1点得られており、器種不明の胴部が出土している。出土地は、I-21のII a層から出土している。外面に白化粧を施し、文様を描き、その上から翡翠釉を薄く施している。胴部小片のため図示できなかった。

## I 褐釉陶器

褐釉は総数315点得られており、器種は、壺・鉢・不明が出土しており、壺が265点と多い。概ね、16世紀～18世紀中頃に比定されるものが多い。産地は、中国と考えられる。出土地はⅡc層とⅡd層が多く、出土数の3/4を占め、器種構成も様々である。

図版46（第36表）8～11が褐釉陶器である。同図8は壺の口縁部で、口唇部は僅かに凹がめぐり、内面は微弱に膨らむ。同図9は壺の底部で、僅かに上げ底状となる。内器面には、轆轤痕が明瞭に残る。同図10は小壺の底部で、逆ハの字状に立ちあがる。内器面には、轆轤痕が明瞭に残る。同図11は鉢で、口縁部は内彎し、口唇部を平坦に整える。外面に轆轤跡が残る。

第21表 褐釉陶器出土一覧①

層序	器種	壺				小壺				鉢	不明	小計
		口縁部	頸部	胴部	底部	口縁部	頸部	胴部	底部			
表探				11				1				12
I層				1				1				2
Ⅱa層				9				2				11
Ⅱc層	1		56	3	2		14	2	1			79
Ⅱc(砂澁)層			1									1
Ⅱc(下部)層			2				1					3
Ⅱc・Ⅱd層	2		81				1					84
Ⅱd(上部)層			1					1				2
Ⅱd層	3	1	63		2	1	12		1	2		85
Ⅱd(粘土質)層			2	1								3
Ⅲa層			16				5					21
Ⅲb層		1	2									3
褐色砂			1									1
攪乱			6				1					7
地山直上			1									1
小計		6	4	252	3	4	1	38	3	2	2	315
器種別合計			265				46		2	2	2	315

\*表探には、表探、清掃、表面清掃、東壁清掃、南壁清掃、埋土、北側趾が含まれる。

## J タイ産半鉢

第33図・図版43（第30表）7と図版46（第37表）12は、タイ産半鉢の蓋である。

第33図・図版43（第30表）7は、蓋の器態は落とし蓋で、摘み部分の残存である。摘みの形態は、いわゆる宝珠形に類似している。頂部・首部は指撫による磨きがみられる。

図版46（第37表）12は、蓋の器態は落とし蓋で、蓋端部の残存である。

タイ産半鉢の類似資料は、『渡地村跡』に掲載されている<sup>54</sup>。

## 註

- 1 『徳化民富 青花』 P35-28
- 2 『天界寺跡Ⅰ』 第33図1～6 P61 青磁染付 小壺
- 3 『天界寺跡Ⅰ』 第33図19～21 P61 小壺
- 4 『渡地村跡』 第77図6 P116 タイ産半鉢 蓋

第22表 褐釉陶器出土一覧②

グリッド	層序	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	不明	合計	グリッド合計
G	I層														2						2	7
	IIa層																2	2	1		5	
H	表探								1												1	3
	IIa層																			1	1	
I	IIc層										1										1	19
	IIa層																1	2	2		5	
	IIc層											3									3	
	IIc・II d層											2	1	2	2						7	
	II d層									1	1										2	
J	攪乱			2																	2	13
	IIc・II d層									3											3	
	II d層						3	1	1		1			1							7	
	褐色砂			1																	1	
K	攪乱		1							1											2	40
	IIc層				1	1			2												4	
	IIc・II d層				3			2	3	1											9	
	II d層			1	4	3	1	7	1	2	1	1	2	2							25	
	IIIb層			1																	1	
L	攪乱		1																		1	50
	IIc層								1		4	1									6	
	IIc・II d層			2	2		2	8	1	5											20	
	II d層		1	1	7	1	2	3	1	2	3	1		1							23	
L・M	表探		1																		1	1
M	IIc層		3	1	1			2	1		2	1									11	84
	IIc・II d層				1	2	1	10	8		8	4	4		1	4					43	
	II d層				1	1		1	8	3	6	1	1								22	
	II d(粘土質)層												2								2	
	IIIa層					1	2		2												5	
N	攪乱		1																		1	67
	表探				3			1						1							5	
	IIc層			1	2		4	3	1	3	8	10	6		1						39	
	IIc(砂泥)層					1															1	
	IIc(下部)層								3												3	
	IIc・II d層													2							2	
	II d(上部)層								1			1									2	
	II d層								2	1		3									6	
	II d(粘土質)層												1								1	
O	IIIa層					1	1	1	1		2										6	18
	IIIb層			1									1								2	
	表探						1		1												2	
	IIc層			1	1		4		3		2	2									13	
P	IIIa層						1	1			1										3	10
	IIc層					1		1													2	
	IIIa層		1		4		2														7	
Q	地山直上											1									1	1
一括	表探					1															1	1
一括	表探																				2	2
	合計	0	3	17	32	12	24	38	44	23	40	32	20	9	4	5	4	4	2	2	315	315

\*表探には、表探、清掃、表面清掃、東壁清掃、南壁清掃、埋土、北側趾が含まれる。

第23表 白磁観察一覧①

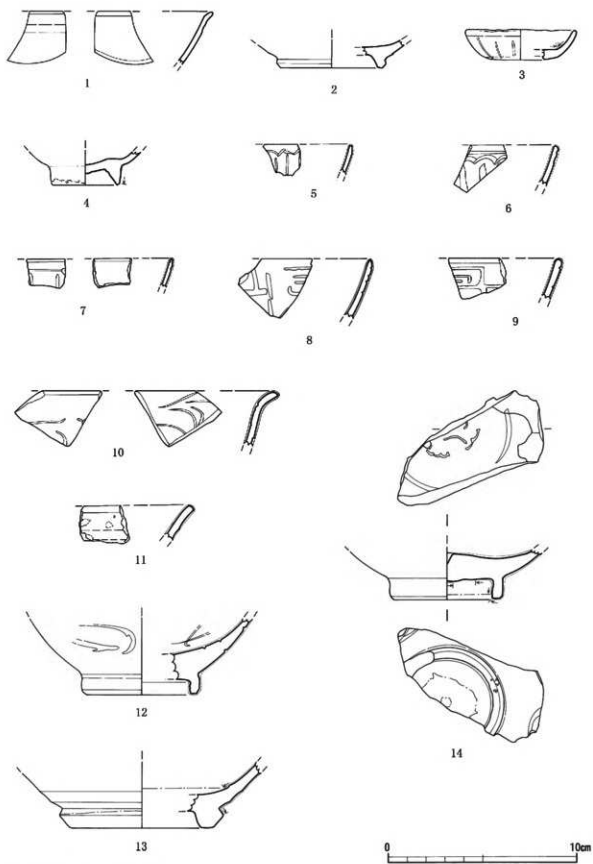
( ) 内は推定

押図番号 図版番号	器種 部位	口径 器高 高台径 (mm)	素地	施釉	釉調	貫入	備考	出土地点
第31図 1 図版41の1	碗 口縁部	— — —	灰白色で微粒子。黒色粒・赤褐色粒を多少含む。	内外面に施釉。	灰白色。	なし。	外反する口縁で、口唇部は舌状に成形される。	N-8 西側畦 Ⅲa層 10/20
第31図 2 図版41の2	碗 底部	— — (54)	灰白色で微粒子。黒色粒・赤褐色粒を多く含む。	底部を露胎。	なし。	なし。	混入物が多く、墨付を面取している。外面に轡線痕が観察できる。	K-17 北側畦 Ⅱd層
第31図 3 図版41の3	小皿 口～ 底部	59 16 25	白色で粗粒子。黒色粒を少量含む。	内外面に施釉。見込みに細い蛇の目輪割ぎ。外底無釉。	青灰色。	なし。	口唇部を刻み、菊花状にする菊花皿である。直口口縁で底部は平底。	N-10 Ⅱc層 0/10 O-9 東側畦 Ⅲa層 10/20
第31図 4 図版41の4	器種 不明 底部	— — 36	灰白色で微粒子。黒色粒・赤褐色粒を多く含む。	墨付及び高台面を露胎。	青灰色。	細い貫入あり。	腹部の立ち上がりは急で、見込みに直径2.2cmの窪みがある。	M-13 Ⅱa層 0/10

第24表 青磁観察一覧①

( ) 内は推定

押図番号 図版番号	器種 部位	口径 器高 高台径 (mm)	素地	施釉	釉調	貫入	備考	出土地点
第31図 5 図版41の5	碗 口縁部	— — —	乳白色で微粒子。赤褐色粒を多量に含む。	内外面に施釉。釉の厚みは厚い。	オリーブ灰色	内外面に、粗い貫入あり。	直口縁で外面に蓮弁文を施す。蓮弁の剣先が略略化され、幅0.6cm程の蓮弁を置く。	K-17 Ⅱd層 20/30
第31図 6 図版41の6	碗 口縁部	— — —	灰白色で粗粒子。黒色粒を極少量含む。	内外面に施釉。釉の厚みは薄い。	オリーブ灰色	内外面に、粗い貫入あり。	直口縁で外面に蓮弁文を施す。蓮弁が略略化され、口唇部に一条の轡線が隠される。幅1.3cm程の蓮弁を置く。	L-11 Ⅱd層 50/60
第31図 7 図版41の7	碗 口縁部	— — —	灰白色で粗粒子。黒色粒・赤褐色粒を多く含む。	内外面に施釉。釉の厚みは薄い。	灰オリーブ色	内外面に、粗い貫入あり。	直口縁で外面に蓮弁文を施す。口唇部に一条の轡線が隠される。蓮弁の剣先が略略化され、幅1cm程の蓮弁を置く。	G-22 Ⅱa層 10/20
第31図 8 図版41の8	碗 口縁部	— — —	灰白色で微粒子。黒色粒・赤褐色粒を多く含む。	内外面に施釉。	明オリーブ灰色	なし。	直口縁で外体面口唇部に雷文帯を施す。	N-10 西側トレン子 Ⅲb層 0/10
第31図 9 図版41の9	碗 口縁部	— — —	灰白色で微粒子。黒色粒・赤褐色粒を多く含む。	内外面に施釉。	明オリーブ灰色	なし。	直口縁で外体面口唇部に雷文帯を施す。	M-11 Ⅲa層 10/20
第31図 10 図版41の10	碗 口縁部	— — —	乳白色で微粒子。赤褐色粒を少量含む。	内外面に施釉。	明オリーブ灰色	なし。	外反碗で内外体面胴部にくずれた雷文を施す。	P-8 Ⅲa層 20/30
第31図 11 図版41の11	碗 口縁部	— — —	白色で粗粒子。黒色・赤褐色粒を多量に含む。	内外面に施釉。	オリーブ灰色	内外面に、粗い貫入あり。	直口縁で全体的に勲葉の掛け方が異なる。素地にひびが入る。	I-17 Ⅱc・Ⅱd層 0/10
第31図 12 図版41の12	碗 底部	— — (63)	灰白色で微粒子。赤褐色粒を多く含む。黒色粒を少量含む。	内外面に施釉。高台内無釉。	オリーブ灰色	なし。	内外面に草花文?を施す。	L-12 東側畦 Ⅱc層 20/30
第31図 13 図版41の13	碗 底部	— — (76)	赤褐色～灰白色で粗粒子。黒色・白色粒を少量含む。	内底、高台部より高台内まで無釉。	オリーブ灰色	内外面に、粗い貫入あり。	焼成が高く、撫で調整も跡である。内底は輪割ぎの跡が明瞭に残る。高台は面取される。	L-17 Ⅱd層 0/10
第31図 14 図版41の14	碗 底部	— — (81)	灰白色で微粒子。赤褐色粒を多く含む。黒色粒を少量含む。	内外面に施釉。高台内蛇の目輪割ぎ。	明オリーブ灰色	なし。	見込みに一条の轡線を隠らせ、文様を施しているようであるが不明である。外面にも、草花文?を施す。	M-16 Ⅱd (粘土質)層 30/40



第31圖 (圖版41) 白磁・青磁

第25表 青磁観察一覧②

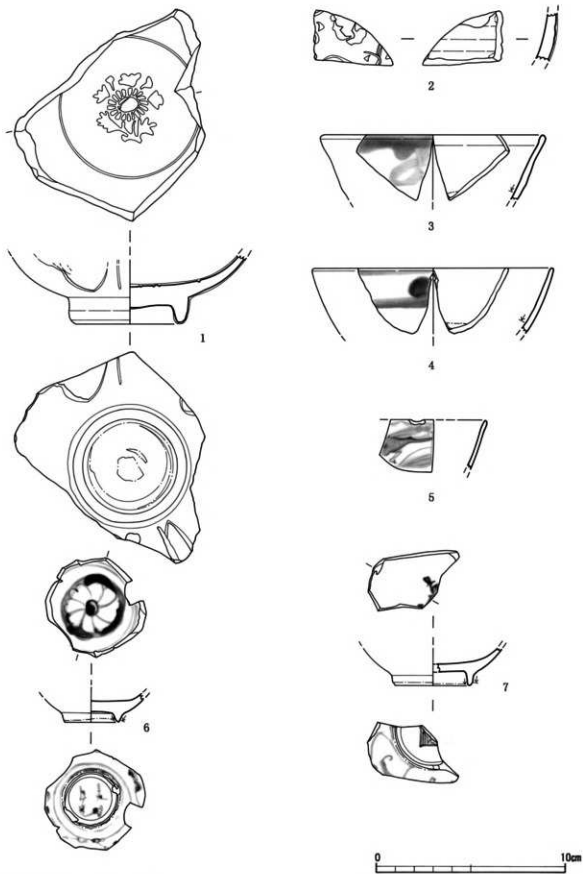
押図番号 図版番号	器種 部位	口径 器高 高台径 (mm)	素地	施釉	釉調	貫入	備考	出土地点
第32図 1 図版42の1	碗 底部	— — 63	灰白色で微粒子。赤褐色粒を多く含む。	内外面に施釉。高台内を蛇の目釉割ぎ。	オリーブ灰色	なし。	見込みに一条の圈線を廻らせ、陰印花? (スタンブ) を施す。外面には、草花文? を施す。	O-13 IIc層
第32図 2 図版42の2	瓶 胴部	— — —	灰白色で粗粒子。黒色粒・赤褐色粒を多く含む。	外面に施釉。内面は無釉。	明オリーブ灰色	粗い貫入あり。	内面は、皸皸痕が残っており、外面には磨擦きによる弧状の文様を施す。	K-9 II d層 0/10

第26表 青花観察一覧①

( ) 内は推定

押図番号 図版番号	器種 部位	口径 器高 高台径 (mm)	素地	施釉	貫入	器形・文様	備考	出土地点
第32図 3 図版42の3	碗 口縁部	(120) — —	灰白色で粗粒子。黒色粒が散見される。	内外面に施釉。胴下部は無釉。	なし。	直口口縁である。外面口唇部に異状磨草文? が施される。	福州周辺	N-12 北側畦 IIc層 0/10
第32図 4 図版42の4	碗 口縁部	(128) — —	灰白色で粗粒子。黒色粒が散見される。	内外面に施釉。胴下部は無釉。	なし。	直口口縁である。外面口唇部の上部と下部に一本の圈線を廻らせ、その中に筆書きの文様が施される。	福州周辺	K-14 西側畦 IIc層 10/20
第32図 5 図版42の5	碗 口縁部	— — —	白色で微粒子。茶褐色粒が多少、黒色粒が極少量散見される。	内外面に施釉。	なし。	直口口縁である。外面口唇部に一条の圈線が施され、胴部に皸皸の文様が施される。		L-12 II d層 0/10
第32図 6 図版42の6	小碗 底部	— — 29	灰白色で微粒子。	内外面に施釉。壘付のみ露胎。	なし。	見込みに、二条の圈線を施しその中に施し花文を施す。外面胴部に牡丹唐草を、高台内に二条の圈線を施し、高台内に「大明年造?」を施す。	18世紀～19世紀頃	L-15 II d層 40/50 M-14 II d層 30/40 N-14 IIc層 20/30
第32図 7 図版42の7	小碗 底部	— — (40)	灰白色で微粒子。	内外面に施釉。壘付のみ露胎。	なし。	外面胴部に仙芝祝寿文を記し、見込みに花卉文? を施す。高台内に四角銘款を施す。	景徳鎮窯系 18世紀～19世紀	表土割ぎ





第32图 (图版42) 青磁·青花

第27表 青花観察一覧②

( ) 内は推定

押図番号 図版番号	器種 部位	口径 器高 高台径 (mm)	素地	施釉	貫入	器形・文様	備考	出土地点
第33図 1 図版43の1	皿 底部	— — (97)	灰白色で微粒子。	内外面に施釉。 畳付のみ露出。	なし。	外面胴部に文様を施し、高台脇に三条の圓線を施す。見込みに二条の圓線、花卉文を施す。高台は、断面三角形である。	15世紀末～ 16世紀中葉	J-15 IIc圖 10/20 K-16 II d圖 10/20
第33図 2 図版43の2	皿 底部	— — (63)	黄白色で粗粒子。	内外面に施釉。 畳付のみ露出。	粗い貫入あり。	外面胴部に唐草文を配し、高台脇に二条の圓線を施す。見込みに二条の圓線を施し、玉取獅子文を施す。高台は、断面三角形である。	15世紀末～ 16世紀中葉	O-10 北側トレンチ IIIb圖 地山直上
第33図 3 図版43の3	瓶 底部	— — (54)	灰白色で微粒子。	内外面に施釉。 畳付および高台内露出。	なし。	底部にラム式蓮井文を施す。	16世紀がもっと 古いかも?	M-11 IIc・II d圖 30/40 L-12 IIc・II d圖 20/30
第33図 4 図版43の4	大鉢 胴部	— — —	黄白色で粗粒子。	内外面に施釉。	粗い貫入あり。	外面胴部に丸文?を施す。 内面に一条の圓線を施す。	福建・広東系。	I-10 攪乱 西側トレンチ

第28表 青磁染付観察一覧

( ) 内は推定

押図番号 図版番号	器種 部位	口径 器高 高台径 (mm)	素地	施釉	貫入	器形・文様・釉色	備考	出土地点
第33図 5 図版43の5	皿 口縁～ 胴部	(90) — —	灰白色で粗粒子。茶褐色粒が散見される。	内外面に施釉。	なし。	胴部から立ち上がる皿で、口縁部は直口である。外面に薄い青色の釉が掛かり、内面には呉須で花唐草文が施され、その上から透明釉を施している。	16世紀～	J-7 II d圖 0/10 攪乱

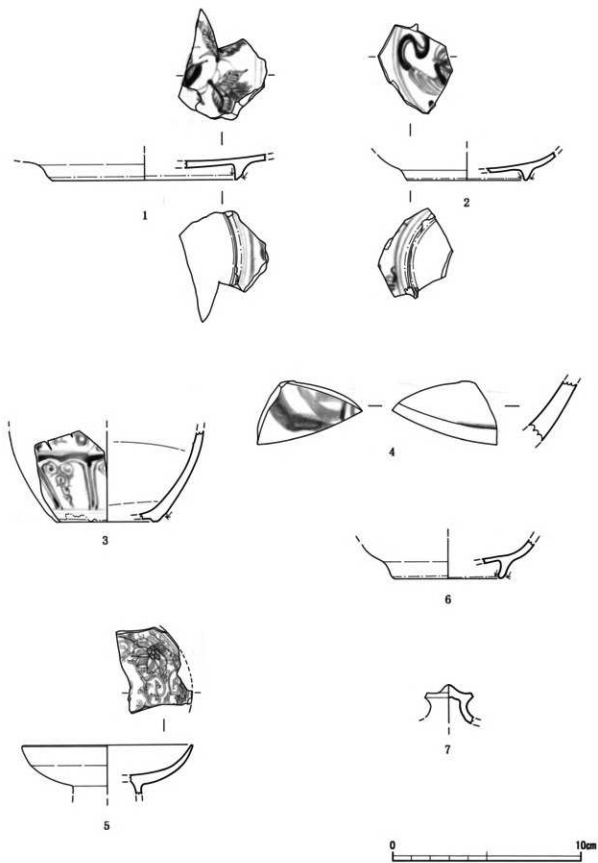
第29表 瑠璃釉観察一覧

( ) 内は推定

押図番号 図版番号	器種 部位	口径 器高 高台径 (mm)	素地	施釉	貫入	器形・文様・釉色	備考	出土地点
第33図 6 図版43の6	碗 底部	— — (58)	灰白色で微粒子。	内外面に施釉。 畳付のみ露出。	なし。	胴部から堰かのように立ち上がる碗である。外面に瑠璃釉を施し、内面と高台内には透明釉を施す。		L-12 II d圖 30/40 40/50

第30表 タイ産半練観察一覧①

押図番号 図版番号	器種 部位	直径 高さ 柄み径 (mm)	胎土	施釉	貫入	器形・文様	備考	出土地点
第33図 7 図版43の7	蓋 頂部	— — 26	灰色で微粒子。白色粒子・褐色粒子・黒色粒子が多量に散見される。			蓋の器壁は落とし蓋で、柄み部分の残存である。柄みの形態は、いわゆる宝珠形に類似している。頂部・首部は指撫による磨きがみられる。	14世紀後半 ～16世紀	L-9 II d圖 10/20



第33圖（図版43） 青花・青磁染付・瑠璃釉・タイ産半練

第31表 白磁観察一覧②

( ) 内は推定

押図番号 図版番号	器種 部位	口径 器高 高台径 (mm)	素地	施釉	釉調	貫入	備考	出土地点
図版44の1	碗 口縁部	— — (128)	灰白色で微粒子。黒色粒・赤褐色粒を多く含む。	内外面に施釉。	灰白色。	細かい貫入あり	僅かに外反する口縁で、口唇部は舌状に成形される。	L-14 Ⅱd層 10/20
図版44の2	碗 口縁部	— — —	灰白色で微粒子。黒色粒を多少含む。	内外面に施釉。	灰白色。	なし。	無文外反口縁である。	K-15 北館畦 Ⅱd層 0/10
図版44の3	碗 口縁部	— — —	灰白色で微粒子。黒色粒・赤褐色粒を多く含む。	内外面に施釉。	灰白色。	なし。	無文外反口縁である。	L-12 Ⅱd層 30/40
図版44の4	小碗 口縁部	— — —	灰白色で微粒子。黒色粒を多少含む。	内外面に施釉。	乳白色。	なし。	外反口縁である。型造りのようである。	K-13 Ⅱd層 20/30
図版44の5	小碗 口縁部	— — —	灰白色で微粒子。赤褐色粒を多少含む。	内外面に施釉。	乳白色。	なし。	外反口縁である。型造りのようである。	L-7 Ⅱc・Ⅱd層 0/10
図版44の6	皿 底部	— — (106)	灰白色で微粒子。赤褐色粒を多く含む。	曇付を露胎。	乳白色。	なし。	器厚は薄手である。高台断面は逆三角形で、曇付は細かい。曇み付けに砂が少量付着する。	L-8 Ⅱd層 10/20
図版44の7	小杯 底部	— — 20.5	灰白色で微粒子。	曇付を露胎。	乳白色。	細かい貫入あり。	曇付は露胎となり、砂?が付着する。高台断面は逆三角形となり、高台内に型造りのシワが残る。	M-19 覆瓦 0/10

第32表 青磁観察一覧③

( ) 内は推定

押図番号 図版番号	器種 部位	口径 器高 高台径 (mm)	素地	施釉	釉調	貫入	備考	出土地点
図版44の8	碗 口縁部	— — —	灰白色で微粒子。黒色粒を少量含む。	内外面に施釉。	オリーブ灰色	内外面に、粗い貫入あり。	無文の、外反口縁の碗である。	M-10 Ⅱc・Ⅱd層 10/40
図版44の9	碗 口縁部	— — —	灰白色で粗粒子。黒色粒・赤褐色粒を多く含む。	内外面に施釉。	オリーブ灰色	なし。	直口縁で外面に蓮井文を施す。蓮井の剣先が円筒化し消滅する。幅0.8cm程の蓮井を描く。	K-13 Ⅱd層 0/10
図版44の10	碗 底部	— — (44)	白色で粗粒子。黒色粒・赤褐色粒を多く含む。	内外面に施釉。高台内側の半ばまで施釉され、高台内は無釉である。	明オリーブ灰色	内外面に、粗い貫入あり。	高台の脚が高く、面取される。	M-16 Ⅱc・Ⅱd層 20/30
図版44の11	碗 底部	— — 62	灰白色で微粒子。赤褐色粒を多く含む。	内外面に施釉。高台内を蛇の目軸割ぎ。	明オリーブ灰色	内外面に、粗い貫入あり。	見込みで一糸の墨線を通らせ、印花文を施す。	表探

第33表 青磁観察一覧④

( ) 内は推定

押図番号 図版番号	器種 部位	口径 器高 高台径 (mm)	質地	施釉	釉調	貫入	備考	出土地点
図版45の1	皿 口縁部	(120) — —	灰白色で微粒子。赤褐色粒を多く含む。	内外面に施釉。	オリーブ灰色	なし。	口折れ皿である。内面から露上面へ折れる部分が丸みを持ち、唇部は狭い。外体面には蓮弁文？が描かれている。	M-11 IIc・II d層 0/10
図版45の2	皿 口縁部	(132) — —	灰白色で微粒子。赤褐色粒を多く含む。黒色粒を少量含む。	内外面に施釉。	オリーブ灰色	なし。	唇折れ外反皿で、蓮弁の文様を施す。	表探
図版45の3	皿 底部	— — —	灰白色で粗粒子。赤褐色粒を多量に含む。黒色粒を少量含む。	内外面に施釉。 高台内無釉。	明オリーブ灰色	内外面に、粗い貫入あり。	見込みに、荷花？の陰印花が施される。	L-9 II d層 0/10
図版45の4	盤 底部	— — —	灰白色で微粒子。赤褐色・黒色粒を少量含む。	内外面に施釉。 高台内を蛇の目釉割ぎ。	オリーブ灰色	なし。	唇厚は、2.2cmで厚みがある。	L-15 II d層 10/20

第34表 青花観察一覧③

( ) 内は推定

押図番号 図版番号	器種 部位	口径 器高 高台径 (mm)	質地	施釉	貫入	器形・文様	備考	出土地点
図版45の5	碗 口縁部	(120) — —	灰白色で微粒子。茶褐色粒が散見される。	内外面に施釉。	なし。	直口口縁である。外面口唇部を肥厚させ、上部と下部に一本の圓線を施し、その中に波濤文が施される。内面口唇部に、一本の圓線を施させる。	清代	N-11 北トレンチ II c層 10/20
図版45の6	碗 口縁部	(132) — —	白色で微粒子。茶褐色粒が多少、黒色粒が極少量散見される。	内外面に施釉。	なし。	直口口縁である。外面口唇部に二条の圓線を施され、胴部に花卉唐草文？が施される。	清代	表土割ぎ
図版45の7	碗 口縁部	— — —	白色で微粒子。茶褐色粒が多少、黒色粒が極少量散見される。	内外面に施釉。	なし。	外反口縁である。外面口唇部に三条の圓線を施し、下部に寿字文が施される。		N-8 II c層 10/20
図版45の8	碗 口縁部	— — —	灰白色で粗粒子。黒色粒が散見される。	内外面に施釉。	なし。	外反口縁である。外面口唇部に一条の圓線を施し、下部に唐草文？が施される。内面口唇下部に波濤文を施す。		N-10 北側溝 III a層 10/20
図版45の9	碗 底部	— (58) —	灰白色で微粒子。茶褐色粒が散見される。	畳み付けのみ無釉。	なし。	見込みに牡丹文？を描く。外面高台縁に2条の圓線を施し、外面腹部には芭蕉文が施される。	15世紀～16世紀	M-16 II d層 0/10
図版45の10	碗 底部	— — —	灰白色で粗粒子。茶褐色粒が散見される。	内外面に施釉。	なし。	見込みに牡丹文？を描く。外面高台縁に3条の圓線を施し、外面腹部には芭蕉文が施される。	15世紀～16世紀	M-9 II c・II d層 60/70
図版45の11	碗 底部	— — —	灰白色で粗粒子。黒色粒が散見される。	畳み付けのみ無釉。	なし。	見込みに二条の圓線を施らせる。外面腹部には、蓮弁文が施される。		K-14 II c・II d層 0/10
図版45の12	碗 底部	— — 59	灰白色で微粒子。茶褐色粒が散見される。	畳み付けのみ無釉。	なし。	外面高台に2条の圓線が施され、腹部には蓮弁文が施される。高台内に、和風の銘を施す。		表探

第35表 青花観察一覧④

( ) 内は推定

挿図番号 図版番号	器種 部位	口径 高さ 高台径 (mm)	素地	施釉	貫入	器形・文様	備考	出土地点
図版46の1	小瓶 口縁部	— — —	白色で微粒子。 茶褐色粒が多少、 黒色粒が極少量散見さ れる。	内外面に施釉。	なし。	反外口縁である。外面口 唇部に一条の隠線を施し、 胴部に馬土文が描かれて いる。		N-11 IIc層
図版46の2	小瓶 口縁部	(60) — —	灰白色で微粒 子。	内外面に施釉。 口唇部は、無釉。	なし。	直口口縁である。外面に 寿字文が施される。	16世紀後半	M-13 IIc層 0/10
図版46の3	皿 口縁部	(205) — —	黄白色で粗粒 子。	内外面に施釉。	粗い貫入あ り。	腰折れ直口皿である。口 唇部外面に一条、内面に 筆書きの文様が施される。		O-13 IIa層 10/20
図版46の4	皿 底部	— (82)	灰白色で微粒 子。	内外面に施釉。 畳付のみ露出。	なし。	外面胴部に遊草文?を配し、 見込みに二条の隠線を施し、 花卉文を施す。高台は、断 面三角形である。	15世紀末～ 16世紀中葉	L-11 II d層 10/20
図版46の5	皿 底部	— (86)	黄白色で粗粒 子。	内外面に施釉。 畳付のみ露出。	粗い貫入あ り。	外面胴部に遊草文?を配し、 見込みに二条の隠線を施し、 十字花文を施す。高台は、 断面三角形である。	15世紀末～ 16世紀中葉	L-11 II d層 20/30
図版46の6	皿 底部	152 — 67	灰白色で粗粒 子。茶褐色粒 が散見される。	内外面に施釉。 畳付のみ露出。	なし。	口唇部に二条の隠線を施 し、見込みに鳥花文?を 施す。外面腹部の立ち上 がりにも二条の隠線を施す。 高台内に、二条の隠線を 施し、合の印を施す。		表土剥ぎ
図版46の7	小杯 底部	— 18	灰白色で微粒 子。	畳み付け、高台 内無釉。	なし。	見込みに、一条の隠線を 施し、元の銘を施す。	16世紀～ 17世紀前半	P-9 II b層

第36表 褐釉陶器観察一覧

( ) 内は推定

挿図番号 図版番号	器種 部位	口径 高さ 底径 (mm)	素地	施釉 釉色	器形・文様	備考	出土地点
図版46の8	杵 口縁部	(206) — —	灰白色で、白色粒子・褐色粒 子が多量に散見される。	内外面に施 釉。黄褐色。	口唇部は僅かに凹がめぐ り、内面は微凸に彫らむ。		K-9 北御咄 II d層 0/10
図版46の9	杵 底部	— — (190)	赤褐色で、大粒(1mm～2mm) の透明粒子(石英)・白色粒子・ 褐色粒子が多量に散見される。	なし。	僅かに上げ底状となる。 内器面には、轆轤痕が明 瞭に残る。		N-15 北御咄 II c層 0/10
図版46の10	小杵 底部	— — 80	橙褐色で、透明微粒子(石英)・ 白色微粒子・褐色粒子が多量に 散見される。	なし。	逆八の字状に立ちあがる。 内器面には、轆轤痕が明 瞭に残る。		N-15 北御咄 II d(上部)層
図版46の11	鉢 口縁部	— — —	赤褐色で、透明微粒子(石英)・ 白色微粒子・褐色粒子が多量に 散見される。	なし。	口縁部は内彎し、口唇部 を平坦に整える。外面に 轆轤筋が残る。		L-9 II d層 0/10

第37表 タイ産半練観察一覧②

( ) 内は推定

挿図番号 図版番号	器種	直径 高さ 筒み径 (mm)	胎土	器形・文様	備考	出土地点
図版46の12	蓋 端部	(130) — —	焼成された内外面は淡褐色とな り、内側は灰色で微粒子である。 透明粒子(石英)・白色粒子・ 褐色粒子・黒色粒子が多量に散 見される。	蓋の器態は落とし蓋で、蓋端部の残存 である。	14世紀後半 ～16世紀	M-13 II c層 10/20

## 第5節 本土産陶磁器

鏡水箕隅原C遺跡から出土した本土産陶磁器の中から特徴的なものを報告する（第34～36図 図版47～49）。

全体として時期的には近代（19世紀後半～戦後）で、623点（磁器600点、陶器23点）を数えた（第38～40表）。磁器の産地は砥部・肥前系・瀬戸美濃系が確認できた。陶器の産地は珉平焼、内野山、薩摩焼、唐津であった。器種としては碗・小碗・皿・杯・蓋等が得られた。量的には碗が一番多く全体の約45%を占め、以下皿、小碗と続くが、僅かながら急須・香炉・瓶などの袋物も出土した。今回は細片が多く器種不明が1/3を占めた。この構成は鏡水箕隅原C遺跡から600mほど南に位置する鏡水土砂場原A遺跡（那覇市：近世・近代）とよく似た傾向にあると思われた。

確認できた技法は、型紙染付け、銅版刷り、印判、クロム青磁等であった。型紙染付けは特に砥部産（いわゆるスカンマカイ）が多く見られた。また、生産者別標記符号の付された碗の底部が1点出土した（第36図10 図版49の10）。岐950とあり『土岐津町誌』史料編によると駄知町 加藤鳩次郎氏の作成によるものということが確認できた。

鏡水箕隅原C遺跡から出土した本土産陶磁器は鏡水土砂場原A遺跡に比べて、産地が九州から関西まで広範囲であるように思われる。主な本土産陶磁器は、第36図 図版49に図示した。なお、第44表に個々の資料の特徴を示す。

### 本土産磁器集中部について

L-12グリッドII a層から本土産磁器が集中して出土した（第34・35図 図版47・48）。中でも砥部焼（いわゆるスカンマカイ）が一番多かった。外面に同一の型紙が使われていてなおかつ器形も変わらないものでも、見込みの模様は3パターン確認できた。また、見込みの模様に合わせてサイズにやや違いが見られた（第41表）。端反り碗であることから、古い時期のものではないと思われる。第42・43表に個々の資料の特徴を示す。

### 珉平焼について

L-16グリッド埋土から珉平焼（淡路島産）が1点出土している（第36図17 図版49の17）。珉平焼は、江戸時代後期の文政年間（1818～1830年）に三原郡伊賀野村（現、南淡町伊賀野）で賀集珉平（1796～1871年）が創業した京風の流れを汲むやきものである。

賀集珉平は、京焼の陶工尾形周平（初代）と出会い、池の内村（現 洲本市城戸）での白土の発見などをきっかけに製陶業を始めた。和物の仁清写彩色や鯉焼から当時流行の中国系の青花磁・絵高麗・白高麗・青磁・赤絵・紫泥・白泥、象嵌焼、朝鮮模製、按南・交趾模製、ヨーロッパ系の紅毛彩色など多種多様な焼成を手がけ、品種も茶器・酒器・花器・置物・その他の日常雑器にまで広くおよんでいた。

珉平の死後、その子力太と甥の三平が引き継いだ製陶業は、明治16（1883）年、「淡陶社」として会社組織となり、池ノ内土を原料とする食器・花器・茶器などの軟質陶器を生産し、販売は海外へも広がり、さらに発展を遂げていくことになるが、タイルの生産高の増加と反比例するように大正末から昭和初期に軟質陶器の生産は廃され、淡陶社の経営はタイル製造の専門会社へと替わっていった。淡陶社は明治26（1893）年、「淡陶株式会社」と改め、昭和60（1985）年には「ダントー株式会社」に社名を変更し、現在に至っている。





第39表 本土産磁器出土一覽②

種類	出土地	I	IIa	IIc	II d	IIc α	II d	IIIa	岩盤直上	表面清掃	表採	清掃	カケラン	西壁	西壁清掃	南壁清掃	北トレンチ 清掃	北トレンチ N-11	本土産 磁器 集中部	計	合計	
									M-17			G-10 P-10		I-6	J-19	J-12 O-7						
磁器の (文様不明)	完(口/底)																			5	5	
	口		4	1					1		1			1						7	15	
	胴		1	1	1									1						3	7	
	底		4																	1	5	
	ほば先																					
	小	口		2							1											3
	胴																					
	底							1	1													4
	口		1								1											1
	胴										1											3
	底		2	1																		2
	口		2																			2
	胴		1																			1
	底																					2
	口		1																			1
	胴																					1
	底											1										1
	口																					1
	胴																					1
	底																					1
	口																					1
	胴																					1
底																					1	
口																					1	
胴																					1	
底																					1	
口																					1	
胴																					1	
底																					1	
口																					1	
胴																					1	
底																					1	
口																					1	
胴																					1	
底																					1	
口																					1	
胴																					1	
底																					1	
口																					1	
胴																					1	
底																					1	
口																					1	
胴																					1	
底																					1	
口																					1	
胴																					1	
底																					1	
口																					1	
胴																					1	
底																					1	
口																					1	
胴																					1	
底																					1	
口																					1	
胴																					1	
底																					1	
口																					1	
胴																					1	
底																					1	
口																					1	
胴																					1	
底																					1	
口																					1	
胴																					1	
底																					1	
口																					1	
胴																					1	
底																					1	
口																					1	
胴																					1	
底																					1	
口																					1	
胴																					1	
底																					1	
口																					1	
胴																					1	
底																					1	
口																					1	
胴																					1	
底																					1	
口																					1	
胴																					1	
底																					1	
口																					1	
胴																					1	
底																					1	
口																					1	
胴																					1	
底																					1	
口																					1	
胴																					1	
底																					1	
口																					1	
胴																					1	
底																					1	
口																					1	
胴																					1	
底																					1	
口																						

第40表 本土産陶器出土一覧

出土地 種類		I	II a	II c	II d	II c・II d	表面清掃	埋土	北トレン 子清掃	カクラン	清掃	合計	
								L-16	N-12		H-11		
陶	碗					1	1					2	
	口												
	胴			1								1	
	底	1										1	
	皿				1							1	
	口												
	胴					1			1				2
	底												
	蓋							2					2
	頭部												
	胴							1					2
	下部(口)		1										
器	壺												
	口												
	胴												
	底										1	1	
	すり鉢							1					
	口												
胴													
底													
袋物		1										1	
口													
胴									1	2		9	
底				2	2	1							
器種不明		1											
口													
胴													
底													
合計		3	1	4	3	2	5	1	1	2	1	23	

今回出土した珉平焼の角皿破片は明治20年代後半から40年代までに多く生産され、日本をはじめアジアへ向けて広域に輸出されたものであることが報告されているので、県内への流入も同時期だったのではないかと考えられる。今後、類例の報告が待たれる。なお、那覇市の「垣花村跡」でも珉平焼の瓶等を確認することができた。

#### 引用文献

註1 兵庫の遺跡49号 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 2003

註2 『珉平焼窯跡』兵庫県文化財調査報告書第284冊 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 2005

#### 参考文献

『垣花村跡』那覇市文化財調査報告書第78集 那覇市教育委員会 2009

『鏡水土砂場原A遺跡』那覇市文化財調査報告書第83集 那覇市教育委員会 2010

第41表 本土産磁器集中部出土の砥部焼計測一覧

番号	残存状況	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	文 様	備 考
1	完	13.60	6.60	4.96	見込み：松竹梅。口縁内側：三角形連続文様。外面：三角形連続文様で枠を表現、中に花文、高台脇に三角形文。	針ハマ痕なし
2	ほぼ完	13.85	6.70	4.80	＃	＃
3	完	14.00	6.25	4.88	＃	針ハマ痕あり
4	完	13.65	6.60	4.87	＃	＃
5	ほぼ完	13.70	6.50	4.96	＃	＃
6	完	13.80	6.55	5.00	＃	＃
7	完	13.60	6.70	4.94	＃	＃
8	完	13.60	6.40	4.88	＃	＃
9	完	13.60	6.00	5.24	＃	＃
10	完	13.70	6.40	4.84	＃	＃
11	完	14.00	6.50	5.02	＃	＃
12	完	13.20	5.95	4.90	＃	＃
13	ほぼ完	13.60	6.55	4.85	＃	＃
14	完	13.00	6.50	4.85	＃	＃
15	完	13.50	6.35	4.87	＃	＃
16	完	13.85	6.60	4.73	＃	＃
17	完	13.60	6.30	4.87	＃	＃
18	完	14.10	6.70	4.85	＃	＃
19	完	13.60	6.05	4.93	見込み：やや丁寧な松竹梅。口縁内側：三角形連続文様。外面：三角形連続文様で枠を表現、中に花文、高台脇に三角形文。	針ハマ痕あり
20	完	13.95	6.10	5.18	見込み：松竹梅。口縁内側：三角形連続文様。外面：三角形連続文様で枠を表現、中に花文、高台脇に三角形文。	＃
21	完	13.40	6.30	4.77	見込み：五弁花。口縁内側：三角形連続文様。外面：三角形連続文様で枠を表現、中に花文、高台脇に三角形文。	針ハマ痕なし
22	完	13.20	6.00	4.75	＃	＃
23	ほぼ完	12.90	6.25	4.56	＃	＃
24	ほぼ完	13.20	6.20	4.55	＃	＃
25	完	13.20	5.80	4.43	＃	＃
26	完	13.10	6.05	4.93	＃	針ハマ痕あり
27	完	13.35	6.10	5.02	＃	＃
28	完	13.20	5.80	4.58	＃	＃
29	完	13.50	5.85	4.57	＃	＃
30	完	13.00	5.80	4.41	＃	＃
31	完	13.30	6.30	4.88	＃	＃
32	完	13.20	6.20	4.80	＃	＃
33	完	13.60	6.10	5.07	＃	＃
34	完	13.45	6.25	4.98	＃	＃
35	ほぼ完	13.00	6.05	4.87	＃	＃
36	1/2破損	13.20	5.90	5.00	＃	＃
37	底部破損	13.50	-	-	見込み：欠失のため不明。口縁内側：三角形連続文様。外面：三角形連続文様で枠、中に花文。	A口縁部：7個 B胴部：22個 C底部：10個
38	ほぼ完	13.80	5.80	4.97	見込み：松竹梅。口縁内側：花文、寿文(?)、四方禪文(?) 外面：花文、寿文(?)、四方禪文(?)、高台脇に三角形文。	針ハマ痕あり
39	ほぼ完	12.90	6.00	4.95	＃	＃
40	ほぼ完	13.10	6.00	5.10	＃	＃
41	ほぼ完	13.10	5.95	5.02	＃	＃
42	ほぼ完	13.30	6.00	4.94	＃	＃
43	完	13.10	5.95	4.70	見込み：松竹梅。口縁内側：花文、寿文(?)、四方禪文(?) 外面：花文、寿文(?)、四方禪文(?)、高台脇に三角形文。	針ハマ痕あり D口縁部：1個 E胴部：2個
44	2/3破損	14.00	3.20	-	見込み：欠失のため不明。口縁内側：五弁花連続文。外面：五弁花、磨草文。	F口縁部：1個

(口径・器高・底径は平均値を示した。)

第42表 本土産磁器集中部出土遺物観察一覧①

挿図番号 図版番号	器種	器形	残存部	口径 器高 底径 (cm)	素地の色 調/釉の 発色	施釉・釉色・ 技法	文様等の特徴			産地	年代	備考
							外面	内面	見込み			
第34図 1 図版47の1	碗	外反	完形	13.6 6.5 4.8	完形のため 不明/やや 青みがかる				松竹梅(松 ×3、竹× 2、梅×2)。	砥部	大正	型紙は内外面 ともに3枚使 用している。 見込みには強 い針ハマの痕 が見られる。
第34図 2 図版47の2	碗	外反	完形	13.5 5.9 4.5	完形のため 不明/やや 青みがかる	機械ロク 口成型。 コバルト での型紙 染付け後、 全体に透 明釉を掛 ける。曇 み付けの み釉を剥 ぎ取る。	胴部中央には8 個の三角形で円 を作り、中心に 菊花を配する。 その周囲を点描 の三角形と逆三 角形で囲う。高 台周囲には酒線 的な花(梅?) を並べる。胎土 にはロクロ目が 顕著に残る。	胴部に二条の圓 線を引いた後、 口縁部に合わせ て点描の逆三角 形を配し、間に 花(梅?)を描 く。内面に型紙 のずれはほとん ど見られない。 胎土にはロクロ 目が顕著に残り、 一部には釉の溜 りが見られる。	松竹梅(松 ×3、竹× 2、梅×3)。	砥部	大正	型紙は内外面 ともに3枚使 用している。 外面は型紙の 重なりが顕著。 見込みには強 い針ハマの痕 が見られる。
第34図 3 図版47の3	碗	外反	完形	14.0 6.2 5.1	完形のため 不明/やや 青みがかる				五弁花	砥部	大正	型紙は内外面 ともに3枚使 用している。 見込みには強 い針ハマの痕 が見られる。
第34図 4 図版47の4	碗	外反	完形	13.1 6.0 4.6	完形のため 不明/やや 青みがかる	機械ロク 口成型。 コバルト での型紙 染付け後、 全体に透 明釉を掛 ける。曇 み付けの み釉を剥 ぎ取る。	四方禪を全体に 散らし、三箇所 に寿と菊花にト ンボを飛ばす。 高台周囲には酒 線的な花を並べ る。	口縁部に沿って 四方禪と菊花と 寿を等間隔に並 べる。胎土には ロクロ目が顕著 に残る。	松竹梅(松 ×3、竹× 2、梅×2)。	砥部	大正	型紙は内外面 ともに3枚使 用している。 外面は型紙の 重なりが顕著。 見込みには強 い針ハマの痕 が見られる。



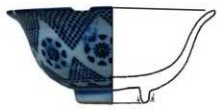
1



1



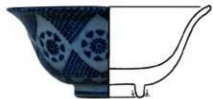
1



2



1



3



1



4

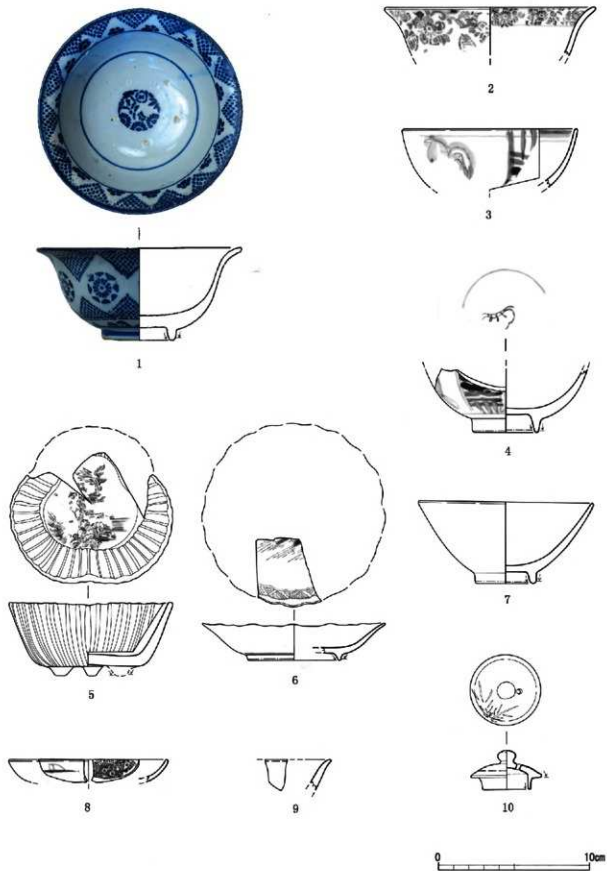


第34圖 (圖版47) 本土産磁器集中部出土遺物①

第43表 本土産磁器集中部出土遺物観察一覧②

( ) 内は推定

採掘番号 図版番号	器種	器形	残存部	口径 器高 底径 (cm)	素地の色 調/釉の 発色	施釉・釉色・ 技法	文様等の特徴			産地	年代	備考
							外面	内面	見込み			
第35図 1 図版48の1	碗	外形	外形	13.6 6.1 4.9	完形のため 不明/やや 青みがかる	機械口ク ロ成型。 コバルト での型紙 染付け後、 全体に透 明釉を掛 ける。曇 み付けの み釉を剥 ぎ取る。	胴部中央には8 個の三角形で円 を作り、中心に 菊花を配する。 その周囲を点描 の三角形と逆三 角形で囲う。高 台周囲には直線 的な花(梅?) を並べる。胎土 には口ク口目が 顕著に残る。	胴部に二条の圓 線を引いた後、 口縁部に合わせ て点描の逆三角 形を配し、間に 花(梅?)を描 く。胎土には口 ク口痕が顕著に 残る。	松竹梅。 中央に梅 の枝が延 びる。	砥部	大正	型紙は内外面 ともに3枚使 用している。 外面は型紙の 重なりが顕著。 見込みには強 い針ハマの痕 が見られる。 内外面とも型 紙と圓線に重 なりが見られ る。
第35図 2 図版48の2	碗	外反	口縁部	14.0 — —	薄灰色微粒 子/青みが かる	機械口ク ロ成型。 コバルト での型紙 染付け後、 全体に透 明釉を掛 ける。	全体に唐草文と 梅を配する。	口縁部に沿って 梅花を配する。	—	砥部	大正	—
第35図 3-4 図版48の3-4	碗	直口	口 高台	11.6 (5.9) 4.4	白色微粒子 /青みがかる	鈍込み成 型。コバ ルト使用。 ゴム印と 手描きの 併用。	松とツルを描く	口縁部に沿って 二重の圓線をめ ぐらす。	ゴム印に よる松	瀬戸 美濃	大正	同一個体
第35図 5 図版48の5	小鉢	—	ほぼ 完形	10.7 4.6 4.2	白色微粒子 /薄い青	鈍込み成 型で三つ 葉を模る。 多色の銅 版転写。	全体に型による 縦じまが入る。 底部には3足。	絵付け無し。	山水画?	瀬戸 美濃	—	—
第35図 6 図版48の6	小皿	—	口 高台	12.2 2.4 6.2	白色微粒子 /やや青み がかる	鈍込み成 型による 波状口縁。 黒色銅版 転写。	高台に沿ってコ バルトによる2 本の圓線。	口縁部に沿って、 龍目。	不明	瀬戸 美濃	昭和	—
第35図 7 図版48の7	碗	直口	完形	11.6 5.5 4.0	完形のため 不明/濃緑	鈍込み成 型後、濃 緑釉を掛 ける。	—	—	—	—	昭和	—
第35図 8 図版48の8	小皿	直口	口縁部	(10.6) —	白色微粒子 /やや青み がかる	鈍込み成 型後、コ バルトで の型紙染 付け。	口縁部にコバルト で手描唐草	菊花を描く	—	肥前	明治	—
第35図 9 図版48の9	不明	やや外反	口縁部	破片	茶褐色微粒 子/	茶化粧後 透明釉を かける。	—	—	—	沖縄 産	—	—
第35図 10 図版48の10	蓋	—	完形	つまみ 径1.2 2.6 3.2	白色微粒子 /やや黄味 がかる	銅版転写	草の転写が剥げ ている	—	—	瀬戸 美濃	大正	—



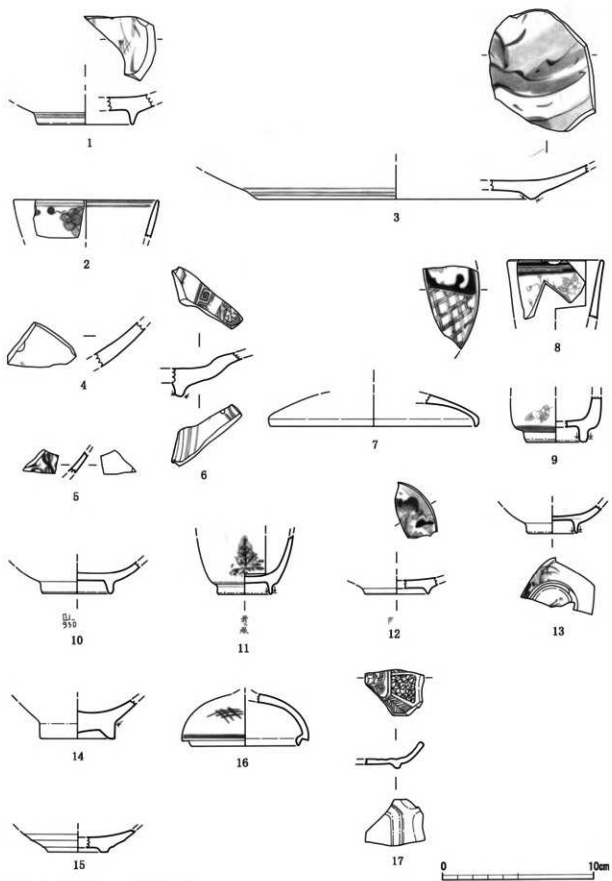
第35圖 (圖版48) 本土產磁器集中部出土遺物②

第44表 本土産磁器観察一覽

( ) 内は推定

押図番号 図版番号	種別	器種	残存部	口径 器高 底径 (cm)	素地の色調/ 釉の発色	施釉・釉色・ 技法	文様等の特徴		銘等	産地	年代	出土地点
							外面	内面				
第36図 1 図版49の1	染付	碗	底部	— — 6.8	灰色がかった 微粒子/やや 濁る	成型後、兵須で 手描きし、透明 釉をかける。	高台脇に2本の 圓線。	見込みに荒織文。	—	肥前系	17 世紀後半	M-12 東側アゼ IIc層 0/10
第36図 2 図版49の2	染付	碗	口縁部	9.6 —	白色微粒子/ 黄みがかる	鑄込み成型後、 コバルトで手描 き。全体に透明 釉を掛ける。	口縁部に沿って 二本の圓線と花 文様?	口縁部に沿って 二本の圓線をめ ぐらす。	—	肥前系	17 世紀後半	N-16 IIc層 0/10
第36図 3 図版49の3	染付	皿	高台	— — 18.6	灰色がかった 微粒子/青 みがかる	鑄込み成型後、 コバルト使用。	高台脇に間隔を あけて1本と2 本の圓線	風景画?	—	肥前系	19 世紀	表土剥ぎ
第36図 4 図版49の4	染付	鉢	胴部	破片	灰色がかった 微粒子/青 みがかる	鑄込み成型後、 コバルトで手描 き。全体に透明 釉を掛ける。	絵付けの一部が 残る	無し	—	肥前系?	—	I-7 カクラン 10/20
第36図 5 図版49の5	染付	小碗	胴部	破片	白色微粒子/ 薄い青	鑄込み成型後、 コバルトで手描 き。全体に透明 釉をかける。	染色体文	無し	—	瀬戸美濃	19 世紀中頃	J-20 カクラン 10/20
第36図 6 図版49の6	染付	皿	腰り 高台	破片	白色微粒子/ やや青みが かる	鑄込み成型後、 型紙染付けか印 判による施文。	何らかの文様あ り。	型紙か印版。見 込みに書文をめ ぐらせる。	—	瀬戸美濃	—	G-21 IIa層 0/10
第36図 7 図版49の7	近代磁器	蓋	かがり まで	— 2.1 14.0	褐色粗粒子/ やや青みが かる	機械口ロク成型 後、上絵の刷版 刷り。印判の併 用。	格子と花を描く。	無し	—	瀬戸美濃	19 世紀	I-16 IIc or II d 0/10 南アゼ
第36図 8-9 図版49の8-9	近代磁器	湯のみ	口の 高台	6.4 (3.3) 4.2	白色粗粒子/ やや青みが かる	鑄込み成型後、 赤絵の刷版刷り。	桜の花・枝葉。	無し	—	肥前系?	—	I-16 IIc or II d 0/10
第36図 10 図版49の10	近代磁器	碗	底部	— — 4.7	白色微粒子/ やや緑みが かる	鑄込み成型後、 緑釉。	グリーンスタン プによる統制番 号の押印。	無し	岐 950	—	—	N-9 表探
第36図 11 図版49の11	近代磁器	小碗	底部	— — 3.6	白色微粒子/ 青みがかる	鑄込み成型後、 多色の刷版刷り。 緑釉後、疊付け のみ釉剥ぎ。	樹木を描く。	無し	最上製	肥前系	—	M-16 IIc層 0/10
第36図 12 図版49の12	染付	皿	高台	— — 4.4	灰色がかった 微粒子/青 みがかる	鑄込み成型。コ バルト使用。ゴ ム印と手描きの 併用。	コバルトスタン プによる統制番 号の押印。	山水画?	あり(不明)	肥前系	—	J-7 40/50 カクラン
第36図 13 図版49の13	陶器	小碗	底部	— — 3.8	黄色粗粒子	手描きによる施 文後、透明釉を かける。	草木?	—	あり(不明)	—	—	I-8 0/10





第36圖 (圖版49) 本土產陶磁器

押図番号 図版番号	種別	器種	残存部	口径 器高 底径 (cm)	素地の色 調/釉の 発色	施釉・釉色・ 技法	文様等の特徴		銘 等	産 地	年 代	出土地 点
							外面	内面				
第36図 図版49の14	14 陶器	陶 碗	底 部	— — 5.0	淡黄白色の 粗粒子/緑青 色	曜ロク口成型後、 銅緑釉を掛ける。	高台脇まで施釉。	無し	—	唐 津 (内野山)	18 世 紀	I-15 東側アゼII (上部) 20/30
第36図 図版49の15	15 陶器	陶 皿	高 台	— — 4.0	赤褐色粗粒 子/暗緑色	曜ロク口成型後、 銅緑釉を掛ける。	横位の調整痕が 明瞭に見られる。 残存部は無釉。	無し	—	唐 津 ?	17 世 紀 後 半	L-15 III d層 0/10
第36図 図版49の16	16 陶器	陶 器	合 子 蓋	— — 7.0	こげ茶褐色 微粒子/暗茶 色	曜ロク口成型後、 透明釉を掛ける。	鉄絵を描く。縁 に沿って一糸の 墨線を引く。つ まみがあったと 思われる。	身の方に受けあ り	—	唐 津	—	G-21 II a層 0/10
第36図 図版49の17	17 陶器	陶 器	角 皿	— 1.75 —	白色粗粒子/ 山吹色	型作り成形。平 面形は花弁状。 高台は断面台形 状で低い。高台 曇み付けのみ釉 を剥ぎ取る。	無し	内面は型押しで 幾何学文とした 多様な線を組み 合わせた文様	—	淡 路	19 世 紀 後 半	L-16 埋土

## 第6節 銭貨

調査地区より完形品、破損品を合わせて18点の銭貨が得られた。内訳は有文銭6点、無文銭9点、近代銭1点、判読不能2点である。層序別に見ると、IIc・II d層より上層で有文銭が、IIc or II d層より下層で無文銭が多く見られる傾向にある。以下、有文銭・無文銭・近代銭に分けて概述する。なお、拓影は状態の良いものを掲載した(第37・38図 図版50)。各層ごとの出土一覧を第45表に、個々の詳細については第46～49表に示した。

有文銭は祥符通寶(若しくは元寶)1点、洪武通寶1点、寛永通寶(新・古)3点の4種類が確認された。そのうち3点磁気反応を示すものが得られた。

無文銭は孔の形状の違いから2種に大別し、II類より磁気反応を示すものが3点得られた。

I類 孔の形状が方形をしているもの。

1 厚さ約0.7mm

2 厚さ約0.9mm

3 厚さ約1.0mm

II類 孔の形状が円形をしているもの。

1 外径1.60cm、孔径0.63cmのもの。1点のみの出土である。

2 外径0.64～1.0cm、中央の孔と外径の幅が細くリング状のもの。

近代銭は明治20年銘の半銭が1点得られた。

### 参考文献

- ・永井久美男『日本出土銭総覧 1996年版』兵庫県埋蔵銭貨調査会 1996
- ・嶋谷和幸「中世の模倣銭生産—出土の銭鋳型を中心に—」『考古学ジャーナル』No.372 1994
- ・内間晴「第V章 第6節 銭貨」『銘苅古基群(II)』那覇市教育委員会 1999
- ・山里千春「第V章 第12節」『ナーチャー毛古基群』那覇市教育委員会 2000
- ・山里千春「第V章 第4節 銭貨」『銘苅古基群(III)』那覇市教育委員会 2001
- ・通貨の歴史研究会 他『わが国の歴史を映す日本の通貨』平成9年
- ・上原静「琉球国と銅銭」『出土銭貨からみた東シナ海と琉球史』出土銭貨研究会 2008

第45表 銭貨出土一覧

※ 銭名の○は欠損部分

層序	銭種	詳符 ○○	洪 ○○ 寶	○○ 寶	寛 永 通 寶		無 文 銭		判 読 不 能	半 銭	計
					古	新	I	II			
Q/10									1		1
I層 0/5									1		1
IIa層 0/10			1	1							2
IIa層 20/30										1	1
IIc層 0/10								2			2
IIc・II d 0/10					1	1					2
IIc・II d 20/30							1				1
II d層 0/10		1					1	1			3
II d層 10/20								1			1
II d層 30/40								1			1
IIIa層 0/10								1			1
清辨								1			1
表探			1								1
計		1	1	1	2	1	5	4	2	1	18

第46表 銭貨観察一覧①

※銭名の○は欠損部分、●は判読できないもの

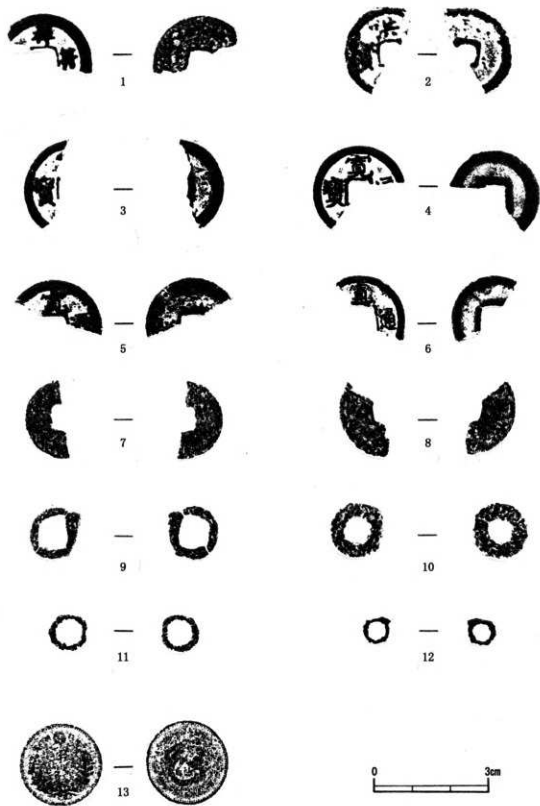
押図番号 図版番号	出土 地点	出土層序	銭貨名 (種別)	国名 初鋳年	法量 (cm・g)				残 存 率	状態・特徴
					外径	孔径	厚さ	重量		
	G-17	I層 0/5	〇〇〇〇	—	—	—	0.14	0.66	1/4	縁の輪郭が若干見られる。磁気反 応有り。
	I-8	0/10	●〇〇〇	—	—	—	0.13	0.61	1/4	銭文摩耗している一部「ハ」の字が 見える。縁の輪郭明確。背の縁の輪 郭弱いが強い。磁気反応有り。
第37図 1 図版50の1	L-11	II d層 0/10	祥符〇〇	北宋 1009	—	—	0.11	1.42	2/5	銭文摩耗している。背の輪郭かなり 弱い。祥符通貫または、祥符元 貫と推定される。
第37図 2 図版50の2	表探	—	洪〇〇貫	明 1368	2.35	0.44	0.15	1.66	1/2	銭文・縁の輪郭弱いが進行してい る。背の縁の輪郭やや弱い。洪武 通貫と推定される。
第37図 3 図版50の3	G-22	II a層 0/10	〇〇〇貫	—	—	—	0.13	1.20	1/2	縁の輪郭明確。銭文摩耗。背の縁 輪郭弱い。
第37図 4 図版50の4	K-11	II c・II d層 0/10	寛〇●貫 (古)	江戸 1636	2.40	0.48	0.12	2.12	2/3	縁の輪郭・銭文共に明確である。 背の縁の輪郭ははっきりしている。
第37図 5 図版50の5	I-19	II a層 0/10	寛〇●〇 (古)	江戸 1636	—	—	0.08	1.03	1/2	縁の輪郭・銭文少し摩耗している。 背の縁の輪郭弱い。
第37図 6 図版50の6	I-18	II c・II d層 0/10	寛〇通〇 (新)	江戸 1668	—	—	0.09	0.77	2/5	縁の輪郭・銭文共に明確である。背 の縁の輪郭弱い。磁気反応有り。

第47表 銭貨観察一覧②

押図番号 図版番号	出土地点	出土層序	銭貨名 (種別)	法量 (cm・g)				残 存 率	分類	状態・特徴
				外径	孔径	厚さ	重量			
	L-11	II d層 30/40	無文銭	1.80	0.86	0.07	0.71	破損	I-1類	両面とも平坦である。
	M-10	III a層 0/10	無文銭	—	—	0.09	0.46	1/2	I-2類	両面とも平坦である。
第37図 7 図版50の7	L-7	II c・II d層 20/30	無文銭	2.03	0.49	0.09	0.80	1/2	I-2類	両面とも平坦である。
第37図 8 図版50の8	G-19~22 H-19~22 I-19~22	清掃	無文銭	—	—	0.10	0.83	1/3	I-3類	錆跡がみられるが、縁の輪郭 が若干みられる。
第37図 9 図版50の9	L-11	II d層 0/10	無文銭	1.31	0.74	0.09	0.32	破損	I-2類	右上にセキ痕がみられる。孔に バリがある。背は平坦である。
第37図 10 図版50の10	N-15	II c層 0/10	無文銭	1.60	0.63	0.08	0.50	破損	II-1類	錆跡が激しい。
第37図 11 図版50の11	L-10	II d層 10/20	無文銭	1.00	0.64	0.07	0.09	破損	II-2類	孔にバリがある。磁気反応有り。
第37図 12 図版50の12	M-7	II c層 0/10	無文銭	0.64	0.44	0.08	0.04	完形	II-2類	右上にセキ痕がみられる。背は 平坦である。磁気反応有り。
	J-12	II d層 0/10	無文銭	—	—	0.65	0.03	1/2	II-2類	右上にセキ痕がみられる。背は 平坦である。磁気反応あり。

第48表 銭貨観察一覧③

押図番号 図版番号	出土 地点	出土層序	銭貨名 (種別)	初鋳 年	法量 (cm・g)				残 存 率	材 質	周 圍 キ ズ	状態・特徴
					外径	孔径	厚さ	重量				
第37図 13 図版50の13	G-22	II a層 20/30	半銭	明治 20	2.20	—	0.12	3.23	完形	銅	なし	表裏とも摩耗されている。 表：中央に半銭の文字。外輪菊文 の右に二百枚、左に換一圓の小 さな文字。右に朝、左に菊を記し て両者は現元で結ばれる。輪郭 内側に歯車状の商標を施す。 裏：中央に点の商標で囲まれた龍 文(呼龍)。外輪は大日本・明治 二十年・1/2 S E Nの文字を配す。 輪郭内側は表と同じ。



第37圖 (圖版50) 錢貨①: 有文錢 (1~6)、無文錢 (7~12)、近代錢 (13)

なお、石囲い遺構（近代期）より、近代銭が1点出土した。第38図及び第49表を参照いただきたい。

第49表 銭貨観察一覧④

押印番号 図章番号	出土 地点	出土 層	遺構	銭貨名	初铸年	法量 (mm・g)				残存率	材質	周囲 キザ	状態・特徴
						外径	孔径	厚さ	重量				
第38図	H-10	I層	石囲い 遺構 ①	一銭	昭和 14	1.745	—	0.140	0.890	完形	アル ミ	なし	表裏とも一部破損。 表：中央に八咫鏡の中に一銭の文字。外 縁は上に菊花文、下に桐を配す。周面を 波流。輪郭内側には点の圓飾。 裏：中央に八咫鏡。その背景に桜花。上 に大日本・下に昭和14年の文字。同文字 の南北各に1個づつ小さな桜花文を配す。 輪郭内側には点の圓飾。



第38図 銭貨②

## 第7節 円盤状製品

円盤状製品は22点を集計し、内12点を図示した(第40図 図版51 第50表参照)。種類別では、沖繩産施釉陶器が3点、沖繩産無釉陶器が9点、瓦が6点、褐釉陶器が4点となっている(第51表参照)。全体的に打割が粗雑である。大まかな成形後、更に円形に整形するための、細かな打割を加えた痕跡が見受けられない。

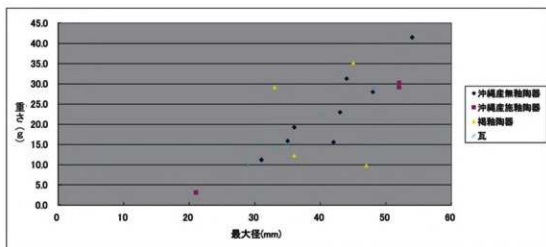
第39図は、種類別の最大径と重量の相関である。種類と大きさに相関関係は認められず、各種に様々な大きさの製品がある。

第50表 円盤状製品観察一覧

図版番号 図版番号	種類	器種	部位	完・破 (残存状況)	最大径 (mm)	高さ (g)	最大厚 (mm)	備 考	出土地点
第40図の1 図版51の1	沖繩産施釉陶器	—	胴部	完	21	3.2	6	主に裏面から剥離されている。比較的、小型の製品。	6-19-22 1119-22 119-21 遺跡調査
第40図の2 図版51の2	瓦	—	破片	完	29	9.9	11	表裏面から剥離している。比較的、小型の製品。	1-10 3-4層 9/10
第40図の3 図版51の3	沖繩産無釉陶器	—	胴部	完	31	11.3	9	主に裏面から剥離されている。	6-19-22 1119-22 119-21 遺跡調査
第40図の4 図版51の4	褐釉陶器	—	胴部	完	33	29.2	8	主に裏面から剥離されている。形状は、円形に近い。	6-12 裏面アゾ 3-4層 10/10
第40図の5 図版51の5	瓦	—	胴部	完	40	22.6	14	裏面から剥離されている。大層な割れ目があるが、形状はほぼ円形にちかい。	M-18 3-4+5-6層 20/20
第40図の6 図版51の6	沖繩産施釉陶器	—	胴部	完	44	31.3	11	表裏面から剥離されている。ほぼ円形を呈している。	M-16 カクラン 10/20
第40図の7 図版51の7	褐釉陶器	—	胴部	1/2	47	9.9	7	表裏面から剥離されている。	1-14 3-4+5層
第40図の8 図版51の8	褐釉陶器	—	胴部	完	45	35.7	19	表裏面から粗雑に剥離されている。	M-19 裏面アゾ 3-4層 20/20
第40図の9 図版51の9	瓦	—	胴部	完	48	29.0	15	主に裏から剥離されている。形状は、楕円に近く、丁寧な成形とは言い難い。	1-12 遺跡トラン 3-7+ 8-9層
第40図の10 図版51の10	沖繩産施釉陶器	器?	胴部	完	48	28.0	11	器などの底部に近い部分を利用して、製作された製品かと考える。表裏面から剥離されている。楕円形の形状である。	1-16 3-4+5層 10/20
第40図の11 図版51の11	沖繩産施釉陶器	器?	胴部	完	52	29.7	10	器などの底部を再利用して、製作されている。主に表面から剥離されている。	7-21 遺跡調査
第40図の12 図版51の12	沖繩産施釉陶器	鉢鉢	胴部	完	52	30.1	8	内面に5本1組の線目痕がある。主に表面から剥離されている。ほぼ円形に近い形状である。	M-12 3-4+5層 30/40
計測№6	沖繩産施釉陶器	鉢鉢	胴部	完	36	15.9	11	内面に線目痕がある。主に外面から剥離されており、形状は、円形に近い。	M-14 3-4層 9/10 全層アゾ
計測№13	沖繩産施釉陶器	鉢鉢	胴部	完	31	11.2	8	主に内面から剥離されている。形状は、円形に近い。	6-18 1層 10/20
計測№14	沖繩産施釉陶器	鉢鉢	胴部	完	54	41.5	13	内面に線目痕がある。主に裏面から剥離されている。形状は三角形に近い。	6-18 1層 9/10
計測№23	瓦	—	胴部	完	31	16.1	14	全体的に割れが著しい。表裏面から剥離されていると考える。	P-8 表裏アゾ 3-4層
計測№27	瓦	—	胴部	完	33	14.6	15	断面の割れが著しいが、主に裏面から剥離されているのではないかと推察される。ほぼ円形に近い形状である。	M-10 3-4+5層 9/10
計測№28	瓦	—	胴部	完	36	15.3	13	表裏面から剥離されているが、主に表面から剥離されている。ほぼ円形に近い形状である。	1-21 3-4層 9/10
計測№9	沖繩産施釉陶器	—	胴部	完	43	23.0	11	表裏面から粗雑に剥離されている。	H-13 3-4層 10/20
計測№10	沖繩産施釉陶器	—	胴部	完	36	18.3	10	主に裏面から剥離されている。形状は、円形に近い。	H-14 3-4層 9/10
計測№11	褐釉陶器	—	胴部	完	36	12.4	7	主に裏面から剥離されている。形状は、円形に近い。	M-19 カクラン 20/20
計測№16	沖繩産施釉陶器	—	胴部	完	42	15.6	8	表裏面から粗雑に剥離されている。	6-18 1層 9/9

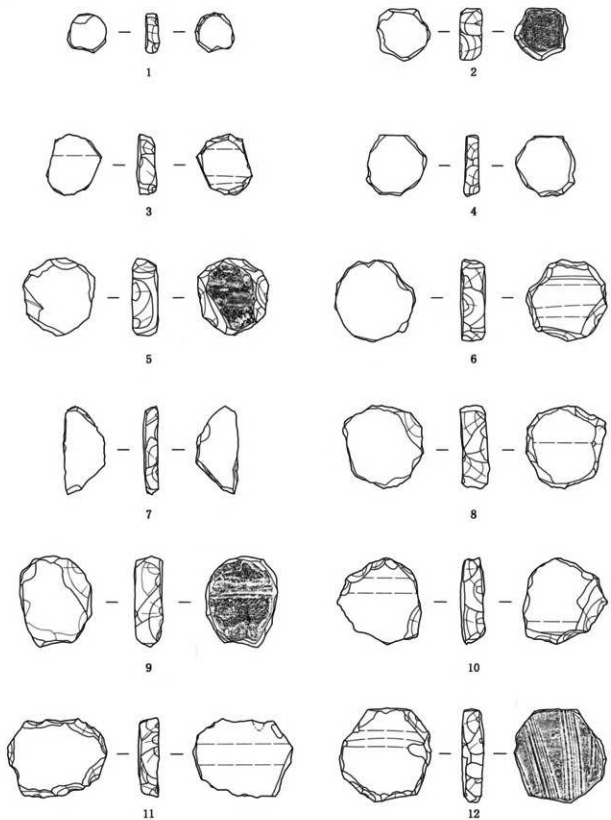
第51表 円盤状製品出土一覧

出土地点	遺物種類	沖縄産施釉陶器	沖縄産無釉陶器	瓦	褐釉陶器	総計	備考
表面清掃	G-19~22 H-19~22 I-19~21	1	1			3	第40図の1 図版51の1 第40図の3 図版51の3
	I-21	1					第40図の11 図版51の11
	G-18		3			3	計測No.16 計測No.14 計測No.13
IIa層	I-21			1		1	計測No.28
IIc層	K-12				1		第40図の4 図版51の4
	M-15				1		第40図の8 図版51の8
	N-13		1				計測No.9
	N-14		2				計測No.10 計測No.8
	P-6			1			計測No.23
II d層	L-10			1		1	第40図の2 図版51の2
IIc・II d層	L-12			1			第40図の9 図版51の9
	L-14				1		第40図の7 図版51の7
	M-10			1			計測No.27
	M-12	1					第40図の12 図版51の12
	M-16			1			第40図の5 図版51の5
	I-15		1				第40図の10 図版51の10
攪乱	M-16		1		1	2	第40図の6 図版51の6 計測No.11
総計		3	9	6	4	22	



第39図 円盤状製品の最大径と重さ相関





第40圖 (圖版51) 円盤状製品

## 第8節 煙管

煙管は、8点を図示する。全て羅宇煙管である。

ほぼ同一の形状であるが、施釉されたものと、無釉のものとの2種類がある。第41図（図版52）の3・6～8は、外面に黒釉が施釉されている。また、同図3と8以外は、八面に面取りされている。同図3は七面に面取りされており、同図8は五面以上であることはわかるが、破損のため判然としない。

全て破損しており、1点（第41図の1）を除き、全長や羅宇接続部の径は不明である。接続部については、残存する計測可能な部位の数値を記載している。全長についても、残存している最長の数値である。

なお、個々の資料の特徴は、第52表に譲る。

第52表 煙管計測一覧

(単位: mm・g)

押図番号 図版番号	器種	材質	完/破	火皿 (mm)		羅宇接続部		全長	重量 (g)	出土地
				外径	内径	外径	内径			
第41図 1 図版52の1	雁首	沖縄産無釉陶器	1/3破	19.0	12.0	(17.0)	(9.0)	43.0	(9.8)	M-16 表面清掃
第41図 2 図版52の2	雁首	沖縄産無釉陶器	破	(17.0)	(12.0)	(14.0)	(6.0)	(35.0)	(6.2)	L-15 II d層 10/20
第41図 3 図版52の3	雁首	沖縄産施釉陶器	破	20.0	13.0	(14.0)	(8.0)	(33.0)	(6.4)	N-15 北側畦 II c層 10/20
第41図 4 図版52の4	雁首	沖縄産無釉陶器	破	18.0	13.0	(15.0)	(7.0)	(29.0)	(8.0)	H-22 II a層 20/30
第41図 5 図版52の5	雁首	沖縄産無釉陶器	破	19.0	14.0	(12.0)	(7.0)	(24.0)	(4.4)	L-14 西側畦 II c層 20/30
第41図 6 図版52の6	雁首	沖縄産施釉陶器	破	19.0	18.0	—	—	(19.0)	(3.8)	O-9 東側畦 II c層 0/10
第41図 7 図版52の7	雁首	沖縄産施釉陶器	破	—	—	(14.0)	(8.0)	(27.0)	(6.2)	N-15 北側畦 II c層 10/20
第41図 8 図版52の8	雁首	沖縄産施釉陶器	破	—	—	—	—	—	(1.9)	K-11 II c・II d層 0/10

\* ( ) 内の数値は残存値

## 第9節 陶製品

土鍾が1点出土している。第41図（図版52）9は、胴部に若干の膨らみを有する円筒形であり、長軸に穿孔されている。図上部に紐擦れの痕跡が認められるが、下部は判然としない。

なお、資料の特徴は、第53表に譲る。

第53表 陶製品計測一覧

（単位：mm・g）

挿図番号 図版番号	器種	材質	完/破	長さ	幅	孔径	重さ	出土地
第41図 9 図版52の9	土鍾	陶器	完	26.0	12.0	4.0	3.0	G-22 IIa層 30/40

## 第10節 玉

玉は、3点を図示した。色調、形状ともに様々である。第41図（図版52）10は不透明な緑色を呈しており、紐擦れの痕跡などは認められない。同図11は、巻き上げ技法で成形されている。孔にはガラス片や粒子が詰まっており、完全には穿孔していない。同図12は外面に凹凸があり、本来は花形の製品と考える。中央部に、円形の孔が穿孔されているとみられる。渡地村跡において、類似の資料が出土している。

なお、個々の資料の特徴は第54表に譲る。

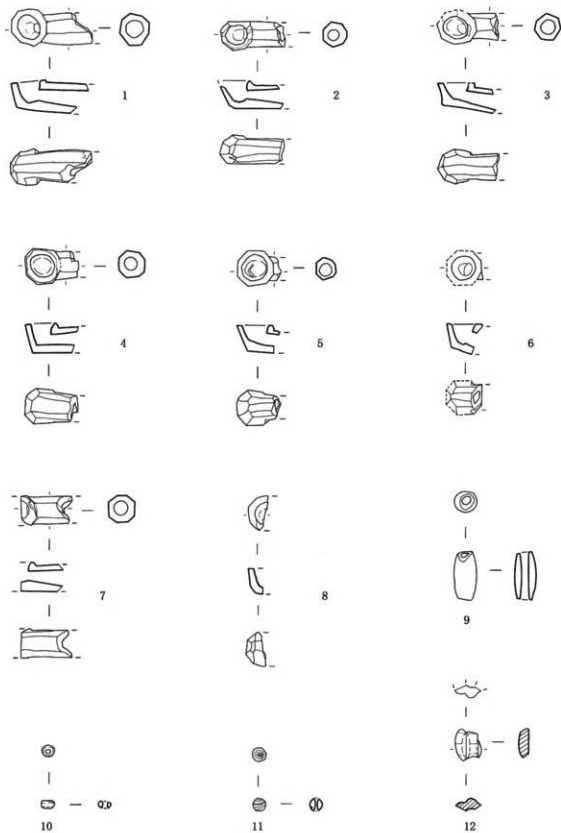
註1 比嘉尚輝 2007「第6章 第26節 玉」『渡地村跡』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第46集

第54表 玉計測一覧

（単位：mm・g）

挿図番号 図版番号	形状	材質	色調	完/破	直径	孔径	高さ	重量	出土地
第41図 10 図版52の10	臼形	ガラス	緑色	完	7.0	3.0	4.0	0.23	L-18 II d層 10/20
第41図 11 図版52の11	球形	ガラス	水色	完	7.0	2.0	7.0	0.46	N-16（北側トレンチ付近）
第41図 12 図版52の12	花形	水晶	半透明	1/4	(5.0)	—	(17.0)	(1.33)	G-16 I層 0/5

\*（ ）内の数値は残存値



第41圖 (圖版52) 煙管・陶製品・玉

## 第Ⅶ章 総括

前章までに発掘調査の成果について述べた。ここでは、今一度整理してまとめたい。

### 遺跡の立地について

本遺跡が所在する陸上自衛隊那覇駐屯地内には、「鏡水名座原A遺跡」「鏡水名座原B遺跡」「鏡水名座原古墓群」「鏡水箕隅原A遺跡」「鏡水箕隅原B遺跡」「鏡水箕隅原D遺跡」「鏡水箕隅原E遺跡」「鏡水水溜原遺跡」「鏡水土砂場原A遺跡」「鏡水土砂場原B遺跡」など多数の遺跡が近年確認されている。

さらに、遺跡の周辺には、「住吉遺跡」「御物グスク」「屋良座森グスク」、港湾北岸に所在する「三重グスク」「渡地村跡」などを含む那覇港周辺遺跡群、また、16世紀代に整備されたことが知られる「真珠道」など琉球王府時代の重要な遺跡が立地する。特に、渡地村跡の発掘調査の成果は、琉球王府時代における那覇港の重要性を改めて知らしめた貴重なものとなっている。

また、旧石器時代の沖繩県指定史跡「山下第一洞穴遺跡」、沖繩新石器時代前Ⅳ期・後期の「ガジンピラ丘陵遺跡」、沖繩新石器時代後期の「那崎原遺跡」など先史時代の遺跡も位置している。このことから、本遺跡周辺は古き時代から先人達の格好の生活環境であったことがうかがえる。

さて、本遺跡は、陸上自衛隊那覇駐屯地内における本格的な発掘調査の契機となった。第Ⅰ章でも述べたとおり、同地域は、立ち入りの制約された区域であったため、埋蔵文化財の有無さえ確認されていないのが現状であった。今後、地区内の開発についての動向が注意される。諸開発等の計画には、埋蔵文化財の取り扱いが極めて重要な位置を占めると言える。

### 層序について

今回は、第Ⅰ～Ⅲ層、砂層と名付け、大きく10枚に分層し、その時期を8期に分けて報告した。

第Ⅰ層は、戦後の造成土。

第Ⅱ層はa～f層に分層して調査を実施した。第Ⅱa・b層は近代期に想定される堆積土であった。第Ⅱc層は、近世期の遺物包含層として捉えられるが、表土剥ぎ作業の際、同層までバックホーにて掘削した。本調査では、第Ⅱd層以下を人力による作業とした。

第Ⅱd層は、沖繩新石器時代後期の土層である。黒味を帯びた暗褐色の砂質層である。

第Ⅱe層は、沖繩新石器時代前Ⅲ・Ⅳ期の土層である。明るい色調の褐色土層である。一見、琉球石灰岩の風化土である赤土と白砂が混ざり合った堆積土との感じを受けた。

第Ⅱf層は、沖繩新石器時代前Ⅱ期の土層である。黒味を帯びた暗褐色の堆積土である。本遺跡の調査において注目された瓜形文土器が出土する土層で、層厚は約10cm程度であった。その堆積は、水平堆積を見せており、本来遺跡一帯に大きく広がっていたものと考えられた。

第Ⅲ層はa・b層に分層した。グスク時代から近世期の遺物包含層と捉えられた。第Ⅲa層は、暗茶褐色を呈する粘土質の堆積土。第Ⅲb層は、同じく粘土質で、色調は上層に比して黒味を帯びる。

白砂層は、沖繩新石器時代前Ⅲ・Ⅳ期の土層である。黄褐色を呈する砂層でサンゴ等も多く含まれる。本遺跡の土層堆積で注意されたことは、沖繩新石器時代前Ⅱ期の所産である瓜形文土器が出土する第Ⅱf層の標高である。本層の標高は、約3.3～3.4mで、類似遺跡においては、標高0m付近に堆積する土層から同資料が出土していることが知られている。ただし、近年、発見された南城市武芸洞遺跡は、標高約20m付近の遺跡であり、遺跡の立地の在り方に留意が必要である。第Ⅱe層は、自然堆積ではない

感じを受けた。今後の検討課題としたい。

#### 遺構について

遺構は、各時期ごとに分けて報告した。

第Ⅱf層の遺構（第8期）は、焼土遺構が主体であった。放射性炭素年代測定（補正年代）では、 $5,810 \pm 30BP$ との結果が得られた。同層出土遺物の年代観に比して若干新しい年代観と言えることから、上層に属する遺構である可能性も示唆される。

第Ⅱe層及び第Ⅱd層の遺構（第7～5期）は、貝塚を主体に報告した。貝塚を形成する軸が略東西と略南北とズレがある。時期によって、貝塚を形成する海岸線の変化の指標になる可能性もうかがえた。第Ⅲ層の遺構（第4期）は、平面が略三角形、断面がV字形となる鋳跡と見られる遺構が多数検出されている。耕作痕あるいは整地痕の可能性を考えている。

第Ⅱc層の遺構（第3期）は、溝状遺構が主体であった。概ね東西南北を軸として構築されており、近世以降、方位の意識が定着していたとの推察もでき貴重な成果であった。

第Ⅱb層に対応する第2期の遺構は近代として捉えた。建物の礎石や掘り込み井戸などが検出された。

以上のように多種多様な遺構の検出により、本遺跡が断続的に人々の活動を示す貴重な成果となった。

#### 遺物について

本遺跡における出土遺物として注意される資料は、沖縄新石器時代前Ⅱ期の爪形文土器と沖縄新石器時代前Ⅳ期の突帯を貼り付けるタイプの土器群が挙げられる。両資料とも市内では、初例をなすものである。

爪形文土器は、指頭押圧を主体とするもの、縦長の指頭押圧を主体とするもの、爪形を主体とするものに分類され、それぞれ、ヤブチ式、野国タイプ、東原式と称される。今後、本遺跡で得られた資料（17,119点）の細分類を検討したい。

突帯を貼り付けるタイプの土器群は、主に白砂層から出土する傾向にある。これらの資料は、鹿児島県の桐木耳取遺跡出土資料と酷似しており九州本土との交流を裏付けるものである。

その他に注意される遺物としては、爪形文土器と同じ層準から出土する石器は小振りの刃部磨製石器が主体であったことである。このことは、野国貝塚でも同様な傾向を示すことが知られており、本時期における石器の一つの様式を提示しているものと考えられる。また、大型石器は、三点が重なり合うような状態で出土した。一見、何らかの埋納遺構も想起されたが判然としなかった。今後、類似資料の追加を持って検討したい。なお、同資料は、出土の状況から第Ⅱe層（沖縄新石器時代前Ⅲ・Ⅳ期）に属するものと解している。

さて、放射性炭素年代測定（補正年代）から本遺跡の年代観を概観してみる。第55表は土層の堆積順に、第56表は年代順に分析結果を並べたものである。

第Ⅱf層（最下層）で約 $6,400BP \sim 6,000BP$ （縄文時代早期から前期）、第Ⅱe層及び赤土混土層で $2,500BP \sim 1,310BP$ （縄文時代晩期から古墳時代）、白砂層で $2,460BP$ から $310BP$ （縄文時代晩期から近世）、第Ⅱd層で $1,520BP$ から $1,410BP$ （古墳時代）、第Ⅲb層で $2,110BP$ から $2,050BP$ （弥生時代）、第Ⅲa層で $390BP$ から $350BP$ （中世末）。第Ⅱc層で $310BP$ から $160BP$ （近世）との分析結果である。

①第Ⅱf層（最下層）と第Ⅱc層の年代観は概ね分析結果と符合している。

②第Ⅱe層における出土土器の年代観は縄文時代前期から中期であったが、分析結果とはかなりの年

代的開きがある。

- ③白砂層では、二点の分析資料間で年代的誤差が大きく、資料採集時のエラーも考えられる。出土土器の年代観は縄文時代中期であったが分析結果からその年代は得られなかった。
- ④第Ⅲb・a層では出土資料の年代観はそれぞれ、グスク時代から琉球王府時代（中世から近世）であるのに対し、弥生時代・中世との結果であった。

出土遺物の年代観と分析結果の比較は、分析試料の採集作業を慎重に行うことはもちろんのことであるが、その作業の積み重ねと類似遺跡との比較、出土遺物自体の型式分類作業を進めることによって、より先史時代の様相を解明することにつながることもなろう。

今回の報告は、多種多様な遺物が大量に得られたため多くの資料を割愛し限られた資料の提示にとどまった。特に主要な資料である土器・石器について、分類、集計が不完全であることは否めない。今後、機会を改めて再整理を行い、詳細な検討を加えたい。

#### 今後の課題

本遺跡の調査を契機に以下のような課題が挙げられる。

- ①沖繩新石器時代前Ⅱ期（爪形文土器）における遺跡の立地の比較・検討
- ②第Ⅱe層の堆積に関して、類似遺跡との比較・検討
- ③沖繩新石器時代前Ⅳ期に所属する土器群についての類例資料の収集
- ④各期における微細遺物（特に魚類等）の検出と類似遺跡との比較・検討

最後に、今回の発掘調査は、那覇市内で初となる爪形文土器の出土が注目された。今後、同資料の出自、類似遺跡との比較検討を行うことによって、先史時代における具体的な人々の営みの全容が明らかにされていくものと考えられる。これまでに得られた調査成果の集積・整理を行い、今後の先史時代研究の発展に向けて、他地域の類似遺跡との比較・検討をより一層充実させる必要がある。

第55表 放射性炭素年代測定一覧①

番号	グリッド	位置	層序	出土年月日	試料の種類	測定年代 (BP)	補正年代 (BP)	時代	備考
1	P-10		ⅡC層 0/10	2005.06.15	炭化材	180±30	190±30	近世	附録4
2	N-16		ⅡC層 30/40	2005.12.05	炭化材	340±30	280±30	近世	附録4
3	M-14	西側アゼ	Ⅱa層	2006.12.18	炭化材	310±20	370±20	ブスク時代	附録6
4	N-9	PtNo12	Ⅱb層	2006.12.19	炭化材	2,140±20	2,080±30	沖縄後期	附録6
5	K-17		Ⅱd層 貝塚下	2007.02.28	炭化材	1,610±30	1,490±30	沖縄後期	附録3
6	M-13	東壁	Ⅱd層 粘土質	2006.12.05	炭化物	1,460±30	1,440±30	沖縄後期	附録2
7	H-11		白砂層 0/10	2007.03.08	炭化材	360±30	340±30	近世	附録4
8	I-14		白砂層 40/50	2007.03.08	炭化材	2,440±30	2,420±40	沖縄前VI期	附録4
9	L-7	東トレンチ	地山(=Ⅱe層:赤土層土層) 10/20	2006.11.02	炭化材	1,460±30	1,350±30	沖縄後期	附録3
10	L-7		地山(=Ⅱe層:赤土層土層) 50/60	2006.12.16	炭化物	1,440±30	1,310±30	沖縄後期	附録3
11	J-9	南壁	Ⅱe層 120/130	2005.11.21	炭化材	2,490±30	2,470±30	沖縄前VI期	附録2
12	J-8	南側トレンチ	Ⅱe層 160/170	2005.11.29	炭化材	1,380±20	1,360±20	沖縄後期	附録6
13	J-7	南側トレンチ	Ⅱe層 粘土質 160/170	2005.11.29	炭化材	1,880±40	1,690±40	沖縄後期	附録3
14	H-10		Ⅱf層 10/20	2005.11.18	炭化材	6,070±40	6,040±40	沖縄前Ⅱ・Ⅲ期	附録3
15	K-7	北側アゼ	Ⅱf層	2005.12.28	炭化物	6,230±40	6,110±40	沖縄前Ⅱ・Ⅲ期	附録1
16	K-7	北側アゼ	Ⅱf層	2005.12.28	炭化材	6,330±30	6,360±40	沖縄前Ⅱ・Ⅲ期	附録7
17	J-8	熊土遺構№1		2006.12.28	炭化材	5,810±30	5,860±30	沖縄前Ⅲ期	附録7

第56表 放射性炭素年代測定一覧②

番号	グリッド	位置	層序	出土年月日	試料の種類	測定年代 (BP)	補正年代 (BP)	時代	備考
1	P-10		ⅡC層 0/10	2005.06.15	炭化材	180±30	190±30	近世	附録4
2	N-16		ⅡC層 30/40	2005.12.05	炭化材	340±30	280±30	近世	附録4
3	H-11		白砂層 0/10	2007.03.08	炭化材	360±30	340±30	近世	附録4
4	M-14	西側トレンチ	Ⅱa層 0/10	2006.12.18	炭化材	310±20	370±20	ブスク時代	附録6
5	L-7		地山(=Ⅱe層:赤土層土層) 50/60	2006.12.16	炭化材	1,440±30	1,310±30	沖縄後期	附録3
6	L-7	東トレンチ	地山(=Ⅱe層:赤土層土層) 10/20	2006.11.02	炭化材	1,460±30	1,350±30	沖縄後期	附録3
7	J-8	南側トレンチ	Ⅱe層 160/170	2005.11.29	炭化材	1,380±20	1,360±20	沖縄後期	附録6
8	M-13	東壁	Ⅱd層 粘土質	2006.12.05	炭化物	1,460±30	1,440±30	沖縄後期	附録2
9	K-17		Ⅱd層 貝塚下	2007.02.28	炭化材	1,610±30	1,490±30	沖縄後期	附録3
10	J-7	南側トレンチ	Ⅱe層 粘土質 160/170	2005.11.29	炭化材	1,880±40	1,690±40	沖縄後期	附録3
11	N-9	PtNo 1 2	Ⅱb層	2006.12.19	炭化材	2,140±20	2,080±30	沖縄後期	附録6
12	I-14		白砂層 40/50	2007.03.08	炭化材	2,440±30	2,420±40	沖縄前VI期	附録4
13	J-9	南壁	Ⅱe層 120/130	2005.11.21	炭化材	2,490±30	2,470±30	沖縄前VI期	附録2
14	J-8	熊土遺構№1		2006.12.28	炭化材	5,810±30	5,860±30	沖縄前Ⅲ期	附録7
15	H-10		Ⅱf層 10/20	2005.11.18	炭化材	6,070±40	6,040±40	沖縄前Ⅱ・Ⅲ期	附録3
16	K-7	北側アゼ	Ⅱf層	2005.12.28	炭化物	6,230±40	6,110±40	沖縄前Ⅱ・Ⅲ期	附録1
17	K-7	北側アゼ	Ⅱf層	2005.12.28	炭化材	6,330±30	6,360±40	沖縄前Ⅱ・Ⅲ期	附録7



## 附篇 1 鏡水箕隅原 C 遺跡の年代測定委託業務報告

## 鏡水貫原C遺跡の年代測定委託業務報告

### <目次>

はじめに	p. 1
1. 試料	p. 1
2. 分析方法	p. 1
3. 結果	p. 2
4. 考察	p. 2
引用文献	p. 3

### <表一覧>

- 表1. 放射性炭素年代測定結果  
表2. 暦年較正結果

## はじめに

箕隅原C遺跡は、那覇市の西南部に位置し、標高3m前後の海岸砂丘上に形成されている。これまでの調査により、調査区の南部には琉球王府時代の遺構が確認されており、鋳跡などが検出されたことから「生産の場」が想定されている。一方、調査区の北部では、土器・石器・貝・獣骨などが大量に出土した遺物包含層が確認されている。これら遺物の中で特筆すべき点は、爪型文土器、室川下層式土器、磨製石斧などの縄文時代早期および前期とされる資料の出土である。このことから、遺跡の北側には縄文時代の遺跡群が分布すると考えられている。このような状況が明らかにされたことにより、本遺跡は先史時代の那覇市周辺を検討することができる貴重な遺跡であるとされた。

本報告では、調査区北部の遺物包含層より出土し、県内でも出土例の少ない爪型文土器に関わる年代資料を得ることを目的として、土器と同層位より出土した炭化物の放射性炭素年代測定を実施する。

## 1. 試料

試料は、箕隅原C遺跡より検出した炭化物1点である。試料の採取された層位であるIf層からは、爪形文とされる土器片も出土していることから、発掘調査所見では、炭化物の年代は爪形文土器の年代指標になり得るものとされている。

## 2. 分析方法

土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後HClにより炭酸塩等酸可溶成分を除去、NaOHにより腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分の除去を行う（酸・アルカリ・酸処理）。

試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅(II)と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じり、500℃（30分）850℃（2時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO<sub>2</sub>を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO<sub>2</sub>と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-II）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>Cの測定も行うため、この値を用いて $\delta^{13}\text{C}$ を算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma:68%）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02（Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。

### 3. 結果

同位体効果による補正を行った測定結果を表1に示す。試料の年代は、 $6,110 \pm 40$ BPを示す。また、校正した暦年代を表2に示す。暦年校正とは、大気中の $^{14}\text{C}$ 濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の $^{14}\text{C}$ 濃度の変動、及び半減期の違い( $^{14}\text{C}$ の半減期5,730±40年)を校正することである。暦年校正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年校正プログラムや暦年校正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表している。なお、今回の試料では、北半球の大気中炭素に由来する校正曲線を用いる。

表1. 放射性炭素年代測定結果

試料名	種類	補正年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	測定年代 BP	Code No.
K-7、Ⅱf層	炭化物	$6,110 \pm 40$	$-32.28 \pm 0.55$	$6,230 \pm 40$	IAAA-63019

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
- 2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差 $\sigma$ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

表2. 暦年校正結果

試料名	補正年代 (BP)	暦年校正年代 (cal)			相対比	Code No.
		$\sigma$	cal BC 5,202 - cal BC 5,174	cal BP 7,152 - 7,124		
K-7、Ⅱf層	$6,110 \pm 43$	$\sigma$	cal BC 5,071 - cal BC 4,956	cal BP 7,021 - 6,906	0.825	IAAA-63019
		$2\sigma$	cal BC 5,209 - cal BC 4,936	cal BP 7,159 - 6,886	1.000	

- 1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer) を使用
- 2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。
- 3) 1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年校正曲線や暦年校正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
- 4) 統計的に真の値が入る確率は $\sigma$ は68%、 $2\sigma$ は95%である
- 5) 相対比は、 $\sigma$ 、 $2\sigma$ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

暦年校正の計算においては、測定誤差 $\sigma$ 、 $2\sigma$ 双方の値を求める。 $\sigma$ は統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、 $2\sigma$ は真の値が95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、 $\sigma$ 、 $2\sigma$ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。測定誤差を $\sigma$ として計算させた結果、試料の校正暦年は7,152-6,906calBPとなる。

### 4. 考察

K-7地点、Ⅱf層からは爪形土器が出土し、同層位出土炭化物の放射性炭素年代測定では、 $6,110 \pm 40$ BPの値が示された。これまでの爪形土器に関わる放射性炭素年代としては、ヤブチ式の $6,670 \pm 140$ BP、東原式の $6,450 \pm 140$ BPという年代が、沖縄県史(財団法人沖縄県文化振興会ほか編, 2003)の縄文時代編年表に示されている。今回の結果は、これらの年代値に対してどのように整合させていくかが今後の課題である。

なお、今後、これまでの測定例との詳細な比較を行う場合には、その測定例における試料の質について注意する必要がある。特に、試料が海生の貝やサンゴなどでは、大気より遙かに循環の遅い海水中の $^{14}\text{C}$ 濃度を反映するため、その同位体補正年代は、炭化物などの大気中の $^{14}\text{C}$ 濃度を基準とした年代に比

べて数百年古くなることも考慮に入れなければならない。

また、今回の測定では、校正された暦年代7,152-6,906calBPという値を呈示したが、これまでの南西諸島における縄文時代に関わる放射性炭素年代測定例では、校正暦年代が示されているものはほとんどない。したがって、現時点では、校正暦年代での検討は行わない。

今回の年代測定結果は、現時点で本遺跡が爪形文土器出土地点の沖縄本島南限であるということ を考慮すると、重要な年代指標になるものと考えられる。今後は、爪形文土器検出層においてさらに複数の試料による年代測定を実施し、それらの比較から、より確実な年代観を得るとともに、あわせて地形・層序の検討および遺跡の古環境に関する総合的な調査なども期待される。

#### 引用文献

財団法人沖縄県文化振興会・公文書管理部史料編集室編、2003、沖縄県史 各論編 第二巻 考古、沖縄県教育委員会、662p



## 附篇 2 鏡水箕隅原C遺跡の自然科学分析委託業務報告

## 鏡水箕隅原C遺跡の自然科学分析委託業務報告

### <目次>

はじめに	p. 1
1. 試料	p. 1
2. 分析方法	p. 2
(1) 放射性炭素年代測定	p. 2
(2) 花粉分析	p. 2
(3) 植物珪酸体分析	p. 2
(4) 微細植物片洗い出し分析	p. 3
3. 結果	p. 3
(1) 放射性炭素年代測定	p. 3
(2) 花粉分析	p. 4
(3) 植物珪酸体分析	p. 4
(4) 微細植物片洗い出し分析	p. 4
4. 考察	p. 4
引用文献	p. 5

### <表・図版一覧>

- 表1. 放射性炭素年代測定結果
- 表2. 暦年校正結果
- 表3. 花粉分析結果
- 表4. 植物珪酸体分析結果

図版1 植物珪酸体



## はじめに

那覇市に所在する箕原C遺跡は、那覇市南西部の国場川河口よりもさらに西方へ1kmほど離れた海岸低地に位置する。氏家・兼子（2006）による地質図に従えば、遺跡の背後には島尻群層を構成する豊見城層からなる緩やかな丘陵地が広がるが、その縁辺には那覇層とされる石灰岩からなる小丘も分布している。遺跡が位置する低地については、埋め立て地となっており、本来の地形を窺い知ることはできない。ただし、箕原C遺跡および隣接する箕原A遺跡などの発掘調査により、海浜堆積物であるサンゴ礫を多量に含む砂礫層や海浜砂あるいは砂丘砂と考えられる砂層の堆積や、その南側（陸側）には低湿地の堆積物と考えられる腐植質なシルト層や粘土層などが確認され、海岸砂丘や砂丘背後の低湿地などの地形が伏在している可能性のあることが指摘されている。

これまでの発掘調査により、遺跡の南側では琉球王府時代の畑地など生産の場を示唆する遺構が検出され、北側では縄文時代の遺物群が検出されている。出土した土器には、約6500年前とされる爪形土器や約5000年前頃とされる室川下層式などが確認されており、沖縄本島における縄文時代早期～前期を示す遺跡としても注目されている。

本報告では、発掘調査により推定された砂丘背後の低地に相当すると考えられる調査区において、湿地の堆積物が示唆されるような腐植質の土壌層が認められたことから、その形成環境の推定を目的として、放射性炭素年代測定および花粉、植物珪酸体の各微化石分析さらに種実遺体の検出を目的とした微細植物片洗い出し分析を行う。これらの結果により、箕原C遺跡の古環境に係わる資料を作成するものである。

## 1. 試料

分析の対象とした土層断面は、M-13 東壁およびJ-9 南壁である。

M-13 東壁では、現地地表下約1mまでの断面が作成された。現地調査所見により、箕原C遺跡における基本層序の層位名が付され、上位よりIIc層、II d層上部、II d層間層、II d層、II d層（粘土質）とされた。各層とも厚さは20cm程度であり、いずれも灰黒～暗灰色を呈する土壌であるが、IIc層およびII d層上部は砂質、それより下位の各層は砂を含む粘土質であり、特にII d層（粘土質）とした層位は、粘土分が多く、また酸化鉄も多量に含まれることから、水田等の人為的な影響のある土壌である可能性も指摘されている。

試料は、IIc層から試料番号1、II d層上部から試料番号2、3、II d層間層から試料番号4、II d層から試料番号5、6、およびII d層（粘土質）から試料番号7の合計7点を採取した。本分析では、水田等の可能性が考えられているII d層（粘土質）の試料番号7とその直上の試料番号6の2点を対象として微化石分析および微細植物片洗い出し分析を行う。さらに、II d層（粘土質）の試料番号7からは、炭化物を抽出し、放射性炭素年代測定の試料（<sup>14</sup>C試料1）とした。

J-9 南壁では、上位よりIIc層、II d層、II d層（粘土質）の各層が認められ、II d層（粘土質）の下位にはIIe層とされる層位も確認された。IIe層は、いわゆるマージと呼ばれる褐色土を基質とし、礫や貝類などを多く包含していることから、背後の石灰岩段丘上のマージの再堆積物であるとも考えられている。

試料は、IIc層、II d層、II d層（粘土質）の各層からそれぞれ試料番号1、2、3を採取し、IIe層からは試料番号4～7を採取した。今回の分析では、IIe層の試料番号5を対象として微細植物片洗い出し分析を行う。また、IIe層から抽出した炭化材1点を放射性炭素年代測定の試料（<sup>14</sup>C試料2）とした。

## 2. 分析方法

### (1) 放射性炭素年代測定

根等の目的物と異なる年代を持つと思われるものが混入している場合は、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後HC1による炭酸塩等酸可溶成分の除去、NaOHによる腐植酸等アルカリ可溶成分の除去、HC1によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分の除去を行う(酸・アルカリ・酸処理)。

試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅(II)と銀箔(硫化物を除去するため)を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃(30分)850℃(2時間)で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO<sub>2</sub>を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO<sub>2</sub>と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局(NIST)から提供されるシュウ酸(HOX-II)とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に13C/12Cの測定も行うため、この値を用いて $\delta^{13}C$ を算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma;68%)に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer)を用い、誤差として標準偏差(One Sigma)を用いる。

暦年較正とは、大気中の14C濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の14C濃度の変動、及び半減期の違い(14Cの半減期5730±40年)を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位での表記が通例とされるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正時の再計算、再検討に対応するため、本報告では1年単位で表記している。暦年較正は、測定誤差 $\sigma$ 、 $2\sigma$ 双方の値を計算する。 $\sigma$ は統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、 $2\sigma$ は真の値が95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、 $\sigma$ 、 $2\sigma$ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

### (2) 花粉分析

試料約10gについて、水酸化ナトリウムによる泥化、篩別、重液(臭化亜鉛、比重2.3)による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリス(無水酢酸9:濃硫酸1の混合液)処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

### (3) 植物珪酸体分析

湿重5g前後の試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入してプレパラートを作成する。

400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に

由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および集身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）、およびこれらを含む珪化組織片を近藤（2004）の分類に基づいて同定し、計数する。

結果は、検出された分類群とその個数を一覧表で示す。

#### (4) 微細植物片洗い出し分析

試料（M-13）東壁試料番号6は717g、同試料番号7は916g、J-9南壁試料番号5は570g、を容器に広げ、常温で数日乾燥させる。乾燥後の試料を肉眼やルーペで観察し、目に付いた炭化物や貝類などの遺物を拾い出す。乾燥抽出後の試料を水に満たした容器に投入し、浮いた炭化物をすくい取って回収する。容器を傾斜させて浮いた炭化物を粒径0.5mmの篩に回収する。容器内の残土に水を入れて軽く攪拌した後、容器を傾斜させて回収する作業を炭化物が浮かなくなるまで繰り返す（20-30回程度）。残土を粒径0.5mmの篩を通して水洗する。篩内の試料を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて種実や炭化材などの炭化物を抽出する。

### 3. 結果

#### (1) 放射性炭素年代測定

同位体効果による補正を行った測定結果を表1に示す。II d層（粘土質）の<sup>13</sup>C試料1は1,440±30BP、II e層の<sup>13</sup>C試料2は2,470±30BPである。また、暦年校正結果を表2に示す。測定誤差σの場合の暦年は、<sup>13</sup>C試料1でcalAD603-646、<sup>13</sup>C試料2でcalBC752-520であった。

表1. 放射性炭素年代測定結果

試料名	地点名	層位	種類	補正年代 BP	δ <sup>13</sup> C (‰)	測定年代 BP	Code No.
<sup>13</sup> C試料1	M-13東壁	II d層(粘土質)	炭化物	1,440±30	-26.40±0.65	1,460±30	IAAA-72401
<sup>13</sup> C試料2	J-9南壁	II e層	炭化材	2,470±30	-25.98±0.61	2,490±30	IAAA-72402

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5668年を使用。
- 2) BP年代値は、1950年を基準として何年前であるかを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

表2. 暦年校正結果

試料名	補正年代 (BP)	暦年校正年代 (cal)						相対比	Code No.		
		σ	cal AD	603 -	cal AD	646	cal BP			1,347 -	1,304
<sup>13</sup> C試料1	1,436 ± 31	σ	cal AD	569 -	cal AD	655	cal BP	1,381 -	1,295	1.000	IAAA-72401
		σ	cal BC	752 -	cal BC	686	cal BP	2,702 -	2,636	0.368	
<sup>13</sup> C試料2	2,470 ± 31	σ	cal BC	667 -	cal BC	634	cal BP	2,617 -	2,584	0.183	IAAA-72402
			cal BC	623 -	cal BC	613	cal BP	2,573 -	2,563	0.051	
		cal BC	595 -	cal BC	520	cal BP	2,545 -	2,470	0.398		
		2σ	cal BC	763 -	cal BC	681	cal BP	2,713 -	2,631	0.298	
			cal BC	672 -	cal BC	483	cal BP	2,622 -	2,433	0.611	
		cal BC	466 -	cal BC	415	cal BP	2,416 -	2,365	0.091		

- 1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer) を使用
- 2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。
- 3) 1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年校正曲線や暦年校正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
- 4) 統計的に真の値が入る確率はσは68%、2σは95%である
- 5) 相対比は、σ、2σのそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

## (2) 花粉分析

結果を表3に示す。いずれの試料においても検出される花粉化石数は少なく、定量分析を行うだけの個体数は得られなかった。木本花粉ではマツ属が、草本花粉ではイネ科、ヨモギ属が検出されるものの保存状態は悪く、いずれも花粉外膜が破損・溶解している状態で産出していた。また、ヨモギ属は複数の花粉が固まった状態（花粉塊）のものも検出された。

## (3) 植物珪酸体分析

結果を表4に示す。各試料から検出される植物珪酸体は少なく、30個程度である。保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。

M-13東壁試料番号6では、タケ亜科やウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが認められる。同試料番号7では、ススキ属やイチゴツナギ亜科などが認められる。なお、各試料から検出されたイチゴツナギ亜科の中には、オオムギなどの栽培種を含むオオムギ族に形態が似た植物珪酸体も含まれる。

## (4) 微細植物片洗い出し分析

同定可能な種実は確認されず、植物はM-13東壁試料番号7から最大角3mm程度の炭化材5個（0.01g未満）が検出されるのみであった。植物以外では、J-9南壁試料番号5から二枚貝類1個やサンゴ類の破片7個程度、M-13東壁試料番号6から二枚貝類の破片1個、各試料から砂礫や土粒が確認された。

## 4. 考察

II d層（粘土質）およびII e層に包含されていた炭化材は、それぞれの層の堆積形成過程において取り込まれたものと考えられることから、その放射性炭素年代は、各層の堆積年代に近いが、堆積よりやや以前の年代を示していると考えてよい。今回の結果に従えば、II e層の堆積年代はおよそ2500年前頃、その上位のII d層（粘土質）の堆積年代はおよそ1400年前頃となり、層位的な矛盾はない。ただし、II e層の年代は、同層から数点出土したとされている爪形文土器との年代観よりもはるかに新しい。これについては、より古い時期の包含層からの流れ込みということも考えられる。また、II e層とII d層（粘土質）との間でその層相が異なることから、II e層からII d層（粘土質）への変化は、環境の変化に起因している可能性がある。II d層（粘土質）の色調と粒径から推定すれば、II d層（粘土質）の堆積時の環境は、周辺からの碎屑物の供給がII e層堆積時に比べて少なく、いわゆる安定した状態であったと考えられる。その安定化は、2500年前から1400年前までのある時期に起こったことが推定される。同じII d層である貝塚層がその遺物から弥生時代後期頃推定されるのでこの範囲内に入り調和的である。ただし、現時点では、この変化の原因および局地的なものであるか、ある程度広域的なものかについては不明である。今後、周辺地域における類例の蓄積が必要と考えられる。

一方、今回の分析では、II d層（粘土質）および直上のII d層からは、ともに環境を解析するほどの

表3. 花粉分析結果

種 類	M-13東壁	
	II d	II d (粘土質)
試料番号	6	7
木本花粉		
マツ属	-	1
草本花粉		
イネ科	1	1
ヨモギ属	-	2
シダ類胞子		
シダ類胞子	2	9
合 計		
木本花粉	0	1
草本花粉	1	3
シダ類胞子	2	9
総計	3	13

表4. 植物珪酸体分析結果

種 類	M-13東壁	
	II d	II d (粘土質)
試料番号	6	7
イネ科葉部短細胞珪酸体		
ウシクサ族ススキ属	-	2
イチゴツナギ亜科	20	3
イネ科葉身機動細胞珪酸体		
タケ亜科	2	-
ウシクサ族	2	3
不明	5	20
合 計		
イネ科葉部短細胞珪酸体	20	5
イネ科葉身機動細胞珪酸体	9	23
総 計	29	28

微化石は得られなかった。一般的に花粉やシダ類胞子の堆積した場所が、常に酸化状態にあるような場合、花粉は酸化や土壤微生物によって分解・消失するとされている(中村, 1967; 徳永・山内, 1971; 三宅・中越, 1998など)。よって、今回花粉が検出されなかった理由としては、堆積時に取り込まれた花粉・シダ類胞子が、その後の経年変化により分解・消失したためと考えられる。

検出された花粉化石種類についてみると、木本類ではマツ属が検出される。沖縄にはリュウキュウマツが特産として知られており、現在でも広く生育している。これらのことから、今回の試料もリュウキュウマツの可能性はある。草本類の花粉化石ではイネ科、ヨモギ属が検出される。これらは開けた明るい場所を好む「人里植物」を含む分類群であることから、調査区周辺の草地に生育していたと考えられる。なお、ヨモギ属には花粉塊も認められた。花粉塊は、花粉を持った植物体が混入し、運搬の影響をあまり受けていない場合などに認められることから、局地的な植生を反映していると推測され、調査区の極近傍に生育していた個体由来すると想定される。

植物珪酸体については、亜熱帯湿潤気候下では堆積物中で珪酸分を含む無機成分の溶脱作用が起こる(松井, 1988) こと、また、湿潤な土壌や土壌温度が高い堆積物で植物珪酸体の風化の度合いが高いとされている(近藤, 1988) ことなどから、植物珪酸体の堆積後に溶解や消失が進み、土層中での植物珪酸体の含量が低下したことが考えられる。

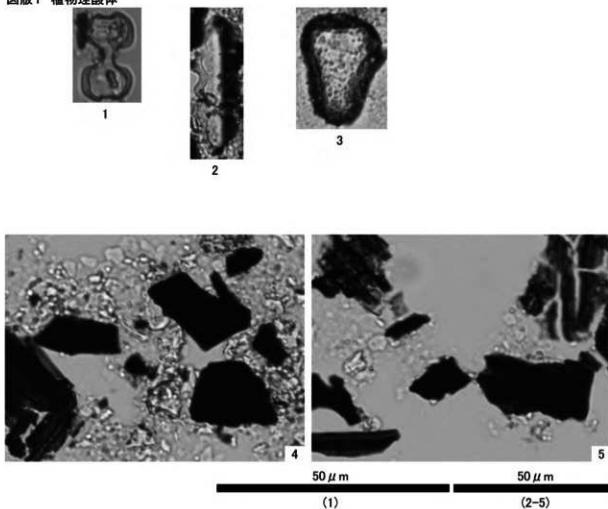
検出された植物珪酸体の分類群からは、少なくとも各層が堆積した頃にタケ亜科やススキ属、イチゴツナギ亜科が生育していたと思われる。イチゴツナギ亜科には、オオムギなどの栽培種を含むオオムギ族に形態が似たものも含まれていた。そのため、オオムギなどの栽培ムギが存在した可能性もある。

いずれにしても、今回の分析では、II d 層(粘土質)が水田層であることを示すような資料は得られなかった。上述したオオムギ栽培の可能性も含めて、今後も、さらに当該期の堆積物や同時期の炭化物を対象とした分析調査により検証することが望まれる。

#### 引用文献

- 近藤 鍊三, 1988, 植物珪酸体 (Opal Phytolith) からみた土壌と年代. ベドロジスト, 32, 189-203.  
近藤 鍊三, 2004, 植物ケイ酸体研究. ベドロジスト, 48, 46-64.  
松井 健, 1988, 土壌地理学序説, 築地書館株式会社, 316p.  
三宅 尚・中越 信和, 1998, 森林土壌に堆積した花粉・胞子の保存状態. 植生史研究, 6, 15-30.  
中村 純, 1967, 花粉分析. 古今書院, 232p.  
徳永 重元・山内 輝子, 1971, 花粉・胞子. 化石の研究法, 共立出版株式会社, 50-73.  
氏家 宏・兼子尚知, 2006, 那覇及び沖縄市南部地域の地質. 地域地質研究報告 (5 万分の 1 図幅), 産総研地質調査総合センター, 48p.

図版1 植物珪酸体



1. ススキ属短細胞珪酸体(M-13東壁 II d層(粘土質):7)
2. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体(M-13東壁 II d層:6)
3. ウシクサ族機動細胞珪酸体(M-13東壁 II d層:6)
4. 状況(鉱物と炭化物が散在)(M-13東壁 II d層:6)
5. 状況(鉱物と炭化物が散在)(M-13東壁 II d層(粘土質):7)

### 附篇 3 鏡水箕隅原C遺跡の年代測定委託業務報告

## 鏡水箕隅原C遺跡の年代測定委託業務報告

### <目次>

はじめに	p. 1
1. 試料	p. 1
2. 分析方法	p. 1
3. 結果と考察	p. 2
引用文献	p. 3

### <表一覧>

表1. 放射性炭素年代測定結果

表2. 暦年校正結果



## はじめに

那覇市に所在する箕原C遺跡は、那覇市南西部の国場川河口よりもさらに西方へ1kmほど離れた海岸低地に位置する。氏家・兼子(2006)による地質図に従えば、遺跡の背後には高尻層群を構成する豊見城層からなる緩やかな丘陵地が広がるが、その縁辺には那覇層とされる石灰岩からなる小丘も分布している。遺跡が位置する低地については、埋め立て地となっており、本来の地形を窺い知ることはできない。ただし、箕原C遺跡および隣接する箕原B遺跡などの発掘調査により、海浜堆積物であるサンゴ礫を多量に含む砂礫層や海浜砂あるいは砂丘砂と考えられる砂層の堆積や、その南側(陸側)には低湿地の堆積物と考えられる腐植質なシルト層や粘土層などが確認され、海岸砂丘や砂丘背後の低湿地などの地形が伏在している可能性のあることが指摘されている。

本報告では、低湿地を形成していたと考えられる堆積物の各層位より出土した炭化物の放射性炭素年代測定を行い、各層の堆積年代に関わる情報を獲得し、箕原C遺跡の地形変遷に関わる資料を作成する。

## 1. 試料

試料は、調査区内各層より出土した炭化材5点である。試料名として、グリッドと層位名が用いられている。各試料の試料名は、K-17II d層、J-7II e層、H-10II f層、L-7地山、L-7東トレンチ地山である。

## 2. 分析方法

根等の目的物と異なる年代を持つと思われるものが混入している場合は、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後HC1による炭酸塩等酸可溶成分の除去、NaOHによる腐植酸等アルカリ可溶成分の除去、HC1によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分の除去を行う(酸・アルカリ・酸処理)。

試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅(II)と銀箔(硫化物を除去するため)を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃(30分)850℃(2時間)で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO2を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO2と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局(NIST)から提供されるシュウ酸(HOX-II)とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定と同時に13C/12Cの測定も行うため、この値を用いて $\delta^{13}C$ を算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma:68%)に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer)を用い、誤差として標準偏差(One Sigma)を用いる。

暦年較正とは、大気中の14C濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の14C濃度の変動、及び半減期の違い(14Cの半減期5730±40年)を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位での表記が通例とされるが、将来的に暦年

校正プログラムや暦年校正曲線の改正時の再計算、再検討に対応するため、本報告では1年単位で表記している。暦年校正は、測定誤差 $\sigma$ 、 $2\sigma$ 双方の値を計算する。 $\sigma$ は統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、 $2\sigma$ は真の値が95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、 $\sigma$ 、 $2\sigma$ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

### 3. 結果と考察

同位体効果による補正を行った測定結果を表1に示す。K-17 II d層は1,490±30BP、J-7 II e層は1,690±40BP、H-10 II f層は6,040±40BP、L-7地山は1,310±30BP、L-7東トレンチ地山は1,350±30BPであった。

また、暦年校正結果を表2に示す。測定誤差 $\sigma$ の場合の暦年は、K-17 II d層で6世紀後半～7世紀初頭、J-7 II e層は3世紀後半～5世紀初頭、H-10 II f層はおよそ6900～6800calBP、L-7地山は7世紀後半～8世紀中頃、L-7東トレンチ地山は7世紀後半であった。なお、暦年校正に関しては、より広範囲の年代幅内に真の年代値を持つ可能性を示すことになることから、確率の程度や他の調査成果等も考慮し検討すべきであると考えられる。

表1. 放射性炭素年代測定結果

試料名	種類	補正年代 BP	$\delta^{13}C$ (‰)	測定年代 BP	Code No.
K-17 II d層 貝塚下	炭化材	1,490±30	-32.34±0.69	1,610±30	IAAA-72834
J-7 II e層 粘土層	炭化材	1,690±40	-36.52±0.74	1,880±40	IAAA-72836
H-10 II f層	炭化材	6,040±40	-26.97±0.76	6,070±40	IAAA-72832
L-7 地山	炭化材	1,310±30	-33.13±0.71	1,440±30	IAAA-72833
L-7 東トレンチ 地山	炭化材	1,350±30	-31.62±0.76	1,460±30	IAAA-72835

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5688年を使用。
- 2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差 $\sigma$  (測定値の68%が入る範囲) を年代値に換算した値。

表2. 暦年校正結果

試料名	補正年代 (BP)	暦年校正年代 (cal)				相対比	Code No.
		$\sigma$	$2\sigma$	cal AD	cal BP		
K-17 II d層 貝塚下	1,492±29	$\sigma$	cal AD 550 - cal AD 603	cal BP 1,400 - 1,347	1.000	IAAA-72834	
		$2\sigma$	cal AD 467 - cal AD 481 cal AD 534 - cal AD 643	cal BP 1,483 - 1,469 cal BP 1,416 - 1,307	0.017 0.983		
J-7 II e層 粘土層	1,690±36	$\sigma$	cal AD 263 - cal AD 277 cal AD 331 - cal AD 406	cal BP 1,687 - 1,673 cal BP 1,619 - 1,544	0.123 0.877	IAAA-72836	
		$2\sigma$	cal AD 255 - cal AD 422	cal BP 1,695 - 1,528	1.000		
H-10 II f層	6,042±43	$\sigma$	cal BC 4,999 - cal BC 4,896 cal BC 4,866 - cal BC 4,851	cal BP 6,949 - 6,846 cal BP 6,816 - 6,801	0.895 0.105	IAAA-72832	
		$2\sigma$	cal BC 5,053 - cal BC 4,830 cal BC 4,814 - cal BC 4,806	cal BP 7,003 - 6,780 cal BP 6,764 - 6,756	0.992 0.008		
L-7 地山	1,306±33	$\sigma$	cal AD 664 - cal AD 710 cal AD 747 - cal AD 766	cal BP 1,286 - 1,240 cal BP 1,203 - 1,184	0.708 0.292	IAAA-72833	
		$2\sigma$	cal AD 658 - cal AD 730 cal AD 735 - cal AD 772	cal BP 1,292 - 1,220 cal BP 1,215 - 1,178	0.681 0.319		
L-7 東トレンチ 地山	1,352±32	$\sigma$	cal AD 648 - cal AD 681 cal AD 622 - cal AD 626	cal BP 1,302 - 1,269 cal BP 1,328 - 1,324	1.000 0.006	IAAA-72835	
		$2\sigma$	cal AD 632 - cal AD 714 cal AD 744 - cal AD 768	cal BP 1,318 - 1,236 cal BP 1,206 - 1,182	0.912 0.082		

- 1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.02 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer) を使用
- 2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。
- 3) 1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年校正曲線や暦年校正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
- 4) 統計的に真の値が入る確率は $\sigma$ は68%、 $2\sigma$ は95%である
- 5) 相対比は、 $\sigma$ 、 $2\sigma$ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

今回の結果に従えば、層位名が与えられている、II f層の堆積年代は、同位体補正を行ったもので、およそ6000年前頃、II e層が1700年前頃、II d層が1500年前頃となり、層位的な矛盾はない。また、L-7地山層は、共に1300年前頃の値を示している。

これまでの箕隅原C遺跡の放射性炭素年代測定により与えられた堆積年代は、II f層で、6100年前頃、II d層で1400年頃前の値を示しており、今回の結果と概ね調和している。II e層については、2500年前頃の値を示し、今回の結果と離れたものになるが、流れ込み等の可能性も想定されることから、少なくとも1700年以前の堆積層ということが推定される。一方、今回、地山層（直上）は、共に1300年前頃の年代値が与えられたが、層位的詳細は不明で、地山層上位層の認識と共に検討が必要と考える。

今回の測定結果で、各層の堆積年代が明らかになってきた。今後も年代値の蓄積を行なうと共に、この結果をふまえた地形・層序の検討および遺跡の古環境に関する総合的な検討が期待される。

#### 引用文献

氏家 宏・兼子尚知，2006，那覇及び沖縄市南部地域の地質。地域地質研究報告（5万分の1図幅），産総研地質調査総合センター，48p.



#### 附篇 4 鏡水箕隅原 C 遺跡の年代測定委託業務報告

## 鏡水箕隅原C遺跡の年代測定委託業務報告

### <目次>

はじめに	p. 1
1. 試料	p. 1
2. 分析方法	p. 1
3. 結果	p. 2
引用文献	p. 2

### <表一覧>

表1. 放射性炭素年代測定結果

表2. 暦年校正結果

## はじめに

那覇市に所在する箕隅原C遺跡は、那覇市南西部の国場川河口よりもさらに西方へ1kmほど離れた海岸低地に位置する。氏家・兼子（2006）による地質図に従えば、遺跡の背後には島尻層群を構成する豊見城層からなる緩やかな丘陵地が広がるが、その縁辺には那覇層とされる石灰岩からなる小丘も分布している。遺跡が位置する低地については、埋め立て地となっており、本来の地形を窺い知ることはできない。ただし、箕隅原C遺跡および隣接する箕隅原A遺跡などの発掘調査により、海浜堆積物であるサンゴ礫を多量に含む砂礫層や海浜砂あるいは砂丘砂と考えられる砂層の堆積や、その南側（陸側）には低湿地の堆積物と考えられる腐植質なシルト層や粘土層などが確認され、海岸砂丘や砂丘背後の低湿地などの地形が伏在している可能性のあることが指摘されている。

本報告では、発掘調査によりIIc層および白砂層から採取された炭化材を対象として、放射性炭素年代測定を行い、箕隅原C遺跡の年代に関わる資料を作成する。

## 1. 試料

試料は、P-10 IIc層、N-16 IIc層、H-11 白砂層、I-14 白砂層で検出された炭化材4点である。試料には試料番号1～4を付す。

## 2. 分析方法

土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅（II）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃（30分）850℃（2時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO<sub>2</sub>を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO<sub>2</sub>と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした<sup>14</sup>C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-II）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>Cの測定も行うため、この値を用いてδ<sup>13</sup>Cを算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV.5.02（Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。暦年較正とは、大気中の<sup>14</sup>C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の<sup>14</sup>C濃度の変動、及び半減期の違い（<sup>14</sup>Cの半減期5,730±40年）を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表している。較正には北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いる。また、暦年較正は測定誤差σ、2σ双方の値を計算する。σは統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、2σは真の値が95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、σ、2σの範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

### 3. 結果

同位体効果による補正を行った測定結果を表1に示す。試料番号1は190±30BP、試料番号2は280±30BP、試料番号3は340±30BP、試料番号4は2,420±40BPを示した。表2には暦年校正結果を示す。測定誤差を $\sigma$ として計算させた結果、試料番号1の暦年代はcalAD1,665-1,951、試料番号2の暦年代はcalAD1,523-1,656、試料番号3の暦年代はcalAD1,492-1,633、試料番号4の暦年代はcalBC706-408であった。これに従えば、試料1が17世紀中頃～20世紀中頃、試料2が16世紀前半～17世紀中頃、試料3が15世紀末～17世紀前半の年代幅を示す。試料4は約2600～2300年前の値を示すことから、縄文時代晩期に属すると考えられる。

表1. 放射性炭素年代測定結果

試料番号	地点名	層位	試料の質	補正年代	$\delta^{13}C$	測定年代	Code No.	測定機関番号
1	P-10	Ⅱc層	炭化材	190±30	-24.76±0.64	180±30	10436-1	IAAA-B3221
2	N-16	Ⅱc層	炭化材	280±30	-28.43±0.45	340±30	10436-2	IAAA-B3222
3	H-11	白砂層	炭化材	340±30	-26.16±0.49	360±30	10436-3	IAAA-B3223
4	I-14	白砂層	炭化材	2,420±40	-25.75±0.42	2,440±30	10436-4	IAAA-B3224

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
- 2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差 $\sigma$  (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

表2. 暦年校正結果

試料名	補正年代 (BP)	暦年校正年代 (cal)				相対比	Code No.
		$\sigma$	$2\sigma$	cal AD	cal BC		
1	185±29	$\sigma$	cal AD 1,665 - cal AD 1,682	cal BP 285 - 268	0.199	10436-1	
			cal AD 1,737 - cal AD 1,784	cal BP 213 - 166	0.513		
			cal AD 1,795 - cal AD 1,804	cal BP 155 - 146	0.094		
			cal AD 1,936 - cal AD 1,951	cal BP 14 - 1	0.194		
			cal AD 1,651 - cal AD 1,684	cal BP 299 - 256	0.222		
		$2\sigma$	cal AD 1,727 - cal AD 1,813	cal BP 223 - 137	0.575		
			cal AD 1,839 - cal AD 1,841	cal BP 111 - 109	0.002		
			cal AD 1,854 - cal AD 1,858	cal BP 96 - 92	0.004		
			cal AD 1,862 - cal AD 1,866	cal BP 88 - 84	0.004		
			cal AD 1,918 - cal AD 1,952	cal BP 32 - 2	0.192		
2	283±31	$\sigma$	cal AD 1,523 - cal AD 1,572	cal BP 427 - 378	0.604	10436-2	
			cal AD 1,630 - cal AD 1,656	cal BP 320 - 294	0.396		
		$2\sigma$	cal AD 1,495 - cal AD 1,507	cal BP 455 - 443	0.021		
			cal AD 1,511 - cal AD 1,601	cal BP 439 - 349	0.590		
			cal AD 1,616 - cal AD 1,665	cal BP 334 - 285	0.373		
			cal AD 1,785 - cal AD 1,793	cal BP 165 - 157	0.016		
			cal AD 1,492 - cal AD 1,527	cal BP 458 - 423	0.323		
			cal AD 1,554 - cal AD 1,602	cal BP 396 - 348	0.474		
			cal AD 1,612 - cal AD 1,633	cal BP 338 - 317	0.203		
			cal AD 1,474 - cal AD 1,640	cal BP 476 - 310	1.000		
3	336±29	$\sigma$	cal BC 706 - cal BC 695	cal BP 2,656 - 2,645	0.062	10436-3	
			cal BC 539 - cal BC 408	cal BP 2,489 - 2,358	0.938		
			cal BC 750 - cal BC 687	cal BP 2,700 - 2,637	0.186		
			cal BC 666 - cal BC 642	cal BP 2,616 - 2,592	0.054		
			cal BC 593 - cal BC 401	cal BP 2,543 - 2,351	0.760		
		$2\sigma$	cal BC 706 - cal BC 695	cal BP 2,656 - 2,645	0.062		
			cal BC 539 - cal BC 408	cal BP 2,489 - 2,358	0.938		
			cal BC 750 - cal BC 687	cal BP 2,700 - 2,637	0.186		
			cal BC 666 - cal BC 642	cal BP 2,616 - 2,592	0.054		
			cal BC 593 - cal BC 401	cal BP 2,543 - 2,351	0.760		

- 1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer) を使用
- 2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。
- 3) 1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年校正曲線や暦年校正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
- 4) 統計的に真の値が入る確率は $\sigma$ は68%、 $2\sigma$ は95%である
- 5) 相対比は、 $\sigma$ 、 $2\sigma$ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

### 引用文献

氏家 宏・兼子尚知, 2006, 那覇及び沖縄市南部地域の地質。地域地質研究報告 (5万分の1図幅), 産総研地質調査総合センター, 48p.



附篇 5 鏡水箕隅原C遺跡の自然科学分析委託業務報告

## 鏡水箕隅原C遺跡の自然科学分析委託業務報告

### <目次>

はじめに	p. 1
1. 試料	p. 1
2. 分析方法	p. 1
(1) 土壌理化学分析・粒度分析	p. 1
(2) 微細植物片洗い出し分析	p. 2
3. 結果	p. 3
(1) 土壌理化学分析・粒度分析	p. 3
(2) 微細植物片洗い出し分析	p. 4
4. 考察	p. 4
引用文献	p. 4

### <表一覧>

表1. 土壌理化学分析および粒度分析結果
----------------------

## はじめに

前報では、発掘調査により推定された砂丘背後の低地に相当すると考えられる調査区において、湿地の堆積物が示唆されるような腐植質の土壌化した層位が認められたことから、その形成環境の推定を目的として、放射性炭素年代測定および花粉、植物珪酸体の各微化石分析さらに種実遺体の検出を目的とした微細植物片洗い出し分析を行った。年代測定により、腐植質の層位は、暦年で7世紀前半頃の堆積年代が推定されたが、微化石および微細植物片の産状は不良であり、それらの結果からは十分な古環境に係わる資料を作成することはできなかった。

本報告では、前報で対象とした腐植質の層位について、土壌理化学分析を行うことにより、その特性を把握し、形成環境特に水田あるいは畑作等の耕作土であった可能性を検討する。また、前回は微細植物片洗い出し分析の対象としなかった腐植質層の上部および前回は別地点の腐植質層について、同分析を行い、その産状を確認する。さらに、近世の滞とされた遺構および不定形不明ビット集中部におけるビットを対象として、生活残渣の検出や用途にかかわる資料の検出を目的とし、微細植物片洗い出し分析を行う。

## 1. 試料

土壌理化学分析の対象とした試料は、前報で微化石分析を行ったM-13東壁の試料である。ここでは、II c層の試料番号1、II d層上部の試料番号3、II d層の試料番号6、およびII d層（粘土質）の試料番号7の合計4点を選択した。また、II d層上部の試料番号3については、微細植物片洗い出し分析を行う。

さらに、M-13南壁で検出された近世の溝の覆土の試料番号3、K-15北畦で認められたII d層（粘土質）の試料番号2、不定形不明ビット集中部ビットより採取された土壌の3点を対象として、微細植物片洗い出し分析を行う。

## 2. 分析方法

### (1) 土壌理化学分析・粒度分析

有機炭素はチューリン法、全窒素は硫酸分解-水蒸気蒸留法、全リン酸は硝酸・過塩素酸分解-バナドモリブデン酸比色法、可給態リン酸はトルオグ法、可給態窒素はリン酸緩衝液抽出-水蒸気蒸留法、リン酸吸収係数は2.5%リン酸アンモニウム液法、粒径組成はピベット法でそれぞれ行った（土壌標準分析・測定法委員会，1986、土壌環境分析法編集委員会，1997）。

以下に各項目の操作工程を示す。

#### 1) 分析試料の調製

試料を風乾後、土塊を軽く崩して2mmの篩でふるい分けをする。この篩通過試料を風乾細土試料とし、分析に供する。また、風乾細土試料の一部を乳鉢で粉砕し、0.5mm篩を全通させ、粉砕土試料を作成する。風乾細土試料については、105℃で4時間乾燥し、分析試料水分を求める。

#### 2) 有機炭素

粉砕土試料0.100~0.500gを100ml三角フラスコに正確に秤りとり、0.4Nクロム酸・硫酸混液10mlを正確に加え、約200℃の砂浴上で正確に5分間煮沸する。冷却後、0.2%フェニルアントラニル酸液を指示薬に0.2N硫酸第一鉄アンモニウム液で滴定する。滴定値および加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの有機炭素量(Org-C乾土%)を求める。これに1.724を乗じて腐植含量(%)を算出する。

### 3) 全窒素

粉碎土試料1.00gをケルダール分解フラスコに秤り、分解剤約3.0gと硫酸10mlを加え加熱分解した。分解後、蒸留水約30mlを加え放冷した後、分解液全量を供試し水蒸気蒸留法によって窒素を定量する。この定量値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの全窒素量(T-N%)を求める。また、有機炭素量を全窒素量で除し、C/N(炭素率)を算出する。

### 4) 全リン酸

粉碎土試料1.00gをケルダールフラスコに秤りとり、はじめに硝酸(HNO<sub>3</sub>)10mlを加えて加熱分解した。放冷後、過塩素酸(HClO<sub>4</sub>)20mlを加えて再び加熱分解を行った。分解終了後、蒸留水で100mlに定容し、ろ過した。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液(バナドモリブデン酸・硝酸液)を加えて分光光度計によりリン酸(P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>)濃度を測定した。この測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量(P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>mg/g)を求める。

### 5) 可給態リン酸

風乾細土試料1.00gを300ml三角フラスコに秤りとり、0.002N硫酸溶液(pH3)200mlを加え、室温で1時間振とうし、ろ過する。ろ液一定量を試験管に採り、混合発色試薬を加えて分光光度計によりリン酸濃度を定量する。この定量値から、試料中の可給態リン酸量(P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>mg/乾土100g)を求める。

### 6) 可給態窒素

風乾細土試料10.00gを100ml三角フラスコにはかり、pH7.0リン酸緩衝液50mlを加え、室温で1時間振とうし、ろ過する。ろ液をケルダール分解し、水蒸気蒸留法によって窒素を測定する。この測定値とから、加熱減量法で求めた試料中の水分量から、乾土あたりの可給態窒素量(Nmg/乾土100g)を求める。

### 7) リン酸吸収係数

乾土として10.00gになるように風乾細土試料を遠沈管にはかり、2.5%リン酸アンモニウム液(pH7.0)20mlを加え、時々振り混ぜながら室温で24時間放置する。乾燥ろ紙を用いてろ過し、そのろ液100μlを50mlメスフラスコに正確にとり、水約35mlとリン酸発色a液10mlを加えて定容し、よく振り混ぜる。発色後30分間放置し、420nmで比色定量する。定量された試料中のリン酸量を2.5%リン酸アンモニウム液(pH7.0)のリン酸量から差引き、リン酸吸収係数を求める。

### 8) 粒度組成(ピベット法)

風乾細土試料10.00gに30%過酸化水素水を加え、熱板上で有機物を分解する。分解終了後、遠心洗浄を行い、脱塩した後、蒸留水約400mlと分散剤(4%ヘキサメタリン酸ナトリウム)10mlを加え、攪拌しながら20分間音波処理を行う。この懸濁液を500ml沈底瓶に移し、蒸留水で500mlに定容する。

沈底瓶を1分間激しく振り、直ちに静置して所定の時間に5cmの深さから懸濁液10mlを採取する。採取懸濁液は蒸発乾固させ、秤量する(シルト・粘土の含量)。さらに、所定の時間が経過した後、沈底瓶から懸濁液を5cmの深さから10ml採取し、蒸発乾固させ、秤量する(粘土含量)。沈底瓶に残ったシルト・粘土はサイフォンを使ってすべて洗い流し、その残査を乾燥・秤量する(砂含量)。これを0.2mmφの篩で篩い分け、篩上の残留物を秤量する(粗砂含量)。これら測定値をもとに粗砂(2.0-0.2mm)・細砂(0.2-0.02mm)・シルト(0.02-0.002mm)・粘土(0.002mm以下)4成分の合計を100とする各成分の重量%を求め、国際法によって土性区分を行う。

### (2) 微細植物片洗い出し分析

試料(ピットは1kg、他は0.5kg)を容器に広げ、常温で数日乾燥させる。乾燥後の試料を肉眼やルーペで観察し、目に付いた炭化物や貝類などの遺物を拾い出す。乾燥抽出後の試料を水を満たした容器に

投入し、浮いた炭化物をすくい取って回収する。容器を傾斜させて浮いた炭化物を粒径0.5mmの篩に回収する。容器内の残土に水を入れて軽く攪拌した後、容器を傾斜させて回収する作業を炭化物が浮かなくなるまで繰り返す(20-30回程度)。残土を粒径0.5mmの篩を通して水洗する。

篩内の試料を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて種実や炭化材などの炭化物を抽出する。分析後は、炭化材、貝類、残渣を70℃48時間乾燥後、容器に入れ返却する。

### 3. 結果

#### (1) 土壌理化学分析・粒度分析

土壌理化学分析結果を表1に示す。土壌の生産力を評価する上で、土壌中の有機物量を無視することはできないが、土壌有機物を直接測定することは難しい。そのため、土壌有機物量の指標としては、全炭素、全窒素量およびリン酸含量も指標とされる。分析結果では、下位の試料ほど有機炭素量および腐植含量の多い傾向が認められ、IIc層では有機炭素量が約0.3%、腐植含量が約0.5%であるが、II d層(粘土質)では有機炭素量は約0.9%、腐植含量は約1.6%を示す。全窒素量についても同様の傾向が認められ、IIc層は0.05%、II d層(粘土質)は0.09%である。C/N比も下位ほど高い値を示し、IIc層では6、II d層(粘土質)では10を示す。土壌有機物は作物の生育基盤となる土壌の物理性や化学性、生物性を改善し、生育や収量を高める効果を担うことから、一般的には腐植に換算して2%以下の土壌では有機物を施与するなどの改良が必要とされる。この観点からすると、腐植含量の最も高いII d層(粘土質)においても、作物が生育する基盤としては若干有機物量が不足しているといえる。

一方、生産力評価における養分豊否の指標としては、可給態リン酸量および可給態窒素が目安とされる。地力増進の基本的技術対策における可給態リン酸の改善目標値は10mg/100g以上とされ、可給態窒素の改善目標値は水田土壌で8~20mg/100g、普通畑土壌で5mg/100g以上とされている(鬼駈, 1985)。この基準からみれば、IIc層からII d層(粘土質)までいずれの層位も可給態リン酸量の改善目標値を満足しており、特にII d層で高い値を示している。可給態窒素量は、IIc層とII d層上部で約1mg/100g、II d層とII d層(粘土質)で約2mg/100gであり、いずれの層位も上記の改善目標値が満たされていない。

全リン酸量は、II d層上部およびII d層で最も高く、7 P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>mg/g前後の値を示し、次いでIIc層が約5 P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>mg/gであり、II d層(粘土質)は約3 P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>mg/gである。土壌中に普通に含まれるリン酸量については、いくつかの報告事例(Bowen, 1983; Bolt・Bruggenwert, 1980; 川崎ほか, 1991; 天野ほか, 1991など)があり、これらの事例から推定される天然賦存量の上限は約3.0 P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>mg/g程度である。したがって、今回分析したいずれの層位も天然賦存量を超えるリン酸量を含有している。また、リン酸吸収係数は、IIc層で最も低く500mg/100gであり、II d層およびII d層(粘土質)で最も高く、約800mg/100gを示す。渡嘉敷(1993)に示された島尻マージの平均的な値は1000mg/100g前後とされているが、今回の各層位の値は、島尻マージの平均値よりも有意に低い。

粒径組成は、IIc層とII d層上部がともに粗砂の多い砂質壤土に分類され、II d層およびII d層(粘土質)は粘土分の多い軽粘土に分類された。ただし、II d層は粗砂、細砂、シルトがいずれも20%台を

表1. 土壌理化学分析および粒度分析結果

地点名	試料番号	層位	土色	有機炭素 (%)	腐植 (%)	全窒素 (%)	C/N	全リン酸 (mg/g)	可給態 リン酸 (mg/100g)	可給態 窒素 (mg/100g)	有機 吸収係数 (mg/100g)	粒 径 組 成				
												粗砂 (%)	細砂 (%)	シルト (%)	粘土 (%)	土性 (%)
M-13 東型	1	IIc	2.5Y5/4 黄褐	0.30	0.52	0.05	6	5.13	29.7	1.3	500	71.2	6.2	6.7	19.9	SCL
	3	II d上部	2.5Y4/3 オリーブ褐	0.56	0.97	0.06	9	7.59	51.2	1.0	730	58.4	11.4	10.5	19.7	SCL
	6	II d	2.5Y3/3 暗オリーブ褐	0.83	1.43	0.09	9	6.73	70.1	2.2	830	25.7	20.4	23.0	30.9	LC
	7	II d(粘土質)	2.5Y3/2 黒褐	0.94	1.62	0.09	10	3.23	35.9	2.5	800	2.2	24.8	32.1	40.9	LC

注. (1) 土色: マンセル表色系に準じた新改訂準土色誌(農林省農林水産庁産産会編纂, 1987)による。

(2) 粒径組成: SCL, 砂質壤土(砂: 65~85% シルト: 10~20% 粘土: 15~25%), LC 軽壤土(砂: 10~55% シルト: 10~45% 粘土: 25~45%)

占めるが、II d 層（粘土質）は粗砂は約 2% 程しか含まず、シルトが約 30%、粘土が約 40% である。この粗砂の含有量の少なさと実際に最も多く含まれる粘土の含有量は、特に「粘土質」とした層相の由来となっている。

#### (2) 微細植物片洗い出し分析

種実確認されず、炭化材が M-13 東壁 II d 層上部試料番号 3 から 0.01g 未満（最大角 1 mm）、M-13 南壁近世の溝試料番号 3 から 0.01g 未満（最大角 1.5 mm）、K-15 北壁 II d 層（粘土質）試料番号 2 から 0.05g（最大角 4.5 mm）、不定形不明ピット集中部ピットから 0.01g（最大角 3.5 mm）検出されるのみであった。これらの結果からは、特に環境等の推定をすることはできない。また、別途、遺物整理時に検出された炭化物は、「N-11・PitNo. 1・III b' 層」が炭化材であり、「L-12・II d 層」がマメ科の種子（半分）である。

なお、植物以外では、動物遺存体（多量の貝類（巻貝、二枚貝）や、骨片、ウニ類の棘、サンゴ類など）や、土器（M-13 東壁試料番号 3）などが確認された。

#### 4. 考察

土壌理化学分析の結果より、II c 層から II d 層（粘土質）までの全層位において、現在の耕作土と比べても十分な量を含有する可給態リン酸量と天然賦存量を超える全リン酸量が確認された。加えてこれらの層位では、島尻マージの平均値に比べると有意に低いリン酸吸収係数の値を示した。これらの特徴から、II c 層から II d 層（粘土質）までの層位では、施肥等によるリン酸の富化があった可能性があると考えられる。発掘調査所見では、II d 層の下位の II d 層（粘土質）が耕作土である可能性が指摘されたが、可給態リン酸量と全リン酸量が最も高い層位は、II d 層上部および II d 層であることから、この層位での耕作が行われたことが推定される。

今回の分析では、現在の耕作土に比べると腐植含量の少なさが指摘された。今後は、この問題も含めて、さらに耕作地の広がり等も想定する場合には、多数の地点における分析結果が必要である。これらと比較検討することにより、より詳細な土地利用状況の検討が可能になると考えられる。

#### 引用文献

- 天野 洋司・太田 健・草場 敬・中井 信, 1991, 中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量。土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発。農林水産省農林水産技術会議事務局編, 28-36。
- Bowen, H. J. M., 1979, Environmental Chemistry of Elements. [浅見暉男・茅野充男（訳）, 1983, 環境無機化学, 元素の循環と生化学, 博友社, 297p.]
- Bolt, G. H. & Bruggenwert, M. G. M., 1976, SOILCHEMISTRY. [岩田進午・三輪睿太郎・井上隆弘・脇捷行（訳）, 1980, 土壌の化学。学会出版センター, 309p.]
- 土壌環境分析法編集委員会編, 1997, 土壌環境分析法。博友社, 427p。
- 土壌標準分析・測定法委員会編, 1986, 土壌標準分析・測定法。博友社, 354p。
- 川崎 弘・吉田 滯・井上 恒久, 1991, 九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量。土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発。農林水産省農林水産技術会議事務局編, 23-27。
- 農林省農林水産技術会議事務局監修, 1967, 新版標準土色帖。
- 小川 吉雄・加藤 弘道・石川 実, 1989, リン酸緩衝液抽出による可給態窒素の簡易測定法。土肥誌, 60, 160-163。
- 鬼駱 豊, 1985, 土壌・水質・農業資材の保全。博友社, 316p。
- ペドロジスト懇談会編, 1984, 土壌調査ハンドブック。博友社, 156p。
- 渡嘉敷 義浩, 1993, 沖縄に分布する島尻マージおよびジャガルの土壌特性。ペドロジスト, 37, 99-112。

附篇 6 鏡水箕隅原C遺跡の年代測定委託業務報告

## 鏡水箕隅原C遺跡の年代測定委託業務報告

### <目次>

はじめに	p. 1
1. 試料	p. 1
2. 分析方法	p. 1
3. 結果	p. 2

### <図表・図版一覧>

表1. 放射性炭素年代測定結果

表2. 暦年校正結果



## はじめに

那覇市南西部の海岸低地に位置する箕隅原C遺跡では、縄文時代早期および中期相当期の遺物包含層や縄文時代前期相当期および弥生～平安時代相当期の貝塚などが確認され、グスク時代の遺構・遺物も検出されている。本報告では、調査区内で確認された堆積物の各層位より出土した炭化物の放射性炭素年代測定を行い、各層の堆積年代に関わる情報を獲得し、箕隅原C遺跡における年代資料を作成する。

## 1. 試料

試料は、調査区内各層より出土した炭化材3点である。試料名として、層位名とグリッドおよび遺構名等が用いられている。各試料の試料名は、IIIb層N-9PitNo. 12、IIIa層M-14西側畦、IIe層J-8南側トレンチである。

## 2. 分析方法

土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後HC1により炭酸塩等酸可溶成分を除去、NaOHにより腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HC1によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理）。

試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅（II）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃（30分）850℃（2時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO<sub>2</sub>を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO<sub>2</sub>と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした<sup>14</sup>C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-II）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>Cの測定も行うため、この値を用いて $\delta^{13}C$ を算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02（Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。暦年較正とは、大気中の<sup>14</sup>C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の<sup>14</sup>C濃度の変動、及び半減期の違い（<sup>14</sup>Cの半減期5,730±40年）を較正することである。暦年較正は、CALIB 5.02のマニュアルにしたがい、1年単位まで表された同位体効果の補正を行った年代値を用いて行う。また、北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用い、測定誤差 $\sigma$ 、2 $\sigma$ 双方の値を計算する。 $\sigma$ は統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、2 $\sigma$ は真の値が95%の確率で存在する範囲である。表中の相対比とは、 $\sigma$ 、2 $\sigma$ の範囲をそれぞれとした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したも

のである。校正された暦年代は、将来的に暦年較正曲線等の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表された値を記す。

### 3. 結果

同位体効果による補正を行った測定結果を表1に示す。IIIb層N-9PitNo.12は2,080±30BP、IIIa層M-14西側畦は370±20BP、IIe層J-8南側トレンチは1,360±20BPであった。

また、暦年較正結果を表2に示す。測定誤差σの場合の暦年は、IIIb層N-9PitNo.12でcalBC156-53、IIIa層M-14西側畦はcalAD1464-1618、IIe層J-8南側トレンチはcalAD642-662であった。IIIb層N-9PitNo.12の暦年代は、現在の年代観では概ね本土の弥生時代中期後半頃に相当し、IIe層J-8南側トレンチの暦年代は沖繩貝塚時代後期、IIIa層M-14西側畦の暦年代は第一尚氏時代末から第二尚氏時代後期までの範囲に相当する。

表1. 放射性炭素年代測定結果

層位	試料番号等	グリッド	遺構名等	種類	補正年代 BP	δ13C (‰)	測定年代 BP	Code No.
IIIb	061219-166	N-9	PitNo.12	炭化材	2,080±30	-28.36±0.59	2,140±20	IAAA-91573
IIIa	061218-69	M-14	西側畦	炭化材	370±20	-21.38±0.46	310±20	IAAA-91574
IIe	—	J-8	南側トレンチ	炭化材	1,360±20	-26.25±0.42	1,380±20	IAAA-91575

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
- 2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差σ(測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

表2. 暦年較正結果

グリッド	遺構名等	補正年代 (BP)	暦年較正年代 (cal)				相対比	Code No.
N-9	PitNo.12	2,083±25	σ	cal BC 156 - cal BC 135	cal BP 2,106 - 2,085	0.230	IAAA-91573	
			2σ	cal BC 115 - cal BC 53	cal BP 2,065 - 2,003	0.770		
M-14	西側畦	365±23	σ	cal BC 176 - cal BC 42	cal BP 2,126 - 1,992	1.000	IAAA-91574	
			σ	cal AD 1,464 - cal AD 1,518	cal BP 486 - 432	0.673		
			σ	cal AD 1,594 - cal AD 1,618	cal BP 356 - 332	0.327		
			2σ	cal AD 1,452 - cal AD 1,524	cal BP 498 - 426	0.574		
J-8	南側トレンチ	1,385±24	σ	cal AD 1,558 - cal AD 1,631	cal BP 392 - 319	0.426	IAAA-91575	
			σ	cal AD 642 - cal AD 662	cal BP 1,308 - 1,288	1.000		
			σ	cal AD 613 - cal AD 669	cal BP 1,337 - 1,281	1.000		
			2σ	cal AD 613 - cal AD 669	cal BP 1,337 - 1,281	1.000		

- 1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer) を使用
- 2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。
- 3) 1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
- 4) 統計的に真の値が入る確率はσは68%、2σは95%である
- 5) 相対比は、σ、2σのそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

附篇 7 鏡水箕隅原C遺跡の自然科学分析委託業務報告

## 鏡水箕隅原C遺跡の自然科学分析委託業務報告

### <目次>

はじめに	p. 1
1. 試料	p. 1
2. 分析方法	p. 1
(1) 放射性炭素年代測定	p. 1
(2) 微細物洗い出し分析	p. 2
(3) 灰像分析	p. 2
3. 結果	p. 2
(1) 放射性炭素年代測定	p. 2
(2) 微細物洗い出し分析	p. 3
(3) 灰像分析	p. 4
4. 考察	p. 4
(1) 遺構の年代観	p. 4
(2) 遺構の用途	p. 4
引用文献	p. 4

### <表一覧>

- 表1. 分析試料
- 表2. 放射性炭素年代測定結果
- 表3. 暦年校正結果
- 表4. 微細物洗い出し・分類結果

## はじめに

那覇市南西部の海岸低地に位置する箕隅原C遺跡では、縄文時代早期および中期相当期の遺物包含層や縄文時代前期相当期および弥生～平安時代相当期の貝塚などが確認され、グスク時代の遺構・遺物も検出されている。本報告では、爪形文系土器の縄文時代前期に相当すると考えられている堆積物を対象として、炭化物の放射性炭素年代測定と、炭化種実や炭化材の抽出を目的とした微細物洗い出し分析、燃料材や植生に関する情報を得るための灰像分析を行い、遺構の年代と用途に関わる資料を作成する。

## 1. 試料

試料は、調査区内の焼土を含む炉跡などから採取された土壌4点で、表1の通り、放射性炭素年代測定、灰像分析、微細物洗い出し分析を行った。発掘調査所見では、縄文時代早期～前期の爪形文系土器出土層位相当と考えられている。

表1. 分析試料

グリッド	層序	位置	遺構	試料採取日	年代測定	灰像	洗い出し	備考
J-8	—	—	焼土遺構No.1	2005/12/25	○	○	○	焼土No.1
J-8	—	—	焼土遺構No.3	2005/12/22			○	
K-6	II f	東畦	炉跡 1	2005/12/28			○	北から1m付近、東から25cm炉跡内
K-7	II f	北畦		2005/12/28	○	○	○	灰?サンプル土

## 2. 分析方法

## (1) 放射性炭素年代測定

土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後HClにより炭酸塩等酸可溶成分を除去、NaOHにより腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理）。

試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅（II）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃（30分）850℃（2時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO<sub>2</sub>を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO<sub>2</sub>と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生産する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした<sup>14</sup>C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-II）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定と同時に<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>Cの測定も行うため、この値を用いてδ<sup>13</sup>Cを算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma；68%）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0（Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、誤差

として標準偏差 (One Sigma) を用いる。暦年較正とは、大気中の<sup>14</sup>C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の<sup>14</sup>C濃度の変動、及び半減期の違い (<sup>14</sup>Cの半減期5,730±40年) を較正することである。暦年較正は、CALIB 5.02のマニュアルにしたがい、1年単位まで表された同位体効果の補正を行った年代値を用いて行う。また、北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用い、測定誤差 $\sigma$ 、 $2\sigma$ 双方の値を計算する。 $\sigma$ は統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、 $2\sigma$ は真の値が95%の確率で存在する範囲である。表中の相対比とは、 $\sigma$ 、 $2\sigma$ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。較正された暦年代は、将来的に暦年較正曲線等の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表された値を記す。

## (2) 微細物洗い出し分析

試料約0.5kgを容器に広げ、常温で数日乾燥させる。乾燥後の試料を肉眼やルーペで観察し、炭化物や動物遺存体などの遺物を拾い出す。乾燥抽出後の試料を水を満たした容器に投入し、浮いた炭化物をすくい取って回収する。容器を傾斜させて浮いた炭化物を粒径0.5mmの篩に回収する。容器内の残土に水を入れて軽く攪拌した後、容器を傾斜させて回収する作業を炭化物が浮かなくなるまで繰り返す(20-30回程度)。残土を粒径0.5mmの篩を通して水洗する。篩内の試料を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて種実や炭化材、動物遺存体などの遺物を抽出する。抽出された炭化材と動物遺存体は、個数と70℃48時間乾燥後の重量、最大径を表示した後、一部を同定対象とする。分析後は、抽出物と分析残渣を容器中で保存する。

## (3) 灰像分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム, 比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、ブリュワックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を、近藤(2010)の分類を参考に同定し、計数する。

## 3. 結果

### (1) 放射性炭素年代測定

同位体効果による補正を行った測定結果を表2に示す。J-8焼土遺構No.1は5,860±30BP、K-7北畦II f層は6,360±40BPであった。また、暦年較正結果を表3に示す。測定誤差 $\sigma$ の場合の暦年は、J-8焼土遺構No.1がcalBC4, 776-4, 695、K-7北畦II f層がcalBC5, 374-5, 304であった。

表2. 放射性炭素年代測定結果

試料名	種類	補正年代 BP	$\delta^{13}C$ (‰)	測定年代 BP	Code No.
J-8 焼土遺構No.1	炭化材	5,860±30	-22.42±0.73	5,810±30	IAAA-102116
K-7 北畦 II f層	炭化材	6,360±40	-23.58±0.59	6,330±30	IAAA-102117

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
- 2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差 $\sigma$ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

表3. 暦年校正結果

試料名	補正年代 (BP)	暦年校正年代 (cal)								相対比	Code No.
		$\sigma$	cal BC 4,776	-	cal BC 4,695	cal BP 6,726	-	6,645	1.000		
J-8 焼土 遺構 No.1	5,856 ± 32	$2\sigma$	cal BC 4,797	-	cal BC 4,654	cal BP 6,747	-	6,604	0.958	IAAA-102116	
			cal BC 4,639	-	cal BC 4,617	cal BP 6,589	-	6,567	0.042		
K-7 北畦 II f層	6,357 ± 36	$\sigma$	cal BC 5,374	-	cal BC 5,304	cal BP 7,324	-	7,254	1.000	IAAA-102117	
		$2\sigma$	BC 5,467	-	cal BC 5,402	cal BP 7,417	-	7,352	0.166		
			cal BC 5,387	-	cal BC 5,295	cal BP 7,337	-	7,245	0.771		
			BC 5,264	-	cal BC 5,227	cal BP 7,214	-	7,177	0.064		

- 1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer) を使用
- 2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。
- 3) 1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年校正曲線や暦年校正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
- 4) 統計的に真の値が入る確率は $\sigma$ は68%、 $2\sigma$ は95%である
- 5) 相対比は、 $\sigma$ 、 $2\sigma$ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

## (2) 微細物洗い出し分析

結果を表4に示す。全試料を通じて、炭化材と動物遺存体が検出された。分析残渣は、サンゴ類などの動物遺存体の微細片を含む砂礫主体である。

炭化材は、J-8焼土遺構No.1、J-8焼土遺構No.3とK-7北畦II f層は0.01g以下と微量で、K-6東畦II f層炉跡1から最も多く検出された (109個; 0.03 g)。炭化材の最大径は4.8mmを測る。殆どが微細で組織観察不可能であるが、この中から比較的大きくて組織観察可能と判断された4個を樹種同定対象とし、木口面 (柎目と板目は、断面を作製することができなかった) のみ観察を実施した。4個とも道管を有することから広葉樹であるが、微細で道管配列が観察できないため、種類は不明であった。

動物遺存体は、骨片、巻貝類を含む貝類、ウニ類の棘などが検出された。J-8焼土遺構No.1、J-8焼土遺構No.3では貝類やウニ類が多く、K-6東畦II f層炉跡1とK-7北畦II f層では骨片が多い。骨片を対象に同定を実施した結果、J-8焼土遺構No.1からは魚類の鰭棘等が2個、イノシシの白歯片が1個、哺乳類の不明破片が8個、J-8焼土遺構No.3からはブダイ類?の咽頭歯?が1個、焼骨の特徴を示す哺乳類の不明破片が1個、K-6東畦II f層炉跡1からは魚類の鰭棘等が7個、焼骨の特徴を示す鰭棘等が4個、ネズミ類?の尾椎?が1個、哺乳類の近位端未化石外れの中手骨/中足骨 (遠位端欠) が1個、哺乳類の不明破片が35個、K-7北畦II f層からはペラ科の上咽頭骨が1個、魚類の椎骨が1個、鰭棘等が12個、哺乳類の四肢骨が4個、哺乳類の不明破片が46個確認された。

表4. 微細物洗い出し・分類結果

試料名	試料位置	試料種類	試料情報		動物遺存体																	
			試料量	試料容積	骨 片				鳥 類				魚 類				哺乳 類					
			個数	容積	最大径	種類	最大径	種類	最大径	種類	最大径	種類	最大径	種類	最大径	種類	最大径	種類				
J-8	焼土遺構No.1	4個	-	<0.01g	23mm	11個	鳥類	鰭棘等	2個	1.1g	13.0mm	40個	5.0g	2.0mm	2.0mm	0.5g	7.0mm	48個	0.1g	4.0mm	102.2g	915.9g
							イノシシ (臼歯)	1個	イノシシ (臼歯)													
J-8	焼土遺構No.3	8個	-	<0.01g	1.0mm	10個	鳥類	鰭棘等	1個	0.17g	8.2mm	41個	0.7g	3.0mm	0.3mm	1.2g	15.0mm	38個	0.1g	0.3mm	278.5g	913.11g
							イノシシ (臼歯)	1個	イノシシ (臼歯)													
K-6	東畦	炉跡1	10.0g	試料 (4個)	0.03g	4.0mm	48個	鳥類	鰭棘等	7個	13.2g	40.7mm	-	-	1.0mm	1.2g	14.0mm	19個	0.2g	0.3mm	226.14g	914.44g
								イノシシ (臼歯)	4個	イノシシ (臼歯)												
K-7	北畦	II f層	12個	-	0.01g	2.0mm	94個	鳥類	鰭棘等	1個	7.1g	30.0mm	8個	0.1g	2.0mm	0.0mm	0.0mm	14個	0.2g	0.2mm	114.7g	912.04g
								イノシシ (臼歯)	12個	イノシシ (臼歯)												

### (3) 灰像分析

各試料からは、植物珪酸体が検出されない。分析プレパラート内には、鉱物粒子や炭化物粒子が散在する。

## 4. 考察

### (1) 遺構の年代観

爪形文系土器の年代に相当すると考えられているピットの堆積物より得られた炭化材の放射性炭素年代は、J-8焼土遺構No.1は $5,860 \pm 30BP$ 、K-7北畦Ⅱf層は $6,360 \pm 40BP$ を示した。伊藤（2007）によると沖縄県内で出土した爪形文土器の放射性炭素年代は、新しいもので $5,950 \pm 95BP$ 、古いもので $6,670 \pm 140BP$ と示されている。今回のピットの堆積物より得られた炭化材の年代は、爪形文系土器の年代観を支持する結果と言える。爪形文系土器に近い年代資料が得られたことにより、箕隈原C遺跡における縄文時代の人間活動は、 $5,850 \sim 6,400BP$ 頃にあった可能性が高いと考えられる。

### (2) 遺構の用途

灰像分析の結果、J-8焼土遺構No.1とK-7北畦Ⅱf層からは、植物珪酸体が検出されず、燃料材に由来する分類群の特定には至らなかった。一方、微細物洗い出し分析の結果、各試料から炭化材と焼骨を含む動物遺存体が検出された。炭化材は、一部（K-6東畦Ⅱf層炉跡1）が広葉樹に同定された。これらの炭化材は、当時の本遺跡周辺域の森林に生育していた樹種に由来することが推定される。また、ピットの堆積物は焼土を含むことと、焼骨と共に出土した状況を考え合わせると、火を受けたことが考えられる。

動物遺存体は、焼骨を含む骨片や、巻貝類を含む貝類、ウニ類の棘などが確認された。このうち、出土骨にはイノシシ、ネズミ類？を含む哺乳類や海水魚が確認された。少量であるが焼骨が含まれることから、ピット内に廃棄された食料残渣と示唆される。また、極めて微小な椎骨が含まれている点を考慮すると、網などで採取されて食材として利用できない小型の魚種が捨てられたことも考えられる。

## 引用文献

- 小林達雄編, 2008, 小林達雄先生古希記念企画 総覧 縄文土器. 株式会社アム・プロモーション, 1322p.
- 近藤隼三, 2010, プラント・オパール図譜. 北海道大学出版会, 387p.
- 伊藤圭, 2007, 南島爪形文土器文化研究史, 紀要 沖縄埋文研究 5, 沖縄県立埋蔵文化財センター, 25-54



## 圖 版



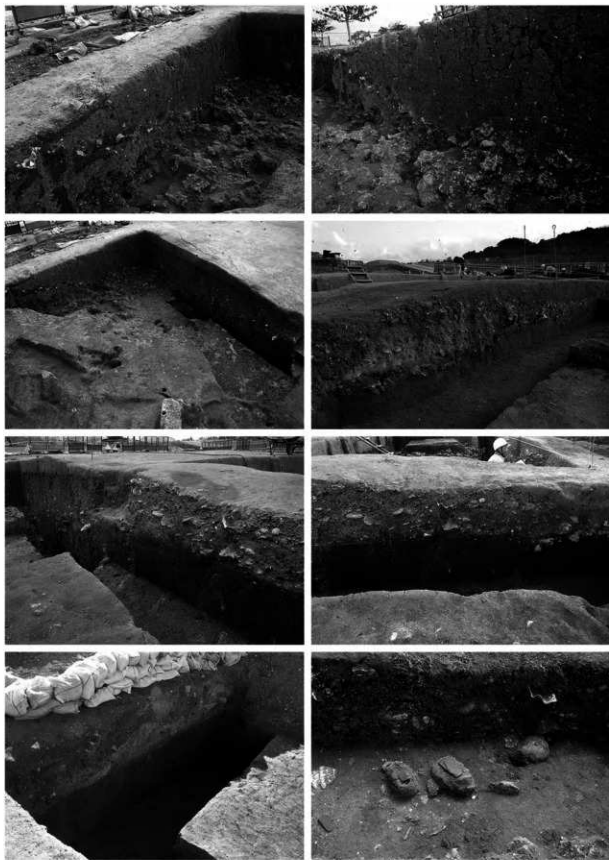
図版 1 遺跡一帯の空中写真

(S=1:8,000)



図版 2 遺跡の状況

- |                  |                  |
|------------------|------------------|
| 1 段目左：遺跡近景（南西から） | 1 段目右：遺跡全景（東から）  |
| 2 段目左：遺跡全景（北西から） | 2 段目右：遺跡全景（西から）  |
| 3 段目左：遺跡全景（北西から） | 3 段目右：遺跡近景（北西から） |
| 4 段目左：遺跡近景（西から）  | 4 段目右：遺跡近景（西から）  |



図版3 主な層序の状況

- 1段目左: I・J-9グリッド東側アゼ
- 2段目左: J-9グリッド東側アゼ・南壁
- 3段目左: J-7~9グリッド南壁
- 4段目左: J-6グリッド南壁

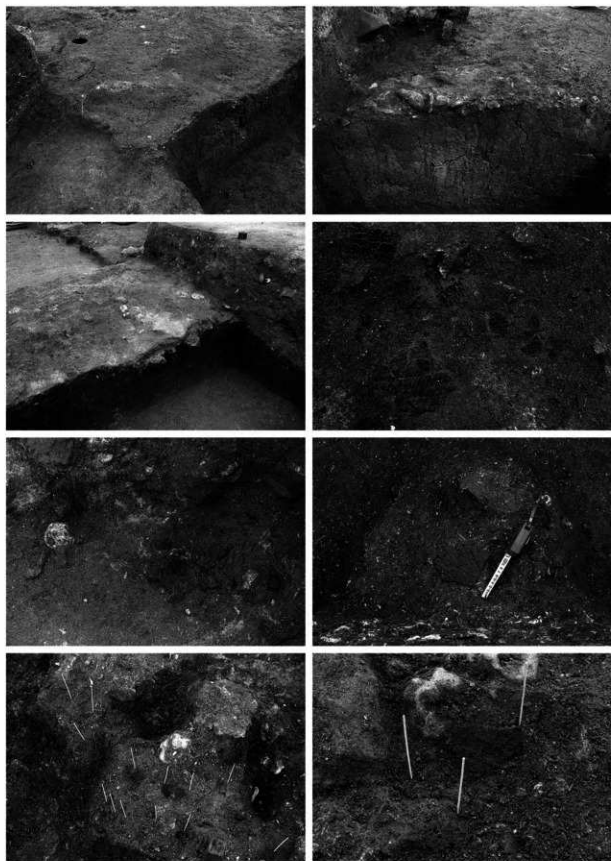
- 1段目右: I・H-9グリッド東側アゼ
- 2段目右: L・M-6グリッド東壁
- 3段目右: J-7グリッド南壁
- 4段目右: J-7グリッド南壁



図版 4 主な層序の状況

1 段目左: I-10~13グリッド北側アゼ  
 2 段目左: H-14・15グリッド北側アゼ  
 3 段目左: G-13グリッド南壁・西壁  
 4 段目左: M-14・15グリッド南壁

1 段目右: K-8・9グリッド北側アゼ  
 2 段目右: H-10~13グリッド北側アゼ  
 3 段目右: K・L-13グリッド西壁  
 4 段目右: M-8・9グリッド南壁



図版5 主な遺構と出土遺物（沖縄新石器時代前II期）

1段目左：焼土遺構No.2・1（J-8グリッド）

2段目左：K-7グリッド遺物出土状況

3段目左：J-7グリッド遺物出土状況

4段目左：F・G-12・13グリッド遺物出土状況

1段目右：焼土遺構No.6（K-6グリッド）

2段目右：K-7グリッド遺物出土状況

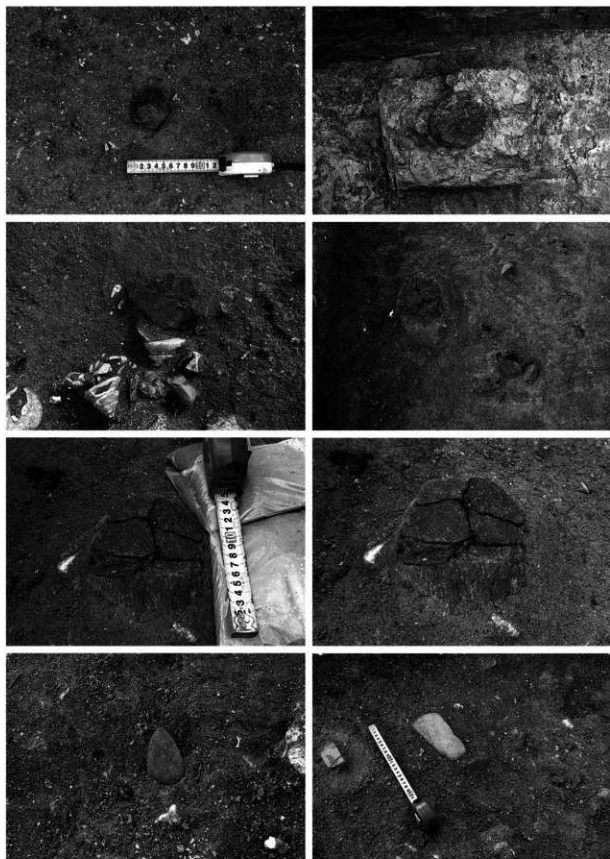
3段目右：L-6グリッド遺物出土状況

4段目右：H-11グリッド遺物出土状況



図版6 主な遺構と出土遺物（沖繩新石器時代前Ⅲ・Ⅳ期）

- |                          |                          |
|--------------------------|--------------------------|
| 1段目左：貝塚検出状況（Ⅰ・J-7～9グリッド） | 1段目右：貝塚検出状況（Ⅰ・J-7～9グリッド） |
| 2段目左：貝塚検出状況（Ⅰ・J-7～9グリッド） | 2段目右：貝塚検出状況（Ⅰ・J-7～9グリッド） |
| 3段目左：貝塚測量状況（Ⅰ・J-8・9グリッド） | 3段目右：貝塚測量状況（Ⅰ・J-8・9グリッド） |
| 4段目左：貝塚近景（Ⅰ・J-9グリッド）     | 4段目右：K-7グリッド遺物出土状況       |



図版7 主な出土遺物（沖縄新石器時代前Ⅲ・Ⅳ期）

1段目左：J-9グリッド遺物出土状況

1段目右：M-7グリッド遺物出土状況

2段目左：K-7グリッド遺物出土状況

2段目右：I-10グリッド遺物出土状況

3段目左：I-10グリッド遺物出土状況

3段目右：I-10グリッド遺物出土状況

4段目左：I-9グリッド遺物出土状況

4段目右：J-7グリッド遺物出土状況





図版 8 主な出土遺物（沖縄新石器時代前Ⅲ・Ⅳ期）

1段目左：G-13グリッド遺物出土状況

2段目左：G-13グリッド遺物出土状況

3段目左：H-14・15グリッド遺物出土状況

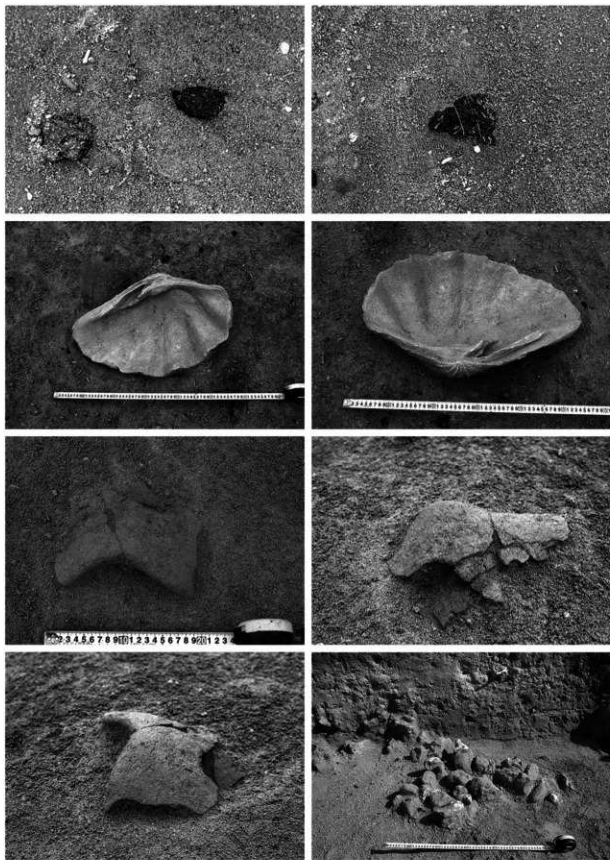
4段目左：H-14・15グリッド遺物出土状況

1段目右：G-13グリッド遺物出土状況

2段目右：G-13グリッド遺物出土状況

3段目右：H-14・15グリッド遺物出土状況

4段目右：H-14・15グリッド遺物出土状況



図版9 主な出土遺物（沖縄新石器時代前Ⅲ・Ⅳ期）

1段目左：H-14・15グリッド遺物出土状況

2段目左：H-13グリッド遺物出土状況

3段目左：H-12グリッド遺物出土状況

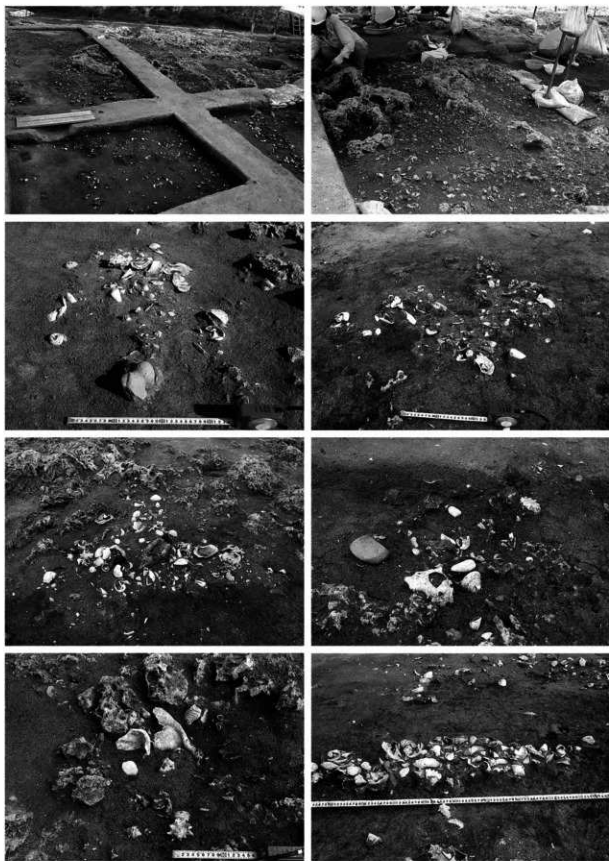
4段目左：H-12グリッド遺物出土状況

1段目右：H-14・15グリッド遺物出土状況

2段目右：H-13グリッド遺物出土状況

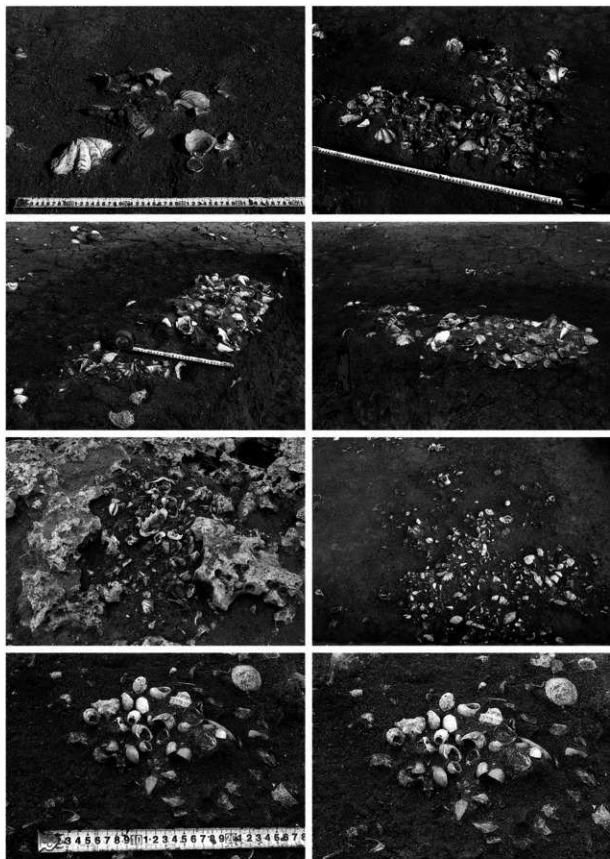
3段目右：H-12グリッド遺物出土状況

4段目右：H-13グリッド遺物出土状況



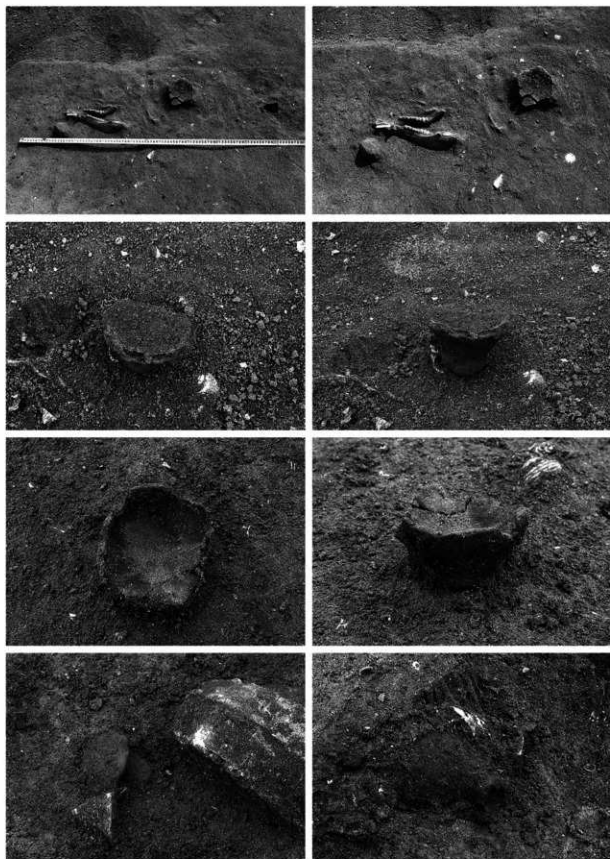
図版10 主な遺構（沖縄新石器時代後期）

- |                             |                             |
|-----------------------------|-----------------------------|
| 1 段目左：貝塚検出状況（J・K-15～17グリッド） | 1 段目右：貝塚検出状況（K-16グリッド）      |
| 2 段目左：貝溜り遺構（I-17グリッドNo.1）   | 2 段目右：貝溜り遺構（I-17グリッドNo.2）   |
| 3 段目左：貝溜り遺構（I-18グリッドNo.1）   | 3 段目右：貝溜り遺構（I-18グリッドNo.3）   |
| 4 段目左：貝溜り遺構（I-18グリッドNo.4）   | 4 段目右：貝溜り遺構（J・K-14グリッドNo.1） |



図版11 主な遺構（沖縄新石器時代後期）

- |                           |                           |
|---------------------------|---------------------------|
| 1 段目左：貝溜り遺構（J-13グリッドNo.1） | 1 段目右：貝溜り遺構（J-13グリッドNo.2） |
| 2 段目左：貝溜り遺構（K-14グリッドNo.1） | 2 段目右：貝溜り遺構（K-14グリッドNo.1） |
| 3 段目左：貝溜り遺構（L-18グリッドNo.1） | 3 段目右：1-18グリッド貝集中部        |
| 4 段目左：ヤドカリ集中部（K-15グリッド）   | 4 段目右：ヤドカリ集中部（K-15グリッド）   |



図版12 主な出土遺物（沖縄新石器時代後期）

1段目左：I-14グリッド遺物出土状況

2段目左：I-13グリッド遺物出土状況

3段目左：I-13グリッド遺物出土状況

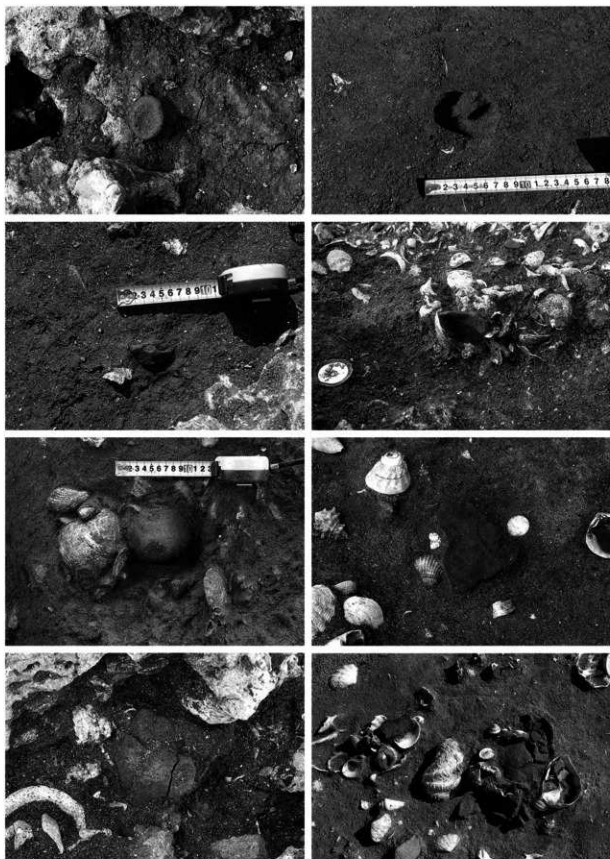
4段目左：J-16グリッド遺物出土状況

1段目右：I-14グリッド遺物出土状況

2段目右：I-13グリッド遺物出土状況

3段目右：I-13グリッド遺物出土状況

4段目右：J-16グリッド遺物出土状況



図版13 主な出土遺物（沖縄新石器時代後期）

1段目左：L-17グリッド遺物出土状況

2段目左：L-18グリッド遺物出土状況

3段目左：I-15グリッド遺物出土状況

4段目左：L-17グリッド遺物出土状況

1段目右：J-19グリッド遺物出土状況

2段目右：K-18グリッド遺物出土状況

3段目右：I-14グリッド遺物出土状況

4段目右：I-13グリッド遺物出土状況



図版14 主な遺構（古く時代以降）

1段目左：遺構検出状況（N・P-5・6グリッド）

2段目左：遺構検出状況（N~Q-5~9グリッド）

3段目左：遺構半蔵状況（N~Q-5~9グリッド）

4段目左：遺構掘下げ状況（N・O-5~9グリッド）

1段目右：遺構検出状況（N・P-5・6グリッド）

2段目右：遺構半蔵状況（N~Q-5~9グリッド）

3段目右：遺構掘下げ状況（N~Q-5・9グリッド）

4段目右：遺構掘下げ状況（N・O-5~9グリッド）



図版15 主な遺構（グスク時代以降）

1段目左：遺構掘下げ状況（N～Q-5～9グリッド）

2段目左：遺構掘下げ状況（N～Q-5～9グリッド）

3段目左：遺構掘下げ状況（N～Q-5～9グリッド）

4段目左：遺構掘下げ状況（N-11・12グリッド）

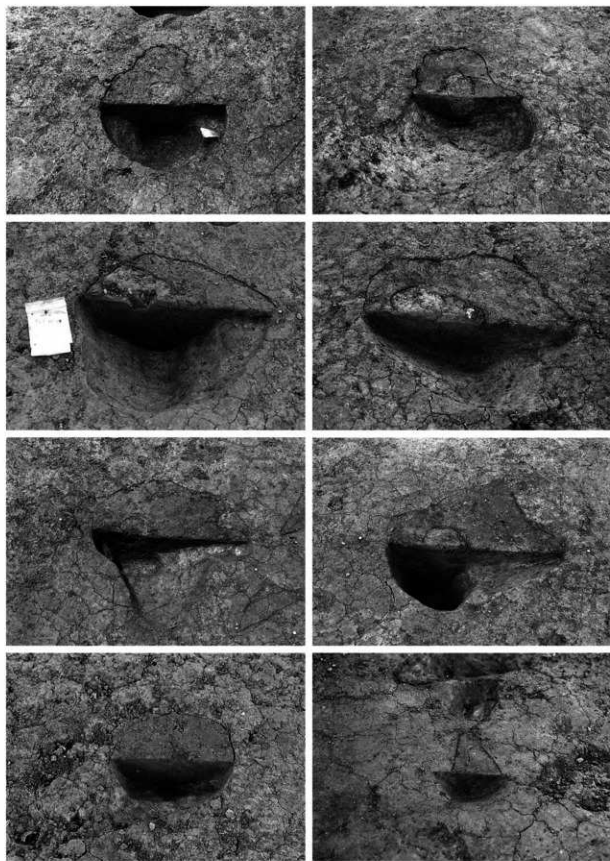
1段目右：遺構掘下げ状況（N～Q-5～9グリッド）

2段目右：遺構掘下げ状況（N～Q-5～9グリッド）

3段目右：遺構掘下げ状況（N～Q-5・9グリッド）

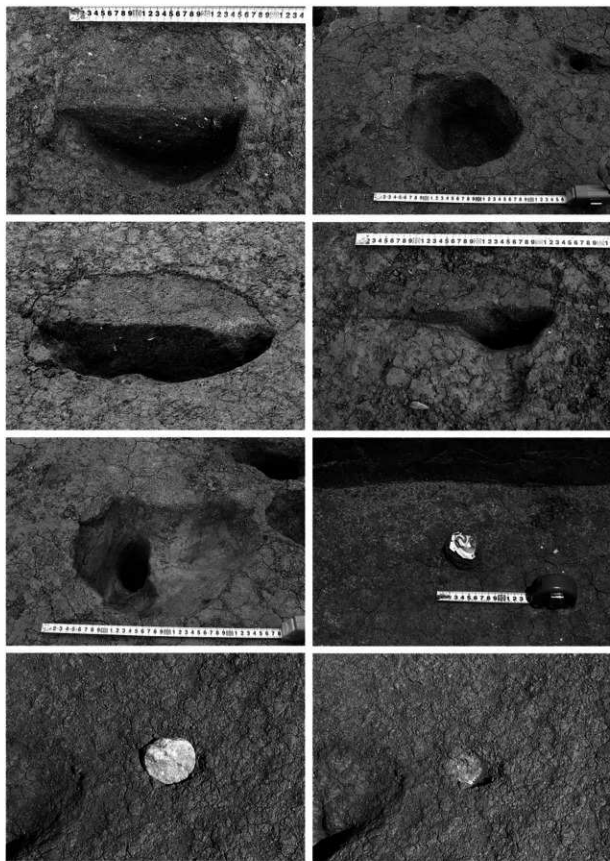
4段目右：遺構検出状況（N・P-5・6グリッド）





図版16 主な遺構（グスク時代以降）

- |                           |                           |
|---------------------------|---------------------------|
| 1段目左：遺構半載状況（O-6グリッドNo.3）  | 1段目右：遺構半載状況（O-6グリッドNo.6）  |
| 2段目左：遺構半載状況（O-6グリッドNo.14） | 2段目右：遺構半載状況（O-6グリッドNo.16） |
| 3段目左：遺構半載状況（O-6グリッドNo.27） | 3段目右：遺構半載状況（O-6グリッドNo.29） |
| 4段目左：遺構半載状況（O-6グリッドNo.40） | 4段目右：跡半載状況（O-7グリッドNo.1）   |



図版17 主な遺構と出土遺物（グスク時代以降）

- |                            |                            |
|----------------------------|----------------------------|
| 1 段目左：遺構半截状況（K-8グリッドNo.6）  | 1 段目右：遺構完掘状況（K-8グリッドNo.6）  |
| 2 段目左：遺構半截状況（M-9グリッドNo.42） | 2 段目右：遺構半截状況（L-8グリッドNo.10） |
| 3 段目左：遺構完掘状況（L-9グリッドNo.2）  | 3 段目右：遺物出土状況（O-10グリッド）     |
| 4 段目左：遺物出土状況（O-7グリッド）      | 4 段目右：遺物取り上げ後の状況（O-7グリッド）  |



図版18 主な遺構（近世）

1段目左：溝状遺構No.1の状況

2段目左：溝状遺構No.1・2・3の状況

3段目左：溝状遺構No.1の近景

4段目左：溝状遺構No.1の近景と順序

1段目右：溝状遺構No.1の状況

2段目右：溝状遺構No.1・2・3の状況

3段目右：溝状遺構No.1の近景

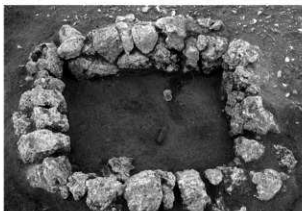
4段目右：溝状遺構No.1の近景と順序



図版19 主な遺構（近世）

1 段目左：溝状遺構No.5の状況  
 2 段目左：溝状遺構No.5の状況  
 3 段目左：溝状遺構No.5の状況  
 4 段目左：溝状遺構No.6の状況

1 段目右：溝状遺構No.5の近景  
 2 段目右：溝状遺構No.5の状況  
 3 段目右：溝状遺構No.5の近景と層序  
 4 段目右：溝状遺構No.6の状況



図版20 主な遺構（近代）

1 段目左：本土産磁器集中部（L-12グリッド）  
 2 段目左：石囲い遺構の状況（H-16グリッド）  
 3 段目左：石囲い遺構の撮影作業状況

1 段目右：本土産磁器集中部（L-12グリッド）  
 2 段目右：石囲い遺構の状況（H-16グリッド）  
 3 段目右：石囲い遺構の測量作業状況  
 4 段目右：石囲い遺構の平面図作成作業状況



図版21 表土剥ぎ作業と樹木の移植作業

- 1 段目左：表土剥ぎ作業の開始直前の状況
- 2 段目左：表土剥ぎ作業の開始直前の状況
- 3 段目左：表土剥ぎ作業の状況
- 4 段目左：表土剥ぎ作業の近景

- 1 段目右：表土剥ぎ作業開始直前の状況
- 2 段目右：表土剥ぎ作業開始直前の状況
- 3 段目右：表土剥ぎ作業の近景
- 4 段目右：樹木の移植作業状況



図版22 表土剥ぎ作業と委託業務

1 段目左：表土剥ぎ作業の状況

2 段目左：表土剥ぎ作業の状況

3 段目左：遺跡空中写真撮影委託業務の状況

4 段目左：磁気探査委託業務の状況

1 段目右：表土剥ぎ作業の状況

2 段目右：表土剥ぎ作業終了後の状況

3 段目右：磁気探査委託業務の状況

4 段目右：磁気探査委託業務の状況



図版23 発掘調査作業の状況

1 段目左：発掘調査作業の全景  
 2 段目左：発掘調査作業の近景  
 3 段目左：発掘調査作業の近景  
 4 段目左：雨天時の冠水状況

1 段目右：発掘調査作業の全景  
 2 段目右：発掘調査作業の近景  
 3 段目右：発掘調査作業の近景  
 4 段目右：雨天時の冠水状況





図版24 発掘調査作業の状況

1 段目左：遺構の写真撮影作業

2 段目左：断面実測作業

3 段目左：断面実測作業

4 段目左：断面実測作業

1 段目右：層序の写真撮影作業

2 段目右：断面実測作業

3 段目右：断面実測作業

4 段目右：断面実測作業



図版25 発掘調査作業の状況

1段目左：グリッド設定作業

1段目右：グリッド設定作業

2段目左：平板実測作業

2段目右：平板実測作業

3段目左：遺構の平面実測作業

3段目右：遺構の平面実測作業

4段目左：遺構の平面実測作業

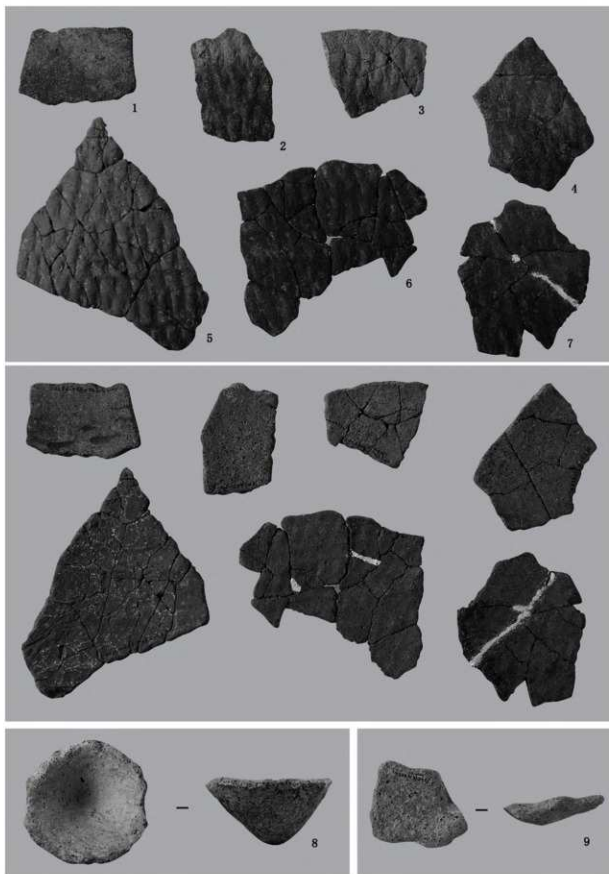
4段目右：遺構の平面実測作業



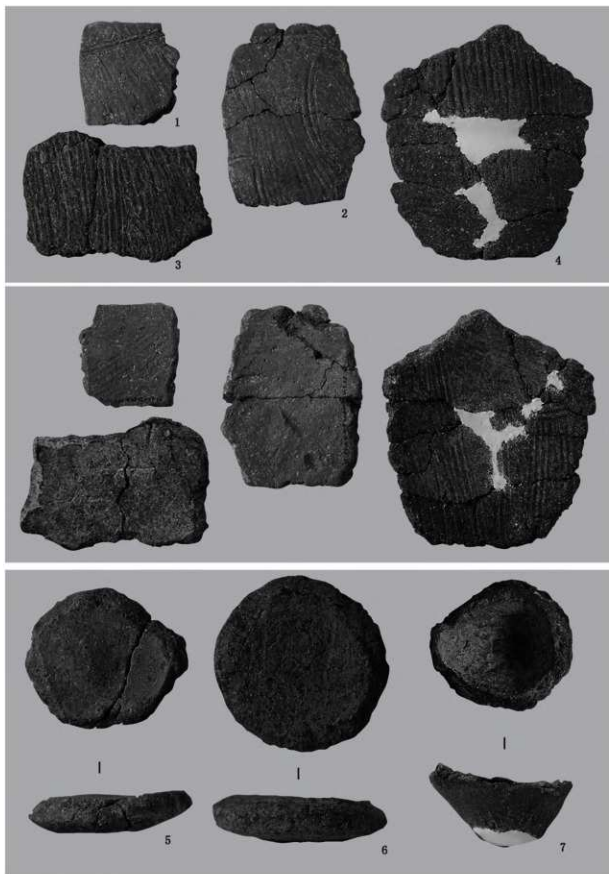
図版26 発掘調査作業の状況

- 1 段目左：電子図化のための測量作業
- 2 段目左：出土遺物の洗浄作業
- 3 段目左：現地説明会の状況
- 4 段目左：現地説明会の状況

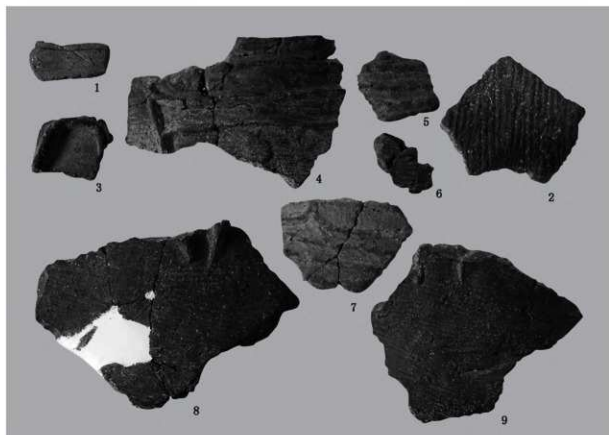
- 1 段目右：電子図化のための測量ポイント設定作業
- 2 段目右：出土遺物の注記作業
- 3 段目右：現地説明会の状況
- 4 段目右：現地説明会の状況



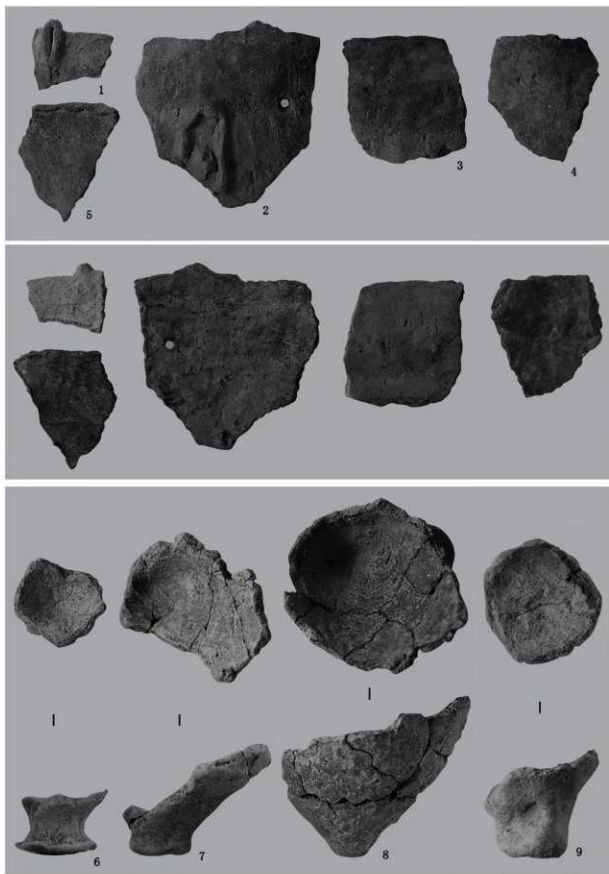
圖版27 (第17圖) 土器①



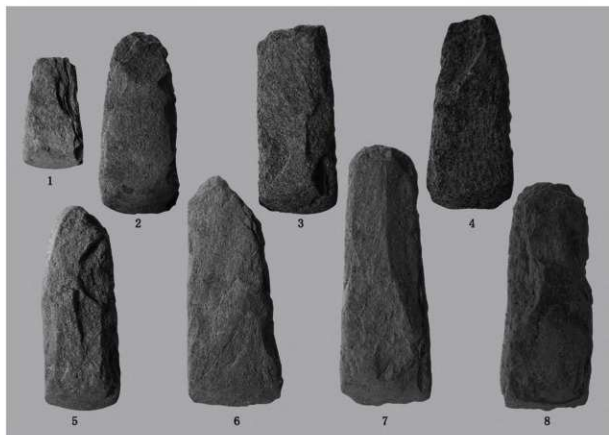
图版28 (第18图) 土器②



圖版29 (第19圖) 土器③

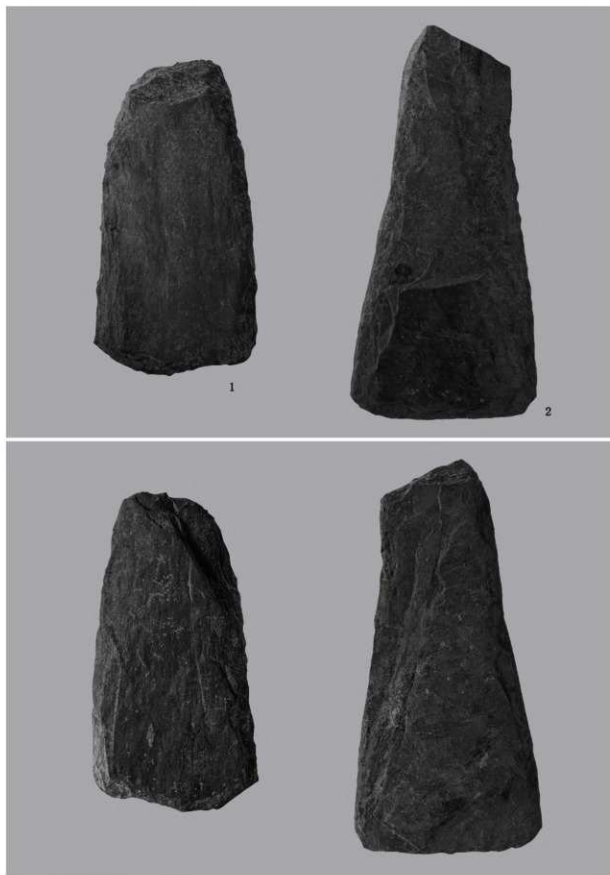


图版30 (第20图) 土器④

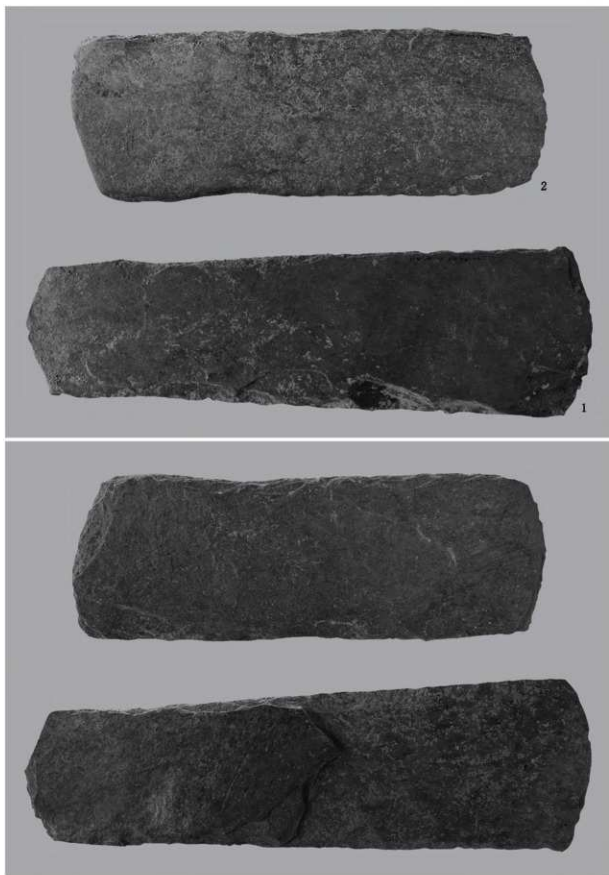


圖版31 (第21圖) 石器①

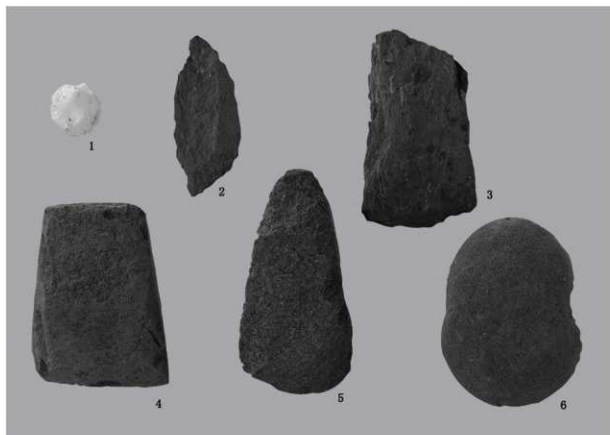




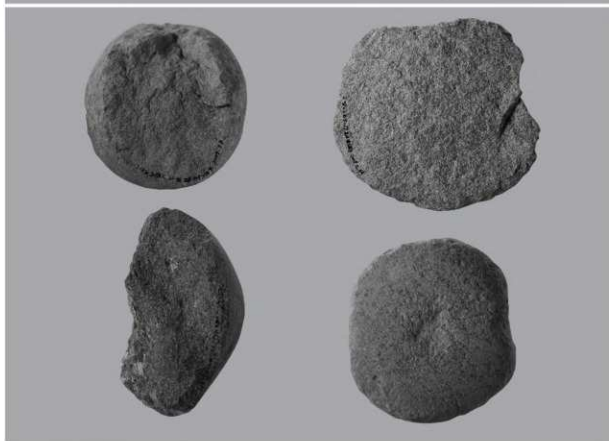
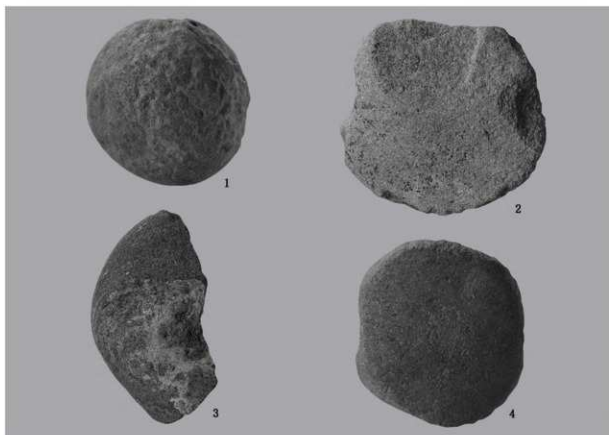
图版32 (第22图) 石器②



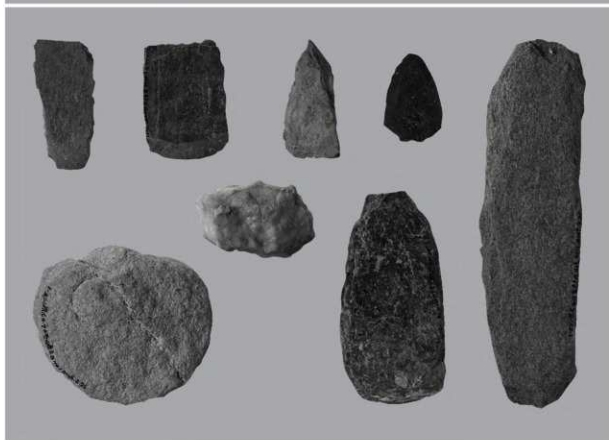
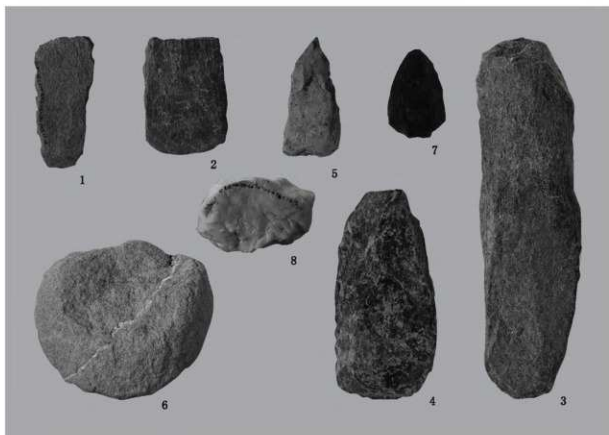
圖版33 (第23圖) 石器③



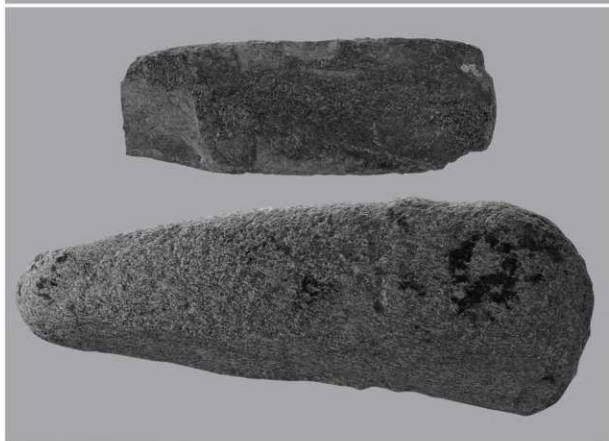
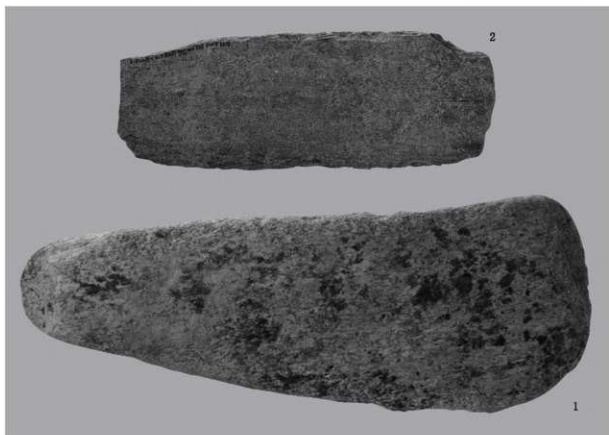
图版34 (第24图) 石器④



圖版35 (第25圖) 石器⑤



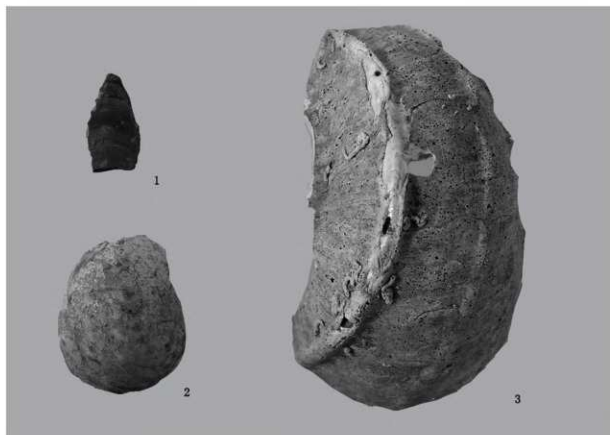
图版36 (第26图) 石器⑥



图版37 (第27图) 石器⑦

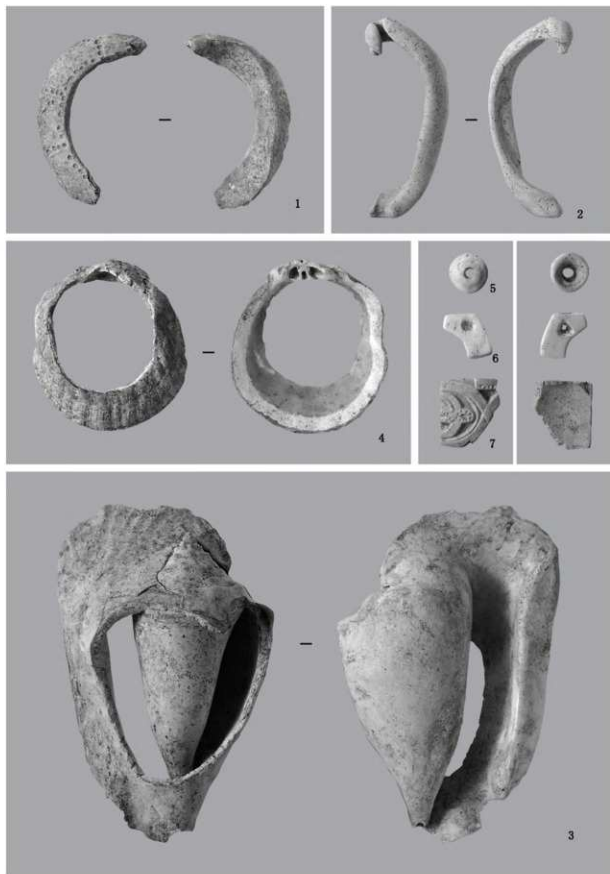


图版38 (第28图) 石器⑧

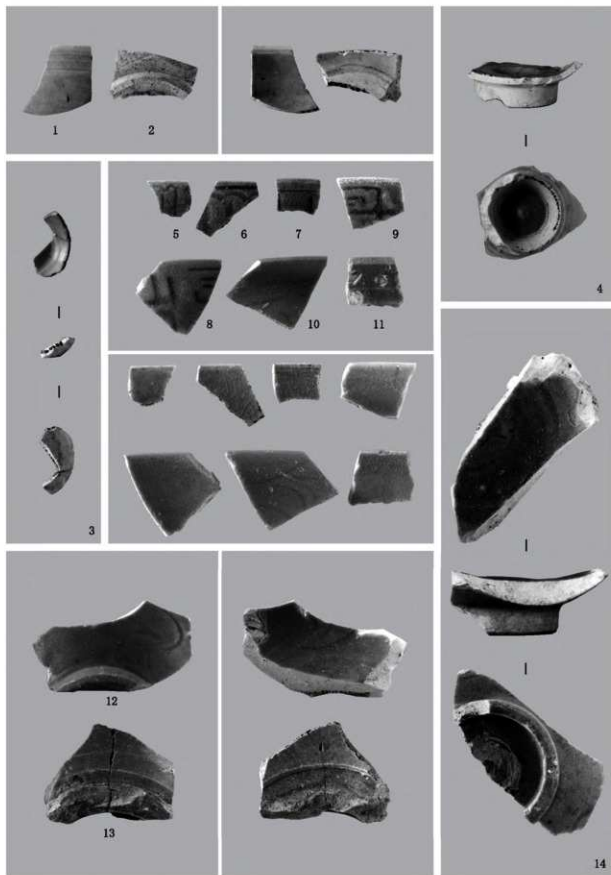


圖版39 (第29圖) 貝製品①

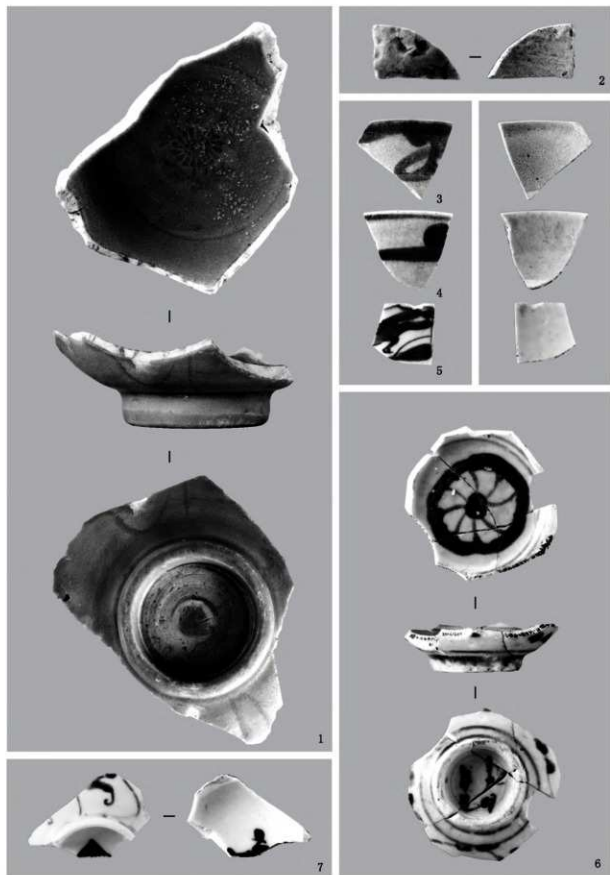




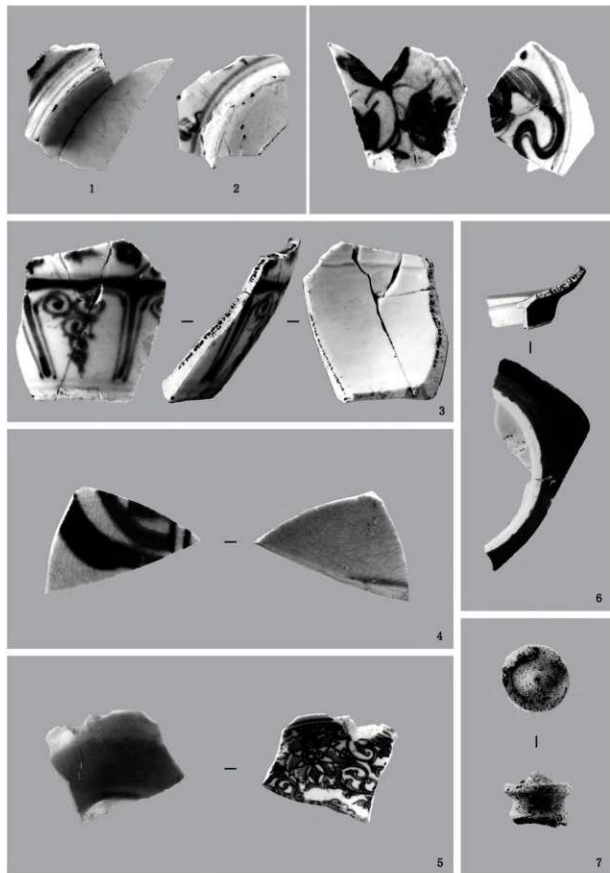
圖版40 (第30圖) 貝製品②



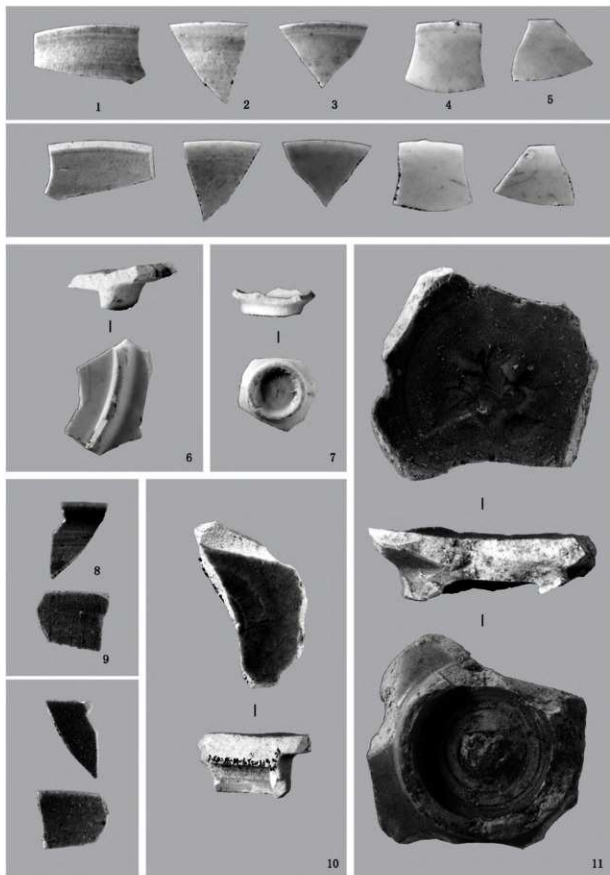
圖版41 (第31圖) 白磁・青磁



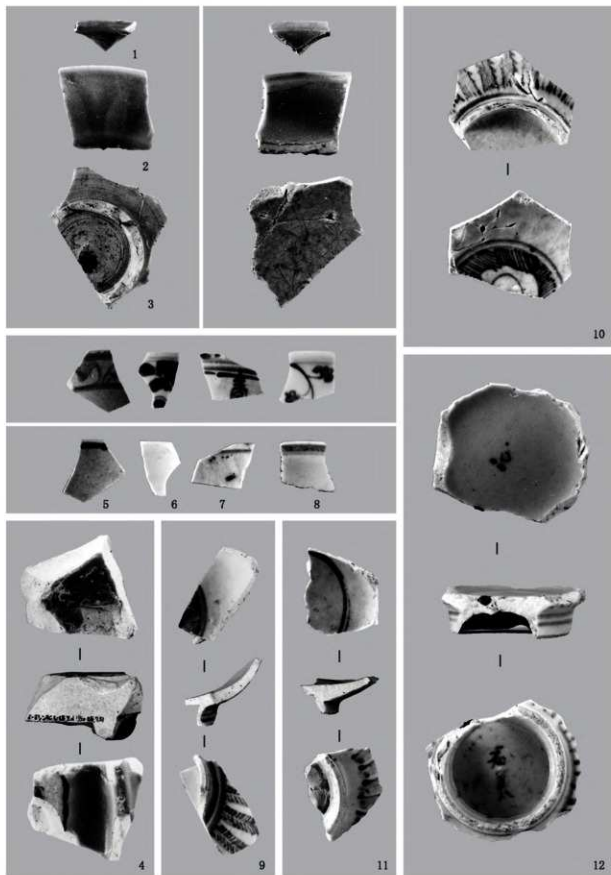
圖版42 (第32圖) 青磁・青花



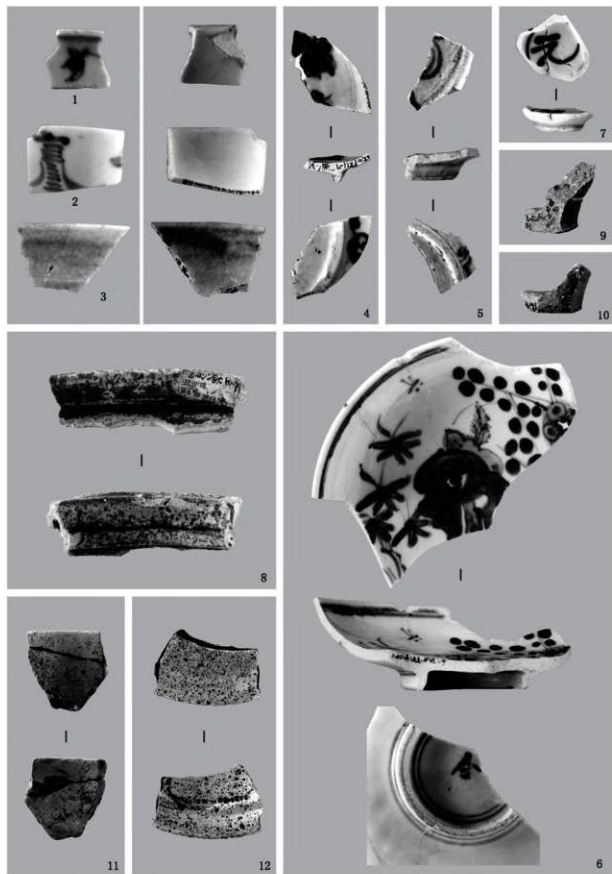
圖版43 (第33圖) 青花・青磁染付・瑠璃釉・タイ産半練



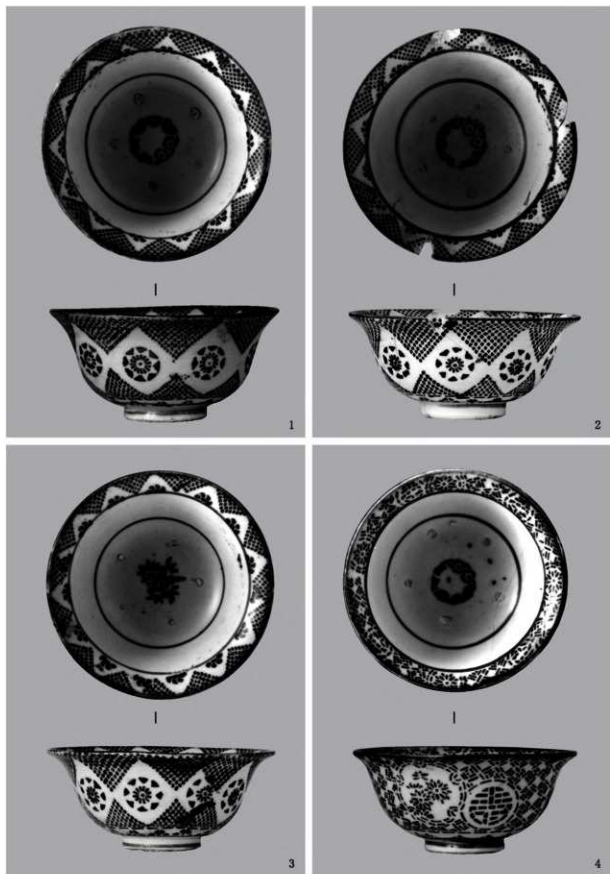
圖版44 白磁・青磁



图版45 青磁·青花

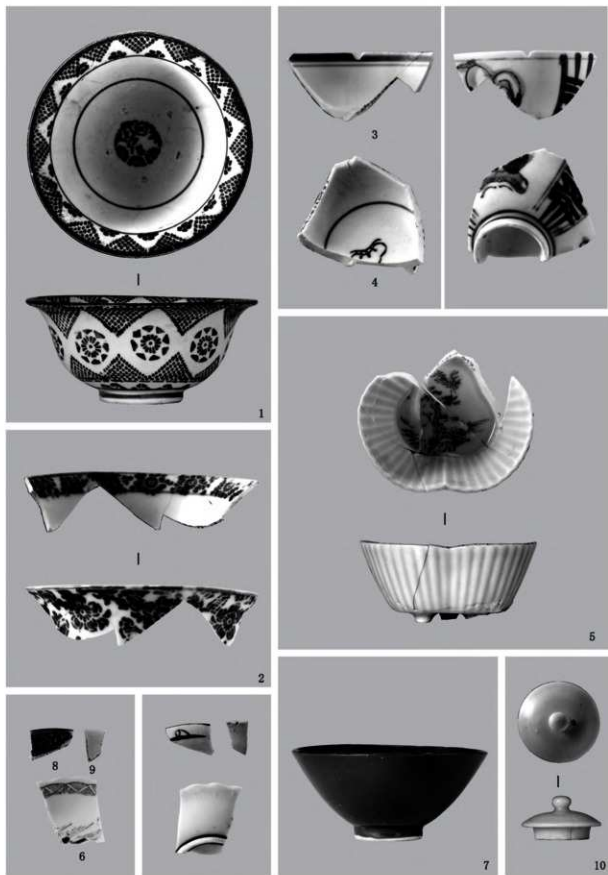


図版46 青花・褐釉陶器・タイ産半練

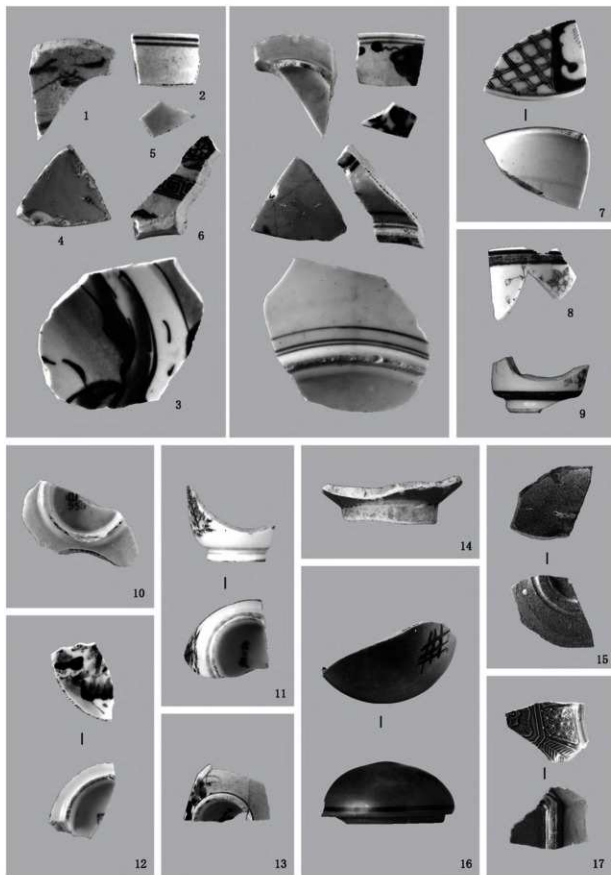


圖版47 (第34圖) 本土產磁器集中部出土遺物①

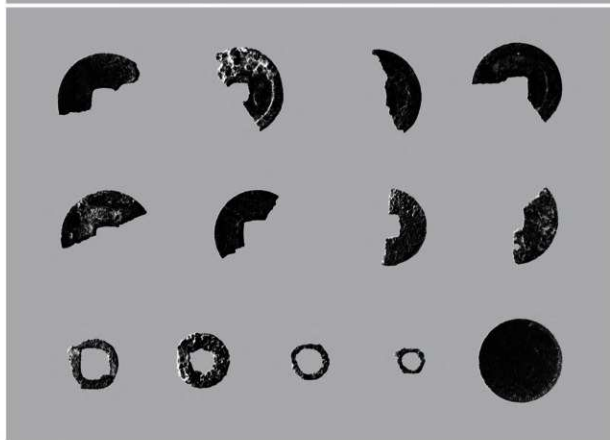
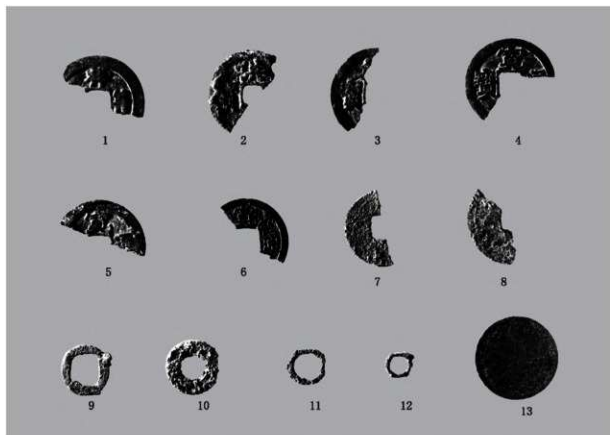




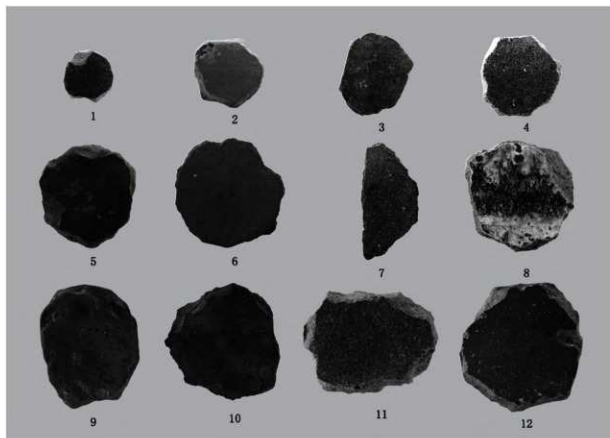
図版48 (第35図) 本土産磁器集中部出土遺物②



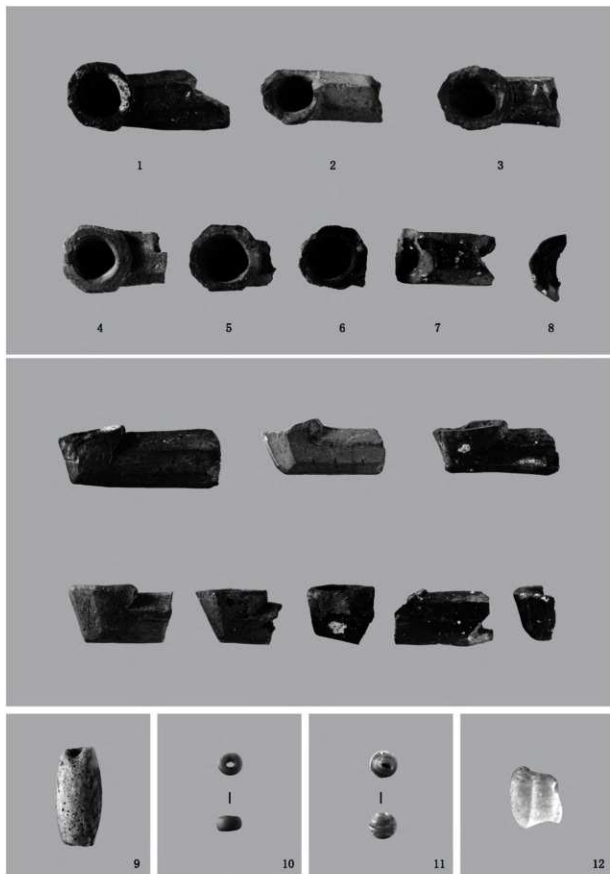
图版49 (第36图) 本土産陶磁器



圖版50 (第37圖) 錢貨



圖版51 (第40圖) 円盤状製品



圖版52 (第41圖) 煙管・陶製品・玉



# 報告書抄録

ふりがな	鏡水箕隅原C遺跡					
副書名	沖縄西海岸道路「那覇西道路」建設事業に伴う緊急発掘調査報告					
巻次						
シリーズ名	那覇市文化財調査報告書					
シリーズ番号	第87集					
編著者名	仲宗根啓・北條真子・樋口麻子・長堂綾・伊波かおり・城間千栄子・上田圭一・矢作健二・真栄田義人・斎藤紀行・松元美由紀					
編集機関	那覇市教育委員会文化財課					
所在地	〒900-8553		沖縄県那覇市前島3-25-1		TEL098-891-3501	
発行年月日	西暦 2011年 3月 30日					
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積
所取遺跡名	所在地	遺跡番号	° ' "	° ' "		
鏡水箕隅原C遺跡	沖縄県那覇市鏡水地内	47201	26度12分46秒 <small>(世界測地系)</small>	127度39分17秒 <small>(世界測地系)</small>	20050601 ～ 20060131 20060601 ～ 20070330	約2,400㎡
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
鏡水箕隅原C遺跡	貝塚	沖縄新石器時代前Ⅱ期 沖縄新石器時代前Ⅲ・Ⅳ期	焼土遺構 獣骨集中部 焼土遺構 貝塚 大型石器集中部	土器 石器 獣骨 土器 石器 貝製品	字鏡水(陸上自衛隊那覇駐屯地)地内で、初めての本格発掘調査	
	生産遺跡?	沖縄新石器時代後期 グスク時代～ 近世 近代	貝溜り・貝塚 銀跡・土坑(ピット) 溝状遺構 本土産陶磁器集中遺構 礎石 井戸跡 石囲い遺構	土器 石器 貝製品 外国産陶磁器 銭貨 ガラス製小玉 本土産陶磁器 沖縄産陶器 銭貨		
要約	本遺跡では、沖縄新石器時代前Ⅱ期に所属する爪形文土器が多数検出されたことで注目された。爪形文土器の出土層位からは、6,110±40、6,360±40BP(補正年代)の放射性炭素年代測定結果が示されている。また、鹿児島県で縄文時代中期頃とされている土器に類似した資料も出土している。遺構は、茅跡の他、沖縄新石器時代前Ⅲ・Ⅳ期及び沖縄新石器時代後期の貝塚、グスク時代～近世期と考えられる銀跡、溝状遺構など多種多様な様相を呈する。					





---

那覇市文化財調査報告書第87集

## 鏡水箕隅原C遺跡

—沖縄西海岸道路「那覇西道路」建設事業に伴う緊急発掘調査報告—

発行 2016年5月31日  
那覇市  
〒900-8585 沖縄県那覇市泉崎1-1-1

編集 那覇市 市民文化部 文化財課  
TEL 098-917-3501  
FAX 098-917-3523

印刷 有限会社 金城印刷 那覇営業所  
〒902-0073 沖縄県那覇市上間565-1  
TEL 098-835-9475  
TEL 098-835-9476

---